

学校法人静岡理工科大学

---

# 創立80周年記念誌





学校法人静岡理工科大学

# 創立80周年記念誌



# 目次

|   |                           |     |
|---|---------------------------|-----|
| ● | <b>学びの姿</b>               | 004 |
| ● | 学校法人静岡理工科大学               |     |
| ● | <b>創立 80 周年にあたって</b>      |     |
|   | 祝辞 静岡県知事 川勝 平太 様          | 006 |
|   | 祝辞 鈴与株式会社 代表取締役会長 鈴木 輿平 様 | 007 |
|   | 挨拶 学校法人静岡理工科大学 理事長 橋本 新平  | 008 |
|   | 挨拶 学校法人静岡理工科大学 常務理事 藤浪 和夫 | 009 |
|   | 挨拶 学校法人静岡理工科大学 理事 下田 修    | 010 |
|   | 挨拶 学校法人静岡理工科大学 理事 渡邊 一洋   | 011 |
|   | 挨拶 学校法人静岡理工科大学 理事 高橋 仁    | 012 |
| ● | <b>沿革</b>                 | 013 |
| ● | 静岡理工大学グループ                |     |
| ● | <b>80年の歩み</b>             | 015 |
|   | 第1章 学校創立期                 | 016 |
|   | 第2章 拡大・発展期                | 022 |
|   | 第3章 大学設立期                 | 027 |
|   | 第4章 進展期                   | 033 |
| ● | 学校法人静岡理工科大学               |     |
| ● | <b>グループ校紹介</b>            | 039 |
|   | 静岡理工大学                    | 042 |
|   | 静岡北中学校・静岡北高等学校            | 052 |
|   | 星陵中学校・星陵高等学校              | 062 |
|   | 静岡産業技術専門学校                | 072 |
|   | 沼津情報・ビジネス専門学校             | 080 |

|                                    |     |
|------------------------------------|-----|
| 浜松情報専門学校                           | 088 |
| 静岡デザイン専門学校                         | 096 |
| 静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校            | 104 |
| 専門学校 浜松デザインカレッジ                    | 112 |
| 浜松日本語学院                            | 120 |
| 沼津日本語学院                            | 124 |
| 静岡理工大学グループ                         |     |
| ● 思い出寄稿                            | 129 |
| 堀田 恭平さん                            | 130 |
| 齋藤 傅さん                             | 132 |
| 荒木 信幸さん                            | 134 |
| ● 未来への挑戦                           | 137 |
| 1 SIST 交流研修会                       | 138 |
| 2 御幸町キャンパスプロジェクト始動！                | 141 |
| 3 静岡理工大学：静岡県内大学唯一の「土木工学科(仮称)」設置構想中 | 142 |
| 4 中学校・高等学校の『未来を見据えた取り組み』           | 142 |
| 5 浜松未来総合専門学校の開校                    | 143 |
| 6 浜松日本語学院の移転・新校舎建設                 | 143 |
| 7 学校法人静岡理工大学『グループビジョン 2030』        | 144 |
| ● 資料                               | 145 |
| 学校法人静岡理工大学 歴代理事長                   | 146 |
| 静岡理工大学グループ校 歴代学長・歴代校長              | 148 |
| 学校法人静岡理工大学 役員名簿                    | 150 |
| 創立80周年記念誌編集委員・編集後記                 | 151 |



静岡理工大学グループ  
学びの姿





みらいーイベント「障がい者ファッションショー」ヘアメイク\_静岡デザイン専門学校



実践力を育成する現場実習\_浜松情報専門学校



研修旅行\_浜松情報専門学校



大道芸ワールドカップ in 静岡パートナーシップ協定\_静岡デザイン専門学校



S-AIR フェスタ\_静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校



学生発 WEB メディア運営\_専門学校 浜松デザインカレッジ



マナー教育\_静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校



2年間の学びの集大成 模擬挙式\_専門学校 浜松デザインカレッジ



研修旅行\_沼津情報・ビジネス専門学校



「できる日本語」の言語活動\_浜松日本語学院



出張授業\_沼津日本語学院

祝辞

## 学校法人静岡理工科大学 80周年に寄せて ～「有徳の人」づくり～



静岡県知事

川勝 平太

学校法人静岡理工科大学が創立 80 周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

貴学校法人は、1940(昭和 15)年に“技術者の育成をもって地域社会に貢献する”を建学の精神として静岡県自動車学校を開設され、以来 80 年の歳月を積み重ね、今では 1991(平成 3)年に開学した静岡理工科大学を中心、2 つの中学校、2 つの高等学校、6 つの専門学校、2 つの各種学校から成る県内屈指の総合学園に発展されました。

現在、総合学園としての強みを活かし、「中・高一貫教育」、「高・大一貫教育」、「高・専一貫教育」など、7,700 名余もの学生・生徒の皆様が多彩な教育連携による魅力ある学びを享受されるなど、正に、本県の私学教育の中核を担っていただいているところであります。

これもひとえに、貴学校法人の橋本新平理事長並びに、歴代の理事長、役員、教職員の皆様をはじめ、卒業生の皆様など、多くの関係する方々の並々ならぬ熱意と御尽力の賜物であり、ここに深く敬意を表するものであります。

また、現在、世界に蔓延する新型コロナウイルス感染症が本県にも大きな影響を及ぼしておりますが、こうした中にあっても、貴学校法人では、学校等での徹底した感染拡大の防止対策や、ICT を活用した授業に取り組まれるなど、ウィズコロナ時代における学生・生徒の学びの保障に努めていただいていることに対しまして、深く感謝を申し上げます。

県といたしましても、県民の皆様の生命を守る感染防止対策と社会・経済活動の再生、さらには、今後の社会・経済や個人の価値観の変化を見据えたふじのくにの新しいライフスタイルの創出に向けて取組を進めてまいりますので、御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

さて、静岡県では、靈峰富士を擁する本県の地域性に最も適うのは、富士山から導き出される多様な価値に立脚した地域づくりであるという視点に立ち、富士の字義を体した「富国有徳の美しい“ふじのくに”づくり」を県政運営の基本理念に掲げております。

「富士」の字は、豊かな「富」を学徳ある「士」が支える形となっ

ております。魅力ある地域づくりの礎を成すのは人であります。本県が目指すのは、靈峰・富士の姿のように、気品をたたえ、調和した人格を持つ「士」すなわち「有徳の人」を育成する、それが“ふじのくに”的教育理念であります。

『論語』に「吾十有五にして学に志す」とありますが、子供は十代で自分の個性を知り得ます。知性、感性、身体能力など、子供一人ひとりの能力や適性、意欲や才能に応じた教育を施すことが重要です。このため、本県では「文・武・芸」三道の鼎立という考え方の下、「知性を高める学習」の充実はもとより、ものづくりやスポーツ、芸術、芸能等の様々な分野に子供の学びの場を広げ、自らの才能を伸ばす実践的な学問としての「技芸を磨く実学」を奨励しています。あわせて、ICT 等最先端技術の進展に伴い、より一層のグローバル化が見込まれる中、国際的な視野を身に付け、新しい価値を創造して社会に貢献し、未来を切り拓く人材の育成にも、県を挙げて取り組んでおります。

地域の自立の基礎は教育の自立であります。また、全ての県民の願いは、本県の宝であり希望をもたらす子供たち・若者たちの健やかな成長であります。子供たち、若者たちが富士山のように高い志を抱き、夢に向かってはばたけるように、「地域の子供は地域の人が育てる」という強い決意を持ち、地域ぐるみ・社会総がかりで子供を育てる機運を醸成し、富国有徳の「美しい“ふじのくに”」の未来を担う「有徳の人」づくりを全力で進めてまいります。

貴学校法人の建学の精神である「技術者の育成をもって地域社会に貢献する」、目指す姿に掲げる「総合学園の特徴を生かして、専門力・人間力と国際性を兼ね備えた優れた人材を多数輩出する」は、こうした県の教育理念と正に合致するものであります。県内私学教育の中核を担う貴学校法人の皆様におかれましては、本県の進める「有徳の人」づくりに、なお一層の御支援・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、関係する皆様の長年の御尽力に改めて謝意と敬意を表しますとともに、この記念すべき年を新たなスタートとして、学校法人静岡理工科大学のますますの御発展と、関係の皆様の一層の御活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

祝辞

# 学校法人静岡理工科大学 創立 80周年へ

鈴与株式会社 代表取締役会長  
鈴木 輿平



「学校法人静岡理工科大学」が創立 80周年を迎えた事は深い感慨と共に、大変嬉しく、この喜びを学園に関係されたすべての皆さん方と分かち合いたいと思っている。

太平洋戦争の始まる直前の 1940(昭和 15)年に、自動車関連の技術者養成の目的で、私の父や叔父が地元経済界の皆様と共に創設したこの学園は、戦争後も順調な発展を続け、静岡県内に自動車関係の諸学校に加えて、二つの高等学校と幾つかの専門学校を併せ持つ大きな学校法人グループに成長する事が出来た。

しかし、その巨大化と同時に、交通警察が管轄し、その御指導の下に経営を行う自動車関連諸学校と、静岡県と文部行政の指導の下にある高等学校・専門学校群と言う、もともと学校としての基本的な体質が異なる学校群を一つの学校法人でまとめて行く事が次第に困難になっていった。

このため協議が行われ、最終的には学園を二つの独立した学校グループに分離し、それぞれ特色を生かして独立した経営を行っていく事となり、結果、私たちの鈴与グループが文部省関連の学校群について経営を支えていく事となった。

また物づくりに伝統のある静岡県であるが、理工系の学部が少なく、地元の学生は東京はじめ他県に流れている状態で、こうした学生を静岡に引き止め、静岡に多くある工場群に良質な技術者を供給していく事を、新しい学園の出発の中でぜひ実現したい、理工系大学の設立がどうしても必要だ、と言う関係者の熱心な訴えに我々も賛同し、鈴与グループで全面的に新しい学園を支援すると共に、静岡理工科大学設立を決心した次第である。

とは言うものの、理工系大学の設立は巨額な資金の調達が必要であり、また文部科学省の厳しい許認可の為の基準を満たし、審査をパスする必要があり、認可を頂戴し開学するまで、その苦労は尋常なものではなかった。

当初はすべてが手探りの状態で、時にはぶつかり合い、激しい議論になる事もあったが、何とか良い大学を作りたいと言う純粋な気持ちはすべての人達が共有していた。改めて、当時の関係された皆さんのご努力に敬意と感謝を捧げたい。

月去り人は移り時は流れて、色々苦労もあったが、大学経営

も一応軌道に乗り、建築・土木学科の新設も目途がついた。

高等学校もそれぞれが中学校を併設し、ご父兄からの評価も高いと聞いている。また、専門学校も価値が多様化する時代の変化に合わせ、色々なチャレンジをしてくれている。

これは全員が真面目に経営に取り組んでくれた結果であり、学園の財務内容も他学校に負けることは無く、まずは立派な内容である。

かつて本学園が分離独立し、私が初代理事長に就任した時に考えていた学園の諸課題は、それなりにクリアできたと思うし、学園経営の経営基盤は格段に固まつたと思っている。今は将来に向かって学園の次の発展を考える時であろう。

創立 80周年を機会に、歴史を振り返りそれぞれのステージで活躍された皆さんお一人お一人すべてに、改めて心からの感謝と拍手を送ると共に、新しいチャレンジに出発する「学校法人静岡理工科大学」のこれからの大いなる発展を心から祈っている。

理事長 挨拶

「フェアでオリジナリティの高い  
教育・研究活動を通じて地域社会に  
貢献し学生・生徒と共に成長し  
続ける総合学園」を目指して

学校法人静岡理工科大学 理事長  
橋本 新平



1940(昭和 15)年に“技術者の育成をもって地域社会に貢献する”を建学の精神として設立された本学園も、おかげさまで創立 80 周年を迎えることができました。20世紀から 21世紀にかけてのその軌跡は、戦後の復興から、モータリゼーションやコンピュータの出現に象徴される高度成長時代を経て、バブル崩壊による世界的な経済不況も経験、そして、現在の AI やグローバル化時代の訪れなど、社会全体や産業界もドラスティックな変化とともに起伏のあった 80 年がありました。

そして今、本学園の歴史を振り返る時、それぞれの時代で常に未来志向で真摯に学園の発展を担ってきた多くの先達の方々の弛まぬ努力と英知の結集とに心より深く感謝の意を表したいと存じます。また、ご後援いただいた多くの保護者、卒業生の方々、本学園各校の教育にご理解とご支援をいただいた多くの企業様、そして本学園設置校の成長を温かく見守り応援し続けていただいた地域の皆様に対しましても心より深謝申し上げる次第です。

本学園は、現在、静岡県全域に大学、中学校、高等学校、専門学校、日本語学校全 13 校 7,700 名強を擁する総合学園へと発展してまいりました。近年では、多様性のある学校種の融合を図るため、全教職員が目標を共有し、オープンな環境を創り出し、学園全体で一体感を醸成することに注力してきました。総合学園として多彩な一貫教育の教育連携を推し進め、繋がりの仕組みをより進化、魅力あるものとさせてきたのもその一環であります。

さて、2020(令和 2)年は、コロナ禍で始まった未曾有の年となり、先の見透しが困難で閉塞感を感じた一方で、社会の在り様や人間の生き方等についても深く教えられることも多く、教育に就きましても大きく進歩、変革する機会を与えてくれた年であると捉えています。実施せざるを得なかったオンライン授業ですが、単に対面授業の代替というだけではなく教育の見える化を始めとし幾つかの気づきを得ると共に、対面授業の必要性も実感させられました。そして教育には変えるべきことと変えてはいけない重要なことの存在を強く自覚したことは今後の教育活動にとり大切な資産になった、と思い

ます。また、このコロナ禍は改めて教育と社会との“繋がり”的強さを感じさせられた出来事でもありました。地域社会への貢献の重要性を再認識し、地域社会に貢献し続けることにより、学校教育の必然性を更に高めることが必要であることを強く認識しました。

総合学園としての次のステージでは、学校種の多様性ゆえの特長を活かし、様々な企業や地域社会との連携を更に深め、「開かれた学園」として永続的な発展を目指さしていくことを“80 年の誓い”として邁進する所存であります。その一例として、建学の精神にもある「地域に対する貢献」というテーマを広い範囲で具現化するため、静岡駅前に、産業界など地域社会との接点を更に深く、大きくする様々な情報発信や人生百年時代の生涯教育などの機能を合わせ持つ御幸町キャンパスを本学園のランドマークとして新設し、地域と共に発展して行きたいと考えています。

他にも新しい取り組みを積極的に展開する意向でありますが、その為には常に望ましい未来像を描いたうえで、現在を振り返り、課題を発見し、解決するバックキャスティング思考を全学園の運営に浸透させ、地域社会の協力を得ながら、新しい価値観を創造し続けていく文化を根付かせ醸成したいと考えています。そして、変えねばならぬ点は変え、守るべき点は守り、全教職員一丸となって、90 周年、100 周年に向けて、日々精進を重ねてまいる所存でございます。

今後とも皆様方の温かいご支援・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

結びとなりますが、学園創立 80 周年記念の準備にあたり、ご尽力、ご協力いただきましたすべての皆様方に感謝申し上げますとともに、記念誌にご寄稿賜りました皆様方には厚く御礼申し上げます。

常務理事 挨拶

## 豊富な学校種を擁する 総合学園の強みを活かして

学校法人静岡理工科大学 常務理事

(法人担当)

### 藤浪 和夫



学校法人静岡理工科大学は、1940(昭和15)年の設立以来、幾多の苦難と絶え間ない曲折を経て令和2年に80周年を迎えることとなりました。これも偏に先人の皆様の教育にかける熱意とご努力の賜物であると深く感謝申し上げる次第です。

さて、本学園は、現在静岡理工科大学を中心に、中学・高校4校、専門学校6校、日本語学院2校、計13校を擁する総合学園に発展して参りました。今回の80周年記念誌発刊にあたり、時は第2次世界大戦前の軍需優先の中、運転免許を持つ者の多くが戦争に召集されてしまい、国内での運輸業務遂行のために自動車学校設立を計画し苦労の末、用地買収をまとめた矢先、護国神社の移転先として取り上げられてしまったことなど、多くの苦難とそれを克服した創業者の皆様方のご努力があって、この学校法人が誕生したことを知りました。このような先人の皆様のご恩に報いるためにも、80周年を一つのきっかけとし、90年、100年、更に未来に向かって永久に発展することを期待し、又、微力ながら学園の発展に貢献していくことに決意を新たにしております。

ご承知の通り、2020(令和2)年に入り、中国を感染源とした新型コロナウイルスにより、日本はもとより、世界中の経済社会が大打撃を受け、先が見通せないVUCAの時代を迎えています。本学園においても、教育ではオンライン授業が導入され、また、教職員の働き方として在宅勤務を経験し、今まで考えられなかった変化が起こっています。無論全てがオンライン授業になるわけではなく、対面授業とのハイブリッド型授業になるものと思われ、また、働き方についても在宅と出勤のメリット・デメリットを考慮した形態になると思われますが、まさにパラダイムシフトというべきであり、今までの常識が通用しない時代に突入したという感じが致します。

しかし、このような時代にあっても、変わるべきものと変わるべきないものがあります。時代のニーズに対応する教育内容は変わるべきものです。変わるべきないものは、「技術者の育成をもって地域社会に貢献する」という建学の精神です。「技術者」の現代的定義をし直す必要はありますが、建学の精神自体は不变です。

現在、第4次中期計画(2022～2027年度)策定にあたり、若手教職員を集め、未来の学園のるべき姿を検討してもらっているところですが、この不易流行の考え方により、教職員及び学生・生徒の皆さん生き生きと希望をもって働き、学べるような素晴らしい「未来の姿」が描けることを期待しています。

また、創立80周年記念事業として、「未来の学園コンテスト」を実施中です。これは、学園に関わる全ての教職員及び学生・生徒が将来のビジョンを共有できる学園を目指して、未来への決意表明をしてもらおうという趣旨に基づくものです。137件という多くの応募があり、教職員及び学生生徒の、未来にかける思いの詰まった素晴らしい提案がたくさんあります。これから選考の段階に移りますが、動画を活用したプレゼンテーションによる最終選考会にて優秀者の表彰を行う予定です。

今までにない大規模投資として、静岡駅北口の一等地に位置する御幸町再開発ビルに「御幸町キャンパス」を2024(令和6)年4月に開校する予定です。これは、静岡理工科大学の研究拠点・地域連携拠点となるサテライト・ラボ及び地域協働センターを設置し、「理工系教育・人間形成教育の振興」と、静岡デザイン専門学校を中心とした「中心市街地の賑わい創出」など、学園を挙げてSIST(Shizuoka Institute of Science and Technology)グループのランドマークとするものです。コロナ禍を危機と捉えるだけではなく、チャンスととらえ、この御幸町キャンパスを大いに利用しながら、学園の発展に資するものとして位置付けております。

とはいえ、少子高齢化とコロナ禍による不況により、進学率の減少も危惧されるなど、学校運営を取り巻く状況は益々厳しくなることが予想されます。

この変化の激しい時代にあって、全国的に見ても例を見ない豊富な学校種を擁する総合学園の強みを活かした学校運営により、学園全教職員が一致団結してこの難局を乗り越え、更に発展していきたいと考えます。

今後とも皆様方のご支援・ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

理事 挨拶

## 80 年の歴史を礎に、さらなる発展を目指して

学校法人静岡理工科大学 理事  
(大学担当)  
下田 修



本学園は、1940(昭和 15)年 5 月、静岡市袖木に開校した静岡県自動車学校から始まりました。その後、戦中・戦後の動乱期、高度経済成長やリーマンショックなど、幾多の苦難を乗り越えて現在に至っています。

本学園の歴史の中で、最も大きな出来事は、1990(平成 2)年 12 月に法人名称を学校法人静岡理工科大学に変更し、翌年の 4 月に静岡理工科大学を開学したことです。その後、新たな専門学校や日本語学校、中学校の開校により、学校数は 7 校から 13 校となりました。本学園の 80 年の歴史の中で、この約 10 年間は、学校数の増加のみならず、中学校を開校することで中等教育と高等教育を擁した学校法人に拡大して参りました。また、時代のニーズに対応して、学科の再編や新学科の開設も行って参りました。

これもひとえに、先人の方々のご努力はもとより、本学園を支えて下さった自治体や企業の方々並びに市民の方々のご支援の賜と、心よりお礼申し上げます。

静岡理工科大学の歴史は、法人名称が学校法人静岡理工科大学になって以降の歴史と同じですので、満 30 歳を迎えることができました。1 学部 4 学科で開設した本学は、1995(平成 7)年の大学院設置、2008(平成 20)年の総合情報学部(現在の情報学部)設置、2017(平成 29)年の県内大学初の建築学科設置、昨年のコンピュータシステム学科データサイエンス専攻設置を経て、現在 2 学部 7 学科 1 研究科となり、在籍者数も開学当時の 1,400 名程から 1,700 名程になりました。また、昨年 12 月には、袋井市と「ふくろい産業イノベーションセンター設置」についての合意書を締結し、地域産業との連携の新たな展開を目指して、これから実質的な活動を行って参ります。

現在、本学では、来年 4 月の土木工学科開設に向けて、新校舎と実験棟の建設工事を行っており、来年 9 月に竣工予定です。静岡県には、理工系私立大学は、本学のみでありますし、建築・土木分野の学科を有する大学は、県内の国公立大学を含めても本学の他にありません。また、数年後には、学生増加に伴う教室増設工事や大学院博士課程設置も検討しております。

ここ数年の本学の歩みやこれらの計画は、静岡県に位置する

大学として、これから地域経済や産業の変化、それに対応して求められる人材や技術の動向などを踏まえ、使命や役割を再定義して、その達成に向けて教育改革や研究の活性化を図れるように講じてきている施策の一環です。

今は、世界的に猛威を振るっている新型コロナウィルスの感染防止と経済活動の両立、大学で云うと、教育研究活動との両立ができるように、迅速かつ弾力的に対応することを第一優先としております。しかし、新型コロナウィルスは必ず終息するときがきます。終息後に本学に求められる使命や役割は、現在、認識しているものとは異なってくることも予想されます。特に、地政学的な変化が国際社会に与える影響は、益々、顕著になり、それによる国内はもとより、静岡県の経済や産業に及ぼす影響は多大であり、これが本学の使命や役割にも波及してくることも予想されます。そのために、現在の取り組みの成果を確実に得られるようにすることと、終息後の世界を予測して、そのときに成すべきことができるための準備もしております。

本学の理念は「豊かな人間性を基に、「やらまいか精神と創造性」で地域社会に貢献する技術者を育成する」です。この理念の意味するところを不易として、「地域社会」や「技術者」は、その時代に適した再定義をしつつ、流行を取り入れ、不易と流行のバランスを取りながら柔軟な対応を図って参りたいと存じます。また、自治体や企業の方々などからも一層のご教示を賜り、これらの方々とも更なる連携を図りながら、本学が社会の発展や活性化に寄与できるようにして参りたいと存じます。

後の時代に、本学園の歴史を振り返ったとき、これから取り組みが、本学は元より、本学園にとっても、大きな転機であったと認めて頂けるように、今後も邁進して参る所存であります。

今後とも益々のご支援とご指導・ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

理事 挨拶

## 学園に息衝く 「気合い」について

学校法人静岡理工科大学 理事  
(中学校・高等学校担当)  
渡邊 一洋



本学園創立 80 周年、この記念すべき日を迎えることができたのも、ひとえに、創立以来本学園の教育にご支援・ご協力をいただきました地域の皆様、保護者の皆様、役員の皆様方はもとより、これまで本学園の教育を支えてこられました歴代校長先生をはじめ、多くの教職員の方々、そして、何よりも努力と研鑽を積み重ねている卒業生の皆様のおかげであると心より感謝申し上げます。

さて、中・高部門は、1963(昭和 38)年自動車の普及が進む中、クルマ社会のニーズに応えるべく、技術者の育成を目指して静岡県自動車工業高校を開校したところから始まります。爾来、1977(昭和 52)年には学校法人金指学園から星陵高等学校の経営を受け継ぎ、2010(平成 22)年には静岡北中学校を、翌年の 2011(平成 23)年には星陵中学校を開校し、現在に至っております。

この間、各校は地域のニーズに応えるべく数々の変遷を繰り返し、時には、募集定員を下回る入学状況になる等、非常に厳しい状況に置かれることもありましたが、先人達が中心となり、その都度「気合い」で乗り越えてまいりました。それでは、本学園に息衝く「気合い」とは何でしょうか。

それは「目標達成のためには、教職員が一丸となって、精神を集中して物事に取り組む」という姿勢です。これが原動力となっているのです。「今、何が悪いからこういう状況になっているのか」「次を上手くやるにはどうすれば良いのか」「今の状況をより良くするためには、どこを、どのように改善すれば良いのか」等々を、皆で集中して考えることができるという文化があり、それが「気合を入れる」ということだと考えているからです。

「目標」は、達成しなければ目標ではありません。目標を達成するためには、それぞれの「職責」において論理的・科学的プロセスであるマネジメントサイクル(P・D・C・A)を、常に回すことが重要であります。しかしながら、結果を出すために、どんなに緻密に計画を立てても、期待通りの結果が出るということは稀であるということもまた事実です。そこで大切なのは定期的な検証なのです。今後もその検証を怠ることなく実施し、善後策をたて、具体的に行動していく所存でございますので、ご支援・ご助言の程よろしくお願いいたします。

今、時代は急激な変革期にあります。日本は、今後益々進むグローバル化に対応するため、小学校・中学校・高等学校では「学習指導要領の改訂」が行われ、高大接続の部分においては「大学入試改革」が行われています。このような中、卒業生、在校生ともに「入学して良かった」「先生と出会えて良かった」と言ってもらえる学校になることはもとより、建学の精神を受け継ぎ、これまでの教育実践をさらに加速させ、豊かな個性と優れた人格、心身ともに健康で、進んで未来を切り拓き、逞しく生きることのできる生徒の育成を目指し、教職員が一丸となって、建学の精神に則った教育を邁進してまいりますので、本学園発展のために、今後とも、皆様方からのご支援・ご指導を賜りますようよろしくお願いいたします。

結びに、学園創立 80 周年記念の準備に当たり、ご尽力・ご協力をいただきました皆様方、ご多忙中にもかかわらず玉稿をいただきました皆様方に深く御礼を申し上げます。

理事 挨拶

## 紡ぎ繋いでいく 「信頼」と「挑戦」

学校法人静岡理工科大学 理事

(専門学校担当)

### 高橋 仁



この度、本学園創立 80 周年を史上最多の 7,714 名の学生・生徒とともに迎えられたことに喜びを実感しております。偏に学園創立以来、時代の要請に応える教育を実践されてきた先輩諸氏のご努力と先見の明に敬意を表するとともに、深く感謝申し上げたいと存じます。また、学園各校の教育にご理解、ご支援くださいました多くの卒業生、保護者の皆様及び地域並びにご支援を頂いています企業・団体の皆様に深く感謝申し上げます。

さて、専門学校教育としての本学園の歴史を辿りますと、1956(昭和 31)年 4 月に、今の静岡産業技術専門学校の前身である静岡県自動車学校整備科第 1 期生は 38 名から始まりました。爾来、自動車整備教育から始まり、1973(昭和 48)年に情報処理教育を開始、昭和 50 年代後半(1980 年代)には、沼津情報専門学校、浜松情報専門学校、静岡文化専門学校と地域、分野を広げ、2008(平成 20)年には富士山静岡空港開港に合わせ、静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校が開校するとともに、静岡デザイン専門学校浜松校を開校し、更に 2011(平成 23)年に浜松日本語学院、6 年後に沼津日本語学院が開校となりました。常に、時代々々の要請に応えた人材育成に挑み、地域に多くの人材を輩出し、現在は、専門学校 6 校、日本語学院 2 校に 3,092 名が在籍し、静岡県下専門学校生の 23% を占めるに至り、まさに「県下 No.1 の専門学校グループ」に成長してまいりました。

本学園の進取の気性に富んだ専門学校展開の底には、常に「技術者の育成を以て地域社会に貢献する」とした建学の精神に基づき、真摯に技術者教育を実践し、そこから醸成された地域、企業、保護者、卒業生の皆様からの「信頼」を先輩諸氏が一つひとつ紡ぎ繋いできてくださったことにあるものです。

「信頼」は一足飛びに得ることはできず、地道に重ね合わせ積み上げてきた努力と真摯な姿勢、そして教育への情熱から得られるものであり、手前勝手な理屈ではなく、常に学生、地域、企業のニーズを察知して積み上げてきた学園の財産であると思います。

2020(令和 2) 年・80 周年の記念の年は、新型コロナウィルス

COVID-19 の感染拡大の禍にも拘らず、教職員は「うつらない、うつさない」ことを基本とし、学生を守りつつ学びを止めないとしてオンライン授業を模索しながら、学生に寄り添うことに専心しておりました。このことは、学生だけでなく、保護者を始めとしたご家族、更には進学を希望する方々から多くの「信頼」を頂くことと繋がってまいりました。

もとより、これから時代は Society5.0 向けた DX(デジタル・トランスフォーメーション) による変革が進むと言われていたところに、コロナ禍の影響もあり、その変革スピードは大きく加速し、教育の在り方、手法も大きな変化の時代を迎えることとなります。オンライン授業と対面授業のハイブリッド型での授業運営や在宅勤務を定着させ、これまでにはできないと思ったことが簡単にできるような仕組みやサービスが数多く我々の眼前に現れるものと思われます。そうしたものを取り入れながら、新しい時代の教育、人材育成を標榜していくこととなります。

こうした時代背景の中、我々は「県下 No.1 の専門学校グループ」に相応しい「質」を求め、あらゆる側面において、「質の向上」に邁進していかなければならないと考えております。今後、「県下 No.1 の専門学校グループとしての圧倒的な教育力を構築していく」ことを目指していきたいと考えています。

この先の学園事業としましても、ビッグプロジェクトである 2024(令和 6)年の「御幸町キャンパス構築」と、それに伴う専門学校の再編が展開されていきます。将来の学園のランドマークとしての「御幸町キャンパス」を軸に、専門学校グループの力を掛け合わせて、様々な事業展開を進めて行くこととなります。

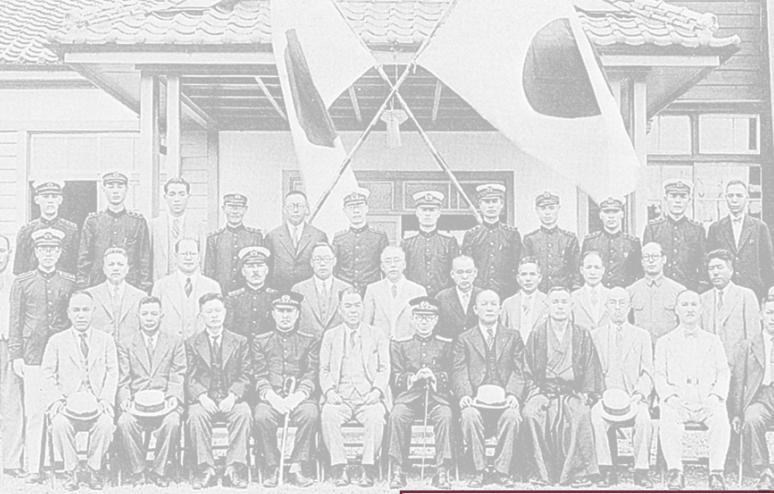
しかしながら、変えてはいけない基本姿勢として、学園の財産である「信頼」と「進取の気性」は、将来に向けて繋いで行かなければいけないものであり、学園を支えてくださった先人の皆様が紡いで来られた「信頼」を専門学校部門教職員一丸となって更に高く築き上げていき、変革の時代に相応しい「進取の気性に富んだ挑戦」を続けていきたいと思います。

どうぞ、今後とも皆様方のご指導・ご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

# 沿革

- 1940(昭和 15)年 5 月 • 静岡県自動車学校開設
- 1956(昭和 31)年 4 月 • 静岡県自動車学校に整備科を設置
- 1962(昭和 37)年 9 月 • 法人名を学校法人静岡県自動車学園に改称
- 1963(昭和 38)年 4 月 • 静岡県自動車工業高等学校開校
- 1970(昭和 45)年 7 月 • 静岡県自動車学校から静岡産業技術専門学校を分離開設
- 1973(昭和 48)年 4 月 • 静岡産業技術専門学校に電子計算機科を設立し、コンピュータ教育を開始
- 1976(昭和 51)年 3 月 • 学校教育法(専修学校規定)により静岡産業技術専門学校が専修学校(専門課程)として認可
- 1977(昭和 52)年 6 月 • 星陵高等学校がグループ校に加入
- 1980(昭和 55)年 4 月 • 静岡県自動車工業高等学校を静岡北高等学校に校名変更 静岡産業技術専門学校に情報処理科を設置
- 1982(昭和 57)年 4 月 • 静岡北高等学校に普通科を設置
- 1983(昭和 58)年 4 月 • 沼津情報専門学校開校
- 1984(昭和 59)年 9 月 • 静岡文化専門学校がグループ校に加入
- 1985(昭和 60)年 4 月 • 浜松情報専門学校開校
- 1988(昭和 63)年 4 月 • 静岡北高等学校に工業技術科を開設 星陵高等学校に英数科を開設
- 1990(平成 2)年 4 月 • 静岡北高等学校に理数科を開設
- 7 月 • 学校法人静岡県自動車学園より学校法人静岡自動車学園が分離
- 12 月 • 学校法人静岡県自動車学園を学校法人静岡理工科大学に改称
- 1991(平成 3)年 4 月 • 静岡理工科大学開学
- 1995(平成 7)年 1 月 • 文部省(当時)より当学校法人の専門学校の当該課程を修了した者を「専門士」と称することが認定される
- 1996(平成 8)年 4 月 • 静岡理工科大学に大学院を開設
- 1997(平成 9)年 4 月 • 静岡文化専門学校を静岡デザイン専門学校に校名変更
- 1999(平成 11)年 4 月 • 静岡理工科大学に情報システム学科を開設
- 2000(平成 12)年 4 月 • 静岡北高等学校に国際コミュニケーション科を開設
- 2001(平成 13)年 4 月 • 静岡北高等学校、星陵高等学校から、静岡理工科大学への高・大一貫教育を開始
- 11 月 • 静岡理工科大学開学 10 周年記念式典を開催
- 2005(平成 17)年 4 月 • 浜松情報専門学校が浜松駅前に新校舎を建設し移転
- 2007(平成 19)年 4 月 • 文部科学省から静岡北高等学校がスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受ける
- 2008(平成 20)年 4 月 • 静岡理工科大学に総合情報学部を開設  
静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校、静岡デザイン専門学校 浜松校開校
- 2010(平成 22)年 4 月 • 静岡北中学校開校 沼津情報専門学校を沼津情報・ビジネス専門学校に校名変更
- 2011(平成 23)年 4 月 • 星陵中学校開校 静岡デザイン専門学校浜松校を専門学校 浜松デザインカレッジに校名変更
- 10 月 • 浜松日本語学院開校
- 11 月 • 静岡理工科大学開学 20 周年記念式典を開催
- 2012(平成 24)年 4 月 • 文部科学省から静岡北高等学校が 2 期目となるスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受ける
- 2013(平成 25)年 8 月 • 沼津情報・ビジネス専門学校創立 30 周年記念式典を開催
- 10 月 • 静岡北高等学校創立 50 周年記念式典を開催
- 2016(平成 28)年 4 月 • 沼津情報・ビジネス専門学校が沼津駅南に新校舎を建設し移転
- 2017(平成 29)年 4 月 • 静岡理工科大学に建築学科を開設 沼津日本語学院開校
- 2019(平成 31)年 4 月 • 文部科学省から静岡北高等学校が 3 期目となるスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受ける
- 2020(令和 2)年 • 学校法人静岡理工科大学創立 80 周年





自動車学校落成式の日の設立準備委員（昭和15年6月）



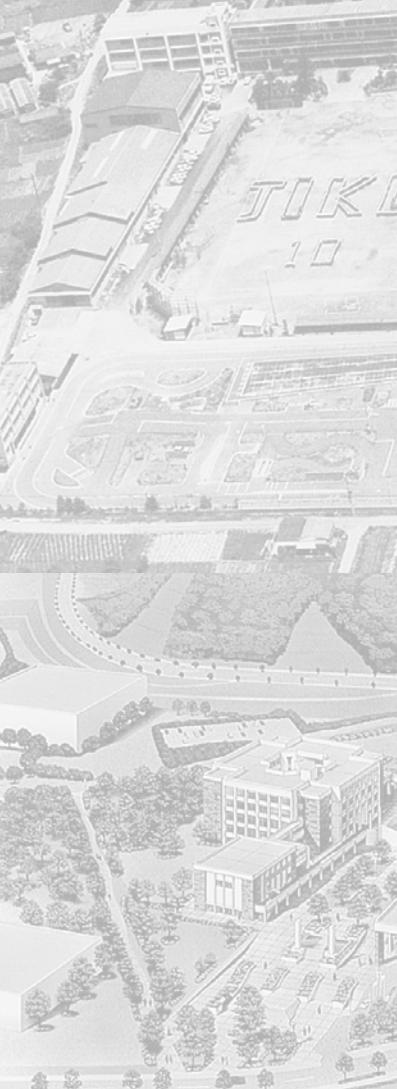
# 静岡理工科大学グループ 80年歩み

2020(令和2)年、学校法人静岡理工科大学は創立80周年を迎えた。現在、当法人は静岡理工科大学を中心とする総合学園として、グループ内の学校を教育のネットワークでつなぎながら未来に羽ばたく人材を育成している。その内訳は県内唯一の私立理工系総合大学である静岡理工科大学のほか、高等学校(2校)・中学校(2校)・専門学校(6校)・各種学校(2校)の合計13校に及ぶ。当グループはこれら静岡県全域に拡がる総合学園としての強みを活かし、「中・高一貫教育」「高・大一貫教育」「高・専一貫教育」といった多彩な教育連携により有為な人材を送り出してきた。

これらを支える土台として創立当初から継承しているのが「技術者の育成をもって地域社会に貢献する」という建学精神である。当法人の歴史をこの建学精神が掲げられた創立にまで遡ると、1940(昭和15)年に開学した静岡県自動車学校にたどりつく。日中戦争開始から3年ほどが経過し、太平洋戦争開戦を翌年暮れに控えた激動の時代だった。

1. 学校創立期　自動車産業発展の中で人材の育成へ
2. 拡大・発展期　広く地域の人材育成を担い、グループの拡大へ
3. 大学設立期　地域の発展に貢献する研究機関・交流拠点へ
4. 進展期　総合学園としてグローバル化が進む社会の人材育成へ

静岡理工科大学開学記念式



# 1 学校創立期

1940（昭和15）年～

自動車産業発展の中で  
人材の育成へ。

高度成長・急速に進むモータリゼーションの中で求められる人材を育成した時代。自動車産業の発展を支えるための人材を育成するために静岡県自動車学校を開設。学校法人静岡県自動車学園に改称されたのは1962（昭和37）年。1970（昭和45）年には静岡産業技術専門学校が分離開設され、新たな時代へと歩み始める。

## 創立前史

静岡県自動車学校設立の議論が起きたのは1939（昭和14）年5月、静岡県交通安全協会の第11回常任委員会においてである。当初、議論されていたのはガソリン節約を背景に浮上した自動車検査場（以下、検査場）の移転問題だったが、やがてそれは学校設立を含む計画へと発展することになる。

このころ、県交通安全協会の活動や自動車検査業務は静岡県警察保安課によって行われており、検査前後の書類手続は県庁で実施された。一方、実際の検査は北に12キロも離れた与一右衛門新田（安倍川上流の河川敷）で行われていた。結果として被検車輛は書類手続と検査のために往復24キロを走行することになる。当時、そのガソリン空費量が月に6000ガロンに達すると計算されていた。

1938（昭和13）年公布の国家総動員法のもと物資すべてが軍需優先となり、ガソリンの節約も“国家への奉仕”であった時代のことだから、6000ガロンの浪費は大問題だった。しかも、タイヤをはじめとする自動車関連物資も欠乏の一途をたどっていたため、検査場を県庁近くに移転すべきであるとの議論が提起されたのも無理のないことだった。

その際、問題とされたのが財源不足である。しかも移転後の運営上でも県からの助成金をいっさい期待できなかつたため、自動車学校を付設して検査場（運転免許試験場〈以下、試験場〉を含む）の維持管理を任せる案が浮上した。この学校設立の件は、いわば“やむを得ぬ措置”として計画されたことで、設立の功労者である山下栄蔵も後に「（静岡自校の設立は）夢にも考えていなかった」と述べている。

では、自動車学校の必要性が低かったのかといえば、決してそうではなかった。

まず、運転免許を持つ者の多くが戦争に召集されてしまい、運輸業務遂行のためには新たに運転技術者を養成する必要があった。その上、ガソリンの代わりに薪や炭を使う代用燃料車が増加したこと、これらに対応できる技術者も育成せねばならなくなっていた。事実、静岡自校の第1期生は「ガソリン自動車は代用燃料たる薪、木炭の代用となり……」と書き残しており、1939（昭和14）年から同15年、すでに代燃車が主流になりつつあったことを伝えている。

保安課長の梶文芳の意向もあり、早急な移転計画の実行をめざして設立準備委員会が設置され、さっそく委員らは同様な体制を探っていた長野や茨城などへ視察に赴いた。一方、財源不足については効果的な打開策を見いだせず、県交通安

全委員会はやむをえず委員の一人でもある山下栄蔵に協力を依頼することになる。彼は県の自動車業界の実力者であり、かつて同じく財源問題を抱えていた与一右衛門新田における検査場建設の際にも尽力した功労者のひとりでもあった。

協力を承諾した山下は県内を飛び回ってあらゆる業者に呼びかけ、結局、単独で10万円に達する移転資金のめどを立ててしまった。その上、梶警保安課長とともに県内の業界などから7万円ほどの寄付を集め、学校設立資金も用立てている。当時の金額としては、いざれもかなりの大金だった。

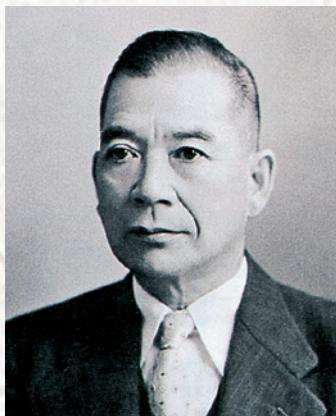
1939（昭和14）年11月、設立準備委員会は自動車検査場の移転先を東海道沿いの袖木<sup>ゆのき</sup>と選定し、山下は県警保安課職員も動員しながら、寝食を忘れて用地の買収交渉を進めた。地権者のうち反対する数人のため交渉は難航したが、あるときには料亭に、別の機会には山下自身の自宅に地権者を招いて彼らの意見を聞き、その上で国家への貢献と奉仕を説いた。後に梶課長が「（山下は）人に真似できない話術を持っていた」と回顧したように、やがて山下の誠意は反対者すべてに通じ、同年12月中旬、ようやく用地の買収契約がかわされた。

これとほぼ並行し、「応召者が多いか、生徒を確保できない」と学校設立に大反対する代議士山田順策の説得も進めた。同氏は静岡乗合自動車協会会長で市議も務める業界の大立て者である。が、ひとたび山下の説得を受け入れると、一転、大きな協力者となった。このときも山下は独自の話術と誠意の限りを尽くしたのだろう。周囲の者たちが「（山田のような反対者が）どうしてあんなに簡単に賛成したか不思議でならない」とそろって首を傾げていたという。

こうして山下らはやっとの思いで地鎮祭にまでこぎ着けたが、そのわずか1日前、苦心の結晶である学校用地を静岡縣護國神社（以下、護國神社）の移転先として取り上げられてしまった。文字どおり突然のこと、これを決定した県からは



静岡県自動車学校落成式の日の設立準備委員 1940（昭和15）年



建学の父、山下栄蔵氏

一言の断りもなく、相談すらされていない。それどころか、県の社寺兵事課長を務めていた護國神社の宮司から「敷地提供を拒むなら非国民だぞ。新聞ものだ」と脅迫まがいの圧力までかけられた。

戦時中のこと、軍関係筋の決定を覆せるはずもなく、山下の苦労は目的達成の直後、水の泡と消えた。ただ、このとき、山下は譲渡した土地と同坪数の代替地を県に要求し、なんとかこれを了承されている。翌年早々、山下は、後に「永遠に本校史に記録すべきものなり」と表現されるほど過酷な土地取得のための努力をまた始めた。が、その取得予定地は踏み込む人をズブズブと沈め、飲み込んでしまうような湿地だった。たとえ取得できても埋め立て工事の予算はなく、山下はまた新たな難題を抱え込むことになる。

ところがそんななか、1月15日に発生した大火災がその難題の解決策を与えることになった。5100余の家屋に被害をもたらし、776人にのぼる死傷者を出した静岡大火である。

同月19日、山下は用地買収を完了し、県に対して“一石二鳥”的案を打診した。すなわち、復興のため被災地を清掃し、その際に出る土砂や瓦礫を学校用地の埋立に用いてはどうか、と提案したのである。県はこの妙案を是とし、各方面と協議して21日より県内業者から奉仕貨物自動車を募ることになった。

記録によると連日30~50台にのぼる奉仕車両と人足84人が動員され、2月12日に作業が完了した。山下らが数カ月遅れの地鎮祭を挙行したのが3月2日のことだった。

こうして代替地を得て学校建設を再開できたものの、さすがの山下も軍と県による一連の強行措置には吐を据えかね、後々まで覚えていたらしい。「……ずいぶんと苦労してここまできたものを事前に何の話もなく、県で一方的に決めて押しつける。憤慨しました」と、方言まじりに語ったのは戦後のことだった。

## 静岡県自動車学校の発足

1940(昭和15)年7月1日、静岡県自動車学校が開校し、同日が開校記念日とされた。総敷地面積は5084坪、もとは無償で払下げられた県衛生課と耕地課の建物ながら、校舎兼寄宿舎や雑庫、車庫、洗車場を備えていた。教室には講堂・研究室・予備室があり、職員室にも事務室・校長室が用意され、生徒のための寄宿舎も7室あった。開学当初、当校は全寮制、就学期間は3ヶ月とされていた。

その直前の6月28日、自動車学校の竣工式と落成式が挙行されている。当日は梅雨のさながら快晴に恵まれ、午前10時の開式に梶文芳、山下栄蔵といった学校関係者や来賓など200人が参列した。竣工式の玉串奉納に続き、落成式では学校設立までの経過が詳しく報告された。そして桂定治郎交通安全協会会長は式辞のなかで「機械はどこまでも機械であり、これに魂を吹き込み精神を打ち込むものは即ち運転者である…(中略)…自動車や戦車は資材さえあればいつでも製作できるが、乗員に至っては一朝一夕で養成できない」と述べ、自動車学校の必要性とともに、技術教育を通して地域の人材育成をめざす当校の建学精神を端的に表現したのだった。

同年7月7日、本科第1期生37人が入学し、校長以下15人の教官が彼らを迎えた。このころの教官の多くは県警保安課職員が兼務しており、同課長の梶文芳が校長を務めていた。いずれも誉れある皇紀2600年の記念行事として学校開設に努力し、いよいよ始まる運転技術者養成への希望に気持ちを高揚させていたことだろう。

一方、第1期生たちが書き残した「入学の所感」を見ると、自動車に対する憧れや愛着とともに、やはり物資不足、技術者不足についての記述が目立つ。が、同時に「今後の交通運輸業界を背負って立つべく自動車学校に入学……」と将来への希望や志も清々しく記されている。彼らの多くは15、6歳、高等小学校を卒業したばかりの若者たちだった。

戦時下の開学だったこともあり、寮生活や授業は万事、軍隊的紀律のもとに行われた。全生徒を4個分隊からなる一小隊編成とし、小隊長は生徒全体の指導を行い、分隊長は講義や実習の各場面で分隊を率いた。生徒たちの起床は毎日6時、就寝は21時半と定められ、朝晩には全員が不動の姿勢をとって点呼に答えていたに違いない。毎日の朝礼は朝食後の午前7時50分に始まり、宮城遙拝の後、国旗掲揚下での君が代斎唱で終わる。授業開始は午前8時ちょうどだった。

当初のカリキュラムによると、午前中には「発動機」「機構」「電気」「分解」「修理」「燃料」など技術系科目を主体に講義が行われ、13時から16時まで午後の授業はすべて実習とされていた。ところどころに「体育」「訓育」の科目も見られるが、時節柄、軍事教練に近い内容だったろう。事実、開学時に定められた5つの校訓のなかには「尊皇愛國」「臣節」といった戦時体制を色濃く反映した項目があった。

これ以後、生徒不足や物資不足、車両故障、さらには空襲に悩まされながら、終戦の年まで22期におよぶ卒業生が静岡自校を卒業した。1976(昭和51)年に刊行された『山下栄蔵



設立当時の静岡県自動車学校校舎とコース 1940(昭和15)年

伝』には、当校の第1期から第50期までの卒業者数が一覧表にされている。戦争末期（第20期）の卒業生数が不明なため正確な数はわからないが、開学から5年あまりで900人を超える技術者を養成した。その間、かつて山田順策が主張したごとく生徒の確保に苦心する一方、タイヤや部品など関連物資の欠乏にも泣かされた。たとえ燃料があっても、自動車が動かなくては実習を進めようがない。戦中のガソリン統制はたしかに厳しかったが、当校の教官と生徒を苦しめたのはむしろモビール（エンジンオイル）の欠乏であり、さらには老朽化と部品不足で動かない自動車そのものだった。その上、すでに主流になり始めていた代燃車の発動には想定外の時間がかかり、しばしば実習開始時間に間に合わなかったばかりか、最悪の場合、終了時間を過ぎてしまった。

むろん、負担となっていたのは物質面だけではない。教官を兼務していた県警保安課職員には本来の任務があり、学校教育が目に見えぬ重荷となったのは当然だ。そのあげく、戦争末期には当校を県立校と勘違いした陸軍に施設全体を占拠されるなどという事態にも遭った。しかし、教官たちは優秀な技術者を育成すべくあらゆる場面で精進し、静岡自校を一度として休学させたことがなかった。令和の現在、80年の過去を振り返って当法人の歴史を語るとき、これら創立当時の学校を運営した先人たちの苦労と努力を忘れてはならないだろう。

そして1945（昭和20）年8月15日、日本国民は玉音放送によって戦争終結を知らされた。ここから始まる戦後復興期、当校を含む自動車学校の重要性はいっそう高まっていく。都市の復興のため、不足する食糧や物資の運搬のため、優秀な運転技術者を必要としたからだ。その一方、新たに交通事故の防止という使命も帯びるようになっていく。自動車台数の増加にともなって交通事故件数も増えてきたためである。終戦後、休眠状態となっていた県交通安全協会を再発足させた主要因もこれであり、同協会の記録によれば1945（昭和20）年に177件（死者61人）だった県内の交通事故数は同23年に443件（102人）と急増し、同26年には1000件（150人）を超えた。

また、連合国軍総司令部（GHQ）主導の民主化にともない、県交通安全協会の組織でも同様の改革が進んだ。1949（昭和24）年1月に協会会則の一部を改正し、会長や副会長、常任幹事などを民間人から選出したほか25にのぼる支部の長も同じく民間人としたのである。

当校が創立10周年を祝って記念式典を挙行したのがその翌25年、浜松に静岡県西部運転免許試験場（以下、西部試験場）が設置される前年のことである。このころ、当校にも民

主化政策の影響が及び、法人化の必要性が議論された。戦時体制ゆえに見過ごされてきた税法上、組織上の矛盾が許されなくなってきたのである。

## 学校法人化

当校の設立母体である静岡県交通安全協会の財団法人化が議論されたのは開学の少し前、1940（昭和15）年5月30日に開かれた設立準備委員会の常任委員会においてだった。しかし、このときは各委員が対立案を主張して互いに譲らず、最終的に「法人化はすべきことながら将来の課題とし、当面は任意団体とすること」「自動車学校の敷地は県に寄付するが、将来、所有権を回復できるよう条件付とすること」など、部分的な折衷案が決議された。以来、当校の敷地は検査場および試験場敷地として県に寄付されたままとなっていた。

『山下栄蔵伝』の記述によれば、当校を県交通安全協会から分離して法人化する上で第一の目的とされたのは山下の考えにもとづく「学校の資格の明示化」だった。これは「学校の権威を確立し、卒業生の社会的地位を向上させること」を意味している。これに加え、敷地や建物など「財産の保全」という目的もあったが、こちらは税法上の問題を多く抱えていた。

また、県交通安全協会から独立した理由として、同書は「学校設立後に同協会からの資金投入がなかったこと」「協会各支部の理事がすべて民間人となっていたこと」などを挙げている。これらの結果、県交通安全協会は公益財団法人化を、静岡自校は学校法人化をそれぞれめざすことになったのである。

当時、自動車学校長を兼務していた増田莊十警運交通課長は後の回顧談で、「いちばん困ったのは学校の建物などが未登記で税務署が黙視してくれなかったこと」と語っている。実際、建物や敷地の一部は旧地主名義のままで、「学校にそんな財産があったか」と驚くような実態だったという。その上、専任職員の源泉徴収も行っていたことが判明し、これら税法上の矛盾をただすだけでも、法人化による組織全体の整理以外に良策はなかっただろう。

1951（昭和26）年5月、県交通安全協会は会長鈴木要二の名をもって県有土地建物払下申請書を提出、検査場と試験場の管理上から委譲していた不動産所有権の無償譲渡を申請した。その際の理由として「戦後学校経営は施設人事運営等管理の徹底改善を要するので…（中略）…土地建物の所有権も回復することが必要且妥当」と書き添えている。

同年11月9日、県知事斎藤寿夫は同申請に対し、県交通安全協会会長宛に無償譲渡する旨を通達した。

翌27年1月11日、県交通安全協会は第23回委員総会で「同協会の財団法人化」と「自動車学校の学校法人設立」を可決し、同日付で敷地、施設などいっさいを学校法人静岡県自動車学校の設立代表者に対して寄付することになった。同時に、山下の「事務上の煩雑を避け、役員を最小限にとどめるべき」との意見により、鈴木要二、山下栄蔵など5人の必要最小限の理事を選出した。

同年3月20日、私立学校法にもとづく「学校法人静岡県自動車学校」の設立認可申請書を県知事に提出。正式な認可を受けたのが同月末日のことで、これで念願の法人資格を有する静岡



創立10周年記念式典会場アーチ 1949（昭和24）年



静岡県自動車学校校舎竣工 1953(昭和 28)年

県自動車学校が誕生した。初代理事長は鈴木要二、後に財団法人化した県交通安全協会の理事長も務める人物である。

そして同年12月、建物の老朽化や運転免許受験者の急増を背景に、校舎改築とコース拡充工事のための予算が計上された。これが当校における初めての校舎の増改築工事である。これらの完成が翌28年11月11日、当校は全国でも屈指の設備を誇る自動車学校となった。この日まで旧設備で学んだ卒業生は2643人に達している。

落成式当日、第14代校長の草間喜代美は祝辞で增加一途の交通事故に言及し、「人道上、社会上、大きな問題である」と述べ、「自動車学校の使命はいよいよ重大さを加えてきたことを痛感する」と結んだ。この年、静岡県内の自動車数は前年度から約1万台増えて3万5500台に達し、9月までに起きた1826件の交通事故で1636人の死傷者を出していた。祝うべき落成式当日、草間校長があえて重い現実を直視したのも無理からぬ数字だったろう。

同日開かれた理事会の席上、当学校にとって最大の功労者である山下栄蔵の胸像建立が議題に上り、満場一致で可決された。完成したのは翌1954（昭和29）年2月のこと、同月5日、新校舎の会議室で除幕式が開催された。現在に至るまで合計3回作られた山下栄蔵の胸像の、これが第1号だった。このとき式辞を読み上げたのは鈴木理事長である。

彼はそのなかで山下が学校設立までに克服した幾多の困難に言及し、これに要した莫大な費用が山下自身の私財によって賄われたことに改めて触れた。そして、用地取得の際に彼が直面した労苦、さらには神社移転のためとはい、それら苦労を二回も繰り返したことなどを感情を込めて語り、峻厳さのなかに秘めた山下の温情を「よほどの忍徒と神に仕える尊嚴の心」とたたえた。

この日を機に山下栄蔵を師表と慕う人々が心を一つにし、世に誇るべき彼の業績を永遠に伝えるべく「栄会」を結成した。以後、会員らは毎年1度の会合をもち、年初7日には一同そろって山下家へ年賀に参上するようになったのである。

## 整備科開設と専任校長の就任

山下栄蔵の胸像が披露された翌年、1955（昭和30）年から日本の高度成長期が始まり、モータリゼーションが加速する。個人消費が急速に拡大し、国民の間に“3種の神器”といわれたテレビ・電気冷蔵庫・電気洗濯機が普及し始める。やがて大衆向け小型乗用車が販売されるようになり、昭和30年

代半ば以降、ついにマイカーブームが訪れた。この間、県内の自動車数急増を背景として、当学校法人に関連するいくつかの変化が起きている。

まず、1953（昭和28）年ごろより具体化されたのが検査場の移転計画である。現在の車検制度が制定されたのがその2年ほど前のこと、増加する検査車両に対応すべく、再び山下栄蔵を中心に国吉田で用地取得のための交渉が進められた。

また、同時期、浜松にある西部試験場の敷地や建物が当学校法人に無償譲渡されることになり、翌29年元日、同施設をもって静岡自校浜松分校の発足を決定した。同年には沼津の東部試験場の買収が当法人の理事会で議論され、1957（昭和32）年1月、沼津分校の発足も決議された。以上の間、山下らによる検査場の移転が1956（昭和31）年2月に完了、県内の自動車数が7万台を超えた年のことだった。

この1956（昭和31）年は当校にとって整備科を設置した特筆すべき年であり、専任校長が就任した初めての年でもあった。それまで当校の校長は県警保安課長が兼務し、1年そこそこで次々に交代していた。そのため、一貫した学校運営ができているとはいえず、実情は赤字続きだったのである。整備科新設について正式に議論されたのは同年2月13日の理事会においてだった。ただ、第14代校長の草間が後に「（私の）校長時代から出ていました」と回顧したように、実際にはかなり以前から話題に上っていた問題だった。

とはいって、そのころの整備科といえば経費のかかる割に応募する生徒が少なく、卒業生の進路も有望とはいえない学科だった。しかも、整備科を新設し、1年で3級整備士を養成する場合、2級整備士の教官を雇い、2級整備工場レベルにまで設備を拡充せねばならない。その設備投資だけでも約1000万円といわれていた。松村周次郎教頭らが「赤字の上に赤字をつくるようなものだ」と反対したのは当然の成り行きだったろう。それに対し、赤字覚悟で設置を促したのが山下栄蔵だった。

「静岡県自動車学校がほかの工場で整備してもらい、車検に出すとはどういうわけだ。堂々と自分で解体し、整備すべきだ。もう、そういう時代になったのだ」

1956（昭和31）年4月、新設された整備科は第1期生38人を迎えた。そして、時代の変化を理由とした山下の判断の正しさはこのわずか1カ月後、「民間車検制度の発足」という目に見えるかたちで証明される。

すでに触れたように、現行の車検制度は1951（昭和26）年に制定され、かつて自動車運送事業を取り締まる目的だった制度から、自動車を技術面から管理する考えのもとに法制化されていた。1956（昭和31）年2月には自動車賠償責任補償制



整備科開設当時の静岡県自動車学校 1956(昭和 31)年

度が始まり、同年5月には民間車検制度の発足とともに検査業務を全国的に統一すべく「自動車検査業務等実施要領」も通達された。この時期以後、車両数急増を背景として、自動車検査業務の拡大と普及が始まるのである。

一方、「赤字覚悟」としてはいたものの、当の山下はその対策として自動車販売店からの援助金や県からの補助金の獲得に奔走していた。ほぼ同時に専任校長招聘のための努力も行っており、鈴木理事長とともに学校全体の運営改革のための活動をも始めていた。

同年9月、初代専任校長に就任したのは金子儀平だった。学校創設時、山下栄蔵と一体となって用地買収などに奔走してきた県警保安課主任で、『山下栄蔵伝』によると、「その努力と手腕は山下に深い印象を残していた」という。学校創設準備が整った当時、内務省に出向した金子は県警の総務、刑事部長、さらには浜松や静岡の中央署長などを歴任していたが、静岡自校の専任校長となるべく退職した。このとき金子は未だ前途ある50歳、もちろん本人の意志のみでキャリアを中断したのではない。「ぜひ学校長に迎えたい」という、山下栄蔵や鈴木理事長からの懇請に応じた結果だった。

専任校長就任後、金子は山下らの信任によくこたえ、財政・教育両面から静岡自校の変革を果たしていく。金子は学校独自の苦労について「学校法人には増資などありませんから、効率的運営による貯蓄と金融機関からの借入による以外には、事業拡大の方法はありませんでした」と語っている。そして1962（昭和37）年、学園運営を軌道に乗せた金子は初代の専任専務理事にも就任し、当法人の改組や静岡県自動車工業高等学校の設立などにも尽力した。後に山下が「学校がよくなり、発展したのは金子さんを迎えてからだった」と回顧したごとく、当法人発展の基礎を築いた功労者として忘れてはならない人物の人だろ。

初代専任校長の誕生後、1957（昭和32）年になると当校の整備科は自動車整備技能検定規則による学科として認定され、同34年にはその実習教室が竣工した。創立20周年を祝い、校歌を発表したのがこの翌年、1960（昭和35）年のことである。

## 静岡県自動車工業高等学校の設立

マイカーブームの到来する昭和30年代半ば以降、当法人は整備科に加えて溶接科を増設し、浜松・沼津の両分校を正式に発足させるなど、組織の拡充期に入った。浜松分校は1954（昭和29）年に発足を決定していたが、実際に県から分校として認可されたのは同32年8月のこと、翌年4月、鈴木喜代平が校長となって分校の整備を始め、1959（昭和34）年1月から本科を開講した。沼津分校もその2年前、1957（昭和32）年1月9日に開校式を挙行しており、これで県西部および東部で急速に増加する運転者・技術者への需要に応じられるようになった。

このころから、当法人では山下を中心に自動車工業短期大学の設立について議論するようになっており、「一足飛びに短大が無理なら、まずは工業高校を——」という考え方もしていた。これを具体化させたきっかけの一つが、1960（昭和35）年の道路交通法改正によって始まった公安委員会指定自動車教習所制度だった。従来、同指定を受けていたのは県内で当校だけ

だったが、教習期間が3ヵ月から時間割に変更されたため、後発の教習所が続出し始める。翌年、当校は県公安委員会から交通違反などによる運転者行政処分講習を委託されるものの、実質上、従来の優位性は失われることになった。

このような事情により、山下らは1963（昭和38）年をめどに工業高校の新設を決心した。同年には第1次ベビーブームを背景として高校進学者数がピークを迎えるためだ。新設校に設置する学科は自動車工学科のみ、「質実剛健」「創意実践」を校訓とする。

山下らは用地買収から造成、校舎建設に至るまでを3ヵ年で完遂する計画としたが、当時、高校の新設には少なくとも3万m<sup>2</sup>の敷地を必要とし、設立資金として1億円ほどを見込まねばならなかった。設立準備の中心である山下と金子は、資金繰りも含めて自動車学校創立時に勝るとも劣らぬ努力を強いられる事となる。

まず、山下は校地を瀬名に定め、89人におよぶ地主との交渉を始めた。数ヵ月というものの現地に赴いて昼夜を分かたず折衝を繰り返し、「1日がこんなに短いものか」と嘆くような日々が果てしなく続いた。このとき大きな助けとなったのが、かつて瀬名の地で村長を務め、地域発展を第一とする山田与作の存在である。山田は率先して高校誘致の意義を地主に説き、校地買収交渉の進展に貢献した。

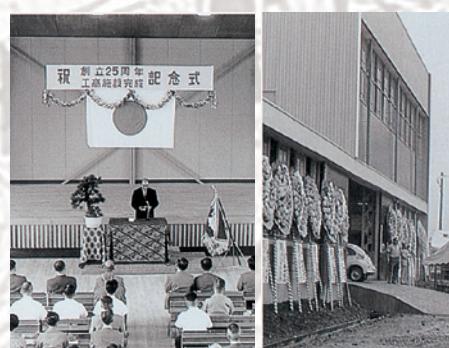
一方、金子は人件費節約のため、自ら校長を兼務しようと教員資格取得のための勉強を始めた。後に金子自身が「高齢で記憶力が鈍っていたから——」と述懐したように、苦心慘憺の末に中学・高校の社会科教員資格を勝ちとり、実際に初代校長を兼務しながら社会科の授業をも担任するようになるのである。

校地買収のめどが立った1962（昭和37）年5月の理事会・評議員会で正式に自動車工業高等学校の設立が決議され、6月には瀬名実習場の整地を完了した。10月には鈴木建設の請け負いで校地造成から校舎建設を開始し、一期工事の進行に合わせて入学試験の準備を進めた。そして同年12月13日、自動車学校3校に加え、自動車工業高校を擁すこととなった当法人は、その名称を自動車技術教育の殿堂にふさわしく「静岡県自動車学園」と改めた。

実績のない新設校のため、当初、志願者は500人程度と予想されていたが、いざ募集してみると860人もの人数が殺到した。自動車産業の将来性の高さとも相俟って、全国でも珍しい自動車工業高校の新設は予想外の反響を呼んでいたのだった。

1963（昭和38）年4月8日、静岡県自動車工業高等学校（以下、自工高校）は第1期生150人を迎えた。ここに当学園はいわゆる“一条校”を擁する学校法人となったのである。

左／記念式典で挨拶する鈴木要二理事長  
右／記念式典会場入口風景  
1965（昭和40）年





西伊豆教習所開設  
当時の教習風景  
1970(昭和45)年

自工高校にとってこの入学式は同時に開校式でもあったが、本館校舎の建設工事はまだ完了していない。山下らの努力が実り、校地の買収契約を完了したのが開校のわずか2カ月前、校舎の完成予定日は5月以降だった。

待望の校舎落成式は6月17日に挙行された。来賓を代表する県知事の祝辞を聞きながら、山下と金子は胸が痛くなるほど感激を噛みしめていた。そして、その胸に秘められた大きな希望と期待は、やがてこの高校で学ぶ無数の生徒たちに向けられていたが、実は当学園で働く全職員たちにも向けられていた。後に金子儀平の義理の息子である杉山昌弘は、金子たちの高校設立にかけた思いの一端をこう語っている。

「(金子儀平は) 教習所の職員全員に“自分たちの学校は単なる教習所ではない”という誇りを持たせたかった」

当法人の使命は建学精神に謳うごとく、社会に貢献できる技術者を養成することだ。が、当学園にとって、生徒たちを指導する教職員たちもまた共に成長し、未来に羽ばたくべき人材なのである。

## 静岡産業技術専門学校の設立

1963(昭和38)年に開学した自工高校は同年11月に実習室の建設を決定し、年内に校歌の発表会も催した。翌39年4月からは共学の工業経営科を新設し、自動車関連企業や工場などの総務・管理・営業などに貢献できる中堅幹部の養成をもめざすことになった(同46年には交通工学科も新設)。その一方、学園本部内では将来的な工業短大の設立方針を再確認してはいた。そして1965(昭和40)年、当法人は創立25周年の節目を迎え、7月に静岡市産業会館で3日間にわたる学園文化祭を開催し、自工高校で盛大な記念式典を挙行した。本校と分校に安全運転講習所を付設した年である。これは9月1日の道路交通法改正で運転者行政処分講習が強化されたためで、以後、講習手数料を徴収するようになった。

この1965(昭和40)年は国内景気が大きく落ち込み、当校の入学生も大きく減少した年だった。高度成長期の終焉を囁く声も聞かれたが、景気はわずか1年で持ち直し、日本経済は再び高度成長の波に乗った。発展著しい自動車産業は輸出面でも花形産業となり、これを背景に当法人の教育体制の拡充もいっそう加速する。

1966(昭和41)年には旅客自動車運転免許(第2種免許)教習を開始し、同42年には瀬名実習場校舎を完成させた。翌43年には静岡・沼津・浜松の3校に学科を増設。新たに開講したのは、①運転高等専科(3カ月/昼間)、②溶接科(6カ月/夜間)、

③製図科(1年/夜間)、④管理事務科(6カ月/夜間)で、定時制の夜間教育も始めた。同時に静岡校では従来の学科名を改め、①自動車技工科(1年/昼間)、②自動車整備科本科(1年/昼間)、③板金塗装科:本科(1年/昼間・夜間)、④溶接科:本科(4カ月/昼間)とした。

さらに同年竣工した法人本部の新館にシミュレーターや各種検査機器を導入し、翌44年から中央研究所を発足させた。運転者の適性などを科学的に分析して無事故ドライバーを育成するためで、外部からの要望があれば関連研究や検査も受託可能である。この年には行政処分者講習の受講者が累計20万人を突破したこともあり、中央研究所の機能に大きな期待が寄せられた。また、東名高速道路の全線開通を踏まえ、当校が全国に先がけて高速教習を始めたのも同年のことである。こちらも全国から注目を集めた。

翌1970(昭和45)年には松崎町を中心とする西伊豆地区の要望に応え、西伊豆教習所を開設した。竣工式を挙行した2月9日よりさっそく業務を開始し、翌月には早くも第1号の運転免許試験合格者7人を誕生させた(同47年より松崎校として指定校となつた)。

そして、ちょうど創立30周年を迎えたこの年、業務の実情に合わせて教習業務を収益事業とし、同時に整備教育部に属する自動車整備科・板金塗装科・製図科・溶接科の4科を公益部門として分離した。後者は新たな専門学校として独立させることになったが、その名称には“自動車”的言葉をあえて使わず、「静岡産業技術専門学校」とした。これは、「自動車産業のみにとどまらず、広く産業各分野の中堅技術者を育成する」という、これまでより視野を広げた教育目標を打ち出したためである。

実際、1972(昭和47)年には情報産業の発展を見据え、新校舎に電算機NEAC2200モデル50型を導入。さっそく「電子計算室」を発足させたほか、自工高校に情報処理科を新設し、翌48年には専門学校にも電子計算機科を開講した。これをもって学園は県内における情報処理教育の先鞭をつけたのである。

こうして当法人は1940(昭和15)年の開学以来、教育内容や設備を時代の要請に合わせて拡充し、教習部門のほか高等学校と専門学校を擁する総合学園に成長した。ただ、とくに成長著しかった高度成長期において、唯一、山下栄蔵の訃報だけが悲しむべき報せであった。学園設立の最大の功労者は1968(昭和43)年11月13日に病のため入院し、翌日、急逝した。そして未だ悲しみの癒えぬ12月3日、故山下栄蔵は交通関係諸事業に対する長年の貢献をたたえられ、閣議決定によって従六位に叙されたのである。

(注) 中央研究所…1971(昭和46)年、静岡免許試験場跡地に設置した静岡安全運転センターへ研究所機能を引き継ぎ、統合された。



静岡産業技術専門学校自動車整備科実習風景 1972(昭和47)年

# 2 拡大・発展期

1973（昭和48）年～

広く地域の人材育成を担い、  
グループの拡大へ。

コンピュータを中心とした電子技術が普及した時代。静岡産業技術専門学校の電子計算機科設立から始まり、沼津情報専門学校、浜松情報専門学校の開校によって情報・コンピュータ分野の人材育成を全県へと広げていく。また、星陵高等学校の加入、静岡北高等学校への校名変更、静岡文化専門学校（現静岡デザイン専門学校）の加入など、グループも拡大し発展を遂げる。

## 静岡北高の誕生と星陵高校の加入

当学園の教習部門（静岡校）で無線教習を開始した1973（昭和48）年、自工高校は創立10周年を迎える。記念事業の一環として新校舎および体育館を新築することになった。情報処理科の開設などによって生徒数が増え、従来の校舎だけでは狭くなつたためである。

これによって施設のほぼすべてが整い、スポーツ各部のめざましい活躍も始まる。これ以後の10年を見ると、サッカー部は県大会で2度の優勝を果たし、卓球部の全国大会出場回数も6回におよび、1980（昭和55）年には交通工学科3年生がジュニア卓球全国大会で準優勝するなど好成績を残した。このほか、自転車競技も全国大会に3回出場し、バスケットボール部も同56年の県大会に準優勝している。また、同60年以後には当校の特色を生かした「自動車工作部」が自作車輛で省エネ競技会に出場し、企業チームを抑えて入賞するなど好成績をおさめた。

この自工高校が「静岡北高等学校」（以下、静岡北高）と名称を変更したのが1980（昭和55）年、当学園が創立40周年を迎えた年だった。学科が4つに増えて教育内容が多様化し、工業高校という名称の枠に入らなくなってきたためである。このころには社会的にも普通科志向が高まっており、静岡北高は改称した年から工業経営科に普通コースを設置し、1982（昭和57）年には普通科を新設した。

上記期間、当法人は学校法人金指学園を合併することとなり、1977（昭和52）年6月3日付で県知事の認可を得た。これにより金指学園は解散し、その経営下にあった星陵高等学校（以下、星陵高）の経営のすべてを当学園が引き継いだ。

星陵高は市街を一望できる風光明媚な富士宮市星山の高台に位置し、10万m<sup>2</sup>の校地を有する全日制普通科の男子高校であった。校地面積は、高校設置基準の約3倍の広さで、優れた教育環境を有している。まだ学校創立3年目という新しい学校だった。

合併当時、同校の職員数は事務職員を含めて35人、在学生は全学年合わせて487人だった。生徒は、3学年が初めてそろつたばかりで、卒業予定者の大半が進学を希望しており、星陵高校の教育や進路指導への期待も大きかったことが想像できる。

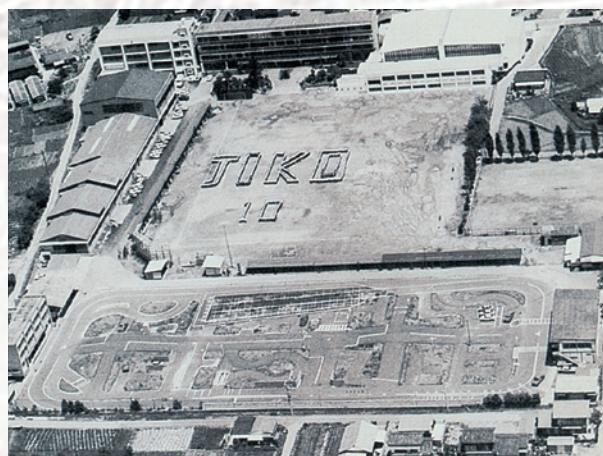
合併からほどない9月24日、星陵高で初となる文化部発表会が開催された。初めての試みのため一般公開をしない校内行

事とし、翌年以降、一般公開に臨めるよう活動の充実を目指すこととなった。翌25日には第2回体育大会を実施した。10月からは受験に向けた本格的な進路指導が展開された。第1期卒業生の進路希望の内訳は進学が99人、就職が46人、自営5人だったが、県内外から50社を超える求人があり、求人者数は、就職希望者数の3倍ほどに達した。

翌1978（昭和53）年3月、初めての卒業式を挙行（卒業生149人）し、4月に173人の新入生を迎えると、早くも地元地区の中学などから入学定員増の陳情が寄せられた。第1期卒業生の進学や就職実績もその要因の一つであった。当学園は地元の要望に応えるべく、急遽、私学協会の了承をとり、1979（昭和54）年度の募集定員を225人に拡大し、さらに翌年3月3日付で同55年度の入学者数を320人（総定員960人）にまで増加するための認可を取得した。

同時期、校舎の増築工事が進行しており、1979（昭和54）年8月に竣工した。増加する生徒の受入体制を整える一方、1983（昭和58）年12月には武道館も完成させ、同59年1月に竣工式を挙行した。さらに同年11月には夜間照明総合施設も落成し、翌60年には念願のテニスコートの整備も完了した。かつて自工高校がそうであったように、星陵高も創立10周年を迎える年にはほぼすべての教育施設を整えた。

この間、生徒数は順調に増加した。部活動も年を追う毎に実績を上げ、その名を県外に示した。1981（昭和56）年の全国高校総体では星陵高の自転車競技部がイタリアンチームレースに出場し、1分47秒21の日本記録を樹立。同58年にはハンドボール部が全国高校総体県大会で初優勝を飾り、全国大



静岡県自動車工業高等学校開校10周年を記念した人文字 1974（昭和49）年



夏の全国高校野球県大会 1973(昭和48)年

会へ出場した。同60年5月には高校総体静岡県大会の自転車競技(団体)で念願の初優勝に輝いたほか、1000mタイムトライアルで1~4位を独占した上、1万mポイントレースで星陵高の選手が優勝した。また、文化系の吹奏楽部も同57年から富士宮市民文化会館で定期演奏会を開始した。定期演奏会は、やがて多くのファンを集める地域の恒例行事になっていった。

星陵高校の校訓は「誠・友・嚴」で、「誠」は誠実な心で事に当たる、「友」は、友情の輪を広げる、「嚴」は厳しさを自ら求める、を意味している。

1973(昭和48)年以後、2度のオイルショックを経て、日本は戦後最大の不況といわれる時代に突入していた。しかし、当学園の高等学校は教職員たちの努力もあって、順調に生徒数を増やし、発展し始めた。

## オイルショックの影響と対策

高等学校2校の設備が整えられる一方、静岡産業技術専門学校(以下、静岡産技)の新校舎も1972(昭和47)年7月に完成し、同49年2月には自動車完成検査場も竣工した。この間、テレビ・新聞などの報道を通じて当校の“女性技術者養成”的理念が高い評価を受け、1973(昭和48)年7月には中日ショッパー社の企画で「これから女子の職業」をテーマとする座談会も小冊子として発行された。

ただ、同年10月に勃発した第4次中東戦争を契機に起きた第1次オイルショックの影響もあり、専門学校への進学者は激減していく。もちろん、それは全国的な傾向であったが、とくに1975(昭和50)年以後の自動車整備学校は“苦難の時代”を迎え、各地で休校や廃校となるケースが相次いだ。当然ながら、その状況は静岡産技も同様で、当該時期に校長に就いた寺田實は後にこの時期のことを「就任早々、私に課されたのは起死回生の振興策でした」と振り返っている。

この“起死回生の振興策”として寺田が理事会に上程した計画は、なんと「生徒数を2.5倍に増やす」という大胆なプランだった。寺田自身の予測通り、同案は「机上論だ」と非難を浴びることとなるが、このときから寺田を含む職員たちは2人1組となって日本全国の中学や高校を車で巡り、地道な広報活動を開始する。もちろん初めての経験もあり、その場でよい返事などはもらえない。それでも職員が一丸となって活動を続け、これと並行して学校のさらなる振興策を練っていく

ことになった。広報活動を続ける傍ら、寺田は建学精神に立ち返って熟考を重ね、やがて3つの施策にたどり着く。

第1の策は「必要な教材はすべて買うこと」。当時の静岡産技はいわゆる各種学校であり、社会的評価も決して高いとはいえない。教材も、あちらこちらから譲られた“おさがり”ばかりが目立ち、決して自慢できる状況にはなかったのである。

第2の策は、社会人としてのマナー教育の実施だった。これを徹底することで、生徒すべてを学校が自信をもって企業に推薦できる学生にしようと考えたのである。事実、企業からは、社会人としての常識をわきまえた人材を望む声が上がっていた。

最後の策は「完全2年制」。当時の学科は中卒を対象とする1年制と高卒を対象とした2年制に分けられていたが、これをすべて2年制学科にする方針としたのである。これで整備科卒業生は2級整備士資格を取得できるし、電子計算機科(1981(昭和56)年にコンピュータ科と改称)でも80人を1年間で教育するより40人を2年間で育てるほうが充実した教育内容にできる。

これら3つの施策は1975(昭和50)年以後、着実に実行されていく。すると、日本全国から資料請求の葉書が届くようになり、パンフレットを送り返すと実際に学生が入学し始めた。ほどなく従来優先していた地元の推薦を待たずに定員を満たすようになり、地域の高校からクレームがつけられるようになった。やがて、定員確保を心配するどころか、志願者全員に入学試験を実施するようさえなったのである。こうなると当然ながら学生の質が大きく向上し、1979(昭和54)年から全員が2級自動車整備士試験に合格するなど卒業生の好実績が目立つようになった。

こうして起死回生を図った寺田の策は功を奏し、各高校や就職先企業から「静岡産技はいい」との評判をとるようになったのである。

もちろん、この好循環の背景には、専修学校制度の発足、自動車産業の発展といった外的要因もあった。法的裏付けにより当法人を含む専門学校の社会的地位は向上し、自動車産業の成長で学生やその保護者たちには「自動車業界は将来有望」「自動車メーカーに就職すれば安心」といった風潮があった。

しかしこれらの外的要因があったとしても、背水の陣を敷いた寺田の策と職員たちの実行力がなければ、オイルショックによる悪影響を跳ね返すことはできなかっただろう。後に寺田は当時得た教訓を次のように語っている。

「失敗を恐れないことです。失敗を怖がる人は失敗しないよ



静岡産業技術専門学校第1号女性技術者たち 1973(昭和48)年~1974(昭和49)年卒

うな行動しかできなくなる。そこからは何も生まれないでしょう」

これ以後、当学園の専門学校は近い将来における情報産業の発展を予見し、自動車産業とともに情報処理技術教育の充実に取り組んでいくことになる。

## 電算化の推進と情報専門学校の開設

当法人の専門学校のうち、静岡産技を除く2校（沼津校・浜松校）は1974（昭和49）年に廃止となっていたが、第2種情報処理技術者の養成を目的として沼津情報専門学校（以下、沼津情報）と浜松情報専門学校（以下、浜松情報）を開校することになった。

これまで当学園は電算機の活用を本格化させており、1981（昭和56）年には教習部門の静岡校で業務の電算化を実現し、同59年にはすべての教習所で同システムの導入を完了した。この当学園が開発したフルコンピューターシステムは県内唯一の本格的電算化方式であり、全国的に見てもトップレベルのシステムとなった。

またこの年には静岡産技にパソコン・ネットワーク室が完成している。このとき当校は文部省（現、文部科学省）より1983（昭和58）年度私立学校施設整備補助金を受けており、同室にOCR（文字読み取り装置）、NEC製16ビットパソコン（PC9801-E）10セットを導入し、光ファイバーで結んだネットワークを構築した。これは近い将来に普及するオフィス・オートメーションを先取りしたローカルエリアネットワーク（LAN）システムのプロトタイプだった。これに加えてオフィスのデスク作業の変革も予見し、OAデスクやチェア、間接照明なども取り入れた先進的な施設とした。

沼津情報の開校がこれと同時期、1983（昭和58）年4月のことだった。前年の秋から入学試験を実施し、コンピュータ科の第1期生103人を迎えた。すでに同校は県の私立学校審議会の事前審査に合格しており、開校時から専修学校専門課程（専門学校）として発足した。これら1期生はプレハブの仮校舎からのスタートとなったが、新校舎は教習部門（沼津校）との合同校舎として建築が進められ、その竣工後、旧校舎と教習コースの改築・改修工事も行われた。同年には浜松情報の設立も決定し、こちらは1984（昭和59）年に私学審議会の審査を受け、1985（昭和60）年4月、専門学校として開校した。

2校とも従来の自動車整備関連学科を置かず、情報処理技



教習管理システムの完全自動化が実現 1981（昭和56）年

術教育を中心とする専門校である。浜松情報にはコンピュータ科のほか、オフィス・オートメーション科（以下、OA科）、メカトロニクス科、エレクトロニクス科が置かれ、第1期生として合計219人を入学させた。さらに1986（昭和61）年には3年制のOAビジネス科の開設を決定し、翌62年4月に開講している。学科内容や取得をめざす資格などは現行のOA科と同様だが、3年制であるため社会人でも時間をかけてじっくり学習できる科である。主な募集対象は浜松市周辺の大手紡績会社（4社5工場）の社員だった（一般からも募集する方針がとられた）。

沼津情報では1985（昭和60）年に第1期生が卒業し、同62年には浜松情報の第1回卒業式を挙行した。これら情報専門学校2校には開校当初から求人数も多く、卒業予定者の就職活動は順調な出だしとなった。情報産業関連業界が好況を呈しつつあったとはいえ、両校とも新設校である。合格率数十分という難関の第2種情報処理技術者試験で50%という高い合格率を記録した生徒たちの好成績に加え、教職員たちの努力の賜といつていいだろう。

実際、沼津情報の職員らは第1期生卒業の約1年前から就職先開拓についての活動を開始している。当時、学園報『交差点』（昭和59年4月号）には卒業生の就職と専門学校の評価との関係について、「専門学校の評価は、卒業生が在学中に得た職業に関する専門の知識・技術を生かせて就職しているかにかかっている」と記されており、担当の職員たちはこのことを念頭に500社におよぶ県東部企業の調査を始めた。

浜松情報でも卒業前年である1986（昭和61）年6月から2年生に就職対策講座を実施し、地元企業人事部長による講演会や正しい話し方についての動画上映、労働省職業適性検査などを行った。この時期、コンピューターが専門家だけのものだった時代は終わり、多くの企業がOA化を進めるようになっていた。当法人自体も業務における総合的なシステム化を推進しており、1986（昭和61）年時点で専門学校のシステムは完成間近になっていた。これは入試管理や学籍、学業、学費、就職、卒業生管理にいたるまで一貫した情報処理を可能とするシステムである。一方、CAI（コンピューター支援教育）についても学園内に推進委員会を設けて研究を開始した。

## 杉山学園の合併

浜松情報が発足した1984（昭和59）年の9月、当学園は創立以来57年の歴史をもつ静岡文化服装専門学校（従来の経営母体は学校法人杉山学園）を合併することになった。

同校の創立は1927（昭和2）年2月にまでさかのぼる。当初の校名は「F.S洋裁学院」だったが、その後、1933（昭和8）年3月に「静岡杉山洋裁縫女学校」、1963（昭和38）年4月には「静岡文化服装学院」と改称し、1976（昭和51）年に専修学校制度による専門学校に認定され、静岡文化服装専門学校となった。さらに同57年4月に「ビジネス秘書科」を開設し、「静岡文化専門学校」（以下、静岡文化）となった。

ファッショントレーニングを学ぶ同校の特色は当学園のそれと異なっているが、技術者教育という目的——すなわち、アパレル（既製服）産業界に必要とされるスペシャリストの養成



静岡杉山洋裁縫女学校

——では共通している。これまで洋裁といえばミシンによる製縫技術が中心だったが、すでにコンピューターによる型紙やサイズの拡縮、生地使用における効率化技術などが発達し、デザインやファッショングカラー分野にもコンピューターを用いた情報処理技術が活用され始めていた。さらに服装科の卒業生には服装専攻科への道が拓かれており、高級既製服（プレタポルテ）技術者のための先端技術教育も受けられるようになっている。なお、1986（昭和61）年、服装科を「アパレル・ファッショング」に、服装専攻科を「ファッショング専攻科」に名称を改めている。

また、ビジネス秘書科とは、OLをめざす女性を対象として就職先企業のイメージを高められる品位ある職業人を養成する学科である。一般の高等学校に欠けているビジネス現場における礼儀作法や身だしなみ、接遇態度をはじめ文書作成や実用英語を学び、急速に導入の進むOA機器の取り扱いや簿記なども同時に修めることとなる。

当学園の所属校となった約2カ月後、11月1日より早くも1985（昭和60）年度入学生の願書受付を開始しており、さっそく学園報『交さ点』には優秀な生徒確保のための協力を呼びかける記事が掲載された。

一方、静岡文化では、同月25日に校内で日頃の学習成果の発表と学校のPRを兼ねたファッショングショーを開催した。企画・製作・モデルに至るまで生徒自身の自主活動によるもので、ワンピースやスーツ、革ブルゾン、ウェディングドレスなど約80点の作品を披露した。詰めかけた300人ほどの観客を魅了したこのショーの模様はSBSテレビや静岡けんみんテレビ（現、静岡朝日テレビ）で取材・放映された。

また、1988（昭和63）年には開発中の社会人向けCAI教育をインテリジェント・ハウス“TEN”として開講を決定した。CAI教育とはコンピューターの支援を活用し、各人がマイペースで実力をつけられる新時代のシステムである。このため、3.5インチフロッピーディスクを装備したNEC製16ビットパソコン「PC9801UV11」とNTTの「NTT-CAI」を導入し、体験講座を始めた。内容はアマチュア無線資格や簿記検定、工事担任者試験などの資格試験に関する講座のほか、表計算ソフト「Lotus123」やワープロソフト「一太郎」など、一般向けアプリケーションソフトについての講座も合わせて開始する。これらはワークステーションと異なり、MS-DOSを基本ソフトとしており、各講座は予定どおりに1989（平成元）年1月よりスタートした。

## 当学園の転換期

1985（昭和60）年前後、いわゆる産学交流といった動きが見られるようになり、当学園の教員が高等学校などに出向き、専門分野の講義を行うことも増えてきた。これにほぼ並行し、パソコンやOA化の普及を背景に、社会人を対象とする講座も増加し始めた。1984（昭和59）年、開校したばかりの沼津情報で実施した夜間パソコン講座や静岡産技の夜間COBOL講座などはその例である。

また、大学・短大・専門学校間の共通科目で相互乗り入れの気運が高まり、当学園が産業能率大学（短大）の通信教育コースから情報処理コースを選定し、短大併修コースを計画したのも同年だった。同62年には教育界と産業界の情報交流の必要性がいっそう呼ばれるようになり、県内研究開発企業における人材確保と育成システムの充実・強化を図るため、企業と専修学校の関係者が情報交流や共同調査研究を行う目的で「交流会」を発足させた。当然ながら本校もこれに積極的に参加する方針をとり、専修学校各種学校振興会に置かれた事務局の局長に本学園の寺田常務が就いた。

同時期、高校など教育現場における国際交流の気運が高まっており、グループ内の学校に台湾や中国、韓国などからの留学生が見られ始めた。

この1987（昭和62）年から同63年にかけての時期、当法人の各部門は組織改革の転換期に向かっていた。静岡北高の生徒数は1300人を超え、合併した星陵高の生徒数も当初の450人から1200人に達していた。静岡産技も800人が学ぶ県内屈指の専門学校となった。

生徒数だけ見れば順調だが、1989（平成元）年以降になると、高等学校では生徒の減少期に入り、これはやがて専門学校における学生数減少へと連鎖していくことになった。当法人の各部門は来たるべき少子化時代への転換、すなわち「学校が入学生を選抜する時代」から「学生やその保護者から学校が選ばれる時代」への変化に適応していく必要があった。

### 〈高校部門〉

教育部門のうち、高校では「量から質への転換」が求められていた。そのため「教育環境の充実整備」「教師の教育活動の活性化と資質向上」を目標とし、1988（昭和63）年度から静岡北高で工業技術科を、星陵高では英数科を新設することになった。特色あるカリキュラムの編成により、生徒や保護者の進学への期待に応えられるように考慮した結果である。



静岡産業技術専門学校 1985（昭和60）年度卒業生



星陵高等学校生徒館「厳友学舎」 1987(昭和62)年竣工

この当時、社会全体で国際化や情報化が急速に進むなか、高等教育機関における新たな学部や学科の新設が相次いで進められており、当学園でもこうした変化にともなうニーズに対応するべく方針を決定した。

また、星陵高では厳友学舎生徒館の意欲的活用も目標として挙げた。これは重点的な教育を実現するための宿泊教育施設であり、以後、星陵高における教育の中心を担う施設となる。

#### 〈専門学校部門〉

静岡産技では生徒増に対応する教室の確保と新校舎の増築を最優先とし、特に新校舎は県内の教育機関初のインテリジェントビルとする計画とした。これは1988（昭和63）年に起工し、1989（平成元）年3月に完成している。全館に光ファイバーを巡らせ、AV機器をネットワーク接続した高度情報化教育施設が出現した。この間、1987（昭和62）年にはコンピュータ科にハードウエアコースを設置して教育内容を拡充し、並行して教師全員の研修や自己啓発を促進しながら「社会から信頼評価される教育の確立」をめざしていくことになった。

幸い、1988（昭和63）年には静岡産技と浜松情報、浜松情報が通産省の推進する情報化人材育成推進事業の委嘱機関に指定された。地域における当校の教育が評価された証だろう。政府は21世紀初頭に40万人のコンピュータソフト技術者が不足すると予測しており、同省は技術革新の激しい情報処理技術者を産学協同で育成する方針を打ち出した。その連携機関として同事業を委嘱された当学園の専門学校3校は、地域の情報技術教育における中核的存在へ飛躍する足がかりの一つを得たことになる。

実際、同年9月には「専修学校と研究開発型企業との情報交流会」が静岡産技で行われた。その当日、協和システム制御、ユニテック、浜松情報、沼津情報、静岡文化ほか種々の企業や学校が参加して県産業界の情勢や海外産業について情報交換などを行い、その模様はNHKやSBSの取材を受け、テレビニュースなどで報じられた。

また11月には静岡産技が文部省から「専修学校における職業教育の高度化に関する開発研究の実施内容が適切である」と認められ、「職業教育高度化開発研究校」に指定されている。これにより、本校は情報化社会における情報処理関連教育に関し、「勤労者の学習要求に即応する専修学校の特性を活かした新しい授業形態の開発研究」を3年間で進めることになった。静岡産技が自動車電子科とコンピュータ制御科を新設し、教育内容のさらなる充実を図ったのが翌、1989（平成元）年だった。この翌年には沼津情報とともに3年制の情報

システム科も新設している（浜松情報の情報システム科は同4年に設置された）。

#### 〈教習部門〉

教習部門では他校との差別化を明確化するため、1987（昭和62）年、教習車を全面的に差し替えた。近い将来に実施される予定のオートマチック（以下、AT）車限定免許制度を前提に、2時間のAT車教習を導入した年だ。以後、当校の教習部門はさらに業績を伸ばすべく、同60年に掲げた2つの目標「①教習高率・教習サービスの向上」「②苦情ゼロ・実績を県平均以上にする」をめざして努力を継続することとなった。

実際のところ、②については同62年時点で改善が見られており、苦情件数は大幅に低下し、まったく苦情がないという声も聞かれるようになってきた。むしろ、外部から「事務所が明るくなって気持ちがいい」「電話の応対がいい」などといった評価も始めた。しかし、①については目標を達成しているとは言えず、概ねこれを達成できたのは5年を経過した1990（平成2）年のことである。その評価の目安は修了検定や試験の合格率であり、1990（平成2）年にはそのいずれもが県内の平均以上となったのだった。

#### 〈沼津校の移転〉

同時期の教習部門で大きな課題とされていたのが沼津校の移転問題で、これは昭和40年代にまで遡る「市道占有問題」に端を発していた。細かい経緯については学園報『交さ点』（昭和60年の創立45周年記念号）などに詳しいが、発足当時、沼津校は指定教習所としての条件を満たすため、敷地の一部として市道を占有することとなった。ただその際、「将来、何時でも返還に応ずる」との条件を含む覚書を提出していたのである。以来、当法人と市、返還を要求する地元住民とが相互に協議を重ねてきたが、同59年、沼津校はとうとう市道を返還し、施設全体を移転させる方針となった。

しかし、公安委員会指定教習所として継続するには、同一性を保つかたちで近傍に移転しなければならない。やっと見いだした用地（沼津市東椎路）には地盤や地価のほか、農地転用や開発行為などの申請や埋没文化財の発掘調査、土地利用委員会の承認、国土利用計画法にもとづく売買価格の承認など多数の問題があった。1年4カ月にわたる地主との交渉や各種申請の末、土地取得の契約は1987（昭和62）年3月に完了した。翌年4月に校舎の建設を開始し、同年11月10日に教習コースとともに完成した。竣工式当日、県警や施工業者、地域の自治体ほか関係機関から200人ほどが臨席し、新沼津校の門出を祝ったのである。



静岡県自動車学校沼津校新校舎 1988(昭和63)年11月竣工

# 3 大学設立期

1990（平成2）年～

地域の発展に貢献する  
研究機関・交流拠点へ。

バブルの崩壊や阪神淡路大震災が起こり、携帯電話やインターネットの普及による情報化が加速する変化の激しい時代。法人名を学校法人静岡理工科大学に改称し、静岡理工科大学が開学。大学院の開設や静岡北高等学校のSSH指定など、理工分野における地域の人材育成・研究機関としての役割も担うようになる。静岡北高等学校、星陵高等学校において高・大一貫教育を開始するなど、グループ内の連携教育も整備。専門学校においてもデザインをはじめ保育や医療事務など幅広い分野へと拡大がはかられ、地域に開かれた教育機関としても期待が高まる。

## 大学設置に向けて

「昭和62年に文部省へ大学設置について打診したところ  
“可能性あり”との印象を受けた」

これは創立50周年記念式典で宇野紳七郎理事長が述べた挨拶の一節である。

静岡県自動車工業高等学校（現、静岡北高等学校）の創立当時、当法人は将来における大学設立の方針を再確認していた。しかし、昭和50年代以後、政府が大学新設について抑制的な政策をとっていたこともあり、断念せざるを得ない状況が続いていた。

ところが1986（昭和61）年から1992（平成4）年までの期間、文部省は18歳人口の増加を踏まえ、大学の収容能力を増大させる方針をとった。これが大学設置の可能性を探った背景である。当学園はその“好印象”を受け、翌63年2月の理事会・評議員会の席上、「大学設置構想」について改めて話し合いをもつこととなった。

その際、議論された主な内容は学園の経営安定化と教育環境の整備についてである。すなわち、近い将来、高等学校で定員割れが必然であること、大学の設置によって対象とする年齢層を弾力的に拡大できることである。定員割れの原因是学齢層の人口減少であり、これは教習部門もほぼ同じ立場となるだろう。さらに、時代のニーズに的確に応えられる教育環境を構築するには、大学を核とする体制づくりが不可欠との結論も得た。

これらの審議の結果、4月1日から大学設置準備室を開設し、大学設置準備委員会を発足させた。同委員会が計画の進行状況を報告したのが約3カ月後のことである。

設置場所については県内10カ所の候補で検討を進め、並行して自治体と接触してその意向を確認してきた。7月中旬には2カ所まで絞りこみ、最終的に経済的な協力を申し出てきた袋井市に決定した。ただし、この時点では同市の意向を尊重し、公式発表をしないことになっていた。翌8月、大学教授を構成メンバーとして全般的な問題を審議するための専門委員会を設置し、大学設置の基本構想やカリキュラムの決定、教員候補者の選考のための活動を開始した。同年末には大学名を「静岡理工科大学」（以下、理工科大）と決定。学部として理工学部を設置し、機械工学科、電子工学科、知能情報学科、物質科学科の4



静岡理工科大学完成予想パース

学科（定員合計300人）を置くこととなった。

1989（平成元）年1月、当初から助言を受けていた東京大学名誉教授石原智男氏より、初代学長就任について内諾を得た。7月には第1次設置認可申請と設置にともなう寄附行為変更申請を文部省に提出し、12月15日、同申請を認可された。その間、6月から校地の造成を開始し、11月には新たに第2法人の設置認可申請書を県知事に提出した。これは教習部門と自動車産業に関する教育部門を第2法人に移し、従来の法人に大学を中心とする教育体制を構築するためである。

1990（平成2）年2月1日、袋井市や地元関係者との業務連絡のため大学設置準備室袋井分室を設置し、6日には大学校舎の起工式を執り行った。学園本部事務局が静岡県自動車学校本館に移転したのも同月のことである。

## 創立50周年 静岡北高の変化

大学設置準備が進行していた1990（平成2）年は、当法人の創立50周年という大きな節目の年でもあった。記念事業の準備委員会が1987（昭和62）年6月に発足し、記念式典・イベントの企画立案や記念出版物の資料収集、PRなどについて準備を進めた。そして1990（平成2）年4月2日、静岡北高の体育馆で創立50周年記念式典を盛大に挙行した。例年のように永年勤続表彰の受賞者が発表され、宇野紳七郎理事長が挨拶に立った。

静岡北高の入学式はその8日後の10日に行われ、新設した理数科の第1期生37人を含む458人の新入生を迎えた。その一方、翌5月の理事会・評議員会では、同校の自動車工学科と工業技術科を普通科に統合することを可決した。

静岡北高は創立以来、自動車工学科を中心に発展してきたが、近年これと最も関係の深い自動車整備関連企業は2級整備士の教育を行う専門学校への期待を高めており、事实上、当校の3級整備士養成教育はその使命をほぼ終えていた。

実際、前章で「転換期」と述べた1988（昭和63）年以後の3年間、自動車工学科の卒業生で自動車整備関連企業へ就職した者は20%を大きく下回るようになっていた。一方、生徒や保護者の専門学校への進学希望は予想を超えて高まっており、産業界では情報化・技術の高度化が急ピッチで進むことから、これらに対応できる人材の育成は急務となってきた。

このため、当校の「職業教育」のあり方をいったん見直し、専門学校4校との連携をいっそう密接にした特色ある普通高校への脱皮が今後の社会からの期待に沿うことにつながると考えられた。そのためには従来の「自動車」というイメージから脱却し、多様なニーズに対応できる柔軟な教育プログラムを構築しなければならない。

以後、静岡北高は理数科や進学コースを軸とした大学進学のためのコース、さらには専門学校との連携による「高・専一貫」による情報技術教育など、本学園ならではの幅広いコース制を導入した「特色ある普通科」を設置する進学校へと変貌していくのである。

なお、創立50周年記念事業の一環として1990（平成2）年8月14日、当学園と県サッカー協会の共催による「日・独・伯親善サッカー大会」を実施した。静岡北高に留学中のブラジル人学生は同校サッカー部の中心選手となっており、近年、静岡北高や星陵高で一般化してきた国際交流の幅をいっそう拡大した。とくに、星陵高ではオーストラリアの聖ヨセフ（ジョセフ）校（通称ナジー校）やキャノンヒル高校との間で相互訪問が始まり、早期から国際交流を始めていた。

## 第2法人設置と理工科大の開学

1990（平成2）年5月に開かれた理事会・評議員会で第2法人の設置認可の本申請提出前の議案について決議され、続けて開かれた第2法人設立発起人会でその名称を「静岡自動車学園」、設置校名を「静岡工科専門学校」（以下、静岡工科）と決定した。

これにより、静岡産技の自動車科・自動車電子科・コン

ピュータ電子科の生徒は1991（平成3）年4月1日から静岡工科に転学する。同時に、現在の「学校法人静岡県自動車学園」の収益事業（自動車教習所・車両整備工場）は新法人「静岡自動車学園」に所属することとなった。この第2法人の設置は同年7月16日に認可され、同月21日に登記を行い、私立学校法にもとづく静岡自動車学園の設置が完了した。

これ以後、文部省の大学設置審議会専門委員による教員の審査、さらには大学設置・学校法人審議会の袋井市での実地調査などが行われ、12月21日、ついに文部大臣より理工科大の設置とそれとともに寄附行為変更の認可を受けた。そして従来の法人の名称が「静岡県自動車学園」から大学名に変更され、ここに「学校法人静岡理工科大学」が誕生した。理事長には鈴与株式会社の代表取締役社長を務める鈴木通弘氏（現、同社代表取締役会長8代目鈴木与平氏）が就任した。

また、12月21日に開かれた理事会・評議員会では新たに発足する大学などのシンボルマークやカラーイメージなどを決議した。シンボルマークのモチーフとされたのは大学名のイニシャル「S」だった。

ところがその4日後の12月25日、当学園に思いがけぬ訃報が入った。学長をお願いしていた石原智男氏が同日急逝され、残念ながら理工科大の開学を見ないまま没したのである。そのため当学園は同日から喪に服し、理事長による学園報の年頭挨拶も中止と決定したのだった。

深い悲しみとともに年が明け、正月を過ぎた1991（平成3）年2月11日、この日から翌13日にかけて理工科大の入学試験を実施し、その際、静岡や東京、浜松、名古屋に試験会場を設置した。定員300人の小規模新設校ではあったが4000人にのぼる学生が受験し、2次の3月24日（試験会場は静岡と浜松）でも600人が応募した。理工科大の初代学長として、日新製鋼株式会社副社長の久松敬弘氏が就任したのが同月12日のことだった。

そして1991（平成3）年4月10日、とうとう理工科大の第1回入学式を挙行し、理工学部4学科の第1期生（合計372人）を迎えた。

開学した理工科大の教育理念は「広く産業の発展に貢献出来る技術の修得とともに、その技術を正しく活用できる人格の陶冶」であり、これは、前身である学校法人静岡自動車学園から継承した、学園建学の精神『技術者の育成をもって地域社会に貢献する』のもと、教育基本法及び学校教育法に基づき「科学・技術に関する学術を研究教授し、国際的視野と技術者としての使命感を持った向上心溢れる人材の育成、及び実践的創造的研究により社会に貢献する』ことを目的としている。以降、取り巻く環境の変化に対応すべく多くのご意見を聴取しながら検討を重ね、本学が到達すべき理想的な姿を包括した、「豊かな人間性を基に、『やらまいか精神と創造性』で地域社会に貢献する技術者を育成する』を理念としている。

同年8月、学園報を創刊し、その名称を『SIST』とした。同月30日には受験生のためのオープンキャンパスを実施し、翌日には「国際性を持った人間とは？」と題して第1回静岡理工科大学公開講座を催した。本学の教員200人ほどに市民も加わって聴講し、当大学は開かれた大学づくりの第一歩を踏み出した。11月2、3日には在学する1年生のみで準備を進めてき



星陵高等学校に聖ヨセフ（ジョセフ）校（通称ナジー校）来校



静岡理工科大学開学記念式典 1991(平成3)年5月

た第1回大学祭を開催、ささやかなものではあったが天候にも恵まれて大成功に終わった。

そして同月22日、日本私立大学協会の理事会で当法人の加入について審議され、同日付で承認された。その結果、当法人は前記協会の中部支部に所属することになったのである。

## 高・専一貫教育

1992(平成4)年4月22日、翌年に創立30周年を控えた静岡北高は情報系専門学校志望者を対象とした2年間のダブルスクールを開講し、いわゆる「高・専一貫教育」を開始した。これは高校の基礎学力と専門学校の知識・技術を結びつけるもので、高校の指定休の土曜日や6時限終了後(放課後)などを利用し、学園内の専門学校へ通学させる独自のシステムである。静岡北高の所在地などを鑑み、このコースの対象となる専門学校は静岡産技と静岡工科である。

この高・専一貫コースの内容は、①情報、②電子、③自動車という3つの系統に分かれており、それぞれの概要は以下の通りである。

①情報系：コンピューターソフト分野のスペシャリスト(SE、プログラマー)の育成を目的とし、卒業生を情報処理技術者として社会に送り出す

②電子系：コンピューターハード分野の設計・開発を行う技術者の育成を目的とする。電子技術と情報技術を駆使できるバランスの取れたエンジニアを社会に送り出す

③自動車系：カーエレクトロニクス分野のスペシャリスト育成を目的とする。高度な自動車電装システムに対応できるハイメカニックを産業界に送り出す

静岡北高の各志望者たちはダブルスクールでそれぞれの基礎について学び、その後、専門学校へ進学して応用技術と知識を習得することになる。

この新たな教育プロセスは主に4つの特色を備えている。すなわち、「実践的で最新の技術革新に対応した教育を提供できること」「生徒に明確な目的意識を持たせられること」「ダブルスクールによって学ぶ場を変え、新鮮な学習意欲を与えられること」「早期から高い技術と専門性を学ぶことにより資格取得の幅を広げられ、合格率の上昇を期待できること」などである。1993(平成5)年7月21日付発行の『SIST』には、学園内の大学・専門学校・高校の間の進学・編入学などの連携を示す概念図が掲載されている。

この当時、グループ内のネットワークを応用した専門学校

や理工科大への進学が徐々に定着しつつあった。大学創立以来の3年間(1994(平成6)年まで)で静岡北高と星陵高からの理工科大進学者数は33人を数え、さらに増加傾向を示していた。また、高校部門から専門学校への進学者数は4校合わせて97人にのぼり、その翌年には北高の高・専一貫コースから90人ほどが進学していた。

同時期、星陵高は創立18年目で男女共学の導入に踏み切り、森英恵デザインによる制服とも相俟って地域における学校イメージを一新した。当初、男女共学は英数科のみの実施だったが、1994(平成6)年度からは普通科でも実現し、創立20周年にして完全な男女共学の高等学校となった。更に、社会からのニーズに応えてCAI教室の設置や進学講座を実施するとともに、国際交流の一環として留学生の受入や海外の学校との姉妹校提携などにも力を入れていた。当時は正に、新学習指導要領が実施された時期であり、国際化・情報化に則した教育への転換をさらに進めることとなる。そして1995(平成7)年度からは星陵高でも新時代に求められる人材教育をめざし、普通科に高・専一貫コースと国際文化コースを設置し、1996(平成8)年度には、英数科に英数科総合コースを開設した。星陵高ではこれらのコース新設を一つの大きなステップとし、同校の果たすべき役割を改めて認識するとともに、以後の新たな学校運営につなげていこうとの方針を打ち出した。なお、星陵高の高・専一貫コースは普通科情報コースと沼津情報とのダブルスクールであり、実施に先だって希望する生徒42人が同校を見学するほど人気を博した。

## 専門学校の改革——情報化社会への対応

80年代バブルが崩壊する一方、「IT革命」が始まる時期、専門学校部門では多様化する教育や情報化の進む社会のニーズに対応し、以下のような変更・新設をした。

1990(平成2)年に沼津情報で3年制の「システム研究科」を開設し、同4年には静岡産技でOA科を「OAビジネス科」と改称したほか、浜松情報でも「システム研究科」を新設している。さらに1994(平成6)年度、静岡産技は「情報テクノ科」を新設して高・専一貫コースによる進学者の受け皿とし、同7年度には「コンピュータグラフィックス科」も新設した。浜松情報ではOA科を「ビジネスクリエイト科」に改称、コンピュータデザイン科にコンピュータエレクトロニクス科を統合した。<sup>(注)</sup>ちょうど、文部省による専門士制度が始まった年である。静



星陵高等学校 森英恵デザインによる制服



岡・沼津・浜松それぞれに「マルチメディア科」を新設したのもこの年から翌8年度にかけてのこと、同時期に発売されたWindows95をきっかけにパソコンとインターネットの普及が加速し、多くのパソコンゲームが店頭に並んだ。そして同8年度、静岡産技は「ゲームクリエイト科」を新設、翌9年度には沼津情報が「ゲームインターフェース科」を設置した。

一方、静岡産技が文部省より「インターネットを利用した専修学校教育における実践的な開発研究」の委託を受けたのがこの年である。これは同省が開催した第1回専修学校インターネット教育開発協議会の決定によるもので、静岡産技を含む委託校7校は3年間にわたって「教材の共同開発」「共同授業」「インターネット活用方法」など、情報化社会に向けた開発研究を進めることになった。なお、同校にインターネットサーバーが立ち上げられたのも同年のこと、WWWによる情報発信や電子メールサービスがスタートした。

一方、静岡文化が大きく変化したのも同時期である。1995（平成7）年、同校は「ファッショントビジネスの学校」として「ビジネスプランニング科」を新設したが、「魅力ある学校」となるべく検討を重ねた結果、ファッショントビジネス系2学科とデザイン系3学科を設置する「デザインとファッショントビジネスの学校（総定員390人）」への転換を決定した。このため1996（平成8）年から新校舎の建設を開始し、翌9年には校名を「静岡デザイン専門学校」（以下、静岡デザイン）へ改めた（校舎は同年6月に竣工）。県内高校生を対象とした「高校生プロダクトデザインコンペ」の主催も同年から始まった。以後、地域におけるデザイン専門学校のリーダー的存在としての認知度を高め、在校生が技能五輪で入賞するなどメディアへの登場機会も増加していくことになる。

（注）専門士制度…当学園の専門学校は「専門士」の称号付与が可能な学校に認定されており、当該課程を修了した学生にこれを授与できる。

## 地域に開かれた理工科大大学院

1993（平成5）年9月、理工科大の開学を記念し、教育棟の中庭に彫刻「光の座」が寄贈された。作者は東京芸術大学教授林武史、寄贈者は鈴与建設株式会社である。この月、当法人は理事会の席上、大学院（修士課程）設置の方針を決議し、1996（平成8）年4月の開設をめどに準備を進めることになった。設置準備の概略は以下の通りである。

1994（平成6）年9月末の理事会・評議員会で大学院設置認可申請手続の開始を決定。

1995（平成7）年6月30日、文部省に「大学院理工学研究科修士課程」の設置認可申請書を提出し、これが受理された。これに先立つ同月7日、大学院の研究施設とするため既存の研究実験棟の東側で増築工事を開始した。

同年12月、文部省から設置認可が告知され、翌1996（平成8）年4月、静岡理工科大学大学院修士課程を開設。高度な教育修了者を社会に送り出すことを責務として大学院理工学研究科（修士課程）を設置し、以下の2専攻で技術革新の時代に望まれる学際的な技術者の養成をめざす。

- ①システム工学専攻：定員15人。システム制御や生産システム、工学解析、電子システム、知能情報システムの各分野で構成され、総合的なシステム工学に関する技術者を養成する。
- ②材料科学専攻：定員10人。物性物理や材料設計、材料化学、電子材料の各分野で構成、種々の材料における物理・化学的基礎教育に重点をおき、工学的応用についても教育する。

開設初年度、システム工学専攻に10人、材料科学専攻に5人が第1期生として入学した。システム工学専攻では「2.5ギガヘルツの高性能アンプの理論的解明と作製」「ダクテッドファン型VTOL垂直離着陸機の姿勢制御」ほかの研究が進められ、材料科学専攻でも「シリコンの基板上でアルコールからダイヤモンドをつくる」など特色あるテーマが研究された。これら大学院の開設準備と並行し、全教職員の参加のもとに進めたのが新カリキュラムの策定だった。こちらも大学院の開設と同時に実施に移り、そのプロセスでいっそうの検討を加えていくこととなる。

さらに2000（平成12）年以後、「地域に開かれた大学院」をテーマに新しい大学院の構築をめざすこととなった。地域の有能な人材を客員教員に招聘し、外部研究機関との共同研究やプロジェクト研究も視野に入れる方針とした。もともと理工科大は市民体験入学を毎年開催するなど「地域に開かれた大学」として開学した経緯がある。第1回卒業式から全国でも珍しい袋井市民による「卒業生を送る会」が実施されてきたし、卒業生も同市発展への祈念と感謝の気持ちを込めて愛野公園にプラタナスなどの植樹を統一、地域や市民との別れを惜しんできた。なにより、卒業生の8割以上が地元企業に就職しているのである。

なお、大学院に経営科目群の授業を開講し、修士（技術経営）の学位を取得できるようになり、学部3年生から入学可能なスキップ入学による進学が始まったのが以上とほぼ同時期、2001（平成13）年のことである。

## 理工科大の情報システム学科

昭和60年代前半、18歳人口の一時的な増加期を迎えて、日本政府は大学進学率の上昇に対応するため臨時の定員増を認めた。当法人の理工科大設立も同時期に当たっている。しかし、この措置は1999（平成11）年度を期限とされており、多くの大学が臨時定員の扱い（継続か廃止）に注目していた。そんななか、1997（平成9）年1月の大学審議会の答申にもとづき、その5割ほどを1999（平成11）年度から同16年度にかけて順次廃止していく方針が決定された。学校によっては臨時定員が過半を占めることもあり、今後、多くの大学が少子化時代に向けた体質強化に努めていくことになる。

新設された理工科大に臨時定員はなかったが、同様な経営環境に曝されることに違いはない。1997（平成9）年度の経営方針において、大学における教育効果や採算性の向上をめざした将来構想を早急にまとめ、同11年度から実行に移す方針が策定された。その結果、1998（平成10）年春までにまとめられた構想案が次の2つだった。

①知能情報学科にコース制を設け、「情報システム学科」へ改称すること。これにともなってカリキュラムを改変し、同時に入学定員数を80人から140人に増やす。

②物質科学科のカリキュラムを改変し、「物質生命科学科」へ改称すること。これにともなって入学定員数を60人から100人に増やす。

文部省での事前相談を含めて検討を重ねた末、今回は②を中心し、①のみを申請することになった。その見通しは必ずしも明るくはなく、大学の経営状態や計画の裏付けとなる財源なども十分な状況とはいえないかったが、1997（平成9）年4月末に「情報システム学科設置認可申請書」を提出。1998（平成10）年12月、文部省から同申請が認可され、1999（平成11）年4月より定員も140人に増えた学科としてスタートした。同学科に用意されるコースは3つ。すなわち、コンピュータシステムコース、ネットワークシステムコース、生命情報システムコースである。この後、理工科大では、学部教育・大学院教育の検討・組織運営改善、研究の活性化などと並行して「受験生減少への対策」を検討していくことになるが、次項に述べる高・大一貫教育、高校生のための公開実験講座などもその一環といえる。

## 高・大一貫教育 — 各部門の改革

前項と同時期、当法人内の各部門でも少子化時代に向けた改革を進めている。沼津情報では入学募集活動に力を入れ、ダイレクトメール（DM）の工夫や体験入学の充実のほか、高校の生徒と教諭への知名度アップに努めた。並行して教育内容の充実も図り、星陵高との高・専一貫教育の好影響もあって定員を上回る入学者を確保した。2000（平成12）年には静岡産技とともにカリキュラムと学科編成の見直しを行い、両校とも同14年度から新体制をスタートさせた。この間、静岡産技は建築科を新設し、地域のニーズに応えると同時に教育分野を拡大させた。同13年には国際的に有利な資格であるベンダー試験も取り入れている。

浜松情報でも沼津情報の事例を踏まえた生徒募集活動を開始し、1999（平成11）年からコース選択のわかりやすさや自由度



静岡理工科大学の卒業生が植樹する様子 写真は2009（平成21）年3月



浜松情報専門学校 左 12階ラウンジからの景色 右 12階建ての新校舎

向上、ターゲット層拡大などをめざして学科の再編成を行った。同時にカリキュラム・職員組織の見直しや近隣高校とのジョイント・スクール制構築も推進し、同13年、聖隸クリリストファー高校との高・専一貫教育を発足させた（法人間では県内初）。さらに、浜松駅前に移転した同17年には、沼津情報とともに公務員コースや医療事務科を設置し、情報系・デザイン系・ビジネス系という3分野のバランスをとった総合的専門学校に生まれ変わった。高さ48.8m、北面総ガラス張りの新校舎は新たなランドマークとしてアクトシティ浜松の東隣にそびえ、動く歩道を備えた空中回廊でJR浜松駅と結ばれている。

静岡デザインでもDMや高校訪問、体験入学ほか生徒募集に力を入れ、2002（平成14）年ごろには高校1、2年生対象のガイダンスも実施するようになってきた。とくに同校では学生の創作活動がそのまま同校の広報活動に結びつく効率のよい運営が継続されており、定員を上回る学生を集めている。

一方、高校部門では教職員それぞれの視野拡大や資質向上をその中心テーマとした。その上で静岡北高では「各生徒に目を向け、それぞれの自己実現を可能とする手作りの教育の実現」をめざし、星陵高では「子どもと保護者の多様な価値観に基づく個性重視の教育、さらには地域に密着した信頼度の高い新たな学校づくり」を目標とした。むろん、法人内ネットワークを活用した高・専一貫コースの存在は他校との差別化に貢献ただろう。

これら2校のうち、いち早く国際交流を充実させた星陵高は地域の中堅進学校との評価を得るようになっていた。また、実業高校から普通進学校へ転換した静岡北高は1997（平成9）年度の時点で国公立大学への進学実績を学校史上最高とし、2000（平成12）年には「国際コミュニケーション科」を開設してさらなる教育環境の充実を図っている。そしてその翌13年度、これら2高校と理工科大・同大学院とを結ぶ「高・大一貫教育」（7～9年）をスタートさせた。ちょうど理工科大が創立10周年を祝い、記念事業の一環であるクラブ棟を完成させた年のことである。

高・大一貫教育の議論は1999（平成11）年ごろから本格化しており、社会現象ともいえる理科教育に関わる課題を端緒としていた。すなわち、理科教育のつまらなさなどに起因する「理科離れ」「物理離れ」「技術教育の低レベル化」といった深刻な問題である。実際、国際比較でも日本児童の理科における応用力低下が指摘されていた。これはとりもなさず「実社会を生きていくツールとしての理科教育を身につ

けていない」ことを意味したが、製造現場の技術者にとって物理学的センスの習得は極めて重要といえた。

以上の解決には学生数の確保と理科教育の質的向上が必須だが、そのためには理科系志望の生徒を増やさねばならない。このとき浮上したのが「高・大一貫教育」の構想だった。理科（とくに物理）の面白さを教えるには、大学教員が高校で直接伝えるのが最も効果的だからだ。幸い、当法人はこれを実現できる環境を備えていた。こうして当法人では「高・専一貫」に加えて「高・大一貫」による教育システムを実施し、他校との差別化の強化と同時に理科教育の質的向上を実現したのだった。

他方、理工科大の物質科学科では1997（平成9）年から高校生のための実験講座を開き、授業や受験勉強から離れて理科の面白さを伝える取組もしてきた。高・大一貫教育を決定した同12年度からは機械工学・電子工学・情報システム・物質科学の全4学科による全学規模の企画に拡大し、県内外の高校から多くの生徒が参加するようになった。高・大一貫教育は法人内での連携によって実現したが、全国でも例のない実験講座もグループや県境を超えて高校生たちの心を捉え、その成果を上げ始めている。

## 理科教育とSPP・SSH

2002（平成14）年度、文部科学省は「科学技術・理科大好きプラン」を開始した。目的は「児童生徒の科学技術・理科に対する関心を高め、学習意欲の向上を図り、創造性、知的好奇心・探究心を育成すること」であり、いわゆる“理科離れ”的な対策事業に位置づけられる。その一角を担うのがサイエンスパートナーシッププログラム（SPP）であり、理工科大（物質生命科学科）は2005（平成17）年度プログラムに参加した。

理工科大ではこれ以前から高校生や中学生、小中学校の教員を対象とする実験講座などで同様な活動をしてきたが、今回のSPPでは夏休み期間を利用して掛川西・掛川東の両高等学校との教育連携講座を実施した。このとき取り組んだのは「環境に優しい新素材」をテーマにした講義や実験だった。両高校の生徒合計15人が参加し、今後の高・大連携に新たな道を見いだした。参加した生徒からは、大学の雰囲気や電子顕微鏡など未知の機器に触れた感想や環境問題に対する興味の深まりなどの声が寄せられ、両高校とも同事業を再び行いたいとの希望を表明した。



高・大一貫（連携）教育始まる



静岡北高等学校「巴川水質調査」気温測定や採水方法等について上級生が下級生に指導する様子 2008（平成20）年

その後、文部科学省から成果報告の依頼があり、同年11月12日、東京国際交流館プラザで開催されたSPP事業報告会「理科大好きシンポジウム2005」でポスター発表を行った。特設会場では参加17団体が説明用パネルを展示し、当校は実験の内容やテクニック、現象など専門的な質問を多く受けたほか、県内高校の教員たちとの交流もでき、今後の高・大連携に新たな道筋を開いた。

一方、静岡北高においてSuper Science High School (SSH) 指定——これも「科学技術・理科大好きプラン」の一環である——に向けた取り組みを始めたのがほぼ同時期だった。前述したSPPは大学や公的研究機関、民間企業などと教育現場との連携推進事業だが、このSSHとは「（文科省による）科学技術・理科・数学教育を重点的に行う学校」の指定を意味している。SSH指定校は「理科・数学に重点を置いたカリキュラム開発や大学や研究機関などとの効果的な連携方策についての研究を実施」することになる。当然ながら、着実な実績をあげれば学校の評価を上げ、他校との差別化を期待できるはずである。

当時、静岡北高はすでに様々なプロジェクト展開による学校改革が進行し、成果と提言を受けながら「オンラインリーワンの教育」を積極的に社会にアピールしており、地域の中・高校関係者たちに認知されつつあった。本格的にSSHの指定を目指し文科省の求める条件の分析・検討を進め、最終的に研究概要を「科学大好き人間を育てるためのプログラム研究」「学校が地域への橋渡しを行い、地域全体に科学大好きを育成するコネクト式授業の開発」の2つに絞り込んだ。この結果、平成19年度に文科省から指定され、県内で3校目、私学では唯一のSSH校となった。また、同年度の指定によって全国で101校がSSH校となり、文科省の予定していた高校数（100校）を満たした。これらSSH校の指定期間は5年間だが、年度ごとの成果報告を義務づけられ、3年目に課される実績発表の審査を経て残り2年の継続を決定される。静岡北高は1996（平成8）年以来継続している巴川の水質調査などの活動をしてきた。SSH指定後は全国の指定校が集まる研究発表会や科学連携シンポジウム、東海地区SSHフェスティバルへ参加するなど、理数科を中心とした活動範囲を拡大させ始めた。その影響は早くも同年の体験入学で顕著となり、参加した中学生やその保護者の関心がSSHや理数科に集まる傾向を見せた。

一方、この時期、学齢人口の減少は急速に進み始めており、当法人内の各部門は安定経営に向けた分析や改革を急ピッチで始めている。とくに危機感を強める理工科大と専門学校部門では新学部の開設や新たな教育分野への進出を計画していた。

# 4 進展期

2008（平成20）年～

総合学園としてグローバル化が進む  
社会の人材育成へ。

東日本大震災やスマートフォンの普及、日本の労働人口の減少、グローバル化の加速など、社会の構造や価値観が変わっていく時代。静岡理工科大学の総合情報学部の開設や静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校、静岡デザイン専門学校浜松校の開校など、グループの拡大が続く。沼津情報・ビジネス専門学校への校名変更、静岡北中学校、星陵中学校の開校、浜松日本語学院、沼津日本語学院の開校など、総合学園に向かってさらなる進展を遂げる。

当法人にとって2008（平成20）年はさらなる発展に向け、着実に歩み出した節目の年である。同19年度に定員割れとなった理工科大や経営面に危機感を強める専門学校部門では周到に準備してきた改革を実行に移した。ただ、学齢人口の減少に加えて児童・生徒の理科離れも進み、今後も当法人にとって厳しい状況が続く。当法人は改めて建学精神に立ち返り、グローバル化を急速に進める情報化社会のニーズに応えるべく教育改革とグループ内連携をいっそう強化することになる。

## 理工科大の2学部制発足

2008（平成20）年4月、理工科大は情報システム学科を改組し、「総合情報学部」を開設し、コンピュータシステム学科、人間情報デザイン学科を設置した。

この前年2月、理工科大は半年間にわたる定員確保に向けた議論の末に3項目の目標をまとめ、達成のための中期計画（5年間）を策定した。その3項目とは、「社会に必要な技術者を一人ひとりていねいに養成して世に送り出している大学であることの評価が社会の中で確立している大学」「小規模でもダイヤモンドのように光る大学力を有する大学」「地域になくてはならぬ存在感のある大学」である。これらを踏まえ、理工科大は360人以上の入学者を確保し、卒業生と就職先企業が大きな満足を得ている大学をめざすことになった。そのための戦略を以下の2つとした。

①多様化する学生それぞれに十分な専門能力と社会人としての基礎力を与え、学生が満足する進路を実現することで大学のブランド力を確立すること。

②本学に地歩のある新たな教育分野に進出（強化）すること。

①の第1歩としてめざしたのが「モノから入る教育」であり、大学全入時代を見据えた「学生中心の大学づくり」である。

さらに「進化」をキーワードに実施したのが2学部制への移行だった。こちらは戦略②にあたる。新学部設置の目的は本学独自の文理融合の構築で、文理の境界で研究成果を出している教員はこれに参画することとなる。

また、機械工学科に「航空工学コース」を新設した。航空機は新素材の塊であり、生命科学科で新素材を取り組む教員は同学科との相乗効果を期待される。

物質生命科学科では「食品化学」を強化する方針をとった。総合情報学部で心理・神経系の研究に取り組む教員は味



平成20年度浜松情報専門学校・静岡デザイン専門学校浜松校入学式 2008(平成20)年

覚や嗅覚などへの展開を考え、本学の食品化学を育てる努力をすることになる。

次に電気電子情報工学科を「電気電子工学科」へ改称し、「光応用・電子デバイスコース」を新設した。ここでは食品化学や航空工学の分野で利用可能なセンサーの開発研究を進めていく。

これ以後、理工科大では上記のごとく「ベクトルを束ねて進む」方針とし、学部や学科の境界を越えて相互に連携・協力しながら共通する方向性を打ち出していくことになった。それによって外部に本学の強みを見るようにし、経営の安定化につなげていく計画である。さらに全学部・全学科で高校の教諭第1種免許を取得できる教職課程を設置し、建学精神の発揚・実現をいっそう強化した。

これら努力の結果、2008（平成20）年4月の入学者数は編入学生などを含めて358人（大学院入学者を加えた場合374人）、翌21年には376人（大学院入学者を加えた場合381人）となり、そのなかには中国や韓国からの留学生3人も含まれていた。

## 静岡デザイン浜松校と 静岡インターナショナル・エア・リゾート 専門学校の新設

静岡デザイン恒例の「高校生デザインコンペ」が11年目を迎える「デザイン・ア・ラ・モードコンペティション」に発展進化した2008（平成20）年、静岡デザイン浜松校（以下、デザイン浜松）を新設、開校した。所在地はJR浜松駅前の浜松情報の校舎内である。

静岡デザインは前記イベントのほかにも卒業制作展の「デザイン・ア・ラ・モード」をはじめ「静岡プランディングブ



浜松デザインカレッジと浜松情報専門学校の共同イベント Creator's SUITE 2009(平成21)年

「プロジェクト」「浜名湖フラワーフェスタ」「メイド・イン・静岡プロジェクト」ほか数々の企画・イベントで活躍し、近年は学生の創作活動がそのまま広報活動に結びつく情報発信型専門学校としての評価を高めてきた。今まで、ものづくり産業に支えられる浜松地区にはデザイン分野の専門学校はなかったが、生活を彩り豊かにする産業の充実が不要であるはずもなく、そこで活躍するプロフェッショナルを育成するのがデザイン浜松の使命である。2008(平成20)年4月、デザイン浜松は第1期生として21人(グラフィックデザイン科9人、ファッションビジネス科12人)を迎えた。新設校とあって今後の反響の有無などを心配した面もあったが、同年の体験入学では40人を超える参加者を集め、翌21年4月、第2期生として31人を入学させた。この年、デザイン浜松は浜松情報との共同イベント「Creator's SUITE」で日頃の学習成果を発表した。とくにファッションビジネスコース1年生は1年間学んできたコーディネートの集大成としてファッションショーを開催、ユニクロとのコラボも実現させている。

一方、2008(平成20)年4月、静岡産技の新館内に新設したのが静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校(以下、エア・リゾート)である。翌21年6月に開港予定の富士山静岡空港を見据え、国際エアライン科(2年)・国際トラベル科(2年)・国際コミュニケーション科(2年)の3科7コースを設置し、第1期生53人を迎えた。

エア・リゾートの教育を特徴づけるのは航空機内等を再現したアリティの高い実習室、おもてなしの心を育むマナー教育、そして各業界への知識を深める研修など数多い。卒業生がめざすのは、フライターアテンダント、グランドスタッフ、ツアーブランナーなどで、航空・旅行業界も含め、さまざまな職種におよぶ。そのため、エア・リゾートでは必須の英語のほか、韓国語・中国語授業にもネイティブ講師を揃え、ハイレベルな語学教育を実現した。9月には株式会社フジドリームエアラインズ(以下、FDA)や静岡エアポートサービス株式会社(現:株式会社エスエーエス)の企業セミナーを実施し、11月には理工科大とともに「静岡空港フェスタ」に参加し地域活動にも貢献した。

翌21年2月には国際トラベル科の学生たちが、ツアーコンダクターには必須の資格である「国内旅程管理研修」を受講し、全員が試験に合格した。同年4月には第2期生69人が入学した。開校2年目として真価の問われる年度だったが、早くも国際エアライン科の学生2人がFDAから客室乗務員として就職内定を得た。

こうして新設2校はスタートしたが、この時期「大学全入時代」の到来にそなえ、当学園の専門学校部門では独自の5カ年中期計画を策定し、企業ニーズに則した即戦力型の人材を育成するカリキュラムの構築を早急に進めることとなった。

## 中・高一貫教育

当学園では2003(平成15)年ごろから星陵高を中心に「中・高一貫教育」の検討を始めたが、静岡北高で具体化したのは同19年のSSH校指定以後である。同事業を生かした中・高一貫教育の検討を進め、やがて中・高・大一貫教育までを視野に入れた。中学生から学習意欲の醸成を図り、高・大一貫教育の実を挙げることが目的の一つである。

種々の検討の結果、静岡北中学校(以下、静岡北中)は静岡北高併設の中学校とし、男女共学で学則定員は60人(3学年で180人)、その教育理念を次の3つとした。

- 1) 心豊かな倫理性の育成
- 2) 科学的思考力・分析力の育成
- 3) コミュニケーション能力・プレゼンテーション能力の育成

また、教育方針を「6カ年の計画的な教育活動をもって幅広く深い教養と高い知性を育み、21世紀の時代を強くたくましく生き抜くための能力(=キーコンピテンシー)を育成する教育を実現する」とし、まずは新設校として中堅クラスの進学校を目指した。同時に同年度から県が進める理数教育の推進「ニュートンプロジェクト」に沿い、その方針を上回る教育をめざす中学とする方針とした。これに先だって校舎の改修工事も実施し、静岡北中学校は2010(平成22)年4月に開校、入学者選抜に合格した第1期生40人を迎えた。入学式当日、森竹鍵治校長は中・高一貫教育の目標について「地球社会の一員として活躍できる人間を育てる」ことと述べ、「第1期生という誇りを胸に6年間努力しましょう」と結んだ。

一方、2009(平成21)年度に創立35周年を迎える星陵高では、同20年から「輝け星陵☆スターヒルプラン」と題した教育体制の改革を始めた。この中期計画では、①キャリア教育の構築・進学実績向上、②中・高一貫教育の確立、③教職員の資質向上、④高・大・高・専一貫教育の改革、⑤新校舎建設と学習環境の整備、という5項目のテーマを掲げている。

このうち、②で新たに併設する星陵中学校(以下、星陵中)の学則定員は静岡北中と同じく60人。星陵高との一貫教育のため6年間の教育プログラムを構築する。とくに国語・数学・英語に重点をおき、新たな感性・理性を育む「美育」の充実を図



静岡北中学校第1期生初めての遠足 2010(平成22)年

ることとした。そして、ハード面での中学生受け入れ準備として、⑤の新校舎建設を決定し、2009（平成21）年10月に起工した。建設場所は現旧校舎南側のAグラウンドに決定、中庭を有する口の字型の4階建校舎が2011（平成23）年1月に完成した。この間、数回にわたって学校説明会を実施し、中・高一貫教育の設置校のない地元からの期待を多く集めた。同年4月には、星陵中学校が開校し、新入生61人が入学した。入学式当日、坪井正明校長は「知・徳・体・美」それぞれのパネルを掲げ、星陵中の4つの教育について語りかけた。

## 専門学校本部の設置 — 中期計画に沿って

2009（平成21）年度、専門学校部門は5ヵ年の中期計画を策定し、これに沿ってカリキュラムの改編や学科の新設などを強力に推進した。並行して同部門はグループとしての活動を始め、企画調査室専門学校担当を静岡産技に置いた。これ以後、デザイン浜松（2011（平成23）年から浜松デザインカレッジ（以下、浜松デザイン））とエア・リゾートに統いて2011（平成23）年には主に東南アジアからの留学生を対象に浜松日本語学院を新設した。留学生に日本語教育を行うことで日本の高等教育機関への進学や地元企業への就職に寄与し、ひいては地域社会発展に貢献することが目的である。これで同部門は7校で構成されるようになった。

同時期、沼津情報は「公務員科」や「こども医療保育科」などを増設して「沼津情報・ビジネス専門学校」（以下、沼津情報・ビジネス）に改称（同22年）し、浜松情報でも「こども医療保育科」（同26年から「こども保育科」）を新設している。静岡産技は同23年4月から医療事務科と専門学校部門では初の4年制学科「みらい情報科」の新設を決定した。後者は大学院への進学も可能な「高度専門士」の称号を取得できる学科で、プログラム力とシステム開発力の育成を柱にネットワーク・データベースの知識を兼ね備えた高度な情報処理技術者の育成を目的とする。さらに翌24年度には「CG・アニメーション科」「メディアクリエイション科」を新設、エア・リゾートも「国際交流科」を新設した。これらの間、当然ながらカリキュラムの改善や定員の変更なども進行していく。

この2012（平成24）年度から企画調査室専門学校担当は法人本部内に移動したが、同26年度には部門のスケールメリットを生かした運営を円滑に進めるため直属の専門学校本部を設置することになった。主な機能は以下の3つである。

- ①7校の運営の全データを集約し、隨時確認可能な状態に管理・整理する
- ②本部長の判断のための情報を基礎データから作成する
- ③広報・就職担当と連携し、アンケートなど課題解決のための情報を収集・集積する

また、専門学校本部長のもとに、校長ミーティングや分科会、改革委員会を設置し、事務局を静岡産技の会議室に置いた。こうして専門学校部門は新たな体制に移行し、そのもとで第2次3ヵ年中期計画の達成をめざすこととなった。

同計画では専門学校部門全体として横断的・総合的に対応する教員力の結集と高度化を進め、県東部・中部・西部に展開する学科群のカリキュラムの統一による教員・教育の質の標



星陵高等学校新校舎 2011(平成23)年

準化を図る。これを基本として“10年後の姿と目標”を「静岡ドリームカレッジ構想」とした。すなわち、核となる学科群と高度な専門教育学科を静岡（中部）に配置し、その上で県内に広くニーズのある学科を沼津（東部）、浜松（西部）に展開する計画である。

この時点ですでに浜松地区では駅前の新校舎に3校が入っており、2016（平成28）年4月にはJR沼津駅近くに新校舎の建設が予定されている。沼津の新校舎には沼津情報・ビジネスが移転し、翌29年には沼津日本語学院を新設する予定となった。また、中部地区では2024（令和6）年ごろをめどに、静岡市葵区御幸町の再開発ビルへ移転・集約させる計画を進めている。

## 第2次中期計画から第3次中期計画へ

中学・高校部門は2013（平成25）年度から第2次中期計画を進め、星陵高ではスターヒルプランの「ザ・ネクストステージ」として「国際社会のなかで協調性を兼ね備えた日本のリーダー・世界のリーダーとなり得る人材の育成」をめざした。すなわち「確かな知・使える英語・異文化理解・リーダー性」の4つの能力の開発である。地域における評価は年々向上し、2015（平成27）年の入試では英数科の志願倍率が5.7倍と県内3位の高倍率（県内私学の平均は2.7倍）となった。

一方、静岡北高は2012（平成24）年度から2期目のSSH指定校となり、その2期目からは完成年度を迎えた静岡北中と合わせた6年一貫のSSHとして活動を始めた。静岡北中ではサイエンス・スタディ・ゼロ（SSZ）と名づけたSSH活動への準備トレーニングを開始し、インセンティブ・レクチャーやサイエンスコミュニケーション、環境調査ほかの活動で理科学的能力を養った。この時期、静岡北高はコアSSH校に指定され、国内外の学校との合同研究や国際舞台での発表機会を多く得ている。これらはいずれも同活動に厚みをもたらし、他方で「SSH事業の教材化・テキスト化」など将来につながる課題も浮上させた。

こうして両高校とも独自性と教育目標を明確にし、同時に進学校としての実績も積み上げてきた。国公立大学や難関校への合格率は向上し、県内私学ではトップクラスとなった。

2017（平成29）年度から学園は第3次中期計画に進み、「学生・生徒の主体性の育成や地域に密着した産学連携教育・研究活動」「一貫教育の深化と拡大」「国際連携の強化」「部門ごとのブランドイメージの明確化」などについて重点的に取り組むこととなり、同時にアメニティ充実や国際化、新分

野・学科設置の検討なども進めることとした。

#### 〔静岡理工科大学〕

すでに理工科大では2013（平成25）年以後に地域連携を深め、袋井市や静岡県など地域との提携を強化し、翌26年には「産学官連携フォーラム」を「地域創成フォーラム」へと進化させた。そして同29年度からは1級・2級建築士、木造建築士の受験資格を取得できる「建築学科」を新設した。同学科は地域からの高いニーズに応えるもので、県内では初である。これに合わせ、2017（平成29）年3月に同学科の新校舎（愛称、えんつりー）の建設を開始した。

また、当大学は「人間力」醸成の一つとして「グローバル人材」の育成を掲げ、「日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）」への参画や海外協定校とともに、もの・ことづくりを行う「一般PBLプログラム」、「特色PBLプログラム」（PBL：問題解決型学習）も始めた。今後はさらに海外大学との交流を拡大・活性化し、「研究力」向上をめざす予定である。

#### 〔中・高校部門〕

中・高部門では各教室にWi-Fi環境を整備してタブレットを活用したICT教育を行い、並行して国際化や高・大一貫教育の強化や学科・コースの再編を検討する方針とした。

星陵中学・高校では2016（平成28）年に新しい学びの形「SEIRYO style」を掲げた。高度な専門性を兼ね備えた教師陣による授業で確固たる学問の土台を築き、ICT機器を活用したアクティブラーニングで生徒主体の行事を展開する。また、海外姉妹校と連携したグローバル教育をいっそう拡充させることとし、英数科グローバルコースの開設を検討する。以上により、自ら自分の未来と世界の明日を切り開く力を備えた「国際社会で活躍できる日本のリーダー、世界のリーダーの育成」をめざすこととなった。

静岡北中学・高校はSSH事業を核としたPBL型教育やグローバル教育を推進し、「国際社会で活躍できる理数系・科学系のリーダーの育成」を目標に掲げた。すでに同校はSSH校として独自の取り組みを定着させつつあり、これが地域からの評価を押し上げている。また、グローバル人材育成についても充実させ始めおり、オーストラリアの提携校との交流授業やホームステイ、台湾の南新国民中学校との国際文化交流授業を行っているほか、毎年の夏には中高生のための国際科学技術フォーラム「静岡北・ユース・サイエンス・エンジニアリング・フォーラム」（SKYSEF）を開催し、国内外から数多くの参加者を集めている。

#### 〔専門学校部門〕

グループとしての活動を強化する専門学校部門でも国際化や



静岡北中学校・高等学校  
ユース・サイエンス・エンジニアリング・フォーラム(SKYSEF)2019

新分野・学科の検討、教育改革を推進し、並行して西部地区的運営を見直すこととなった。すなわち、浜松情報と浜松デザインの学生募集や教務運営の一体化および両校統合、さらには2019（令和元）年度に始まる浜松情報と浜松日本語学院との連携による「介護人材育成プログラム」である。同3年度には連携を海外にも拡大し、母国で同分野の専門教育を受けた留学生を受け入れ、日本での国家資格取得と就職を目標とする予定とした。

東部地区では2017（平成29）年4月に沼津日本語学院を開校し、浜松日本語学院とともに国際交流を充実させ、同年設立の「留学生支援の会」とともに地域発展に貢献していく方針となった。これにともない、同校卒業生の受け入れ学科の新設についても計画を進めていく。

また、静岡産技に「こども保育科」を、浜松情報に「国際介護福祉科」を新設し、加えて介護福祉系学校を静岡産技校舎内に新設する案について検討を始めることになった。さらに部門全体の資格取得率を上昇させるため、前年比5%の向上をめざして指導法の改善も推進する。静岡デザインでは「静岡から日本へ、世界へ」をコンセプトに活動フィールドをさらに拡大させる方針とし、今後はよりグローバルな視点に立ったデザインを考え、「SDGs（持続可能な開発目標）」「知的財産権」といった国際社会の共通目標についての理解も深めていく。また、エア・リゾートでは専門的な英会話力の強化をめざし、企業と連携した「オンライン英会話」を導入した。今後はその専門性を高めるため、ICTを活用した語学学習・専門学習教材の開発と導入を進めていくことを検討している。

以上を統括する法人本部では広報活動の展開や設備投資計画の立案を進める一方、人材育成マップにもとづく教員採用・教育を実施し、キャリアパスによる人員配置を進める。同時に拠点間のネットワーク構築と基幹サーバ・共有ストレージのデータセンターへの移管を実施するほか、業務の効率化や事務組織の見直しと改組を推進することとなった。

なお、第3次中期計画満了（2021（令和3）年）までに予定される主な設備投資（建設）は、理工科大の第2クラブハウスとグラウンド整備、星陵中学・高校の新体育館、静岡北高の新体育館、静岡北中の中学校校舎、専門学校部門の宮前町小校舎などである。

## 未来に向けて

現代は少子高齢化と同時にグローバル化・国際化・ICT・人工知能やロボット技術・宇宙開発技術も急速に発展し、社会の変化を見通せない時代となった。価値観や労働条件が多様化する時代、政府は柔軟な労働環境のため働き方改革を推進し、文科省は予測困難な時代に対応すべく高大接続改革を推進している。当学園もこれら時代の変化や改革に対応しながら、自らの将来を決める大切な時期を迎えていた。そして平成最後の年、当学園は創立80周年と新法人設立30周年に向けた施策のポイントとして「一体感醸成」を掲げ、「中国研修旅行」と「SIST交流研修会」を実施した。

前者の対象は当法人の事務系職員で、総勢95人が訪れたのは40年前に経済特区とされた深圳市。海外企業の下請け工場のなかから世界的通信メーカーなどを誕生させた地域振興のモデル



中国研修旅行で訪れた深圳市

地区である。急速な人口増加とともに大学をはじめとする高等教育機関も増え、現在では国内大学と海外大学が共同運営する学院の設置も進む。当学園の職員たちはこの著しい経済・技術の成長や変化のエネルギーを肌で感じ、深圳大学で実施されている教育モデルや先端施設、さらには全世界の大学ランキングを指標とした成長・経営戦略を目の当たりにした。

一方、SIST交流研修会は学園の全職員を対象とした。互いに仲間意識をもち、これを深めることで学園全体の力を生み出し、すばらしい結果をもたらそうとの願いをこめた研修会である。当日、（株）麻生キャリアサポートの福澤仁志常務取締役の「必要とされる学園・学校するために～他校に学ぶ～」と題した基調講演では他校の事例を知る貴重な機会を得て、続いて行われたグループディスカッションでは部署を超えて互いの意見や希望を語り合う場を初めてもった。

閉会後、「業務と法人経営のつながりを感じられた」「キャンパスの移転・校舎改築など、なぜその時期に、どのように行ったかがわかる」「グループ経営状況が理解でき、入学者確保の重要性を認識した」など、将来を見据えたすばらしい感想が多く寄せられた。本学園の職員たちは「人を知り、人と語る」経験により「学園には多くの仲間がいる」という認識とともに一体感を共有し、創立80年という大きな節目となる令和の時代を迎えたのである。

2019（令和元）年12月、中国・武漢を発生源とする新型コロナウイルス（COVID-19）は、瞬く間に全世界に感染が拡大し、2020（令和2）年12月末現在、世界の感染者数は8270万余人、死者は180万余人に上っており、人の移動が制限されたことにより、失業者の増加、GDPの減少など、リーマンショックを上回る社会・経済に深刻な影響を全世界に及ぼしている。今後、ワクチンや治療薬が普及しない限り本格的な人の移動は回復せず、当面不景気が続くものと予想されている。本学園においても2020（令和2）年の卒業式や入学式も全体を集めての開催は見送られ、例年とは様変わりの様相を呈した。また、授業は3密を避けるため一部遠隔授業が行われたり、事務職員においては在宅勤務を余儀なくされたが、実際、遠隔授業や在宅勤務を実施してみると意外とスムーズに実行できる部分もあることが判り、コロナ後の教育の在り方や業務処理の遂行方法など、従来の常識が通用しないニューコロナの時代を迎えていた。また、今後、AI、ICTの劇的な進展による第4次産業革命の時代を迎える中で、本学園はどのような方向に向かうのか。2022（令和4）年度より始まる第4次中期計画が開始されるが、その指針となる5年後、10年後の学園全体のあるべき姿を、現

在若手職員を中心に議論しており、これをもとに長期ビジョンを策定する予定である。

JR静岡駅北口の一等地である静岡市葵区御幸町・伝馬町再開発ビルに、2024（令和6）年4月開校を目指して「御幸町キャンパス」を設置する予定である。これは、県内唯一の理工系総合大学を含む多種多様な13の学校を有する静岡理工科大学グループだからこそできる方法で、静岡の更なる活性化に貢献するものである。そのコンセプトは、「多くの人が往来し、集い、めぐり逢い、共に学び共に考え刺激し合って、共に成長する、そして、「ひと」「もの・こと」「まち」の未来を切り開いていくフィールド」である。その主な機能は、

#### ①静岡理工科大学サテライトラボ

社会人へのAI・データサイエンス教育、小学生を対象とした「お理工塾」、中高生を対象としたワークショップによる理工系分野への興味喚起、住民・企業・行政とともにワークショップや研究会の開催による地域課題の解決

#### ②地域協働センター

地域ニーズ・地域課題と本学園のシーズをつなげるフォーラム・セミナーの開催、社会ニーズを受けたりカレント教育

#### ③同窓生サイト

全国各地で活躍する卒業生同士のビジネスマッチング、卒業生と県内企業による異業種交流会

#### ④静岡デザイン専門学校

総合デザイン専門学校としての地位を確立し、都市部への流出から静岡への回帰、グループ専門学校・地元企業と共同で、小中高生を対象とした職業体験イベントの開催等である。

この御幸町キャンパスを学園のランドマークとし、「フェアでオリジナリティの高い教育・研究活動を通じて地域社会に貢献し、学生・生徒と共に継続して成長し続ける総合学園」を目指していく。

1940（昭和15）年の創立以来、長い歴史を積み重ね、現在の当学園は13におよぶ学校を擁している。それらの基幹ともいえる理工科大は2011（平成23）年に20周年を迎え、2021（令和3）年には新法人ともども30周年を迎えるとしている。この大学と一貫教育を進める2校の高校のうち、静岡北高は2020（令和2）年時点で創立から57年を、星陵高校も45年を積み重ねた。

専門学校部門も歴史を重ねるなかで、高校との一貫教育を充実させてきた。浜松・沼津の両日本語学院や浜松デザイン、エア・リゾートなど、時代のニーズに対応した新しい学校がある一方、かつて静岡県自動車学校の整備科としてスタートした静岡産技は創立から64年の校史を綴る伝統校となった。同様に沼津情報・ビジネスは37年、浜松情報は35年が創立から経過し、2017（平成29）年に創立90周年を祝った静岡デザインも合併から36年を数える。

そして今、当学園の全教職員が一体となり、来たるべき100年に向けて新たな歴史を刻み始めた。若手教職員はより経験を積んで一人前になるべく若々しい抱負を掲げ、中途採用の教職員はこれまでの経験を基礎にさらなるステップアップをめざす。中堅以上の幹部教職員は法人全体を俯瞰し、グループの発展と次世代への継承を視野に入れている。これら教職員の全てがその心に刻むのは、80年の昔、創立者たちが掲げた「技術者の育成をもって地域社会に貢献する」という建学精神にほかならない。





# 学校法人静岡理工科大学 グループ校紹介

1. 静岡理工科大学
2. 静岡北中学校・静岡北高等学校
3. 星陵中学校・星陵高等学校
4. 静岡産業技術専門学校
5. 沼津情報・ビジネス専門学校
6. 浜松情報専門学校
7. 静岡デザイン専門学校
8. 静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校
9. 専門学校 浜松デザインカレッジ
10. 浜松日本語学院
11. 沼津日本語学院





80  
th

たくさんの希望とともに、  
新しい未来へ。

## 静岡理工科大学グループ

フェアでオリジナリティの高い教育・研究活動を通じて地域社会に貢献し、  
学生・生徒と共に成長し続ける総合学園

---

本学園は、1940年に『技術者の育成をもって地域社会に貢献する』を建学の精神として設立され、現在、静岡理工科大学を中心として2つの中学校、2つの高等学校、6つの専門学校、2つの各種学校からなり「フェアでオリジナリティの高い教育・研究活動を通じて地域社会に貢献し、学生・生徒と共に成長し続ける総合学園」を目指し、7,700名余りの学生・生徒と約470名の教職員が特色ある教育・研究活動を行っています。

1991年に開学した静岡理工科大学は、県内唯一の私立理工系総合大学として従前からの「教養教育」「専門教育」「やらまいか教育」を柱に研究力を高め、モノ作りからコト作りに至るまで学生の主体的な学びを尊重し、企業との共同研究や地域との連携活動を通じて専門力だけでなく人間力を育み、産業界をリードできる柔軟で活発な人材の育成を目指しています。

中学校、高等学校では私立校ならではの中・高一貫教育を推進し、これから社会に必要とされる「学力の3要素」「G-STEAM教育の展開」「SDG'sの実践」を学べる教育環境を整え、国際的にも活躍出来る人材の育成に力を入れています。

専門学校グループは、実社会の人材ニーズに合わせ幅広い分野の「職業実践型人材の育成」を目標に、産業界が求める専門知識や技術の修得に加え、高い人間力を養うためのキャリア教育を展開しています。また、2011年に「浜松日本語学院」、2017年には「沼津日本語学院」を開校し、日本の長期的な就労人口減少に対し大きな期待を寄せられている『必要とされる国際人材を社会に輩出する』ことを目標として、教育活動を実践しています。

時代の変化とともに、変わりゆく世界。

そして、変化を必要とされる社会が目の前にあります。

時にたくましく潮流を超えていく人材に求められるものは

豊かな人間性と高い専門性を備えたグローバルな視野。

独自のネットワークと地域に根付いた一貫教育により

一人ひとりの可能性を引き出し、伸ばすこと。

本学園は、静岡県東部、中部、西部に跨がり大学・中高・専門学校・日本語学校という多様性のある学校種を持つ総合学園としての強みを今後とも最大限に活かし、「中・高一貫教育」「高・大一貫教育」「高・専一貫教育」といった多彩な教育連携をもって、地域社会との連携を深め、地域から日本、そして世界で活躍する有為な人材を送り出せる様、教職員共々日々精進を重ねています。

私たちは、その責任と使命を心に刻み新たな扉を拓いていきます。

---



静岡北中学校



星陵高等学校



星陵中学校



静岡北高等学校



沼津情報・ビジネス専門学校



沼津日本語学院



静岡デザイン専門学校



浜松日本語学院



浜松情報専門学校



静岡理工科大学



専門学校 浜松デザインカレッジ



静岡産業技術専門学校



静岡インターナショナルエア・リゾート専門学校

2021年4月、浜松情報専門学校と専門学校 浜松デザインカレッジは統合し、浜松未来総合専門学校として新たなスタートを切ります。

# 静岡理工科大学

SHIZUOKA INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY

理工学部

機械工学科 電気電子工学科 物質生命科学科 建築学科

情報学部

コンピュータシステム学科 情報デザイン学科

大学院

理工学研究科 · システム工学専攻 · 材料科学専攻

**個性豊かな教員の持つ多様な専門力をベースに、県内有数の教育・研究施設を活用し研究力を核とした貴重な経験を通して、地域社会の活性化に貢献する人材を育成する。**

1980年代初頭、日本の産業構造は高度技術・情報化社会の進展に伴う転換期を迎えるました。この頃より、本学園では社会の要請に応えるべく、大学設置に向けた構想策定を始め、1988（昭和63）年の「大学設置準備委員会」の発足をもって工業系大学の開設に向けた具体的準備作業に取り掛かりました。

大学設置場所は、日本でも有数の工業地域であり、世界的にも有名な企業が立地する静岡県西部地域にある袋井市とし、公私協力方式による大学設置としました。

1991（平成3）年4月、「豊かな人間性を基に、『やらまいか精神と創造性』で地域社会に貢献する技術者を育成する」を建学の理念とし、理学と工学の融合を図る理工学部に、機械工学科、電子工学科、知能情報学科、物質科学科を設置する1学部4学科、入学定員300名の静岡理工科大学を開学しました。

学部教育においては、科学・技術に関する学術を研究教授し、技術者としての使命感と国際的視野を持った向上心溢れる人材を育成し、実践的・創造的研究により社会に貢献することを目的としました。

また、1996（平成8）年には、科学・技術の高度教育・研究を通じて、広く人類の文化の発展に寄与することを目的に、大学院修士課程を開設しました。

その後、2008（平成20）年には人間の感性とコンピュータ技術を融合し、社会のニーズに柔軟に対応する人材育成を行う総合情報学部を設置し、2017（平成29）年には新たな文化を創造する建築家・建築技術者の育成を目指す建築学科を開設しました。現在、本学は2学部（理工学部／情報学部）6学科（機械工学科・電気電子工学科・物質生命科学科・建築学科／コンピュータシステム学科・情報デザイン学科）大学院修士課程2専攻（システム工学専攻・材料科学専攻）を有する静岡県内唯一の私立理工系総合大学として、教育研究活動、更には地域貢献活動を展開しています。

さらに、本学における教育研究の場は国内に留まらず、海外にも展開しており、これまでに、中国に9大学1機関、韓国に3大学、台湾に4大学、そしてブラジルの航空技術大学と連携協定を締結し、教育・研究分野における国際交流、人材交流を積極的に進めています。

2021（令和3）年4月に開学30周年を迎える、本学の卒業生・修了生は約8,300名となります。その内7,000名を超える方が静岡県内に在住、在勤し、地域の産業界で活躍しています。

本学では、建学の理念に基づく人材育成を現在も途絶えることなく実践しています。



# 静岡県内唯一の私立理工系総合大学の挑戦です。 やらまいか精神を受け継ぎ、未来へ挑み続けます。

## 静岡県の人材育成教育機関であるとともに、 地域の研究機関としての要請に応えて行きます

静岡理工科大学の建学の理念は、「豊かな人間性を基に、『やらまいか精神と創造性』で、地域社会に貢献する技術者を養成する」です。社会に役立つ仕組みを考える「ことづくり」、それを形にする「ものづくり」、創造への挑戦が生み出す価値の連鎖が、社会に役立つ革新的技術を生み出します。

「もの」や「こと」の本質を探求する「理学」と、その知見を基に人間の生活に役立つ「こと」や「もの」の創造を目指す「工学」、「情報学」。緑に恵まれたキャンパスで、人と地球の未来を創る学生たち。研究に力を注ぎ、自らを研ぎ澄まし、学びを究め、「専門力」と「人間力」を総合的に養い、人との力を身につけ、卒業後は、社会へ羽ばたき、それぞれの道をしっかりと歩んで行きます。

理工学部では、県内初の建築学科から一期生としての卒業生を2021年3月に輩出しました。情報学部では、データからソリューションとイノベーションを生み出すデータサイエンス専攻が始動しています。

新たな価値創造に挑戦する県内唯一の私立理工系総合大学として、地域の文化、技術の継承と創造に挑戦して行きます。

## エコパ周辺の発展と賑わいを感じながら 続けてきた施設の充実と研究領域の拡大

本学は、個性豊かな教員の持つ多様な専門力をベースに、「先端機器分析センター」や「やらまいか創造工学センター」などの県内有数の研究・教育施設と、学生たちの「若い力」を融合し、地域社会の活性化に貢献する高いポテンシャルを有しています。これは、文部科学省の科学研究費補助金や受託事業、企業との共同研究などが年々増加していることからも裏付けられています。

また、2017年度から理工学部に、県内大学初の建築学科を開設して、大きな軒下空間エンツリーとしての新校舎での新しい建築教育に取り組み、さらには、ICTやIoT、そしてビッグデータの活用に寄与する情報学部コンピュータシステム学科に、データサイエンス専攻を、2020年度に開設しました。

このような本学の「研究力」を地域企業に広く認知していただき、地域企業や地城市民の皆様との対話を促進して、地域企業や地域社会が抱える課題の解決に向けて取組むとともに、本学の研究のシーズ（種）を活用しての研究連携を通して、新しい高付加価値のある工業製品などの創出へと繋げる「ふくろい産業イノベ

ーションセンター」を2021年度に開設しました。本センターでは、本学関係者のみならず、袋井市、商工団体、金融等の産学官金が一体となり、イノベーション創出に貢献して行きます。

## 地域の要請に応える使命を担うことによって、 日本、世界の技術革新に繋げていく

東海道新幹線、東名・第二東名、静岡空港や清水港などの港湾施設での人の移動や物流を担う社会基盤の防災・減災、老朽化へのメンテナンス、さらには少子高齢化社会でのコンパクトな街づくりが喫緊の課題となっています。

本学では、このような地域のニーズに応えるべく、2017年度に、理工学部に県内大学初の建築学科を設置し、学内の雰囲気も一段と活気を増してきました。時代に求められる学びを、さらに模索する中、2020年度には、情報学部のコンピュータシステム学科に、日本でもまだ数少ない「データサイエンス専攻」を開設しました。育成対象のデータサイエンティストは、サービスの利用者や利用状況のデータを分析し、改善策や新機能をサービスに活かすという、今後注目される専門職です。

さらに、2022年度には、理工学部に静岡県内唯一となる「土木工学科」の開設を予定しており、静岡県での喫緊の課題である防災・減災の研究を通して、道路や河川、港湾など、静岡の未来の街づくりに貢献できる人材の育成を目指しています。

本学では、小さい頃から理工学や情報学の分野に関心がある学生はもちろん、実りある将来の人生を探している人も入学生として歓迎します。建築学や情報学を学ぶ上では、文系や芸術系、人間文科系へ関心を持つことも大切なことです。卒業時には、複数の専門性を身につけながら、自主性と協調性を持つ人材へと育ち、実社会で飛躍する姿を想像します。

静岡理工科大学 学長 野口 博



# 施設紹介



2011年4月に汎用性の高い大型分析装置を集中管理し、分析技術の提供や新しい活用法の開発などを通じて、学内の研究・教育活動を支援することを目的に開設しました。全国的にも稀な地域に開かれた研究開発拠点として、地域企業や近隣の高等学校の分析支援も行っています。



2013年6月に本学が掲げる“モノから入る教育”を実践し、学生の主体的な学びを支援する施設として開設しました。本学の工学分野や、国の成長戦略分野を視野に入れ「夢を形に」する工学系研究を推進します。



2017年3月に建築学科の開設に合わせ竣工しました。計画、環境、構造、材料、安全・安心で災害に強いなど、建築学科で学ぶ様々な領域を横断し、校舎そのものが「活きた教材」となるよう各分野の技術が統合して出来あがる建築を体現しています。



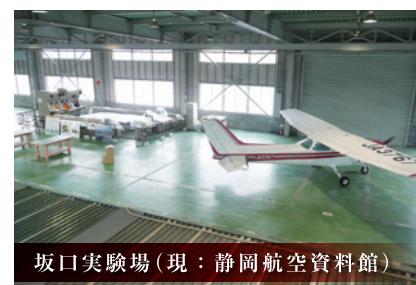
2019年11月に開学以来学生の休憩場所として利用されてきた学生ホール内にカフェテリアをオープンしました。同時に、学生ホールの全面リニューアルを実施し、学生だけでなく、教職員や外部からのお客様にも利用されています。



1996年3月に大学院修士課程の設置等による教員数増加に伴い、研究実験棟の増築を行いました。1999年3月に同棟を更に増築し、現在の研究実験棟となりました。



2004年4月に愛野駅から徒歩または自転車で通学する学生の利便の向上を図るため、県道から大学構内に繋がる道路を整備しました。通称「エコバ新道」。



2010年4月に機械工学科 航空工学コースの学生が、航空工学関係の実習を行う試験場として竣工しました。その後、各所に散在する貴重な航空資料を集め、展示することで多くの人達に航空輸送への興味を深めていただく「静岡航空資料館」を2013年11月に併設しました。



2011年9月にグループワークやディスカッションなど、学生の主体的学習を支援し、快適で多目的に使える活発空間を提供するため、附属図書館をリニューアルしました。



2017年の建築学科開設に合わせ竣工した両実験棟では、大型の実験機器を使って実物大のシミュレーションができ、これら設備を備える大学は静岡県内では本学のみとなります。



2020年4月に全学の情報基盤環境の運用・保守・整備とともに、次世代のICT教育環境(スマート・教育コンテンツ)の導入や全学的なデータサイエンス教育など、学内の教育・研究活動のサポートを行うなど、機能を拡充して開設しました。

# 沿革

- 1991(平成3)年4月
- 静岡理工科大学開学  
理工学部、機械工学科、電子工学科、知能情報学科、物質科学科の1学部4学科を設置
  - 初代学長 久松敬弘 就任
- 1995(平成7)年4月
- 第2代学長 中川龍一 就任
- 1996(平成8)年3月
- 研究実験棟(増築等)竣工
- 4月
- 大学院修士課程開設  
理工学研究科システム工学専攻、材料科学専攻の2専攻を設置
- 1998(平成10)年2月
- すずよクリエイティブハウス 竣工
- 9月
- 第3代学長 塩田進 就任
- 1999(平成11)年3月
- 研究実験棟(新築棟)竣工
- 4月
- 知能情報学科を改組し、情報システム学科開設
- 2000(平成12)年10月
- クラブハウス 開所
- 2001(平成13)年11月
- 開学10周年記念式典
- 2003(平成15)年4月
- 電子工学科を電気電子情報工学科に名称変更
- 2004(平成16)年4月
- 物質科学科を物質生命科学科に名称変更
- 2006(平成18)年9月
- 第4代学長 荒木信幸 就任
- 12月
- 夢創造ハウス 竣工
  - エンジン実験棟 竣工
- 2008(平成20)年4月
- 理工学部情報システム学科を改組し、総合情報学部コンピュータシステム学科、人間情報デザイン学科 開設  
電気電子情報工学科を電気電子工学科に名称変更
- 8月
- エアプレーンショップ 完成
- 2010(平成22)年4月
- 坂口実験場(静岡空港に近接)開設
- 2011(平成23)年3月
- 先端機器分析センター 竣工
- 11月
- 開学20周年記念式典
- 2013(平成25)年6月
- やらまいか創造工学センター 竣工
- 2014(平成26)年4月
- 第5代学長 野口博 就任
- 2017(平成29)年3月
- 建築学科棟えんつりー 竣工
- 4月
- 理工学部建築学科 設置
  - 総合情報学部を情報学部に、人間情報デザイン学科を情報デザイン学科に名称変更
- 2020(令和2)年4月
- コンピュータシステム学科データサイエンス専攻 開設



# 活動紹介

## 技術への挑戦



第14回 産学交流見学会  
(1995.08)

産業界の生産・研究の現場を大学教員が訪ねることで互いの理解が深まり、見学会後に実施された意見交換会では、技術課題解決に向けた発展的な意見交換が行われました。



第2回 産学官交流会(1999.12)

大学と産業界との連携強化を通じて、地域の技術振興と大学の研究活動の活性化を目的に開催しました。現在は、実施場所を大学から浜松市街地へと移し、「地域創成フォーラム」として開催を継続しています。



大邱大学校(韓国)と交換留学生協定(2002.06)

海外展開への第一歩となった本協定を含み、現在は海外17大学1機関と本学は教育・研究に関わる協定を締結しており、積極的な海外展開も行っています。



第15回 機器分析講座(2006.09)

地域の分析技術の向上や技術者育成を目的に、最先端の分析機器に関する講習会を実施しており、第1回機器分析講座から現在に至るまで、延べ1000名以上が受講しています。



第31回 鳥人間コンテスト選手権大会(2007.07)

2005年に発足した学生サークル「SKY Traveler」は、2007年に鳥人間コンテスト滑空機部門に初出場しました。2013年にはチーム最長記録186.29メートルを記録しています。



### 第6回 全日本学生フォーミュラ大会 (2008.09)

SIST Formula Projectは、2006年度開催の第4回全日本学生フォーミュラ大会から参戦を開始しました。現在は、ICV(ガソリン自動車)と、EV(電気自動車)の両部門に毎年度挑戦しています。



### 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(2010~2014)

本学の申請した研究プロジェクト「省資源型の地域産業創生を目指した微量元素分析・マッピング技術の開発と応用」が文部科学省に採択され、5年間にわたり技術の確立に向けた研究開発を行いました。



### モータードライブ応用研究会 総会(2015.07)

2004年3月に地元産業界からの支援を受け、モータの選定法やパワーエレクトロニクス技術に関する開発を支援する本研究会を発足しました。



### 商工団体連携協定調印式(2016.09)

これまで組織的または、個人的な協力関係で様々な活動を行ってきた袋井商工会議所、磐田商工会議所、浅羽町商工会、磐田商工会と、これまで以上の協力関係を構築するための連携協定を締結しました。



### 建築学科 バーチカルレビュー(2019.10)

建築学科では、年2回、学生が自身で制作した作品を教員や外部有識者を前にプレゼンテーションする「バーチカルレビュー」を実施しています。ここで講評により、建築計画における知識や考え方を学び、全国レベルの設計力が養われます。

## 学生生活



## 第1回 入学式(1991.04)

1991年4月に実施した第1回入学式では、機械工学科102名、電子工学科96名、物質科学科81名、知能情報学科94名の計373名の新入生が出席しました。

第1回  
大学院修士課程入学式  
(1996.04)

1996年4月に新設した大学院修士課程理工学研究科にはシステム工学専攻10名、材料科学専攻5名の計15名が入学しました。

LA(学生選書委員)  
(1999~)

本好きな学生と図書館職員の協働により、選書や本の紹介、大学祭でのワークショップなどの活動を通して学生の読書推進や図書館の活発化を図っています。2018・19年には、ビブリオバトル全国大会への出場を果たしています。



## 第1回 ホームカミングデー(2001.10)

かつての学び舎で、旧友や恩師との再会を楽しみ、親交を深める場として、ホームカミングデーを開催し、当日は100名を超える同窓生が集いました。



## 第23回 大学祭(2014.10)

大学祭は、学生が日常的に行っている活動成果などを、展示や出店を通して、保護者や高校生、卒業生、地域の市民の方々に楽しみながら理解を深めていただく「お祭り」です。学生が主体となり、地域の方々と一緒に素敵な時間を過ごしてもらえる場を提供しています。

第20回  
チャレンジハイク  
(2015.05)

新入生にとっては、これから4年間を過ごす袋井市を知る機会となります。法多山や愛野公園等の市内名所や海の見える風景を楽しみながら歩をを目指します。

学内企業説明会  
(2018.03)

本学体育館に80社を超える企業にお越しいただき、学生に対し会社説明や仕事内容及び採用試験などについて、説明いただきます。



## 情報センター学生スタッフの勤務開始(2018.10)

学生が学生に教えることで自己の知識を高め、今後の社会人活動にも活かされる「責任を持って業務にあたる意識」を養成しています。

## 地域交流・地域貢献



### 第1回 高校生のための 物質科学実験講座(1997.08)

県内高校生を対象に、専門的な講義や実験を通して、理工系分野への興味を掻き立てる取り組みとして、本会を実施しました。



### 第5回 一日体験入学(1997.08)

参加者は、講義・実験を受講し、学生食堂で昼食を取り、理工科大生としての1日を過ごし、本学の魅力を満喫します。現在は、市民体験入学と名称を改めています。



### 第10回 公開シンポジウム(2001.01)

時事テーマについて、本学教員がコーディネーターとなり、学内教員・外部有識者によるパネルディスカッションを行います。さらには、地域市民の方々を加え、会場一体となり設定テーマについて議論しました。



### 第1回 ものづくりフェスタ in 袋井(2009.11)

2日間に渡って開催された本イベントでは、中東遠のものづくり技術・作品が本学に集結し、産学官での新たな交流が育まれました。



### 小学校理科教室(2012.07)

子供たちに科学の面白さを伝えることを目的に出張理科講座を開催しました。日常生活にある物を題材にして、科学の面白さを体験しました。



### SISTコロキウム(2015.08)

お茶やお菓子を楽しみながら、話題提供者の話を聞いて、参加者同士が意見交換するサイエンスカフェを開催しています。近年は、話題提供者に近隣高校生を招き、地域の方や本学教員による盛んな意見交換が行われています。



### 第7回 高校生ものづくり・ことづくりプランコンテスト (2020.02)

浜松市との共同開催として、2013年度から高校生を対象に、「こんなものがあればいい」、「こんなことをやってみたい」、「夢のあるアイデアを『カタチ』にして、売り出したい」など、アイデアに満ちたオリジナルプランを募集するコンテストを実施しています。

# 学生代表メッセージ

この場所だからこそ新しいモノを知り、  
この時代だからこそ繋がるモノがあり、  
そして、成長しているのだと思います。

私は富山県出身の静岡理工科大生です。入学者の大半を県内出身者が占める本学では、当然の如く、入学直後に顔見知りの友人はいませんでしたが、2人の友人とすぐに知り合うことが出来ました。私達は、大学内で活動する全てのサークルが一堂に介し、大々的に新入生を募集する学友会主催の「新入生歓迎会」に参加しました。参加当初は、特に目的のサークルも無く、ただ見学するだけのつもりでしたが、友人の一人がクラブ連合委員会に興味を持ち「一緒に入ろう」と誘ってきました。私がサークル活動の楽しさや充実感を知り、その活動に没頭していくきっかけとなったのはこの一言でした。ただ、この年のクラブ連合委員会新入部員は、私と私の友人2人を含む3人でしたが、この2人とはこの後の学生生活において多くの時間を共に過ごすこととなります。

1年目の主な活動は、優しい先輩方のサポートでした。大学の周辺を散策しながら10km以上の長距離を歩くチャレンジハイクが、主催者として初の活動となり、準備や運営に戸惑うこともありました。しかし、先輩たちのフォローがあり落ち着いてイベントを運営することができました。その後に開催した「学長杯スポーツ大会」「サークル間交流会」等では、イベントを通じて学科・学部・サークルの垣根を越えた学生間の交流が深まる場を設けることができ、開催準備から終了までの長い時間を共にした仲間や先輩方との関係は一層深まりました。

先輩方との関係性が深まることで、サポートだけでなく、自分たちも積極的に活動に参加したいと考えるようになり、反省や改善点を探り、どうすれば貢献できるのか、その方法を考えるようになりました。同級生3人で「より多くの学生に参加してもらうためには」について話し合い、イベント終了後のアンケート項目や回収方法、チャレンジハイクのルート設定、サークル間交流会の開催日程など、新しい考えを示し、先生方を含めた学内の様々な方に評価、ご意見、共感をいただきました。これらの経験は、俯瞰して物事を見て考える力へと繋がり、発想力・対応力・リーダーシップの成長を感じることができました。

1年目の後半には、先輩方との引継ぎを終え、私が新たな委員長となり委員会を運営していくこととなりました。身が引き締まると共に、より良い活動ができるよう決意を新たにしました。新学期には多くの後輩が入部したこと、スクールバスにイベント告知を掲載する等、これまでには無かった活動が提案され、それを実行できる体制が整いました。巡り合わせや偶然の部分もありますが、一人ひとりが考え・実行できるクラブ連合委員

会は本当に恵まれたサークルだったと思います。

現在、私はクラブ連合委員会を引退し、後輩たちに運営を引き継ぎました。2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、イベント等の企画・運営を通して引継ぎを出来なかったことが心残りの1つとなっています。しかし、これはクラブ連合委員会に限ったことではありません。しばらくは私達が活動していた環境に戻ることが無いと思われる所以、学内のサークル・クラブ・学生団体で活動する全ての学生には、現状を前向きに捉えて、意見を出し合い、これまでの活動を活かした新たなカタチを作り上げていっていただきたいと思います。

私は、静岡理工科大学に合格した時に、住み慣れた地元を離れ、慣れない土地で学生生活を送ることに不安がありました。しかし、あの時「静岡に行こう」と決心したことは正しい選択だったと思います。なぜなら、静岡理工科大学には、新しい学びや経験があり、充実した毎日がありました。また、ここで知り合えた仲間・先輩・後輩・先生方そして、地域の方々から確かな自信と生きる力をいただきました。中でも仲間との出会いは何物にも代えがたく、長期休暇中に行く旅行や、大学帰りに立ち寄る飲食店で過ごす時間は、大切な一時です。私に関わっていただいた全ての方に大きな感謝を感じると共に、そこから学んだ「私しさへと繋がる芯となる部分」を大切にして残りの大学生活を送りたいと思います。また、卒業後は、社会生活を通して、お世話になつた皆様からいただいた感謝をお返しできればと思います。



野島 康平 さん

■情報デザイン学科3年 ■2019年度 クラブ連合委員会委員長  
■富山県立滑川高等学校 出身

# 同窓会長メッセージ

## 同窓会のもつ無限の力 SIST ブランドが 地域で活躍する卒業生の誇りになるように。

法人設立 80 周年、誠におめでとうございます。静岡理工科大学卒業生を代表して、心よりお祝い申し上げます。静岡理工科大学同窓会員の皆様におかれましては、益々のご活躍のこととお慶び申し上げます。また、日頃より同窓会の活動や運営に関してのご協力を賜り、心より厚く御礼申し上げます。

静岡理工科大学同窓会は発足より 25 年間、時代に合ったツールを用いて同窓生を繋ぎ、充実した人生のきっかけとなる様な活動を目指して常に挑戦しています。これもひとえに、志を同じくする仲間に恵まれたことに尽きます。

振り返ってみると、私と学校法人静岡理工科大学グループとの繋がりは深く、長いものとなります。初めての出会いは、グループ校の 1 つである星陵高等学校に新設された「英数科」の第一期生としての入学でした。充実した 3 年間を過ごし、卒業後の進路に選んだのも、開校初年度となる静岡理工科大学で、今思えば、「技術者の育成をもって地域社会に貢献する」という建学の精神の実現を目指し、学校法人静岡理工科大学グループの皆さまが引いた真っ新なレールに、感銘し、共感して乗り込むことのできた数少ない一人となります。また、当時は物珍しく、世間一般での認知も低かった「高・大一貫教育」という、新たなカリキュラムを取り入れた高校に対して半信半疑だったことも覚えています。現在では、学習に充てる十分な時間を確保し、計画的な人材育成を行うこの方針が全国各地で散見されることから、教育方針として正解だったことは誰の目にも明らかです。新たな取り組みに腐心され、実現に向けて邁進された皆さまのご苦労は計り知れないものがあったと推測します。この熱を浴びて学んだ時間が、今の私の同窓会活動に対しての心構えの礎となっていることに間違いはありません。

また、グループ内での進学を選んだことで、高校時代にお世話になった先生方とは様々な場面でご一緒することとなり、大学進学後、そして現在に至るまで、変わらず気に掛けていただけに大変感謝しています。

幸いなことに、現在、私は学校法人静岡理工科大学の評議員という立場もいただいており、グループ全体の運営に参画させていただいております。評議員会では、産業界・官界・学界と、さまざまな立場の方々がグループ全体の未来を思い描きながら、時代のニーズに合わせた教育方針や組織の在り方についての議論がなされています。これまで私が「在ることが必然」と感じていた学びの場は、多くの方々の思いで造り上げられていてことを知り、改めて感銘を受けると共に、弛緩なく続く議論に

グループ全体の明るい未来と、卒業生としての誇りを感じています。この場に参加する立場にあることに感謝し、私の経験やグループに対する感謝の念を、この場から発する「新たな教育」で恩返しをしたいと考えており、今後も微力ではありますが、グループの発展にお力添えが出来ればと考えています。

さて、静岡理工科大学同窓会も、2020 年に発足 25 周年を迎えたが、同窓会員の繋がり創出や強化を図る活動においては課題も多く、悩みは尽きません。しかし、地域社会で活躍する同窓生と楽しみながら、同窓会の活性化に向けて更なる挑戦を続けてまいります。先頃には、グループ各校の同窓会役員が一堂に介し、交流を持つ初の試みがありました。中高一貫、高大一貫と教育における繋がりに加え、卒業生による新たな繋がり創出に向けた取り組みが始動しています。学校法人静岡理工科大学としてのブランド意識を共有することで、各校単体では実現不可能であった面白い事が出来るのではと、未来に可能性を感じています。

今後も、静岡理工科大学同窓会の活性化とともに、グループの強みを活かした活動を通じて、グループ全体の発展に寄与していきたいと思います。関係の皆様におかれましては、これからも同窓会活動への変わらぬご支援ご協力を宜しくお願いいたします。



宮川 信之 さん

■静岡理工科大学 同窓会 会長  
■静岡理工科大学 機械工学科 1 期生

# 静岡北中学校・静岡北高等学校

SHIZUOKA KITA JUNIOR HIGH SCHOOL / SHIZUOKA KITA HIGH SCHOOL

静岡北高等学校

理数科

国際コミュニケーション科

普通科

**建学の精神「社会に貢献する人材の育成」を掲げ、校訓「創意実践」「質実剛健」の校風の中で、使命感と意欲に燃える若人の育成を目指しています。**

本校は、1963（昭和38）年に時代の要請に応え、静岡県自動車工業高等学校として、自然豊かな瀬名の地に開学し、建学の精神と2つの校訓を原拠に、歴史と伝統をつないできました。1980（昭和55年）に静岡北高等学校に校名を変更し、2010（平成22年）には静岡北中学校を開校しました。今年の3月には、中学校は8回目、高等学校は55回目の卒業生を送り出しました。これまでに、約2万1千人の卒業生が卒業してきました。卒業生は、多くの分野で社会に貢献しています。

中学校では、「将来のScienceとSocietyを牽引できる存在感と思慮深さを持った人材の育成」、高校では、「常に誠実で、清らかな心をもって真剣に物事に取り組む人材の育成」、「日々新しいものを創り出そうと何事にも積極的に挑戦する人材の育成」、「大学院、大学、専門学校という高等教育の場において、高度な科学技術を習得できるよう基本的な学力を身に付ける」を教育目標とし、時代に合った教育プログラムを開拓してきました。また、部活や生徒会等の課外活動も活発に行われています。

近年の本校の教育プログラムの特色として、研究活動があげられます。本校は、文部科学省から2007（平成19年）にSSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）として指定を受け、平成24年には中高一貫で指定を受け、現在に至ります。SSHは、将来の国際的な科学技術関係人材を育成するために、先進的な理数教育を実施し、カリキュラムの開発と実践、課題研究の推進、体験的・問題解決的な学習等を実践する高等学校を指定するものです。SSHの目的は、本校の建学の精神とも合致し、指定後は、科学技術で未来の地球に貢献する人材の育成を目指してきました。SSH指定校第1期から、試行錯誤を繰り返しながらも、研究成果発表で数々の賞をいただき、世界大会に出場する等の成果をあげ、令和元年度には本校生徒として初の特許申請をしました。失敗の連続の中、生徒と教師が共に目標に向かい、地道な努力を積重ねてきた研究活動は、本校の教育活動を象徴する一つの例と言えます。



# 「フェアでオリジナリティの高い教育・研究活動を通じて地域社会に貢献し、生徒と共に成長し続ける総合学園」の一員として。

## 生徒が目標に沿って科・コースを選択し、一人ひとりのなりたい自分を叶えます

本校は、故山下栄蔵先生のもと、昭和38年に静岡県自動車工業高校として開学し、第1期生として自動車工学科150名が入学しました。現在も、多くの卒業生が自動車産業界や多くの分野で活躍されています。その後、昭和55年に、静岡北高等学校に校名を変更しました。昭和57年に普通科、昭和58年に同科に進学コース、平成2年に理数科、高・専一貫コース、平成12年に国際コミュニケーション科、平成13年に高・大一貫コースを新設し、平成22年には静岡北中学校を開校し、時代と共に法人のグループ力を生かした姿へと変化してきました。また、部活動も盛んで、プロ野球選手、Jリーガー、競輪選手等、プロスポーツ界で名をはせた卒業生も多くいます。

近年では、進路先も大きく変化し、9割の卒業生が大学、短大、専門学校に進学しています。校舎や校庭は開校当時と大きく変わりましたが、どの時代でも故山下栄蔵先生の掲げられた建学の精神「社会に貢献する人材の育成」と、2つの校訓「質実剛健」「創意実践」に支えられ、進化してきました。今後も、時代の求める「社会に貢献する人材の育成」を標榜し、生徒と保護者様と共に本校は歩んでいきます。

## 時代と共に進化し続ける静岡北中高を目指して

超大容量の情報が超高速度で飛び交う、変化の激しいこれから時代を生きていくために、人間力と確かな学力を育み、その土台の上に、一人ひとりに合った $+a$ の力を身に付けることを目指しています。また、「感謝」の気持ちと「自分を信じる」ことを忘れずに、自ら学ぼうとする姿勢を育んでいきたいと考えます。そして、将来、社会が求める力はどんな力なのか、自分の持つどの力で社会に貢献するのかを考え、笑顔で次のステップに進めるよう一人ひとりの目標に寄り添っています。そこには、主体的に生きる、多様性の中で生きる、協働して生きる、感謝して生きる、誇りを持って生きる、そんな真のグローバル人材を育てたい、という本校の思いが込められています。

昨年度は、SSH指定校第3期12年目として、中高で行う研究活動を人材育成に活用する新たな取り組みや、生徒会を中心に関係諸機関と連携しながらのSDGsに繋がる活動等、生徒達が主体的に取り組む活動を通して、令和の幕開けと共に、本校の次の一步を踏み出しました。私たち教職員は、生徒達の笑顔や、困難な場面に直面しても乗り越えようとするひたむきな姿、保護者の皆様に支えられてここまできました。これからも、柔軟な思考で、思慮深く他者と協働できる「社会に貢献する人材の育成」を実践していきます。本校での活動を通して、卒業生が将来「街づくり」に寄与し、国づくりや世界の発展に貢献することは、まさに建学の精神そのものであります。

## 未来につなげる建学の精神

現在、学校教育は将来の社会を見据えて、大きな転換期の中になります。生徒に求められる力は増大し、それを育むための教育プログラムが多くの教育現場で展開されています。これから更に科学技術の進歩が加速し、人々の生活を便利にしていく一方で、世界規模の問題も解決していくかなければならない時代に向けて、真剣に子供たちの未来を考えているからです。

本校の基軸は、どのような時代であっても「社会に貢献する人材の育成」に他なりませんが、校内だけでの学習や活動では、これから時代に対応していく様々な力を育むには狭い世界であると感じます。そこで本校では、校内の教育活動に加えて次世代型の教育プログラムを展開し始めました。その一つとして、令和元年度から、課題研究を全校生徒で取り組んでいます。これは、自らの課題を発見し解決を試み試行錯誤する中で、教科横断の学びやメタ認知の促進、国際性の涵養、自己の成長につなげるためです。ここで、本校の大きな強みとなるのが、平成14年度から研究開発に取り組んできた、SSH指定校としての実績です。今までのSSH活動と成果の検証に基づき、課題研究を通じ人材育成につなげる新たなプログラムとして、様々な外部機関と連携しながら、生徒達が主体的に取り組める活動を多く展開していきます。校外のモデルケースとなる多くの輝いている方と接し、刺激を受け、校内に持ち帰り、自己の成長につなげるサイクルを繰り返しながら、一人一人の $+a$ の力を育み、時代に合った「社会に貢献する人材の育成」を実践していきます。

静岡北中学校・静岡北高等学校  
校長 山本 政治



# 施設紹介



人工芝グラウンド

人工芝はオランダから輸入。体育の授業や部活動での使用だけでなく、昼休みにはサッカーやキヤッチャボールをするなど、多くの生徒が体を動かして楽しい時間を過ごしています。



生徒食堂

日差しの入る明るい食堂。日替わり定食や麺類などメニューも豊富で、ランチタイムには多くの生徒が利用しています。暖かい日はテラス席でランチを楽しむ生徒も多くいます。



図書館

23,000冊を超える様々な書籍を取り揃える図書館。読書空間であるとともに、協働学習や自習室など多機能空間としても利用されています。



PCラボ教室

パソコン40台を設置したPCラボ教室。「社会と情報」の授業のほか、課題研究や総合学習など、多くの場面で活用されています。



家庭科調理実習室

調理台は8台。中学・高校の授業のほかに文化祭模擬店用の調理や小学生の親子を招いての親子クッキングサインなど、幅広い場面で活用されています。



音楽室

広々とした音楽室。普段の音楽の授業で使用するほか、放課後や休日は吹奏楽部が人に感動を与える演奏を目指し、練習に励んでいます。



三創工房

実験・研究に大活躍の工房。中学校の技術の授業だけでなく、高校の課題研究でも実験や研究に必要な機材の作製など、多くの生徒の活動の場として利用されています。



武道館

2階建ての武道館。1階フロアでは柔道部・合気道部、2階フロアでは空手道部・剣道部が毎日熱の入った練習で自らを鍛えています。



卓球場

9台の卓球台を備える卓球場。体育の授業や卓球部の活動で使用していますが、昼休みには多くの生徒がネットを挟んで球を打ち合い、楽しんでいます。



ゴルフ練習場

高校の施設としては珍しいゴルフ練習場。打席数は6と決して大きな練習場ではありませんが、体育の授業やゴルフ部の練習場として使用されています。



駐輪場

収容可能台数は1,000台以上。この春にきれいな塗装でリニューアル。今年は700名以上の生徒が自転車で登校し、この駐輪場から一日の学校生活がスタートします。

# 沿革

|                   |  |                  |  |
|-------------------|--|------------------|--|
| 1962(昭和 37)年 11 月 | ● 静岡県自動車工業高等学校設立認可                       | 2000(平成 12)年 4 月 | ● 國際コミュニケーション科新設   |
| 1963(昭和 38)年 4 月  | ● 第一期生 自動車工学科 150 名入学                    | 2001(平成 13)年 4 月 | ● 普通科に高・大一貫コース新設   |
| 1964(昭和 39)年 4 月  | ● 工業経営科 一期生入学                            | 2002(平成 14)年 4 月 | ● 制服を現在のデザインに一新  |
| 5 月               | ● 実習工場竣工                                 | 2007(平成 19)年 4 月 | ● 文部科学省よりスーパー・サイエンス・ハイスクール(SSH)に指定される  |
| 1966(昭和 41)年 2 月  | ● 第一種自動車整備士養成施設として指定される                  | 2010(平成 22)年 3 月 | ● 静岡北中学校 設置認可承認  |
| 1971(昭和 46)年 4 月  | ● 交通工学科新設                                |                  | ● 本館を高校棟、特別棟を中学棟と改称  |
| 1972(昭和 47)年 4 月  | ● 情報処理科新設                                |                  | ● 静岡北中学校 サイエンス・パートナーシップ・プロジェクトの採択  |
| 1978(昭和 53)年 4 月  | ● 自動車教習コース撤去、運動場の拡張                      | 4 月              | ● 静岡北中学校 第一期生入学<br>文部科学省よりコア・SSH の採択   |
| 1980(昭和 55)年 4 月  | ● 校名を静岡北高等学校に変更                          | 8 月              | ● SEES 2010 開催   |
| 1982(昭和 57)年 4 月  | ● 普通科新設                                  | 2011(平成 23)年 3 月 | ● 静岡北中学校 サイエンス・パートナーシップ・プロジェクトの採択  |
| 1984(昭和 59)年 3 月  | ● 工業経営科・情報処理科・交通工学科廃科                    | 8 月              | ● IWF 2011 開催  |
| 1986(昭和 61)年 4 月  | ● 普通科に進学コース設置                            | 2012(平成 24)年 3 月 | ● 文部科学省よりスーパー・サイエンス・ハイスクールに再指定され、平成 25 年度より 3 年間の科学技術人材育成重点校の採択を静岡北中学校・高等学校の中高一貫で受ける |
| 1988(昭和 63)年 4 月  | ● 工業技術科新設                                | 8 月              | ● SKYSEF 2012 開催(令和元年まで毎年継続して実施中)  |
| 1990(平成 2)年 4 月   | ● 理数科新設                                  | 2013(平成 25)年 3 月 | ● SSH 実験室設置  |
| 12 月              | ● 法人名を学校法人静岡理工科大学に改称                     | 8 月              | ● 人工芝グラウンド竣工   |
| 1991(平成 3)年 4 月   | ● 普通科にコース制を設置(高・専一貫、実務、体育)               | 2019(平成 31)年 4 月 | ● 第 3 期スーパー・サイエンス・ハイスクールに指定される   |
| 1992(平成 4)年 3 月   | ● 本館(6 階建)増築起工(翌年 4 月竣工)<br>テニスコート、弓道場撤去 |                  |  |
| 4 月               | ● 制服をブレザーに変更                             |                  |  |
| 1993(平成 5)年 3 月   | ● 自動車工学科・工業技術科廃科                         |                  |  |
| 1995(平成 7)年 4 月   | ● スクールバス運行開始                             |                  |  |
| 1998(平成 10)年 12 月 | ● 本館増築部分(4 階建)竣工 新生徒食堂完成                 |                  |  |



# 活動紹介

## 静岡北中学校



### 野外活動 (2019.04)

藤枝市の大久保キャンプ場での活動。全学年を縦割りにしたグループで、フィールド遊びやバーベキューを行い、親睦を深めました。



### 環境調査捕獲調査 (2019.05)

県より特別採捕許可を受けてのカメの捕獲調査。開校時からの伝統行事です。「爬虫類ハンター」静岡大学加藤先生の指導により、麻機遊水地で捕獲調査を行いました。

### 静北祭 (2019.05~06)

グランシップでのステージ開催と学校での地域公開。中学生は各クラスで合唱を披露。練習と発表を通し、クラスの絆を深めました。



### SKYSEF2019 (2019.08)

海外12校・国内4校の中高生が参加。ポスターセッションや各国・各校混成チームによる国際共同プロジェクトを通して、科学探究の諸能力を高めました。2012より18回目。

### インセンティブレクチャー (2019.09)

2年生は静岡理工科大学にて、3年生は静岡大学にて、大学の先生方から興味深い講義をしていただきました。後日、学んだことをパワーポイントにまとめ、発表しました。



### 探究講座発表会(2019.09)

自分自身で調べてみたいことを見つけ、研究を行う活動。1年生が夏休み中に取り組んだ研究課題について、ポスターを作成し、それぞれの考えや成果を発表しました。



### 南極授業(2019.10)

南極昭和基地と生中継で、交流授業を実施しました。第60次南極地域観測隊の植松浩二隊員が、南極の過酷な自然、観測隊の仕事や調査の内容等、説明をしてくれました。



### 職業体験実習(2019.11)

静岡県理容組合青年部の方33人が講師として来校してくれました。体育館にてカットやバーマなど理容の仕事の体験をし、学ぶことの意義を考えました。



### 地域清掃活動(2019.12)

生徒会主催の行事です。1時間半ほどの活動でしたが、学校周辺の道路の清掃活動を行いました。清掃活動を通して「感謝」と「奉仕」の精神を養います。



### 留学生との交流授業(2020.01)

沼津日本語学院や浜松日本語学院の留学生たちを招いての交流授業。年に2回実施し、2年生が参加します。昨年は自国の紹介や英語のすごろくゲームをして交流を楽しみました。



### 百人一首大会(2020.02)

生徒会主催行事。全学年を縦割りにして32のチームを作り、百人一首大会を行いました。学年を超えて生徒同士の絆が深まり、日本文化の理解に役立ちました。

## 静岡北高等学校



### 文化祭(静北祭)(2019.05~06)

グランシップでのステージ開催と学校での地域公開。クラス展示やCM動画の制作。模擬店の運営、部活動や有志によるパフォーマンスなど大いに盛り上がりました。



### 体育祭(2019.09)

励和頑年(れいわがんねん)。励和「互いに励まし、協力し合う」頑年「頑張る年(体育祭)にする」のスローガンのもと熱い戦いが繰り広げられました。



### SKYSEF 2019(2019.08)

海外 12 校・国内 4 校の中高生 230 名が参加。ポスターセッションや各国・各校混成チームによる国際共同プロジェクトを通じ、科学探究の諸能力を高めました。2012 より 8 回目。



### 修学旅行 タイ・カンボジア・グアム(2019.12)

4泊 5 日の修学旅行。理数科・国際コミュニケーション科はタイ・カンボジアへ、普通科はグアムへ。海外の文化を直接体験し、自分の視野を広げました。



### SSH 成果発表会(2019.12)

本校 SSH の概要や 1 年間の活動報告。代表者によるステージで発表や、高校 1 年生全員によるポスターセッション形式での課題研究中間発表など、生徒が中心となって行いました。



### 海外語学研修 (2019.03)

オーストラリアの姉妹校での研修。  
1年生の希望者 33名が参加。英会話授業やアクティビティに参加して英会話能力を高め、ホームステイを通して現地の人々との交流を深めました。



### イングリッシュサマーキャンプ(2019.07)

2泊3日の体験型英語学習。毎年国際コミュニケーション科の1年生が参加。外国人講師によるワークショップやアクティビティを通じ、英語コミュニケーション能力を育てます。



### 高専連携講座(2019.06)

法人グループ内の専門学校の授業を体験。普通科の1年生が各学校を訪れて独自の授業を体験し、「職業意識」「進路意識」を高めました。



### SDGs 活動

静岡市役所と協力しての SDGs 推進活動。有志のメンバーが校内や地域の方々に本校の SDGs の取り組みについて説明しました。活動範囲を徐々に広げています。



### 科学教室(2019.07)

理数科の1年生が西奈こども園を訪問。科学の実験を通して、科学の不思議やおもしろさを伝え、園児たちと楽しく触れ合いました。

# 生徒代表メッセージ

創立 80 周年を迎えて



石垣 美月 さん

■静岡北中学校 3 年 ■生徒会会長・SHIP（中高一貫研究班）  
■静岡市立足久保小学校 出身

静岡イチ魅力に溢れた学校。  
それは静岡北高校



大木 利奈 さん

■静岡北高等学校 理数科 3 年 ■生徒会長・美術部（部長）  
■静岡北中学校 出身

私が静岡北中学校を志望した動機は主に二つあります。

一つ目は、静岡北中学校が中高一貫校ということです。静岡北中学校では、各教科の授業や研究活動において、じっくりと基礎を固めることができるとともに、高校に進学する様々な準備もできます。

二つ目は、SSZ や SKYSEF、SHIP などの多種にわたる研究活動に魅力を感じたことです。自分の興味・関心に合った研究ができるとともに、その結果を発表する機会もあり、観察力や分析力、表現力等を伸ばすことが出来ます。更に、こうした研究結果を英語で発表する機会もあり、英語力や語彙力も伸ばすことができます。

現在、私が学校生活を送る上で特に力を入れていることは、勉学と生徒会活動です。

勉学では、高校進学に向けて理解できないことがないよう、先生方のご支援をいただきながら各教科の課題はもちろんのこと、日々の自主勉強ノートで予習・復習を繰り返し行っています。

生徒会活動では、今年度については新型コロナウィルスの感染拡大防止のため、行事や課外授業などが自粛となり、今なお様々な制限や規制がある中ではありますが、生徒会の役員とともに「できること、やれること」を探し、北中生の皆さんに明るい学校生活を送れるような企画を計画・実践しています。

今後も、新型コロナウィルスの影響に予断を許さない状況が続きますが、下級生の「良きお手本」となる学校生活を送っていきたいと思います。

静岡北高校の魅力は三つあります。

一つ目は先生方の手厚い指導です。自習室や講座にてわかるまで説明し、また進路についても親身になってご指導をしてくださるので大変心強いです。

二つ目は校舎がきれいなところです。新しいだけでなく、キャップ集めや周辺のごみ集めなど奉仕精神が身についているため、生徒がきれいに維持しつづけています。

三つ目は科学の教育に強いところです。(水のノーベル賞ともいわれる 2019 日本ストックホルム青少年水大賞の受賞や 2007 年から第 3 期連続してスーパーサイエンスハイスクール SSH に認定されています。この背景には毎年、成果を英語でプレゼンテーションをする SKYSEF や課題研究活動の寄与が大きいといえます。) 大学受験や将来、就職をするにあたり発揮される部分であると思います。

まだまだ語りきれないほどの魅力のある北高で私が一番に力を入れていることがあります。それは生徒会活動です。私は一年次に会計をやり、二年次に副会長、そして今生徒会長となり、貢献しながら北高と共に更なる成長を図りたいと考えています。

# 同窓会長メッセージ

## 永続する学び舎、 創立 80 周年の歴史と次の一步

学校法人静岡理工科大学創立 80 周年誠におめでとうございます。この記念すべき節目に学校と関わることができましたこと大変光栄に思います

母校、静岡県自動車工業高等学校が昭和 38 年 4 月に開校、当時の施設等は一部未完成の状態で授業に使用する教科書や教材も大半は先生方の手作りで、そのご苦労と熱意が日々の授業にも感じられ、先生と生徒が一緒になって苦労を共にして頑張ったことを恩師や先輩方に伺ったことがあります。私はその 3 年後に入学、諸先輩たちとは違い、全ての施設・設備が完成され、校舎や実習場が真新しく学科棟の窓ガラスはブルーのフィルムが貼られ、お洒落な校舎や実習場であったことがとても印象に残っています。また、学校周辺は住宅など一軒もなく周りは田んぼや畑だけでしたので、時期によってはグランドの土を巻き散らす名物の「瀬名嵐」に悩まされたことも今では良き思い出となりました。

当時は全国でも自動車工学を主として学ぶ高等学校は殆んどなく、注目度も高く通学するのに片道約 2 時間(徒歩～JR～自転車)掛かりましたが、今、思い返せば自分の興味に合った勉強に打ち込める事ができましたので、その時に培った知識や技術が、その後の人生にも大きな影響を与えた楽しい高校生活でした。併せて、これまでの人生で多くの岐路がありましたが、自分にとって重要なターニングポイント(転換期)でもありました。

その後、学校は昭和 55 年 4 月に教育環境の改善とともに、校名を現在の静岡北高等学校と名称変更し、これまでの自動車関連業種に留まることなく、社会全般で活躍する生徒を輩出する学校へと更なる発展を目指し現在に至っています。

私ども静岡北高等学校同窓会(北風)は昭和 55 年に校名の変更はありましたが、これまで第 1 期生(昭和 41 年 3 月卒)から第 55 期生(令和 2 年 3 月卒)まで約 2 万名余の多くの卒業生が巣立ち、そして県内外を問わず海外においても立派な社会人・学生として活躍しています。ここに改めて同窓生一同を代表し諸先生方に感謝申し上げます。同窓会々員は人生の目標となる先輩そのものであり、これからも微力ながら学校発展のためにご協力させていただき共に歩んで行きたいと思います。

「国家百年の計は教育にあり」今や変転極まりない社会情勢の中にあって、教育への期待は益々高まりを見せていくが、現在の教育成果は学校と社会とでは大きな乖離があります。長い間学力イコールテストの点数重視という思い込みに囚わ

れた形式的な暗記能力が中心の時代でしたが、これからは新しい学力(21 世紀学力)「考える力」の時代到来です。これまでの予定調和的に正解のある問題に答える点数より正解に至るプロセスを試行錯誤する中で新しいものを創造していく内容を重視する能力にスタンスを置くようご指導を宜しくお願いします。

今後、生徒たちは当然ながらグローバルな世の中で生きて行かなければなりません。そのためには是非、社会に貢献し期待される人間性豊かな人財になって欲しいと願います。併せて教育改革はこれまで何度も行われて来ましたが、静岡北高等学校の先生方の生徒に対する愛情と熱意はいつの時代も変わらず素晴らしいものです。これは長年培ってきた学校関係者の献身的な努力と支援の賜物であると思います。これからも先生方におかれましては歴史と伝統を静かに眺め続けてきた学び舎で、かけがえのない青春を謳歌し変化の激しい社会で臆せず堂々と生き抜ける人間力を秘めた人財の育成にご期待申し上げます。

時は移り、人は変わっても伝統と創造を兼ね備えた母校は 80 周年を契機に更に飛躍的発展を遂げますことを祈念してお祝いのことばといたします。



平井 一史 さん

■ 静岡北高等学校 同窓会 会長

# 星陵中学校・星陵高等学校

SEIRYO JUNIOR AND SEIRYO SENIOR HIGH SCHOOL

星陵高等学校

英数科

中高一貫コース 総合コース 英数コース

普通科

進学コース 高・専一貫コース 普通コース

## 地域のために、地域と歩んだ45年。 伝統校の秘める変化へのポテンシャルが描く未来を。

星陵高等学校は、1975（昭和50）年、「学校法人金指学園星陵高校」として静岡県富士宮市星山に創設されました。1977（昭和52）年、学校法人静岡県自動車学園との法人合併により、「学校法人静岡県自動車学園星陵高等学校」となり、この時に現在の静岡北高等学校と姉妹校となりました。

1988（昭和63）年に大学進学を目標とした「英数科」を新設。四年制大学進学率の大幅な向上を実現しました。

1990（平成2）年には、法人分割により「学校法人静岡理工科大学 星陵高等学校」となりました。1992（平成4）年、英数科を男女共学化、創立20周年を迎える1994（平成6）年には普通科を男女共学化し、スクールバスの運行を開始しました。よりよい校風、通いやすく、安心して学びやすい環境づくりを実現しました。

1990年代後半から2000年代前半には、より効果の高い進路指導を実現すべく、英数科に「総合コース」や「高・大一貫

コース」、普通科に「進学コース」や「高・専一貫コース」を設置。在校生の多様な進路希望に対応する進路指導体制を整えました。

2011（平成23）年には待望の「星陵中学校」を設置。富士地区初の私立中高一貫校として6年間の中高一貫教育をスタートさせました。超難関大学進学を可能にする充実したカリキュラム、特色ある美育行事を用意し、地域の期待に応えるべく、日々進化をつづけています。

2020（令和2）年現在、中・高合わせて1,400名を越える生徒が在籍し、「高大連携プログラム」や「高・専一貫プログラム」などグループ力を活かして、次世代を支えるグローバルリーダー育成を強力にバックアップしています。

星陵中学校・高等学校は、これからも時代と社会をリードする、静岡を代表する私学として、地域への責任を果たし、さらに飛躍の舞台へと歩みを進めてまいります。



# 変化を恐れず楽しみながら挑戦する。すべては子どもたちの未来のために。進化し続けた45年と未来への戦略。

## 建学の精神「人をつくる」とともに 地域と共に進化を続けた45年

星陵中学校・高等学校は建学の精神「人をつくる」に基づき、昭和50年に富士宮市の星山に開校しました。当時は男子校でした。その後、学校法人静岡県自動車学園（現在の学校法人静岡理工科大学グループ）に合流し、英数科の設置や男女共学化、星陵中学校の併設など様々な変遷を経て現在に至っています。

時代の移り変わりの中で、星陵も進化を続けて参りました。時代の変化を見据えて、現状に安住することなく職員一丸となってよりよい教育とは何かを考え、それを着実に行動に移すことで、地域からの支持を獲得し続けてきました。今では県下を代表する進学校として確固たる地位を築き、新たな取り組みにも果敢に挑戦する「変化に強いイノベーションブランド校」という評価をいただくまでになりました。また平成23年に開校した星陵中学校も、特色ある美育プログラムを擁する進学校として地域から高い評価をいただいております。

この間、法人内各校のご支援、ご協力をいただき、中学校・高等学校の教育内容の充実をみることができたことは誠にありがたく、喜ばしいことであると認識しております。学園のスケールメリットを生かして、中・高・専・大と人材育成のネットワークを全県に展開することで、すぐれた人材を絶え間なく地域に供給できていることを心から誇りに思います。

時代によって求められる「人材」像は変わっていきますが、これからも星陵は社会に貢献できる「人を」「作り続けて」まいります。

## 時代にあわせた新たな教育 多様な学びが育てる価値創造型人材

中学校・高等学校が共通して力を入れているのが「G - S T E A M教育」。それぞれG…Global（地球的規模の課題への理解）、S…Science（科学）、T…Technology（技術）、E…Engineering（工学）、A…Art（芸術、デザイン思考）、M…Mathematics（数学）の頭文字であり、理数系教育+ArtのSTEAM教育にグローバルな視点を合わせたものです。

教育については「何を」「いかにして」「何のために」この3つの視点が大切ですが、G-STEAMは「何を = 学ぶ内容」にあたる部分です。グローバルな視野養成のために全校をあげてSDGs教育を推進しており、内外からも高い評価をいただいております。

「いかにして学ぶのか」の部分が「AL (Active Learning)型の学び」、文部科学省の言う「主体的で対話的で深い学び」です。ALといってもその材料となる知識は不可欠です。ただ今の子どもたちはインターネットやメディアから大量の情報を瞬時に入手できるため、知識注入型の授業から知識活用型・知識活性化型の授業にシフトする必要があるのです。

本校のAL型授業を根底から支えるもの、設計図が「思考コード」です。これにより思考レベルを可視化し、到達度レベルも明確化します。さらに生徒の思考力活性化のために「問題解決型学習（Problem Based Learning = PBL）」の手法を用いています。もはや授業者が黒板の前で一方的に講義をする時代は終わりました。いま星陵にあるのはもっと多様で、複雑で、重層的で、変化に富んだ学びの空間です。生徒たち、そして先生方の挑戦に期待しています。

## 変わり続けることで未来への責任を果たす 22世紀を見据えた人材育成のねらい

先に教育にとって大切な3要素「何を」「いかにして」「何のために」と述べました。最後に残った「何のために」、これこそ星陵の教育が変わり続ける理由を示しています。答えは明快です。生き残るためです。

今や人生100年時代です。今年生まれた子どもは、25歳の時にシングュラリティを目撃し、その後50年以上「シングュラリティ後の世界」を生きて、81歳の時に22世紀に突入します。そんな時代を生きていくうえで必要なのは、世の中にあふれる知識を無批判的に「コレクション」していくことではなく、その「知識」をどうやって世の中を豊かにしていくために活かせるだろうかと考える「知恵」と「知性」ではないでしょうか。そして、人工知能には持てない「人間としての魅力」も大切です。これを磨くことで、シングュラリティ後の50年間を「楽しく」生きていくことができるよう思います。

星陵は、子どもたちにそんな未来を用意したいと考えているのです。星陵はこれからも進化に努め、静岡県が全国に自慢できるイノベーションブランド校として私学の先頭を走り続けていきたいと考えております。

「変わり続けること」、これこそが本校が地域に対してできる最大の貢献なのではないかと考えております。今後も星陵中学校・高等学校をよろしくお願ひいたします。

星陵中学校・星陵高等学校 校長 渡邊一洋



# 施設紹介



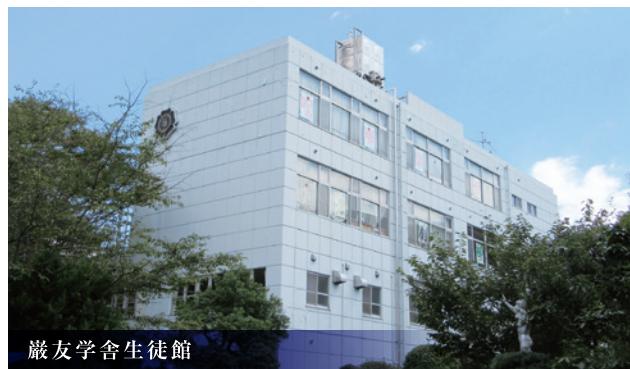
校舎

2011年に完成した校舎は、全体をガラス張りにした開放感あるデザインとなっています。生徒が勉学に集中できる環境を考慮し設計されており、職員室前のスタディホールでは、常に勉学に励む生徒の姿が見受けられます。



特別教室棟

特別棟は、技術室・家庭科室などが設置された、旧校舎を利用した施設です。収容人数の異なる教室が数多く整備されており、生徒個々の希望による選択授業の際に利用することが主となります。



巖友学舎生徒館

生徒館は、宿泊利用可能な多目的施設です。調理実習室が完備され家庭科の授業で使用されています。また、部活動の合宿の他、吹奏楽部・演劇部の活動場所として活用されています。学校行事の際は、イベントの開催場にもなります。有事・災害時には地域住民の緊急避難宿泊所としても機能します。



体育館

体育館は、授業やバドミントン、バスケットボール、バレー・ボールなどの部活動で多く活用されます。2階フロアには卓球場も併設されており、機能性も充実した設計となっています。



格技場（武道館）

格技場は、主に剣道部を中心となって活動しています。また、柔道の授業や、集会などでも利用することもあり、板面・畳面と十分な広さを備えた施設となっています。



パソコン室

パソコン室は、校舎に2室設備。計80台のパソコンを完備しています。主に総合学習やアクティブラーニングで活用され、放課後多くの生徒が学習・進路活動のため利用しています。



化学室

化学室は、機能的な実験器具が完備された研究プロジェクトの中心となる教室です。本校で進められている「星陵ラボ」では、多くの生徒がさかんに研究活動を行っています。



図書スペース

図書室は、約30000冊の本を収蔵しています。従来の図書室のように壁を仕切らず、生徒が気軽に立ち入りやすいよう考慮されており、読書や学習の推進をコンセプトとしています。



美術室

可動式の机など、創作作業に適した設備（教室照明の微調整等）が完備されており、多くの絵画作品や造形作品が生み出されています。



テニスコート

硬式テニス部・ソフトテニス部が中心となって活動しています。クレーコートが4面有り、授業でも十分に活用できる広さを有しております。

# 沿革

|                   |   |                  |   |
|-------------------|---|------------------|---|
| 1973(昭和 48)年 12 月 | ● 校舎起工式挙行                                   | 1994(平成 6)年 3 月  | ● 第 17 回卒業式(卒業生 5000 人となる)                          |
| 1974(昭和 49)年 8 月  | ● 学校法人金刺学園認可                                | 4 月              | ● 普通科男女共学開始、スクールバス運行開始                              |
| 11 月              | ● 星陵高校設置認可                                  | 5 月              | ● 創立 20 周年式典  |
| 1975(昭和 50)年 4 月  | ● 星陵高等学校開校、初代校長 式守富司氏就任                     | 1995(平成 7)年 4 月  | ● 第 7 代校長 森竹鍵治氏就任、普通科高・専一貫コース(沼津情報専門学校)、国際文化コース開設   |
| 1977(昭和 52)年 8 月  | ● 学校法人静岡県自動車学園に合併<br>(学校法人静岡県自動車学園星陵高校へ移行)  | 1996(平成 8)年 4 月  | ● 英数科総合コース開設  |
| 1978(昭和 53)年 3 月  | ● 第 1 回卒業式(卒業生 149 人)                       | 1997(平成 9)年 8 月  | ● 校舎耐震補強工事完了  |
| 4 月               | ● 第 2 代校長 古川鎮氏就任                            | 1998(平成 10)年 4 月 | ● 英数科を英数コース・総合コースの 2 コースに正式命名、静岡デザイン専門学校との高・専一貫教育開始 |
| 1979(昭和 54)年 3 月  | ● 普通教室棟増築、校旗新調披露                            | 2000(平成 12)年 4 月 | ● 静岡工科専門学校との高・専一貫教育開始                               |
| 1980(昭和 55)年 4 月  | ● 第 3 代校長 遠藤茂樹氏就任                           | 2001(平成 13)年 3 月 | ● 第 24 回卒業式(卒業生 8000 人となる)                          |
| 1982(昭和 57)年 4 月  | ● 第 4 代校長 大川亀之助氏就任                          | 4 月              | ● 高大連携教育開始  |
| 1983(昭和 58)年 3 月  | ● 第 6 回卒業式(卒業生 1000 人となる)                   | 2002(平成 14)年 4 月 | ● 英数科高・大一貫コース開設、学校完全 5 日制開始、土曜講座開始                  |
| 4 月               | ● 特別進学コース開設                                 | 2004(平成 16)年 4 月 | ● 第 8 代校長 坪井正明氏就任                                   |
| 1984(昭和 59)年 1 月  | ● 武道館完成                                     | 2005(平成 17)年 3 月 | ● 第 28 回卒業式(卒業生 10000 人となる)                         |
| 1985(昭和 60)年 5 月  | ● 創立 10 周年式典                                | 5 月              | ● 創立 30 周年式典  |
| 9 月               | ● テニスコート新設                                  | 2009(平成 21)年 9 月 | ● 新校舎建設工事開始   |
| 1987(昭和 62)年 2 月  | ● 故友学舎生徒館完成                                 | 2011(平成 23)年 2 月 | ● 新校舎完成   |
| 4 月               | ● 第 5 代校長 福本良雄氏就任                           | 4 月              | ● 星陵中学校開校、星陵中学校初代校長 坪井正明氏就任                         |
| 1988(昭和 63)年 4 月  | ● 英数科開設、バスターミナル新設                           | 2014(平成 26)年 4 月 | ● 英数科中高一貫コース開設                                      |
| 9 月               | ● CAI 教室完成                                  | 2016(平成 28)年 3 月 | ● 第 39 回卒業式(卒業生 15000 人となる)                         |
| 1989(平成元)年 3 月    | ● 第 12 回卒業式(卒業生 3000 人となる)                  | 4 月              | ● 第 9 代校長 渡邊一洋氏就任                                   |
| 1990(平成 2)年 12 月  | ● 法人名を学校法人静岡理工科大学に改称<br>(学校法人静岡理工科大学星陵高等学校) | 2017(平成 29)年 8 月 | ● 新校舎無線 LAN 整備工事、「20 分の挑戦」開始                        |
| 1991(平成 3)年 4 月   | ● 静岡理工科大学開学                                 | 2018(平成 30)年 4 月 | ● 土曜授業・第 7 時限講座開始                                   |
| 1992(平成 4)年 4 月   | ● 第 6 代校長 杉山昌弘氏就任、英数科男女共学開始                 | 2019(平成 31)年 3 月 | ● 第 42 回卒業式(卒業生 16000 人となる)                         |
| 1993(平成 5)年 5 月   | ● 教育相談室開設                                   | 2019(令和元)年 8 月   | ● 特別棟無線 LAN 整備工事                                    |



# 活動紹介

## 星陵中学校



朝霧林間研修 (2019.06) 1年

富士山周辺で自然科学の研修をしました。自然に触れて、自然を愛する心を育むとともに、団体行動をとおして思いやりや協力する心を養いました。



ふじのくに地球環境史ミュージアム研修  
(2019.10) 1年

芸術・歴史分野で、新しい価値観に触れ、自己を見つめ世界との絆を深める行事です。また、SDGs 講座では、専門知識を身につけました。



陶芸教室 (2019.12) 1年

お茶碗作り、自由制作、絵付け体験、施釉体験をとおして、創造することの楽しさ、思考・判断・表現するなどの造形的知識・技術を身につけました。



下田臨海研修 (2019.06) 2年

下田周辺の海洋環境や外浦海岸に生息する生物についての学習をしました。下田海中水族館だけでなく海辺の生きものをスケッチし、観察をしました。



### 京都・奈良研修(2019.10) [2年]

古都において、日本の歴史・伝統文化について自分の目で確かめることで、本質を見抜く力を養成しました。特に川村能舞台では、観劇に加え、実際に能を体験しました。



### SEI プログラム(2019.07) [3年]

外国人の先生と英語のみでSDGsに関する話し合いを行いました。各国の文化についての交流もし、多角的に視野を広げました。



### 歌舞伎研修(2019.04) [3年]

歌舞伎ギャラリー、歌舞伎鑑賞、江戸東京博物館での学習をとおして、日本の伝統文化を身近なものとして感じ、文学や言語、人間の表現の豊かさを感じました。



### グローバル研修(2020.01) [3年]

1年生で静岡を学び、2年生で日本を学んだうえで、3年間のまとめとして、海外での研修を行います。ハワイにてホームステイを行い、「日本」と「世界」を実感しました。

## 星陵高等学校



## 春季グローバル・ゴーリズ研修(2019.04)

新年度のスタートにあたり、本校の推進するSDGsへの理解を深めます。築地市場やオリンピック会場、お台場を見学し、進路選択に役立てるとともにクラス内の親睦を図ります。



## 体育祭(2019.05)

クラスごとに、担任の先生の顔をデザインした旗を作り、クラス旗をシンボルとして一致団結を図ります。競技を通して個人やクラスの目標実現に向かって真剣に努力する姿勢と連帯の精神を養います。



## 御殿場研修／JAXA研修(2019.04)

普通科・英数コース・総合コース1年生  
中高一貫コース1年生

二つの研修は入学式後もなく行なわれます。御殿場研修では高校生としての生活習慣を身につけ、規律を学びます。また、野外でのカレー作りやオリエンテーリングを通してクラスメイトとの絆を深めます。JAXA研修では、最先端の科学技術に関する展示物に触れることにより好奇心を刺激すると共に、発見する喜びと創造する楽しさを体験します。



## 星陵祭(2019.06)

生徒が主体的にSDGsに取り組むことを目指し、事前に行なった調べ学習を展示作品で発表します。一般公開日には地域のお客様をお迎えし、SDGsについて広く知っていただくことも重要なテーマの一つとして取り組んでいます。



#### グローバル研修 (2019.12)

2年生は、修学旅行としてカナダ・バンクーバーでの海外研修を行ないました。現地の文化や自然に触れ、たくさんの刺激を受けて帰ってきました。



#### SEIRYO English Immersion Program (2019.08)

外国人学生をお招きし、英会話、プレゼンテーション、ディベート形式の授業をしていただきました。語学力の向上とともに異文化への理解も進みました。



#### マラソン大会 (2019.11)

健康の保持・増進と体力の向上を図るため、毎年秋に行われます。優勝を目指して、事前の練習でも熱心に走りこむ頑張りが見られました。



#### SDGs発表会 (2020.02)

一年間で各自が探求したテーマを互いに発表し合います。クラス代表発表、コース代表発表を経て選抜されたグループが、全校生徒の前で学習の成果を披露しました。

# 生徒代表メッセージ

変化を恐れない星陵の革新教育で  
夢を見つけ、夢を叶える力を身に着け、  
将来輝こう！



宮城島 賢太 さん

■星陵中学校3年 ■第八期生徒会 生徒会長  
■男子バスケットボール部 ■富士市立富士第二小学校 出身

胸を張って、  
「星陵の全てが素晴らしい」と言えます。



白川 功 さん

■英数科総合コース3年 ■令和元年度星陵高等学校後期生徒会長  
■富士市立吉原第一中学校 出身

私は幼いころから、好奇心旺盛で未知の世界にも一人で踏み込んでいけるタイプでした。この長所を生かし輝くことができる学校は星陵中学校だと思い、自ら受験を決め合格するために勉強をし、合格することができました。同じ小学校の人のことは関係なく一人で入学をきめました。星陵中学3年生になった今、改めて星陵中学校で学んでいることの素晴らしさを感じます。

特に授業と美育行事は、星陵中学校の誇りです。中高一貫ならではの先取学習で基礎学力定着を徹底しながら、高校1年生レベルの問題に触れることで応用力を磨きます。また、各教科の基礎学力をアウトプットする機会が授業にあります。その1つに、一つの問題に対して、生徒同士の対話や、プロジェクトやタブレットを使ったディスカッションで自分の意見と仲間の意見をつなげる、身に付きやすい授業が数多く展開されています。

本物に触ることで本質を見抜く美育行事は、基礎学力を学ぶ座学に加え、思考力、観察力、表現力、そして人間性を磨きます。この探求学習を通して、実際に本物に触れ、様々な分野で確かな知識を身に着けることができました。加えて、美育行事の後には事後学習として、PBL(Project Based Learning)を行い、自分の意見をしっかりと持ち、それを伝える技術も身に着けます。そこから更に新たな課題が生まれ、研究を継続していきます。

星陵中学校は、世の中の変化に素早く対応し、夢を見つけ夢を叶えられる学校です。これからも星陵生としての誇りを持ち、充実した学校生活を送ります。

私は星陵高校生徒会長という大役を務めさせて頂きました。ある先生の「クラス全員で生徒会に入ろう。」という言葉がきっかけとなり、生徒会活動に参加するようになりました。生徒会長として全校生徒の要となり活動していく中で、改めて星陵の魅力を発見し、星陵高等学校の生徒であることに誇りを感じる様になりました。

数年前から星陵高等学校は、SDGs (Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)) 達成に向けた探究活動を積極的に進めています。毎年、2月に生徒会が主体となり中高合同の「SDGs発表会」を開催しています。また、6月の星陵祭でもSDGsをテーマに掲げ、様々な課題に対して自分たちの新しい提案や探究活動の成果発表を行っています。

生徒の力だけでは乗り越えることのできない困難な問題も、活動を支えてくださる諸先生方のおかげで、解決していくことが出来ます。先生方は、学習活動・進路相談等に、私たち生徒と同じ方向を向いて親身になって対応し、問題解決に協力して下さいます。それは毎日放課後、スタディーホールで勉強する生徒と先生方の取り組む姿を理解できます。

星陵高等学校は、生徒自らがより良い学校生活を作り上げていくことができる学校です。充実した学習を支える環境と、何よりも生徒に真剣に向き合ってくれる先生がたくさんいらっしゃるからです。卒業を間近に控え、改めて星陵高等学校に入学してよかったですと心から思います。ここで学んだ全てを人生の糧とし、世界に羽ばたきます。

# 同窓会長メッセージ

## 変わり続ける勇気をもって、挑戦を楽しむ。

静岡理工科大学グループがめでたく創立 80 周年を迎えることができ、星陵高等学校同窓会会員を代表して衷心より祝意を表します。これもひとえに創立当初より献身的に「技術者の育成をもって地域社会に貢献する」の建学の精神のもと教育に対して情熱を持ち、生徒の指導に当たってこられた教職員の方々の並々ならぬ努力の賜物であると深く敬意を表します。

また、数多くの精銳を輩出し続ける誇り得る学園です。静岡理工科大学グループを星陵高等学校同窓会として力強く支援してまいります。

1940 年に“技術者の育成をもって地域社会に貢献する”を建学の精神として設立した静岡理工科大学グループの星陵高等学校から今日までに巣立った卒業生は、世の中が目まぐるしく変わる今日、幅広く地域社会を支え、各方面で活躍しています。私たちは「誠・友・厳」の校訓のもと文武両道の精神で、何事にも精一杯事に当たることを学びました。母校で学んだかけがえのない経験がいかに実社会で大切であるかを実感しています。

昨今は、既存の知識や常識が通用しない未知の時代を生き抜くために、変化を恐れず、一人一人が充実した人生を送る時代となりました。そこで必要となるのが、静岡理工科大学グループで学ぶ最先端のグローバル教育、ICT 教育、アクティブ

ラーニングなどの 21 世紀型スキルです。

また、総合学園の強みである「中高一貫教育」「高大一貫教育」「高専一貫教育」に加え多角的な専門分野を学ぶ専門学校の飛躍で、絶えず変化する実社会のニーズに合わせ、高い技術を修得し高い人間力を養うためのキャリア育成が進んでいます。

この学び舎で変化に対応し時代を切り拓く力を学んだ諸先輩方と、この後に続く後輩がこの同窓会で結ばれ、大きな力となるのであれば素晴らしいことでしょう。

これからも、静岡理工科大学グループは、静岡県全域に広がる総合学園の強みを生かし、静岡を代表する私学として、地域への責任を果たし、さらに飛躍の舞台へと歩みを進めていきます。

同窓生の皆様には、静岡理工科大学グループを卒業したことに誇りを持って人生を歩んでいただきたいと思います。

最後に、この輝かしい歴史を誇る静岡理工科大学グループが今後益々隆盛なる前途を開拓し、世界で活躍し続けることを心から祈念し、お祝いの言葉といたします。



西川 有一 さん

■星陵高等学校 同窓会 会長

# 静岡産業技術専門学校

SHIZUOKA PROFESSIONAL TRAINING COLLEGE OF INDUSTRIAL TECHNOLOGY

みらい情報科

コンピュータ科  
プログラムコース

コンピュータ科  
ビジネスコース

医療事務科

こども保育科

CG技術科

ゲームクリエイト科

CADデザイン科

建築科

IT・ビジネス・ゲーム・CG・CAD・医療事務・保育・建築分野など  
時代のニーズに合わせた8学科9コースを有する総合専門学校。



1970(昭和45)年に開校した静岡産業技術専門学校は、今年で開校50年を迎えました。開校以来、学生一人ひとりの個性を尊重しながら高いレベルの教育に向き合ってきた結果、10,000名以上の卒業生が各業界に就職し、それぞれのフィールドで活躍しています。

「社会に自立するために必要な人間力と高い専門技術を有する人材を育成し、地域社会に貢献する。」という教育理念を基に、時代のニーズに対応する「先端技術教育」と、社会人の基本である「人間教育」を日々実践しております。

毎年多くの資格取得者を輩出しているのも本校の特徴のひとつです。本校の教育内容や実績が評価され、経済産業省より「基本情報技術者試験」の午前試験免除対象校に認定されており、1981(昭和56)年から今日までに、2,800名以上の合格者を輩出しております。そのほか、世界基準のベンダー資格やCAD系、医療系など、国家資格はもちろん、長期的な視点で有益となる多岐分野の資格実績に向けて、資格取得に特化した「資格試験対策授業」や一人ひとりのレベルに合わせた段階ごとのハードル設定など、開校50年の見識に基づいた強力な資格取得バックアップ体制を構築しております。

また本校では実務経験を積んだことのある教員や現在進行形で現場の第一線で活躍している講師を揃え、進化する社会状況にアンテナを張り、「今」必要とされる専門科目を多く用意しています。教員は教育の質を向上させるため、最新の技術を身につけ研鑽することで学生の可能性を引き出し、また常に半歩先を見据えた最新のカリキュラムを構成することによって、単なる知識や資格の取得だけでなく実社会がもとめる能力を身につける実践的な教育を行っています。各産業界の最新設備を想定した学習環境の整備にスピード感を持って取り組むことでハイレベルなスキルを育むと同時に、学生自身のやる気や向上心の支えに繋げています。この環境の中で培われた数多くの企業や団体・教育機関・地域社会で作る教育ネットワークは、全国でもトップレベルであり、日々進化を遂げています。

情報化が進んだ現代の実社会で本当に役立つ知識や技術を養うため、静岡産業技術専門学校は、これからも「教育の質」にこだわり、地域社会に貢献できる人材の育成と学生たちの夢の実現に真摯に向き合っていきます。

# 先端技術教育と人間教育の2つの柱で、これまで10,000人以上、社会に貢献できる優秀な人材を輩出してきました。

## 産業界のあらゆる要請に応える技術者の育成をもって、地域産業の発展に貢献してきました

大阪万博が開催された昭和45年、静岡産業技術専門学校は専門化・細分化していく技術者需要に応えるため開設し、専門技術者育成に努めました。まだコンピュータの黎明期ともいえる昭和48年に、将来需要が予想される情報処理技術者の人材育成を目的とし、即戦力となるコンピュータプログラマの養成学科を開設、いち早くデジタル分野の教育をスタートいたしました。そして昭和51年、学園は専修学校制度に基づき、専門学校へと昇格しました。その後、昭和55年、2年制の情報処理科を設置、昭和58年2年制のオフィスオートメーション科を併設いたしました。その背景には専門学校の教育課題である資格取得をバックアップするカリキュラムを組むためには、2年過程の導入が不可欠だったということがあげられます。平成元年に電子制御に精通するカーエンジニアの養成を目的に自動車電子科を開設し、平成2年には情報系で県内初の3年制情報システム研究科とコンピュータ電子科を開設し、学校法人静岡理工科大学の開設許可を得ました。平成6年、情報処理の基礎教育を経験した学生向けの情報テクノ科を設置、通産省（現 経済産業省）より情報化人材育成学科認定校Ⅰ類として認定、さらに平成7年には文部省（現 文部科学省）より、卒業生に「専門士」の称号が付与されることが認められました。平成8年、短大併修コースを設置、平成10年には学校教育法の改正により、大学への編入が認められ、より専門性の高い知識の習得が可能となりました。その後、拡大するゲーム・CG業界の需要に応えるため、ゲームクリエイト科、マルチメディア科を設置いたしました。また、近年では、技術者需要に応え、情報化社会に適応する人材を養成し、建築科・みらい情報科・医療事務科・こども保育科など、多くの業界で活躍する人材を輩出しております。

## 社会の変化に即応した実践的な職業教育・人材育成の実現のため、柔軟に対応してきました

本校は、「資格のSANGI」といわれる程、毎年多くの資格取得者を輩出し、基本情報技術者試験が圧倒的に有利な午前試験免除制度対象校でもあります。これまでに約2800名を超える「基本情報技術者試験」合格者を生み出してきました。これは、無理なく「学びの到達点＝資格合格」に達するカリキュラムと、50年の実績を持つ本校だからこそできる独自の徹底した直前対策授業、そして何より教員一人ひとりの熱意によるものといつてよいでしょう。IT・情報・医療・児童保育・機械設計・建築といったそれぞれ希望の業界に就職し、活躍するうえで、国家資格や長期的に見て有益な資格を取得することは大きなアドバンテージになります。

また静岡産業技術専門学校では50年の開設以来、実務経験のある教員や現場の第一線で働く講師を揃え、教育の質を向上させる

ために、自己研鑽を重ね、常に「今」必要とされる知識・技術を習得できる生きた学びを展開しています。そして進化する社会状況にもアンテナを張り、柔軟かつスピーディに学習環境の整備に取り組むことで、最先端の技術教育を実現、学生の可能性を最大限に引き出す努力を続けています。この実体験に基づく「生きた教育」が社会に出た時に、即戦力となるための礎となります。

## これからも未来にはばたく人材の育成を目指しています

専門学校教育の根幹は、取り巻く環境、特に社会や産業界との繋がりにあります。実社会において教育分野の技術がどのように使われているか、将来どんな方向に進んでいくかを常に見極めていかなければなりません。本校では、半歩先を見据えた教育を施していくために、最新技術で業界をリードする企業や大学、団体との教育連携や教育認定などの様々な教育ネットワークの充実を強化しています。これだけの教育ネットワークを持つ専門学校は全国でも数少なく、50年専門学校教育に真摯に取り組んできたからこそ、幅広く信頼できる教育ネットワークです。人口減少・少子・高齢化社会を迎える我が国にとって、経済成長を支える専門人材の確保は重要な課題です。今、社会は大きな変革期の中にあると言われ、非常に不透明な時代のように感じますが、実は、すでに明確な方向性が示されています。それは、「何かをやった人もやらない人も、同じ結果が生じる社会」から「何かに挑戦し、成し遂げた人には、それ相応の報酬がもたらされる社会」に変化すると言うことです。社会は、集団主義から「個の重視」へと大きく変化し、自分を表現する「コミュニケーション能力」が重要なスキルになり、「何ができるか？」を強く問うようになってきています。私たち静岡産業技術専門学校は、これまで以上に、この変革期に必要とされる、人間力と高い専門性を持った人材を育み、未来の社会に貢献していきます。

静岡産業技術専門学校 校長 坂部 真彦



# 施設紹介



ゲームクリエイト実習室

ゲームプログラミングを中心としたゲーム制作のための開発用ソフトを完備。ネットワークゲームにも対応できる開発環境を備えています。



情報ネットワーク実習室

シスコネットワーキングアカデミーをはじめとする最先端のネットワーク技術やシステム開発の実習ができる環境を完備しています。



CG・アニメーション実習室

CGやアニメーション、映像編集など、プロ仕様のデザイン系ソフトウェアを完備。3DCGアニメーションの制作にも対応可能です。



医療＆ビジネス実習室

病院の窓口での様々なシチュエーションを想定しながら、患者さんへの接遇マナー実習などを行います。



ピアノ実習室

一人一台の電子ピアノを完備。基礎から学べるので未経験でも安心です。ヘッドホンをつければ自分のベースに合わせてレッスンできます。



保育実習室

通常教室の機能に、保育や音楽などの演習ができるオープンスペースを設けることで、学びと実践が効率よく展開でき、保育・幼児教育の専門家に必要な実践力が身につきます。



CADデザイン実習室

業界標準の3次元CADソフト「Solid Works」による設計・演習が行える環境を完備。また、建築系のCAD設計授業にも対応可能です。



ゼミナール室

少人数で行う実習や研究、試験対策など、ゼミ形式での授業を行います。



就職相談室

求人情報はもちろんのこと、就職実績や入社試験問題などがストックされています。就活に関する相談や面接練習も常時行っています。



多目的ホール

各種特別講義や就職のためのガイダンス、卒業研究発表会などのプレゼンテーションの場に使用します。

# 沿革

|                  |   |                  |   |
|------------------|---|------------------|---|
| 1940(昭和 15)年 5 月 | 全寮制の静岡県自動車学校を開設   | 1996(平成 8)年 4 月  | ゲームクリエイト科、マルチメディア科を設置   |
| 1952(昭和 27)年 3 月 | 学校法人静岡県自動車学校として認可される                                    | 1998(平成 10)年 4 月 | 建築科を設置  |
| 1956(昭和 31)年 4 月 | 静岡県自動車学校に整備科(1年制)を設置                                    | 1999(平成 11)年 4 月 | コンピュータグラフィックス科とゲームクリエイト科を3年制に改定   |
| 1962(昭和 37)年 9 月 | 法人名を学校法人静岡県自動車学園と改称                                     | 2000(平成 12)年 4 月 | 情報テクノ科を情報ネットワーク科に改称   |
| 1970(昭和 45)年 7 月 | 静岡県自動車学校より静岡産業技術専門学校を分離開設<br>自動車整備科(1年制)及び板金塗装科(1年制)を設置 | 2001(平成 13)年 4 月 | マルチメディア科を Web デザイン科に改称  |
| 1973(昭和 48)年 4 月 | 電子計算機科(1年制)を設置し、コンピュータ教育を開始                             | 2002(平成 14)年 4 月 | 情報システム研究科を情報ネットワークシステム科に改称  |
| 1974(昭和 49)年 4 月 | 自動車整備高等科(2年制)を設置  | 2003(平成 15)年 4 月 | マルチメディアデザイン科を Web デザイン科に改称<br>OA ビジネス科を廃科   |
| 1976(昭和 51)年 4 月 | 学校教育法(専修学校規定)により専修学校(専門課程)として認可される                      | 2006(平成 18)年 4 月 | CAD デザイン科を設置  |
| 1980(昭和 55)年 4 月 | 情報処理科(2年制)を設置   | 2007(平成 19)年 4 月 | 総合ビジネス科を設置する。また情報ネットワークシステム科を情報システムアドバンス科に改称  |
| 1982(昭和 57)年 4 月 | 自動車整備高等科を自動車科、<br>情報処理科をコンピュータ科に改称                      | 2008(平成 20)年 4 月 | 総合ビジネス科を総合オフィスビジネス科に、<br>Web デザイン科をデジタルデザイン科に改称し、<br>キャリアライセンス専攻科、住環境デザイン科、<br>福祉公共ビジネス科を設置 |
| 1983(昭和 58)年 4 月 | オフィスオートメーション科(2年制)を設置                                   | 2011(平成 23)年 4 月 | みらい情報科(4年制)を設置<br>福祉公共ビジネス科を医療事務科に改称<br>住環境デザイン科を廃科   |
| 1989(平成元)年 3 月   | 情報棟(現在の校舎)が完成   | 2012(平成 24)年 4 月 | コンピュータグラフィックス科を CG・アニメーション科に改称し、<br>メディアクリエイション科(3年制)を設置<br>キャリアライセンス専攻科、総合オフィスビジネス科を廃科     |
| 4 月              | 自動車電子科(2年制)を設置  | 2013(平成 25)年 4 月 | 情報システムアドバンス科、デジタルデザイン科を廃科   |
| 1990(平成 2)年 4 月  | 情報システム研究科(3年制)と<br>コンピュータ電子科(2年制)を設置                    | 2015(平成 27)年 4 月 | メディアクリエイション科を広告・WEB デザイン科に改称  |
| 12 月             | 学校法人静岡県自動車学園は、学校法人静岡理工科大学への改称と静岡理工科大学の開設認可を得る           | 2018(平成 30)年 4 月 | CG・アニメーション科を CG 技術科に改称  |
| 1991(平成 3)年 4 月  | 自動車科、自動車電子科、コンピュータ電子科が学校法人静岡自動車学園静岡工科専門学校として分離開設        | 2019(平成 31)年 4 月 | こども保育科を設置   |
| 1992(平成 4)年 4 月  | オフィスオートメーション科を OA ビジネス科に改称する                            |                  |   |
| 1994(平成 6)年 3 月  | 校舎を増築   |                  |   |
| 4 月              | 情報テクノ科(2年制)を設置  |                  |   |
| 1995(平成 7)年 4 月  | コンピュータグラフィックス科を設置                                       |                  |   |



# 活動紹介



## SANGI カルチャー開講(2016.07)

授業では体験できないことを体験することで視野を広げ、教養を身につけることが目的です。一番人気は、今話題沸騰の注目スポーツ「ボルダリング」でした。



## 「秋期 情報処理技術者試験」集中対策(2017.09)

IT・情報処理業界で活躍するために、必要不可欠といわれる難関国家資格「情報処理技術者試験」に、本校では昭和56年から今日までの長きにわたり挑戦し続けています。



## 令和最初の産技杯争奪ボウリング大会を開催(2019.05)

狛ヶ崎ヤングランドボウルで学科・学年ごとに編成されたクラス団体戦と、個人戦が行われました。団体戦は担任のスコアも含まれるので、必死にプレーする先生の姿も。



## 春のディズニーハイキング(2019.05)

学習や資格試験対策、就職活動の合間にリフレッシュ!ディズニーを全力で楽しみました。授業や学校生活が軌道に乗った1年生は、仲間の新たな一面を発見したようです。



## 「スーツ着こなし講座」を開講(2019.06)

「株式会社AOKI」様より、スーツの着こなし方などの指導を行う講師を招き、スーツの選び方・ネクタイの結び方・場面に合わせた色の使い分けなどについて学びました。



## 医療事務科1年生の「ベビーシッター講座：沐浴」(2019.07)

ベビーシッターとして必要な知識と技術を学ぶ講座です。実物大の赤ちゃんの人形を使いながら、体を洗い、新しい服に着替えさせるところまで実践しました。



### 静岡県「県民の日」広報デザインコンテスト最優秀賞 (2019.08)

CG技術科に在籍している浅見皓斗さんが最優秀賞を受賞。作品は、2019年度の「県民だより」8月号の表紙と、県民の日WEBパンフレットに使用されました。



### コンピュータ科ビジネスコース1年生の「OB・OGセミナー」 (2019.10)

様々な職種で活躍している、卒業生によるセミナーです。それぞれの仕事内容の他、仕事で達成感を得たことや働く上でのモチベーションの上げ方などをお話しいただきました。



### 「SANGI スポーツフェスティバル」を開催 (2019.10)

草薙総合運動場で開催される、全学生参加の秋の一大イベント。ドッジボールやバレーボールといった球技やコスプレだるまさんが転んだなどを楽しみました。



### 「株式会社 バンダイナムコスタジオ」特別講座 (2019.12)

アニメーターとして活躍する元梅幸司様、柴田裕介様による講座。キャラクターをどう動かしたら美しく見せることができるか等を丁寧に解説していただきました。



### こども保育科1年生による「合唱発表会」(2020.01)

合唱曲の『虹』を、みんなで手をつなぎリズムに乗って歌いました。楽器演奏の曲は「A Whole New World」。学生たちはみんなで音を作り上げる喜びや達成感を味わいました。



### TV番組「ポツンヒー軒家を大改造!! 劇的ビフォーアフターする！」に出演(2020.03)

松永先生は「匠」として一軒家のリформを担当。建築科の学生は屋根の部分の制作に取り組みました。プロの指導の下、実践力を高める貴重な経験となりました。

# 学生代表メッセージ

## 産官学連携事業

### 「動画撮影と AI 認識による 駿河湾サクラエビ漁業支援システムの開発」

私は卒業研究として、サクラエビの AI(人工知能)画像認識について取り組んでいます。サクラエビは現在漁獲量が大幅に減少しており、静岡県独自の水産業であるサクラエビ漁の存続が危ぶまれています。そのため、水産資源であるサクラエビの個体数推定が課題とされていますが、広大な駿河湾全体のサクラエビを把握することは困難であり、人の目で個体数を計測することは現実的ではありません。そこで、AI にサクラエビの情報を学習させ、動画に撮影されたサクラエビを自動的に認識するシステムを構築しています。東海大学海洋学部によって駿河湾内の深海にて撮影された動画データを利用し、この動画からサクラエビの特徴を検出することで AI へ学習させ、自動的に認識するシステムを構築しています。システムは「個体数測定による生物密度推定」「海中サクラエビ体長測定」「船上サクラエビ体長測定」という 3 つの機能によって構成されています。すべてのシステムに共通して、AI によるサクラエビの画像認識が必要で、正確にサクラエビだけを認識できる精度が求められます。

しかし、深海の動画を AI に学習させた事例は世界的にも珍しく、AI の構築は非常に困難でした。更にサクラエビのような小型生物(30mm~40mm)の海中における認識は前例が無く、正確に認識し個体数を測定することを目指して AI 認識精度の向上実験を繰り返し、現在までに 80% 程度の認識率で AI を構築することができましたが、90% 以上の精度を目指してさらに AI の改良中です。

サクラエビ漁を継続させるために重要なことは、経済活動を継続させながら、漁場の生物量をコントロールすることです。サクラエビは 1 年ほどで寿命を迎えるため、1 歳を超えたサクラエビだけ漁獲することで、個体数減少を抑制しながらサクラエビ漁を継続させることができます。そのため、由比漁協では自主規制として、35mm 以下の個体を漁獲しないように定めています。そこで、体長を測定できるように 2 台のカメラを使い同時撮影することで、画像に意図的な視差を生じさせ、自動的に体長を測定することを可能にします。これが 2 つの「海中サクラエビ体長測定システム」です。このシステムは動画で撮影されたサクラエビの体長組成を表し、成体となる個体がどの程度含まれているか、動画を撮影するだけで判断できるようになります。

また、現在の漁業者は試験操業によってサンプルを採集し、船上で方眼紙にピン留めした個体を用いて体長を測定しています。この作業は 1 回ずつ行うため、非常に手間と時間がかかる上に、体長を正確に測定することが困難です。これを解決す

るために開発しているのが 3 つ目の「船上サクラエビ体長測定システム」です。サンプルとして漁獲された個体を撮影することで、自動的に体長組成を表示することを実現します。水揚げ直後のサクラエビをスマートフォンで撮影することで、体長組成をグラフ化し自主規制対象とならないかを判断する根拠となるシステムです。

これら 3 つのシステムを組み合わせて実用化することによって、駿河湾のサクラエビ個体数を正確に把握し、漁獲量回復のための一助となると考えております。

「サクラエビ」が生きる駿河湾と「桜えび」としての静岡市だけの地場産品の両方を守るという社会問題に直接向き合い、私の学んでいる技術が問題の解決につながっているという喜びと充実感を得ることができます。このように学びを実践へとつなげる貴重な場を提供いただけたことにあらためて感謝します。実用化に向けてのハードルは高く、引き続き求められる責任を感じながら、この産官学連携事業に関わる多くの方々のアドバイスと協力を受けて、漁業における ICT 化の可能性を見いだすスマート漁業の実現に向けて取り組んでいきたいです。



長倉 大貴 さん

■ みらい情報科 4 年  
■ 静岡県立駿河総合高等学校 出身

# 同窓会長メッセージ

## 1万人の卒業生を繋げ ITと共に優秀な人材の育成をもって 今後も地域社会に貢献し続けます。

静岡理工大学グループ設立 80 周年、及び静岡産業技術専門学校設立 50 周年を迎、ここに敬意を表すとともに、お慶びとお祝いを申し上げます。

静岡産業技術専門学校のルーツは、その前身となる静岡県自動車学校において 1956 (昭和 31) 年に整備科を設置したことを起源とし規定しているところですが、静岡県自動車学校から教育部門を分離するかたちで、1970 (昭和 45) 年に「静岡産業技術専門学校」が誕生を上げました。そこから 50 年の月日が流れる中で、これまでに 1 万人以上の卒業生を輩出し、地域社会だけでなく全国で活躍しております。

静岡産業技術専門学校 (略称「SANGI」) といえば情報教育分野が有名ですが、その足取りは、時代の先取りを目指す中で生まれ、1973 年の、まだ情報産業が黎明期であったタイミングにおいて、県下で初めて大型電算機を導入して情報教育 (電子計算機科) をスタートさせたところからはじめます。その後、1980 年に情報処理科、1983 年にはオフィス・オートメーション科、1990 年には情報システム研究科を設置し、その後もコンピュータグラフィックス科、マルチメディア科、ゲームクリエイト科などを新設し、時代の流れの中でコンピュータにより様々な産業が生まれ、その流れの船頭となれる技術者を育成してきました。それ以降にはコンピュータ技術が既存の産業界でも活用されるようになると、建築科や CAD デザイン科、医療事務科などを設置、そして遂には幼稚教育にもコンピュータ技術が使われる時代に入り、2019 年にはこども保育科を新設しました。

このように、SANGI の歴史はコンピュータの発展と共に歩み、そして、その技術活用の拡大に併せて、静岡産業技術専門学校も拡大してきました。

そして、これから時代を考えたとき、すべての産業界において、これまで以上に IT に精通した人材が求められることは容易に想像できます。今後 10 年から 20 年後には、日本で働いている人の約半数の職業が、機械や人工知能によって代替することが可能になると想われ、車の自動運転化や医療領域における VR (仮想現実) による施術が可能となり、更には仮想通貨による取引が普及し、人とモノがリアルタイムで繋がることが可能となります。当然のことながらそうした技術を支えるためには、プログラム開発やセキュリティ、ネットワークなどの専門技術者の育成が求められますが、すべての産業において DX (デジタルトランスフォーメーション) 化が進む中で、働く人材

に求められるのは、しっかりと IT 知識や技術を備えた人材となります。それは正に、SANGI の役割が今後も益々拡大することを意味します。

では、そのような時代を迎えるとき、その教育の在り方として、従来通りの技術者の育成だけをもって、地域社会に貢献できるのか、と問われると、新たな取組みが必要になると感じます。その取組みは「繋がり」だと予測します。仮想現実の中で容易に繋がる時代だからこそ、現実を伴った繋がりが重要なファクターとなります。会社内の繋がりだけでなく、同業他社との繋がり、更に異業種との繋がりや地域との繋がりなど、様々な人と文化の繋がりが重要となってきます。そうした意味でも、今後益々同窓会の存在が重要になると感じています。1 万人を超える卒業生を抱え、同業だけでなく他分野の人材にも恵まれ、その繋がりを活かすことが出来れば、今後益々教育が発展すると確信しています。そして、その輪が理工大学グループとして繋がることで、より魅力的なネットワークと成り得ます。

最後に、静岡理工大学グループの益々の発展を祈念し、改めて、お祝い申し上げます。



塩谷 剛弘 さん

■ 静岡産業技術専門学校 同窓会 会長  
(コンピュータ科 1988 年卒)

# 沼津情報・ビジネス専門学校

NUMAZU PROFESSIONAL TRAINING COLLEGE OF BUSINESS AND INFORMATION TECHNOLOGY

高度ITビジネス科

コンピュータ科

ゲームクリエイト科

CGデザイン科

ビジネス科

医療事務科

公務員科

こども保育科

製菓・製パン科

国際ビジネス科

**工業、商業実務、衛生、教育・社会福祉の分野で人間性豊かで創造性に富んだ技術者と知性高く教養深い有能な職業人や教育者を育成する総合専門学校。**

沼津情報・ビジネス専門学校は今年で開学 37 年を迎え、これまでに 6,000 名近くの卒業生を輩出してきました。長い歴史の中で地域社会のニーズを常に汲み取り、カリキュラムの変更や学科の改編などを重ね、工業分野に留まらずビジネスや保育、製菓など幅広い分野の教育に進出し、現在は 10 の学科を有する静岡県東部最大の総合専門学校に成長しました。平成 28 年には、沼津駅前への校舎の移転、新築を行い、多彩且つ最適な教育設備を整えたことで学生数・教育の質共に大きな発展を遂げました。本学園の強みである情報教育においては 2016 (平成 28) 年に 4 年制の高度 IT ビジネス科を開設、ソフトバンクグループが運営するサイバー大学と提携したダブルスクール制により情報化社会の最先端を行くビジネスリーダーを育成し、完成年度となる令和元年度は高い就職実績を残すことができました。本学園の中で唯一の衛生分野の専門課程を持つ製菓・製パン科では、充実した実習設備の中で実践的な教育を行うだけではなく、国家資格である製菓衛生師の養成施設として昨年

は 8 割以上の学生を合格に導きました。2019 (平成 31) 年 4 月より外国人留学生専門学科である国際ビジネス科を開設し、日本人学生と外国人留学生の交流を推進することで、グローバルな視点を持った学生の育成を目指しています。各科における専門教育はもちろんのこと、経済産業省が提唱した社会人基礎力を持った人材の育成のために学校独自のキャリア教育にも力を入れており、挨拶、時間厳守といった当たり前の社会常識を実践できることを重要視しています。これらの教育を実践することで本校の教育理念でもある「社会に自立するために必要な人間力と高い専門技術を有する人材」の育成を実現しています。学校全体で学生ファーストの精神を共有し、教育内容だけではなく学生たちの学校生活が充実するよう学内イベントや課外活動にも力を入れています。

教育成果はもちろん、学生生活の面でも学生満足度の高い専門学校であり続けるために、沼津情報・ビジネス専門学校は今後も進化を続けていきます。



# 静岡県東部地区の高等教育機関として、 37年の歴史と約6,000名の卒業生を輩出して来た 実績を持つ専門学校。

## 1983年4月に沼津市寿町に 「沼津情報専門学校」として開校

本校は、1983年に沼津市寿町に「沼津情報専門学校」として開校し、静岡県自動車学校沼津校と合同の校舎でスタートしています。開学当初の学科はコンピュータ科のみで定員は80名でした。その後学科や定員も増え、自動車学校は、東椎路に移転し、校舎も増築しました。何度かの学科改編をしていく中で2010年4月には保育系の学科を新設したことを機に、校名を「沼津情報・ビジネス専門学校」に改称し、総合専門学校としてのイメージを前面に打ち出しました。また、2016年4月には、現在の沼津市西条町に移転するとともに校舎を新築し、4年制の「高度ITビジネス科」と2年制の「製菓・製パン科」を新設しました。開学時は「コンピュータ科」の1学科のみでスタートしましたが、「コンピュータ制御科」、「情報システム研究科」など学科の改編を繰り返し、現在は10学科を有しております。この37年間に実に23の学科を立ち上げてきました。このように、学科の改編が繰り返されてきた本校ですが、唯一「コンピュータ科」だけは開学以来30年間ずっと存続しております。ここに本校の礎があるように思います。

## 4つの分野、10の学科を持ち、 ベースは情報処理の総合専門学校

本校には現在、「高度ITビジネス科」「コンピュータ科」「ゲームクリエイト科」「CGデザイン科」「ビジネス科」「医療事務科」「公務員科」「国際ビジネス科」「こども保育科」「製菓・製パン科」の10学科があります。また、専門学校には全部で8つの分野がありますが、本校はその内の「工業」「商業実務」「教育・社会福祉」「衛生」の4分野を持っています。

IT、ゲーム、デザイン、ビジネス、医療事務、公務員、保育、製菓、留学生と分野も様々、学科も様々なため、それぞれの学科(クラス)はそれぞれの個性を持っています。

また、学生個々の将来の夢や目標もそれぞれで、そんな多様なクラスや個人の集合体であることが、本校の特徴であり強みであると思っています。

本校では、授業の一部や行事などでは、学科ごとの運営ではなく学科混合での運用を多く取り入れ、様々な分野に興味を持った学生同士が交流を持ち、卒業までにいろいろな価値観を持った学生との交流を持つことによって、人としての幅を広げて社会に出て行ってもらいたいと思っています。各分野の専門的な知識や技術を身に付けることや関連資格の取得を

目指すことは専門学校として当然のこととしておりますが、社会人としての基本的な考え方や、現代では避けて通れない、コンピュータ関連の知識や操作も身に付けてもらいたいと考えています。

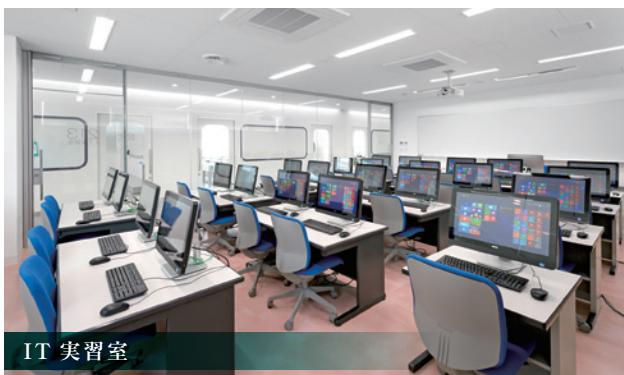
## 進化し続ける学校でありたい

静岡県は、東西に長く本校は東に位置しています。例えば沼津からの距離は、浜松より東京の方が近い状況です。そのため、首都圏とのかかわりが強く、いろいろと影響が出ています。かなりの数の人が新幹線で三島から東京に通勤しています。学生も首都圏に対して身近に感じているらしく、中部、西部の学生と比較して県外への就職に関してあまり抵抗を感じていないようです。このことは就職に関してとても有利に働き、特にIT系の分野では顕著に実績として表れているように感じます。専門学校の使命は入学してきた学生を確実に就職させることにあると思います。本校の地理的な優位性や特色を活かし、今後も末永く存続してゆきたいと思っています。前にも述べたとおり、開学以来37年間、学科の改変をしながら時代に合った専門学校であり続けようとしてきました。言い換えれば進化し続けてきました。進化を止めればそこで終わってしまいます。恐竜は絶滅したといわれていますが、鳥に進化したという考え方もできます。形を大きく変えたり、考え方を変えたりすれば、進化し続けることができます。本校も進化を続け生き残っていきたいと思います。

沼津情報・ビジネス専門学校  
校長 鈴木 経康



# 施設紹介



IT 実習室

最新鋭のパソコン30台を完備したIT実習室。大人数の実習にも対応できます。IT系の学科だけではなく、他の学科の授業でも広く利用されています。



製菓第1実習室

プロ仕様の厨房設備と衛生設備を備えた製菓・製パン科の実習室。講師の手元が見えるよう調理台ごとにモニターが完備されています。調理台は熱い調理道具も直接置けるように全面大理石でできており、より効率的な作業が可能となっています。



ピアノ実習室

保育士資格取得に必須となるピアノ実技を身に着けるための実習室。部屋は防音仕様になっているため、合奏や合唱の練習にも対応できます。一人でじっくりと練習したい学生のために個室の実習室も完備しています。



多目的ホール

200人以上収容可能な大ホール。大型のプロジェクターとスクリーンも設置されていて講演などの特別授業も実施可能。フットサルやバスケットボールなど学生の課外活動や体育の授業でも使用されます。



子育てサロン

近隣の乳児とその保護者が学生と触れ合っていただくためのスペース。こども保育科の学生に乳児と接する機会を提供するとともに、地域の子育てに貢献しています。



ビジネス実習室

企業の応接室と病院のカウンターを想定した実習室です。ビジネス系の学生が接遇・応対について学びます。



ギャラリー

定期的にクリエイティブ系学科の学生作品を展示しています。企業や業界関係者を招いての展示イベントを実施したり、天気のいい日はここで授業を行ったりします。



キャリアサポートコーナー

学校に寄せられた求人票や会社資料がおいてあり、学生が自由に閲覧できます。パソコンも設置されており、学校の就職システムを利用して求人を検索することもできます。



ラウンジ

全学生が利用できるフリースペースです。電源もあるため、パソコンを持ち込んで自主学習をする学生も多いです。製菓・製パン科の学生の販売実習スペースとしても利用されています。



トレーニング室

消防や警察など、体力試験を課している公務員を目指す学生のために最新のトレーニング機器を備えたトレーニング室。空いている時間であれば公務員科の学生以外でも利用可能。

# 沿革

- 1983(昭和 58)年 4 月 学校法人静岡県自動車学園沼津情報専門学校開設  
静岡県東部地域のコンピュータ情報処理技術者的人材需要に応えるため、コンピュータ科を設置
- 1988(昭和 63)年 3 月 通産省より「情報化人材育成連携機関委嘱校」に指定
- 1989(平成元)年 4 月 電子技術とソフト技術の両方を兼ね備えた技術者の養成を目的としてコンピュータ制御科を設置
- 1990(平成2)年 12 月 学校法人静岡県自動車学園は、学校法人静岡理工科大学に改称
- 1991(平成3)年 4 月 SE 養成を目的として 3 年制の情報システム研究科を設置  
11 月 文部省より「専修学校職業教育高度化開発研究」の委託指定校に選定
- 1993(平成5)年 4 月 国際的視野で活躍できるビジネスマン・ビジネスワーマンの育成を目的として国際ビジネス科を設置  
また社会のニーズに対応するために、コンピュータ制御科をシステムクリエイト科に改称
- 1994(平成6)年 3 月 校舎を増築
- 1995(平成7)年 4 月 時代のニーズに合った人材の育成を目指し、マルチメディア科を設置
- 1996(平成8)年 4 月 ゲームインターフェース科を新設
- 1997(平成9)年 4 月 システムクリエイト科、国際ビジネス科を廃止し、システムデザイン科、OA インストラクタ科を新設
- 1999(平成 11)年 4 月 情報システム研究科、ゲームインターフェース科を廃止
- 2002(平成 14)年 4 月 OA インストラクタ科を医療事務の単一コースにし、医療事務 OA 科と改称
- 2003(平成 15)年 4 月 システムデザイン科を廃止
- 2005(平成 17)年 4 月 工業分野に設置していた医療事務 OA 科を、商業実務分野を追加し医療事務科として設置
- 2007(平成 19)年 4 月 ゲームクリエイト科・CG クリエイト科・グラフィックデザイン科・CAD デザイン科・ビジネス科を新設
- 2008(平成 20)年 4 月 キャリアライセンス専攻科・公務員専攻科を新設し、マルチメディア科を廃止
- 2010(平成 22)年 4 月 校名を沼津情報・ビジネス専門学校に改称し、こども医療保育科を新設
- 2011(平成 23)年 4 月 1 年制の公務員専攻科を 2 年制の公務員科に改称
- 2012(平成 24)年 4 月 グラフィックデザイン科、CAD デザイン科を廃止
- 2016(平成 28)年 3 月 校舎を西条町 17 番地 1 号に移転  
4 月 4 年制の高度 IT ビジネス科、2 年制の製糞・製パン科を新設し、CG クリエイト科を CG デザイン科に、こども医療保育科をこども保育科に改称
- 2019(平成 31)年 4 月 外国人留学生専門学科 国際ビジネス科を新設



# 活動紹介



## 沼情祭 (2020.02)

年に一度開催される沼情生による文化祭。定番の飲食の屋台や音楽ライブ等のイベントに加えて、ゲーム体験コーナーやデジタル水族館等、各科の特徴を活かした催しが満載です。毎年外部から多くの方が来場します。



## 東京ゲームショウ出展 (2019.09)

静岡県の学校で唯一、世界最大級のゲームイベント「東京ゲームショウ」にゲームクリエイト科、CGデザイン科の学生が作品出展しています。業界関係者にPRするだけではなく、他校の学生と評価交換することで、より優れた作品の制作に繋がります。



## 販売実習 (2019.06)

製作の技術だけではなくお客様へのサーブのトレーニングのために、製菓・製パン科の学生が作ったパンや菓子を5階のラウンジにて定期的に販売します。毎年大人気のクリスマスケーキは予約受付後、短時間で完売します。



## 子育てサロン (定期的に開催)

地域のおさんと保護者の方を対象に、学校の一画を子育てサロンとして開放しています。こども保育科の学生の実習としての機能を果たすと同時に、地域の子育てへの貢献もしています。



## テーブルマナー研修 (2019.11)

ビジネス系の学生を対象にテーブルマナーを学ぶための研修を実施しています。ホテルの会場で和食懐石料理やフレンチのフルコースを実食することにより、学生たちが普段経験することの少ないテーブルマナーを学びます。



## 卒業研究発表会 (2020.02)

卒業制作の中でも特に優れたものを選出し、外部会場にて発表会を開催しています。卒業予定の全学生、教職員はもちろん、学生の内定先企業様も招待して、学生たちの学習成果の集大成を発表しています。



#### OB・OG セミナー (2020.02)

社会で活躍する卒業生をお招きして、在学生向けに講演をいただく機会を設けています。学生たちが目指すべき業界・職業で働く卒業生の声を聞くことで、より明確に自身の進路をイメージすることができるようになります。



#### 企業見学ツアー

業界研究のために、各科において卒業後の進路となりうる企業や病院の見学ツアーを実施しています。



#### 研修旅行 (2019.12)

学びの集大成として卒業年次生たちが国内外への研修旅行に参加します。毎年複数のコースが用意されており、学生が最も興味のある場所へ渡航し、見識を広げます。



#### オアシスルーム オアシスランチ (定期的に開催)

学生支援の一環として学生と教職員の交流の場を設け、学生が気軽に相談できる環境を整えています。学校生活の悩みから恋の悩みまで、みんなでランチを食べながら雑談形式で相談することができれば、個室でじっくり相談することもできます。



#### あいさつ運動 (毎朝)

本校では「挨拶・清掃・時間厳守」の3つを基本コンセプトに掲げ、学生達に徹底指導をしています。その一環で毎朝沼津駅から学校までの通学路に教職員を配置し、登校する学生達への挨拶運動を実施しています。



#### 校外清掃 (定期的に開催)

学生たちの周辺地域への感謝の念を育み、地域に根差した学校教育を実現するため、各クラスが持ち回りで学校周辺の清掃活動を実施しています。最近では活動が認知され、清掃中に近隣住民の方たちにお声がけいただくことも増えてきました。

# 学生代表メッセージ

## 人を幸せにする IT エンジニアを目指して。

私は高校時代からパソコンで作業するのが好きで、文書作成や表計算など基本的なツールの使い方を習得していくうちに、もっと高度な情報処理スキルを学びたいと思うようになりました。ニュースや新聞でも日々 IT の重要性が取り上げられる現代で、パソコンという小さな機械を通じて実現できることに無限の可能性を感じ、将来は IT のエンジニアになるという目標を定めました。高校卒業後の進学先を探していると、自宅から通える沼津市に 4 年制の IT 学科を持つ専門学校があると知り、まずはオープンキャンパスに参加してみようと思いました。模擬授業では私がそれまで全く知らなかった技術や知識をわかりやすく説明してくれたため、この学校なら自分の目標を達成できると思い迷わず入学を決意しました。

4 年前に移転したばかりの校舎は駅からのアクセスも良く、実習機器やネットワーク環境も整っていて、IT を学ぶうえで最適な環境であると感じています。高度 IT ビジネス科は 4 年前に新設された学科ということもあり、先生方も学生に対して情熱を持って接してくれます。少人数制のクラスで実際に IT のプロフェッショナルだった先生方がとてもわかりやすく親切に教えてくれるため、学生たちも自分の成長を日々感じながら勉強に取り組むことができます。学園祭やクラブ活動など、学生主体の行事や活動も盛んであるため、学業だけではなく楽しい学校生活を過ごすことができます。学科を超えた学生同士の交流も盛んなので、自分とは違う分野を目指す学生と接することで視野が広がり、将来の進路を考える参考になっています。私が最も魅力に感じているのは資格取得のための授業が充実していることで、特に情報処理技術者試験に関しては、試験前の期間は分野毎に徹底した対策授業を受けることができます。おかげで私も入学して一年目で基本情報技術者試験に合格することができました。現在は応用情報技術者試験の合格を目指し頑張っています。

高度 IT ビジネス科は IT に関する知識だけではなく、大学併修による経営学の授業や、卒業後の進路を見定めるための進路指導も徹底しています。授業を受ける中で思うことは「IT は目的ではなく手段である」ということです。入学前は漠然と IT に関する知識を身につけたい、将来は自分が好きな IT を仕事にしたいという思いが強かったですが、最近では「IT を使って何をすべきか」を考えるようになりました。情報処理の世界は私が想像していたよりはるかに広く、様々な技術と可能性があふれています。そんな中で自分がどの技術を使ってどのようなエンジニアになるべきか、その答えを見つけることが重要だと考えています。私はまだ 2 年生ですが、IT 業界

の採用活動のスタートはとても早く、先輩たちの多くは 3 年生のうちに内定を獲得しています。自分が IT を使って何を実現したいのか、一刻も早く目標を見定めなければなりません。まだまだ学ぶことが多く明確な進路は定まっていませんが、私が見つけ出した一つの答えは「人を幸せにする IT エンジニアになりたい」というものです。IT は今や生活のいたるところに関わっていて、今後ますます普及していくでしょう。エンジニアとして技術の習得や新しい技術の開発ばかりに目を取られると、それを使う人たちを意識しなくなってしまうのではないかと思います。私はどのような分野のエンジニアになんでも、常にユーザーの顔を意識した仕事がしたいです。将来自分の開発した技術がたくさんの人の生活を豊かにして、その人たちの幸せに繋がる、それこそが私が目指すべき理想的なエンジニアなのだと気づきました。そんなエンジニアになるという目標を達成するためにも、今学生として技術を学べる時間と環境のありがたさを忘れずに、学校生活の一日一日を大切に過ごしていこうと思います。



望月 美菜 さん

■高度 IT ビジネス科 2 年 ■静岡県立富士宮東高等学校 出身  
■経済産業省主催 基本情報技術者試験合格

# 同窓会長メッセージ

## 80年の伝統を活かし、卒業生・社会と繋がり続ける学園であり続ける。

学校法人静岡理工科大学創立80周年を謹んでお祝い申しあげます。これまでのご功績に敬意を表すと共に、今後のさらなるご発展とご隆盛を祈念いたします。

私の母校である沼津情報・ビジネス専門学校はまもなく創立40年を迎えます。現在は多種多様な学科を備える静岡県東部では最大級の専門学校に成長しましたが、私が入学した時は「沼津情報専門学校」として情報教育の学科が主流でした。今では一般教養の一つと言えるまでに普及しているITですが、当時はようやくシステムエンジニアという言葉が認知され始め、コンピュータについて学ぶことが特別な時代でした。そのせいか入学してくる学生は皆、高い目標意識をもって専門知識の習得に励んでいたように感じます。私は高校卒業を控え、既に県外の大学のマスマディア系の学部に合格していたのですが、ある日自宅に届いた沼情からのダイレクトメールを見て、明確な目的意識もなく大学で学ぶよりは、地元の専門学校で最先端のITを学ぶのもいいかなという気持ちで入学を決意しました。入学時に購入したノートパソコンは今の3倍は厚みがあり持ち運びも不便でしたが、それでも最先端の機器を手にすることができた喜びでいっぱいでした。インターネットについても今のように無線接続ではなく、実習室にパソコンを持ち込んで有線で繋ぐ時代でしたが、世界の情報にアクセスできる画期的なツールに感動を覚えたものでした。ここまで短期間に技術が進歩することは予想していませんでしたが、沼情で学んだ知識と技術があるからこそ今でも時代に取り残されることなく社会で生き抜いていけるのだと実感しています。

私は同窓会長であると同時に非常勤講師として今でも母校の学生の教育に携わっています。4年前に沼津駅前に移転した校舎は、私が在学していた頃のものとは比べ物にならないくらい洗練された外観で、設備も充実しています。学生達は恵まれた環境下で勉学に励んでいますが、同時に私の学生時代からは技術も大幅に変革を遂げているため、学生達も幅広い知識を身につける必要があります。また、ITが身近になった分、プロフェッショナルになるためにはより高度な技術を身につけていることが求められます。コンピュータに触れたことがある人材が重宝される時代から、コンピュータを流暢に扱える人材が求められる時代に、更にはコンピュータを使って新たな価値を創造することができる人材が求められる時代になっています。時代の変革に取り残されることなく、高度な人材の育成に挑戦し続ける沼津情報・ビジネス専門学校、そ

の教育の一端を担えることを大変嬉しく思っています。法人内には私以外にも、卒業生が教職員として学生の教育に貢献している例が多数あると聞いています。学生が在学中に習得した技術・知識を社会で磨き上げ、それを再び母校の学生に還元するこのサイクルこそ他の学校法人にはない学校法人静岡理工科大学の強みだと思います。今後も学園全体で多数の卒業生を輩出していく中で、卒業生との繋がりが即ち社会との繋がりとなり、学生達に社会から求められる技術を教育することに繋がる。同窓会長の一人として、今後もこの「繋がり」を強化していくことに努め、母校の発展に、ひいては学園全体の発展に貢献してまいりたいと思います。

最後に、80周年という輝かしい歴史を誇る学校法人静岡理工科大学が今後益々隆盛なる前途を開拓し、学生達が技術者として育ちゆく場であり続けることを心から祈念し、お祝いの言葉といたします。



山本 葉子 さん

■沼津情報・ビジネス専門学校 同窓会 会長

# 浜松情報専門学校

HAMAMATSU PROFESSIONAL TRAINING COLLEGE OF INFORMATION TECHNOLOGY

セキュリティネットワーク科

コンピュータ科

ゲームクリエイト科

CAD科

ビジネスライセンス科

医療事務科

こども保育科

国際ITビジネス科

ものづくりと情報教育から産声を上げた浜情は、幅広い分野への進出と  
グローバル化を経て、「職業人」の育成を通じて静岡県西部地区の未来に貢献。



浜松情報専門学校は1985年（昭和60年）に開校し35年を超える歴史を重ねてきました。情報教育を中心に工業分野、商業実務分野、教育・福祉分野と留学生学科を含めた3分野8学科を擁する静岡県西部地域最大規模の総合専門学校です。卒業生は7,000人を超え、静岡県西部地域を中心に多くの企業・医療機関・保育幼児教育施設などで活躍しています。開校以来一貫して「技術者の育成をもって地域社会に貢献する」という教育理念のもと、知識、技術、資格の取得に加え、社会人基礎力を併せ持つ人材育成を行っています。

## 〔セキュリティネットワーク科〕

拡大するIoT時代の到来を見据え、ネットワークとセキュリティ教育に特化し、インターネット社会を取り巻く脅威に備え、対応できるセキュリティエンジニアを育成。

## 〔コンピュータ科〕

コンピュータの基礎からプログラミング、ネットワークなど高度な技術まで幅広く学習し、IT業界や情報システム分野で活躍できるSE・PGを育成。

## 〔ゲームクリエイト科〕

ゲームプログラミング能力を徹底的に磨き、ゲーム企画や発想力、CG基礎まで、ゲーム制作に関わる一連の制作過程を学習し、ゲームプログラマを育成。

## 〔CAD科〕

「CATIA」を活用し2次元から3次元まで、より速く正確な設計を可能にするCAD技術を習得。基礎から高度な設計を行うことができるCAD技術者を育成。

## 〔ビジネスライセンス科〕

業界や企業で高く評価される資格を多く取得し、パソコンスキルを持ち合わせた、事務職、金融、販売職、営業職などさまざまなフィールドで活躍できる人材を育成。

## 〔医療事務科〕

医療現場で役立つ受付や会計窓口業務をはじめ、診療報酬請求業務、院内事務作業にも従事できる医療事務員、調剤薬局事務員を育成。

## 〔こども保育科〕

幼稚園教諭免許、保育士資格、短期大学卒業資格（近大・九州・短大）を確実に取得。幼児教育に深い関わりのある絵本では「認定絵本士」の資格を取得し、幼児教育現場で活躍できる人材を育成。

## 〔国際ITビジネス科〕

留学生を対象とし、職業に活かせる日本語教育を基礎に、浜松のものづくり業界や観光ビジネス業界で活躍できる人材を育成。

# 新しいものに挑戦してゆく進取の 気質溢れるこの街で、地域と共生し、 市民の誇りとなる総合専門学校を目指して。

## 浜情の歴史は、地域産業の変化の歴史

### 今まで、これからも

本校は、昭和60年4月浜松市曳馬町に県西部地域の情報教育の拠点として、本年で38年目を迎えました。地域産業を支え、時代と社会構造の変化に呼応しながら教育分野の裾野を広げ、卒業生は7000人を超え、県西部地域を中心に、社会の各分野で活躍しています。

平成17年4月に現在の浜松市中心地（中区中央3丁目）に移転し、常に社会ニーズを先取りした実践的なカリキュラムを取り入れながら、現在、「セキュリティネットワーク科」「コンピュータ科」「ゲームクリエイト科」「CAD科」「ビジネスライセンス科」「医療事務科」「こども保育科」「国際ITビジネス科」の8学科を有する総合専門学校に発展を遂げてまいりました。

今、このキャンパスに立ち、校舎内に響き渡る学生たちの賑やかな声を聞くにつれ、歴代校長のリーダーシップのもと、数多くの教職員がそれぞれの立場で、本校の発展にご尽力、ご貢献下さいましたことに、あらためて敬意と、深い感謝を申し上げます。

## 人としての「逞しさ」を育成し、地域社会に貢献する人財を輩出する教育を目指して

さて、地域の皆様が本校に対して抱くイメージは、創立時の印象から「コンピュータを教える学校」とよく言われます。

確かにコンピュータそのものを学ぶ学科もありますが、正しくは、コンピュータを道具として、毎日、新聞やテレビを観るAI、ロボット、インターネット、ゲーム、CADなど、およそ情報通信技術（ICT）に関わるあらゆるものを教育対象とし、更には、医療事務や幼児教育者・保育者の育成など、人間と相対するホスピタリティが教育の柱である学科や、国や文化の違いを受容しながら、共に社会で共生していく教育を展開する学科など、それら全てが集まり、学生・教員が日夜切磋琢磨している総合専門学校であるというのが、発展を遂げた現在の浜情の姿と言えます。

教育とは、単なる知識や技術の蓄積ではありません。それは、問題や課題を自分で発見・分析し、何をすべきか、それをどのように実現するかを自分で具体的に考える力であり、現代のように先行きがまったく見えない時代にこそ必要とされる能力です。

その上で、私たちが大切にしなければならないのは「利他の心」の育成であり、常に自身の周りに目を向け、他者の状況を

客観的に把握する冷静な知性と、他者の心を慮る豊かな感性・想像力、自分とは異なるものを受け入れる柔軟性と広い視野、そして自分がなすべきことをなしていく決断力・実行力です。

そのような、時代が求める人材像に向け、これまで以上に「技術教育」「実践教育」へ真摯に取り組むのは勿論のこと、人としての「逞しさ」を育成し、地域社会に貢献しうる人材を輩出する教育に、これまで以上に力を入れて参ります。

## 「利他の心」を育む、新時代の技術者教育を目指し、サポーターの皆様と共に前進

本校は、これまでの歩みの中で先人たちが築き上げてきた本校の歴史と伝統を守りながら、2021年4月には、同じ校舎で運営する「専門学校 浜松デザインカレッジ」と発展的統合をし、新たに「浜松未来総合専門学校」として、校名通り「未来」に向けた新たな歩みを開始します。

これまでの歩みの中で得た本校の財産は、活躍する卒業生は勿論のこと、学生の成長を願い常に寄り添いながら指導にあたってきた歴代の教職員の皆様、今この時も歩みを続ける現役の教職員であり、そしてなによりも特筆すべきは、「やらまいか」の精神に満ち溢れ、地域の青年を育てる志を持ち、人間的な成長を支える、地域、行政、産業界など、数多くのサポーターの存在です。

本校は、そうした数多くのサポーターの皆様とこれまで以上に強く手を携え、「利他の心」を持った学生を広く世界に送り出すために歩みを続けて参ります。

浜松情報専門学校

校長 松本 文晴



# 施設紹介



パソコン実習室・CAD モデリング実習室

情報系学科の学生が主に使用するパソコン実習室です。ハイスペックなパソコンに加え3Dプリンターも配備され、各種実習に活かされています。



医療事務・ビジネス実習室

医療、ビジネス系学科の学生が主に使用するパソコン実習室です。室内には本格的な病院内受付カウンターもあり、受付業務のロールプレイング授業も実践的に行われます。



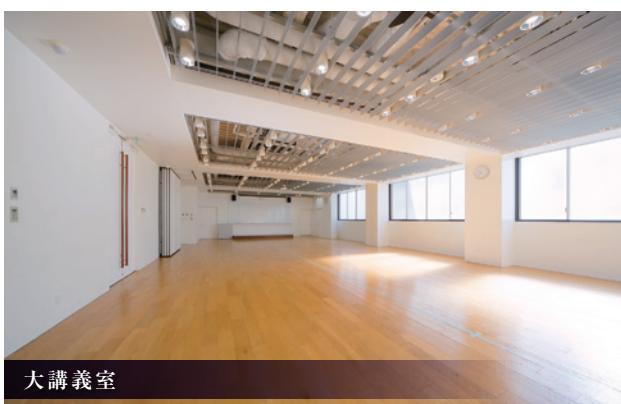
保育フロア

ピアノ実習室を含む、こども保育科の施設が集約されています。造りや装飾も他とは全く異なり、思わず大人も童心に戻ってしまいます。



ピアノ実習室

休み時間や放課後も解放されているピアノ実習室では、学生一人につき必ず一台を割り当て、いつでも誰でも練習する機会を持てるよう配慮しています。



大講義室

大講義室は、各学科の実技学習や集会、各種セミナーなど目的・用途によってその姿を変えます。

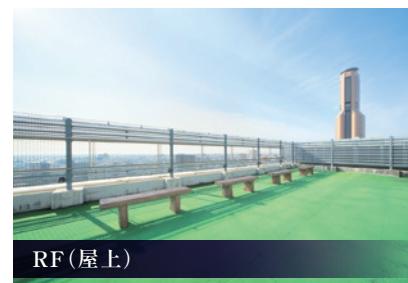


カフェラウンジ

常時開放されているカフェラウンジにはいつも学生たちの活気があふれています。特にランチタイムには多くの学生が交わり、会話する姿が見受けられます。



ロールプレイングルーム



RF(屋上)

開放的な屋上からは浜松市内の街並みが見渡せます。天気がよければ富士山をみることもできる浜情・浜デの絶景スポットです。



インスタ映えスポット

1F昇降口、8Fエレベーター扉、8F廊下の3か所に設置されたインスタ映えスポット。オープンキャンパスでは、高校生から注目を浴びています。

# 沿革

|                  |  |                  |   |
|------------------|--|------------------|---|
| 1985(昭和 60)年 4 月 | ● 浜松市曳馬に浜松情報専門学校を開校<br>メカトロニクス科、エレクトロニクス科、コンピュータ科、オフィスオートメーション科の 2 年制 4 学科設置   | 2003(平成 15)年 4 月 | ● コンピュータ科に電子制御コースを設置  |
| 1987(昭和 62)年 4 月 | ● 働きながら学べる 3 年制の新設学科として<br>OA ビジネス科を設置   | 2005(平成 17)年 4 月 | ● 校舎を浜松市曳馬から浜松市中区へ移転<br>● CG・ゲーム科をデジタルデザイン科に改称し、<br>ゲームプログラミングコースをコンピュータ科に移設  |
| 1988(昭和 63)年 3 月 | ● 通産省「情報化人材育成連携機関委嘱校」の指定を受ける   | 2006(平成 18)年 4 月 | ● CAD 科を機械 CAD コースと工芸 CAD コースに分割<br>● OA ビジネス科をビジネス科と改称し、公務員コースを新設  |
| 1992(平成 4)年 4 月  | ● 3 年制の学科として情報システム研究科を設置<br>● メカトロニクス科をコンピュータデザイン科に、<br>エレクトロニクス科をコンピュータエレクトロニクス科に<br>名称変更   | 2007(平成 19)年 4 月 | ● 公務員専攻科(1 年制)を設置   |
| 1994(平成 6)年 3 月  | ● 校舎(新館)の増築が完成   | 2008(平成 20)年 4 月 | ● キャリアライセンス専攻科(1 年制)を設置、<br>コンピュータ科に e スクールコースを設置   |
| 1995(平成 7)年 1 月  | ● 「専門士」としての称号付与を卒業生にすることができる<br>課程として認可  | 2010(平成 22)年 4 月 | ● こども医療保育科(3 年制)を設置   |
| 4 月              | ● マルチメディア科を設置<br>● コンピュータエレクトロニクス科をコンピュータデザイン科<br>に統合し、制御／メディアコース、CG／CAD コースを設置<br>● オフィスオートメーション科をビジネスクリエイト科に<br>改称                       | 2011(平成 23)年 4 月 | ● 情報ネットワーク科を廃科し、コンピュータ科に統合。<br>また既存学科における教育課程の一部改正をおこなう<br>● ゲームクリエイト科(3 年制)、アニメーション科(3 年制)、<br>ものづくり工学科(2 年制)、医療事務科(2 年制)を設置 |
| 1996(平成 8)年 4 月  | ● コンピュータ科に短大併習シニアドコースを設置   | 2014(平成 26)年 4 月 | ● ビジネス科の教育課程を一部改正し、<br>ビジネスライセンス科と改称  |
| 1997(平成 9)年 4 月  | ● マルチメディア科にソフト制作コース、<br>インターネットコースを設置<br>● ビジネスクリエイト科に医療事務コース、<br>短大併習秘書コースを設置<br>● コンピュータデザイン科を CG／CAD 科と<br>デジタル通信科に分割<br>● ゲームクリエイト科を設置 | 2015(平成 27)年 4 月 | ● こども医療保育科の教育課程を一部改正し、<br>こども保育科と改称   |
| 1998(平成 10)年 4 月 | ● 3 学科に統合するために情報システム科、<br>情報クリエイト科、情報マネジメント科を設置<br>● OA ビジネス科を情報ビジネス科に改称して、<br>情報システム研究科を含め 5 学科の学科構成とする                                   | 2016(平成 28)年 4 月 | ● 医療事務科の教育課程を一部改正し、<br>職業実践専門課程認定<br>● 國際 IT ビジネス科(3 年制)を設置、コンピュータ科<br>職業実践専門課程認定   |
| 1999(平成 11)年 4 月 | ● 高等学校との情報教育連携を開始  | 2017(平成 29)年 4 月 | ● セキュリティネットワーク科を新設<br>● こども保育科、ビジネスライセンス科<br>職業実践専門課程認定   |
| 2001(平成 13)年 4 月 | ● 高等学校との情報教育一貫性を目的とする<br>ジョイントスクール制開始<br>● 情報ネットワーク科、コンピュータ科、CAD 科、<br>CG・ゲーム科、OA ビジネス科を統合設置し、<br>5 学科 8 コースの技術教育分野を設置                     | 2018(平成 30)年 4 月 | ● ゲームクリエイト科 職業実践専門課程認定  |
|                  |  | 2019(令和元)年 9 月   | ● 高等教育の修学支援新制度の対象校として認定   |

# 活動紹介



## 浜情&浜デ合同春の遠足(2019.05)

浜情と浜デの全学科でナガシマスパーランドへ行きました。ジェットコースターや観覧車などのアトラクションに乗ったり、併設しているアウトレットモールで買い物を楽しんだりしました。学校や学科の垣根を越えて仲を深めることができました。



## 資格取得も頑張っています(2019年度末・2020年度末)

浜松情報専門学校ゲームクリエイト科では、ゲーム制作やIT技術の習得はもちろん、ゲーム制作に必要な周辺技術の習得のため、各種検定にも挑戦しています。近年は、全国においても、優秀な成績を収めています。



## 時代のニーズに合った人材を育成する ビジネスライセンス科(2019.06)

ビジネスライセンス科は、企業連携授業を年間7社以上実施しております。「秘書」や「コミュニケーション技法」等で学んだことを活かす実践力にも繋がっており、学生が目指す企業からも多数内定を頂いております。



## 浜松情報専門学校開設と共に歩み続ける コンピュータ科(1985.04~)

30年以上の実績と未来を見据えた情報教育。その教育内容もIT技術者を求める声に応えながら、また技術進歩に伴い様々な変化を遂げながら取り組んでいます。開設以来多くの卒業生を輩出し地域を支えています。



## CAD科のトヨタ自動車工場見学(2018.09)

自動車がどのように製作されているのか見学し歴史を学びます。モノづくりの現場を工程ごとに知ることで設計者として必要な要件や考え方を身に付けます。知識としてしか知らなかつた技術を実際に見ることで理解力を深めます。



## 病院実習で実践的に学べる医療事務科(2020.02)

総合病院を中心に行われる1年次の病院実習は、学習意欲に大きな影響を与えます。様々な診療科を体験し、総合受付では電話対応や保険証、紹介状の確認などを行い、就職活動に向け大きな自信につながっています。



#### 実践力を育成する現場実習(毎年6・7・9・10・1月)

子ども保育科では、幼稚園教諭、保育士の免許・資格取得に必要な保育現場での実習を行っています。子どもとの接し方、年齢毎の発達や遊びの様子、保育者の姿など、生きた保育を学ぶ貴重な場となり、現場実習を通して実践力を育成しています。



#### 浜松・浜名湖のツアープランニング(2019.11)

公益財団法人浜松・浜名湖ツーリズムビューロー様より課題を頂き、観光ビジネスコース3年生が「母国の大切な人に浜松・浜名湖を案内するなら…」という想定で一泊二日の旅行を考えました。発表後は「留学生ならではの視点で発見があった」という感想を頂きました。



#### 研修旅行(2019.12)

観光ビジネスコース3年生が、今まで学んだことを活かし、京都の1泊2日の旅行をプランニングしました。IT／CADコース3年生をアテンドするという実習を兼ね、京都に研修旅行へ行きました。IT／CADコースの学生も大いに楽しみました。



#### 浜松日本語学院との連携授業(2020.02)

グループ校内も連携を意識して授業をしています。この回では、オリンピックについて、1年生が調べ、浜松日本語学院の学生に向けて発表しました。日本語学院の学生からは、「今まで興味がなかったが、オリンピックが楽しみになった」などの感想を頂きました。



#### オペレーションセンター見学(2019.01)

セキュリティサービスを提供している東京の企業様を訪問し、実際の業務を見学しました。学生たちは、モニタールームの業務やサーバールーム等、学校ではなかなか見られない設備に驚いていました。



#### 実戦ネットワーク講座(2019.06)

地元ネットワーク企業様の協力を得て、浜松市の学校の校舎から静岡市の企業様のサーバーにセキュリティのあるネットワークで接続し、内線電話の設定を行いました。自分の携帯電話から多機能電話に掛けられたときは感動です。



#### 全国専門学校ロボット競技会で入賞多数(1992~2015毎年12月)

コンピュータ科、同電子制御コース、ものづくり工学の学生が、全国専門学校ロボット競技会第1回から第24回までに優勝9回、準優勝5回、その他各賞多数の輝かしい優秀な実績を残しました。

# 学生代表メッセージ

## CAD科で学んだ知識と これからの目標

私が2年間学んだCAD科はCADに触れたことのない学生がほとんどで、CADの基礎から応用まで細かく学ぶことができ、私はCAD科でモデリング方法の多くを学びました。私は高校時代からCADを学ぶ機会があり、CADでモデリングを行っていました。専門学校に通い始めて、自分の知らないCADソフトやCADの操作方法を知ることができ、もっと知りたい、もっと学びたいと思うようになりました。CAD科はCADを使って、3次元モデルや2次元図面を作成するだけでなくデザインについてやネジや歯車などの機械系の部品について詳しく学ぶことができるのでCADソフトの操作以外のことも学ぶことができます。3Dプリンタという自分でモデリングした作品を樹脂で出力することのできる機械もあり、実際のものづくりの体験や流れを体験し学ぶこともできます。

そんな学校生活の中で行ってきた課題で1番苦労したことが複数人で1つの作品を作るグループワーク課題なのですが、私はグループリーダーで班員をまとめる立場になり、メンバーそれぞれができる作業を把握し役割分担をしました。その中で自分の任された仕事に責任を持ち、メンバーを気に掛けて作業に取り組んでいたのですが、メンバーの知らない作業の内容を教えるまでの時間がなかったのでメンバーを頼ることをできずに作業を進めてしまったので、作業の終盤、効率が悪くなってしまいました。その中で私はメンバーを頼ることの重要さを知ることができ、メンバーで完成を目指すことができました。グループで作業することでメンバー同士ができない場所のカバーをして、1つの作品を作ることの大変さと達成感を学ぶことができました。就職先では主にグループで1つのものをモデリングすることになるので、グループリーダーでなくてもリーダーの大変さを感じることができるので、今回の経験を生かし作業をできるようにしたいです。

そして今はCAD利用技術者試験に合格する為に3次元モデルと2次元モデルのモデリングを早く正確に作成することを練習して、金属や歯車などの機械系の部品などについての勉強をしています。私が特に苦労していることはモデリングで、通常のモデリングの履歴は後から見返した時にわかりやすく作っているのですがそれを試験用に早くこなすための作り方に変えなくてはいけないということです。何度も繰り返し過去の問題を解き、タイムを計ってできるだけ早く正確にモデリングができるように試験に向けて頑張っています。試験で学んだ知識やモデリング技術は就職後でも役に立つ物ばかりなので丁寧な作り方も早い作り方も自分の技術として使いこなせるように今努力しています。

私はCADに携わる仕事に就きたいと高校時代から夢を追い続けてきました。そしてCAD科で学んだ知識を生かすことができる職業に就職が決まつたので、在学中に基礎をさらに学び基礎を学んでから応用のモデリング方法や履歴の綺麗な作り方を学びたいと思います。また就職先が決まり、同時に高校時代からの夢が叶つたので、学んだ知識と技術を生かして就職先で自分の作った車が世界で安全に使用されたいというデザイナーの思いが、車に乗ってくださるお客様に伝わるようなモデリングをするという目標ができました。在学中だけでなく、卒業後もCADの技術向上に向けて努力をしていき、車に対しての新しい知識を得て、安全に運転することができる、かっこいい車のモデリングを行いたいと思っています。



大庭 未唯奈 さん

■CAD科 2年  
■静岡県立浜松城北工業高校 出身

# 同窓会長メッセージ

## ミライへのバトンタッチ

法人の4番目の学校として浜松情報専門学校が開校されて35年。今では、専門学校は全6校の姉妹校となり、県内最大の規模の専門学校グループとなっています。その母体となった静岡県自動車学校の開設から今年で80年を迎えたことをお慶び申し上げます。

学園のことはよくわかりませんので、浜松情報専門学校に在籍していた当時の印象を元にお話しさせていただきます。

私が浜松情報専門学校に入学したのは2010年前半でした。進学先を選定するうえで、「ハマジョウ」は地元では有名な専門学校で、先輩たちも毎年進学していましたので、一番に候補にあがりました。そして、開校の地である曳馬の校舎から、現在の中央3丁目（当時は旧松江町）に移転した新校舎は魅力的でした。入学後にクラスメイトから、浜松駅に近いことが袋井・掛川から通学する自分たちにとって非常に便利な場所であることを耳にしました。すでに母体は、学校法人静岡理工科大学に移管されており、当時私も、大学が擁する専門学校であることを認識しており、経営的にも教育的にも安心できる要素のひとつでもありました。在籍当時、選択授業で普通自動車免許を取得する授業があり、その際に静岡県自動車学校との繋がりを知り、学園のスケールメリットを感じた記憶があります。

今回の寄稿にあたり、浜松情報専門学校を第28期卒業生と

して社会に出た私が、改めて第三者としての目線で学園をみてみると、姉妹校で同じような勉強をしている学生との交流機会が持てたら良かったなと感じています。

これから浜松情報専門学校は、専門学校浜松デザインカレッジと融合して、浜松未来総合専門学校に変革します。新しい学校となりより魅力的かつ、様々な分野ごとに未来を担う学生が成長していくのだろうと期待しています。浜情同窓会が解散されることとなり、慣れ親しんだ「ハマジョウ」という母校の愛称名が使われなくなるのは寂しいですが、誕生する新しい学校が引き続き県西部で継続発展していくことを期待します。そして、浜情同窓会の会員と今まで培った同窓会のノウハウを新しい学校の同窓会に引き継いでいくことが、私に与えられた同窓会会長としての役目だと改めて感じています。

これからもより一層、学園のスケールメリットが感じられるような学校法人グループであってほしいと願うとともに今後の発展を期待しています。



鯨 佑輔 さん

■浜松情報専門学校 同窓会 会長

# 静岡デザイン専門学校

SHIZUOKA DESIGN COLLEGE

グラフィックデザイン科

プロダクトデザイン科

インテリアデザイン科

フラワーデザイン科

ファッションデザイン科

ファッションビジネス科

プライダル・ビューティー科

服飾造形教育の歴史とフロンティア精神を受け継ぎ、デザイン分野へと飛躍。

「デザインの力で地域の未来を支える」そんな人づくりが続いている。

静岡デザイン専門学校の歴史は、1927(昭和2)年、アメリカから洋裁技術とミシンを携え帰国した杉山夫妻創設の洋裁学校から始まります。現在の地、静岡市葵区鷹匠での静岡大空襲による校舎全焼から再建・復興。家庭洋裁から既製服の時代へと時を経ながら、専門技術教育を積み重ね、1984(昭和59)年から本法人に仲間入り。杉山三枝子校長が継続して校長に着任し、本校の歴史のバトンが繋がれました。

その後、時代の要請を受け、1995(平成7)年、県内初のグラフィックデザイン科を設立。デザイン学校へのシフトチェンジの準備が整い、1997(平成9)年には学校名を「静岡文化専門学校」から「静岡デザイン専門学校」に変更、新校舎が完成。家具やホビーなど地場産業を支える人材育成を目指すプロダクトデザイン系や、県内唯一のフラワー系学科など、現在の元となる学科がスタートし、学生数も5倍以上に拡大してきました。

その長い歴史の中でいつも根底に流れ続けてきたもの、それは「専門技術教育」と「フロンティア精神」。時代のニーズに合った質の高い専門性にこだわり、現在では、専任教員と共に

教育を支える県内外クリエイター講師陣は150名を越えます。地域や企業、行政とのつながりを大切にしながら、学生が街に出て活躍する産官学連携は毎年40件以上を数え、学生主体の様々なイベントも一年中動いています。チャンスを楽しみ失敗を恐れずとにかく動いてみる「フロンティア精神」「挑戦の文化」が校風として根付き、学生・教職員に脈々と引き継がれているのです。そしてその成果として今では、日本トップクラスブランドのヘアメイクコンテスト2年連続全国1位や、グラフィックデザインの全国採用など、全国規模のコンテスト入賞実績が続いている。また、2010(平成22)年度からは「社会人基礎力」を教育の柱に加え、行動力のある自立した社会人の育成を続けています。

次代の御幸町キャンパス構想において重要な使命を担う本校は、今後も「フロンティア精神」を忘れず、この「専門技術教育」を多様な方々の学び場として広く地域社会に開きながら、学生や保護者・企業や地域・卒業生やクリエイターと本法人を繋ぎ動かすハブになって参ります。



# 人に触れ、未来を思い、デザインの力で街を元気に。重ねてきた時間を忘れず、新たな一歩を踏み出します。

## 苦難を乗り越えることによって気づいた地域との絆づくりの大切さ

学校法人杉山学園静岡文化専門学校と本法人（当時の学校法人静岡県自動車学園）が合併したのは昭和 59 年。杉山省吾理事長と、本法人寺田寅元副理事長が、静岡県専修学校各種学校教育振興会で前会長、会長という関係からご縁が生まれたと伺っています。

当時は情報処理教育が花盛りの時代。グループ校においても静岡産業技術専門学校が躍進し、沼津情報専門学校、浜松情報専門学校が次々と誕生する中で、総学生数約 100 名、アットホームな雰囲気ながら老朽化した校舎での静岡文化専門学校学生募集は大変苦しい時代が続きました。

時代は平成へ。学校法人静岡理工科大学へ移行した頃から様々な方向性を模索しました。300 社にも及ぶ企業訪問やリサーチを行い、デザイン系へのシフトを計画。平成 7 年に県内初のグラフィックデザイン科を新設しました。定員を越える応募で弾みがつき、新校舎・新校名・新学科構想が一気に進み始めます。

しかしその矢先、大きな出来事が起きました。「近隣住民による新校舎建設反対運動」です。鷹匠は家康お膝元の城下町、閑静な住宅地。当時は高層の建物も少なく、静岡鉄道沿線には建設反対の看板が何枚も掲げられました。開かれた住民説明会は 20 回ほど。粘り強い交渉が続きました。その苦難を乗り越えて信頼を重ね、今の近隣の方々との良好な関係があることを忘れてはならないと思います。

## 地域社会の出来事を教材にして、街や人と関わりながら共に成長する教育

平成 9 年。予定より 3 ヶ月遅れたものの新校舎も無事完成し、静岡デザイン専門学校に校名を改めます。建設反対運動を経験したことで「地域に貢献する」「地域に愛される学校になる」という進むべき道が決まり、ここから地域や企業と連携する活動が本格的に始まったのです。

あれから 24 年。地域の方々からは「シズデ」の愛称で呼んでいただけるようになり、学生数も 550 名を超えるました。産官学連携事業は毎年 40 件以上。その多くは継続事業となり、日々学生達が街で動いています。「大道芸ワールドカップ in 静岡」では、ポスター・デザインを担当して 19 年、キッズメイクなどのボランティアは 23 年。ある時期から、素敵な出来事が起こるようになりました。大道芸でメイクをしてもらった子供が成長し、今度は学生としてメイクをしてあげる側に。ポスター制作に取り組んだ学生達が社会人となり、自分の子供を連れてまた大道芸に帰ってくる…。継続が循環を生み、街の元気を創り出すようになったのです。そんな事例が本校には溢れています。

制服から菓子、ロボットに至るまで、学生達が商品開発に関わっ

たものが今も流通し、開業 14 年のサテライトギャラリー「デザインファーム」では、通年にわたりアートと元気を発信。街中をキャンバスにして、デザイン力と社会人基礎力（前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く力）を育んでいます。この実現を支え続けるために、専任教職員と 150 名の講師陣、支援企業も強くつながり、教育の質と学生の成長に向き合いながら日々工夫を重ねています。

## これまでの活動を進化させることを目指して 御幸町キャンバスへ

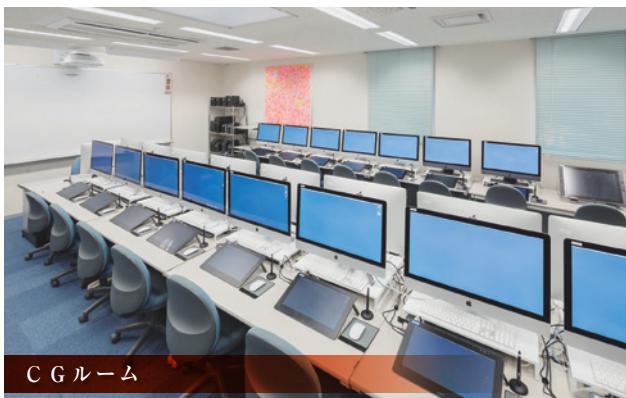
15 年にわたって静岡駅前エリア御幸町・伝馬町・鷹匠（みてた地区）の街づくりに関わり、街の方々と様々な交流を続け、賑わい創出と学生の学びが両輪となる活動を続けてきた本校は、2024 年御幸町キャンバスへ。これからも「デザイン × ビジネス教育で社会を元気にする」ことをビジョンに掲げ、これまでの活動を進化させると共に、地域協働センターや教育推進室と連携し、地域、企業、行政、デザイン業従事者、そして法人内各校の学生生徒、教職員、卒業生、保護者、入学希望者を繋ぐハブとなり、活気ある街づくりとグループ力の向上に貢献していきます。

また、新設学科設置によるデザイン教育の幅の拡充、ハイブリッド型と単位制導入による自由で多様な学びの提供など、デジタル化と国際化をベースに、フィールドを日本へ世界へと広げた新しい学びのカタチに挑戦していきます。リカレント教育においても、本校らしく、良質な学びと集う場の提供を行い、デザイン業界をはじめとする産業支援、地域の方々への学校開放を実現し、ヒト・モノ・コトが行きかう街の活性化に繋げていきます。

静岡デザイン専門学校 校長 久保田 香里



# 施設紹介



最新のMacと液晶タブレットを揃えたデジタル制作環境。高度なグラフィック処理や映像・アニメーション編集にも対応しています。



200インチの大型プロジェクターが設置されたホール。作品や企画のプレゼンの他、イベントや卒業制作を行うショーや練習などにも活用されます。



基礎から本格的なデッサンまで、基礎技術を身につけるための部屋。デジタル技術を積極的に取り入れながらも、手で描くことを大切にしています。



一人1台のミシンを備える服飾造形の実習環境。オリジナルの一着を作り上げるためのツールや資材が揃う環境で、洋服や舞台衣装を作り上げていきます。



ガラスに囲まれた交流と展示のスペース。学生たちの作品発表の場にもなっています。



フラワーアレンジメントの実習室。大型のフラワーキーパーには、市場から届く花が保管されます。



3Dスキャナ、3Dプリンター、レーザー加工機が並び、イメージ通りの作品制作をサポートします。



ブライダル・ビューティー科の実習環境には、ウェディングドレスが並んでいます。



静岡鉄道沿線にあるキャンバスの壁面もデザインされており、地域の皆様を楽しませています。



静岡市の青葉シンボルロードにあるサテライトギャラリー。実習店舗や作品展が常に実施されています。

# 沿革

- 1927(昭和 2)年 2 月 • 「F.S 洋裁学院」を開校
- 1933(昭和 8)年 3 月 • 「静岡杉山洋裁縫女学校」と改称(各種学校認可)
- 1944(昭和 19)年 • 戦争の勤労学徒動員により休校
- 1945(昭和 20)年 6 月 • 静岡大空襲により校舎を焼失
- 1952(昭和 27)年 3 月 • 学校法人杉山学園の設置が認可される
- 1963(昭和 38)年 4 月 • 校名を「静岡文化服装学院」に変更
- 1976(昭和 51)年 4 月 • 学校教育法の改正により、専修学校の認可を受ける  
校名を「静岡文化服装専門学校」に変更
- 1981(昭和 56)年 4 月 • 短期服装科を開設。ビジネス秘書科を開設
- 1982(昭和 57)年 4 月 • 専門課程商業実務分野が認可される  
校名を「静岡文化専門学校」に変更
- 1984(昭和 59)年 9 月 • 学校法人杉山学園と学校法人静岡県自動車学園の合併が認可される
- 1986(昭和 61)年 3 月 • 服装科をアパレルファッション科に、  
服装専攻科をファッション専攻科に名称変更
- 1990(平成 2)年 12 月 • 法人名称を学校法人静岡理工科大学に改称
- 1993(平成 5)年 4 月 • アパレルファッション科をファッションクリエイト科に、  
ビジネス秘書科をビジネスプランニング科に名称変更
- 1995(平成 7)年 4 月 • グラフィックデザイン科を開設
- 1997(平成 9)年 4 月 • 校名を「静岡デザイン専門学校」に変更  
• プロダクトデザイン科、フラワービジネス科、  
ファッションデザイン科、ファッションビジネス科を開設  
• 新校舎が完成
- 1998(平成 10)年 4 月 • 学校教育法の改正により、大学編入学が可能になる
- 2010(平成 22)年 4 月 • ファッションビジネス科のコースから独立し、ブライダルビューティー科を開設
- 2011(平成 23)年 4 月 • プロダクトデザイン科のコースから独立し、空間クリエイト科を開設
- 2013(平成 25)年 4 月 • 空間クリエイト科をインテリアデザイン科に、  
フラワービジネス科をフラワーデザイン科に名称変更
- 2017(平成 29)年 2 月 • 全 7 学科の文部科学省「職業実践専門課程」認定が完了
- 4 月 • 創立 90 周年を迎える



# 活動紹介



## 大道芸ワールドカップ in 静岡 パートナーシップ協定(2019.11)

2002年の提携から19年にわたり、イベントの開催を支えながらデザインの力を学んでいます。ボスター・フライヤーのデザイン、衣装製作、イベント運営など、様々な形で大規模イベントに関わります。



## 伝馬町通り商店街活性化プロジェクト(2019.08)

2006年より始まった「伝馬町通り商店街活性化プロジェクト」。デザインの力で地域を元気にしていくために「てんま夏祭り」を開催。夏祭りでは学生が地域の小学生と行う浴衣ショーや手作りの作品販売、ライブペイントなどを実施。



## 卒業制作展デザイン ア・ラ・モード(2020.01~02)

3日間にわたって行われる7学科合同の大規模な卒業制作展。2020年は「持続可能な開発目標SDGs」という新たな共通テーマも掲げられました。3,000人を越える来場者を迎え、個人の作品展示、ショーやディスプレイを披露しました。



## 技能五輪全国大会(2019.11)

洋裁部門、フラワー装飾部門の静岡県代表として毎年技能五輪への出場を果たしています。愛知県で開催された2020年の大会には4人の学生が出場し、洋裁部門全国3位、フラワー装飾部門全国3位という快挙を成し遂げました。



### リバウェル井川ポスター制作(2019.11)

実際にリバウェル井川スキー場へと足を運び、スキーを体験したうえでポスター やリフト利用券のデザインに取り組み19年目になります。プレゼンまでのプロセスも経験し、コンペ形式によって実際に採用されるデザインが決定します。



### シズデ × 大場建設「ヒロ・メディカル整体院」内装・看板デザイン(2019.05)

インテリアデザイン科が実施している企業とのコラボレーション授業のひとつ。実際に施工される現場を題材に企画・デザインを考えプレゼンを行う貴重な経験をしています。



### みらいとイベント 「障がい者ファッションショー」ヘアメイク(2019.09)

静岡県障がい者文化芸術活動支援センター「みらいと」。この施設のイベントとして開催される「障がい者ファッションショー」をヘアメイク、スタイリング、写真・映像の担当で学生がお手伝いしています。



### NHK 静岡放送局「ひるしづ」内コーナー 「しづおか花便り」フラワー装飾(毎週月曜日)

静岡県内の生産者から市場経由で届いた花をラッピングやアレンジして、NHKのスタジオに届けて17年目を迎えます。番組内の「しづおか花便りコーナー」で紹介していただき、1週間使用されます。



### 新静岡セノバ・ショーウィンドウディスプレイ (2019.04)

ファッションの中心地からほど近い、シズデならではの実習。学びの場を校外に移し、ディスプレイの企画から施工までを自分たちの手で行います。施設や商品のコンセプトを理解し、ディスプレイを考え、施工前には企業の方にプレゼンを行います。



### 衣装デザイン制作(2019.03)

静岡市のイベント「七間町ハプニング」ではダンサーの衣装を制作。他にもアイドル衣装、企業の制服、作業服などオリジナリティあふれる作品を制作しています。FDAの初代制服もシズデ生のデザインです。

# 学生代表メッセージ

人を笑顔にしたり、産業を後押しできる  
モノ・コトづくりができるデザイナーになりたい。  
そしていつかプロのデザイナーとして  
シズデに関わることが夢です。

私は幼い頃から、綺麗なものを見つけて集めたり、想像して描いたりする事が好きだったことから必然とデザイナーという職業に憧れを抱いていました。未熟だった私は、デザイナーといつても何のデザインをしたいのか、何を勉強すればいいのかが漠然としていて、高校卒業後の進路選択に迷っていた時、静岡デザイン専門学校のオープンキャンパスに参加しました。その際に、「プロダクトデザイン」という業界は、平面や立体だけでなく、どんな領域にも挑戦できる道であると知りました。私は、雑貨、服、写真などデザインに関わる様々な事に興味があったので、自分次第でいかようにもチャンスの幅を広げられる「プロダクトデザイン科」の道を選ぶことにしました。実際に入学し、学生生活を送り感じていたことは、静岡デザイン専門学校そのものがチャンスに溢れ、そのチャンスに自ら飛びつくることで、何にでも挑戦できる学校であるということでした。そのおかげで、私の可能性の幅は広がり、アイディアの在庫は今も増え続けています。

私はこの2年で沢山のコンペに参加させて頂きました。2年次に参加した富山デザインコンペティションでは、新しい付箋紙を提案しました。私自身が日頃マルチタスクが苦手で付箋紙が必要品であるにもかかわらず、付箋紙に書いた事自体を忘れてしまう事がしばしばあることから、それを防ぐような新しい付箋紙の提案をしました。元々は、折り紙を集めていた事もあり、紙好きが高じて思いついたアイディアです。このコンペでは、プロの方々に混じり、唯一の学生として入選することができ、大きな自信に繋がりました。

また、静岡の中山間地“オクシズ”的魅力を伝える為に考案したフードプロジェクトでは、しづおかビジネスプランコンテストにて静岡新聞社賞を頂きました。静岡の魅力のある場所はどこだろう…と考えた際、以前母親とドライブをして知った“オクシズ”という地域にスポットを当てた企画を考えました。私のアイディアは全て、自分自身の実体験からヒントを得ています。卒業後社会人となっても、シズデでの体験や経験がヒントとなり、この先の私のモノづくりにも活かされていくのだと思います。そして現在は、自分がデザインしたプロダクトを海外に出展する為に、日々奮闘しています。

アート、デザイン、創造して何かを生み出す事は楽しい反面、時に難しく苦しい時もあります。うまくいかない時は全く進まず、

焦りが出たり追い込まれたり壁にぶつかることも少なくありません。そういった感情と付き合う時間で、挫折を感じてしまう事も多々あります。しかし、シズデの良い所は、それを理解し、一緒に歩んでくれる先生がいるところです。モノを作っている時の引き締まった空気と、ふっと力が抜ける時間をバランスよく作り出してくれるこの学校の空気感に、私はとても助けられています。

そして私が感じたこの学校のもう一つの魅力は、学科を問わず、様々な道のプロの方と出会いお話をできた事です。その出会いの中で、デザイナーはただモノをつくったり、考えたりするだけでは無く、どうやって生まれて、還るのか、最初から最後まで責任を持たなくてはいけないという事を学びました。ただオシャレな物をあって、人の心には響かない、未来には残らない、それではデザインする意味がないと思います。単純な言葉ですが、私は人を笑顔にしたり、産業を後押しできるモノ・コトづくりができるデザイナーになりたいと考えます。そのため、自分には何ができるかを考え続け、人や社会が幸せになるモノづくりができる人になりたいです。そしていつか、プロのデザイナーとして、シズデに関わることが夢でもあります。



天野 七帆 さん

- プロダクトデザイン科 3年 ■ 静岡中央高校 出身
- ふじのくに芸術祭 2019 学生アートフェスティバル出展
- 富山デザインコンペティション 2019 入選
- 第18回しづおかビジネスプランコンテスト静岡新聞社賞

# 同窓会長メッセージ

街中にシズデ（静岡デザイン専門学校）が溢れ業界にはシズデ卒業生が続々と就職してきていつまでも、在学時の気分が抜けません。

学校法人静岡理工科大学の創立80周年、誠におめでとうございます。

もう既に3年前の話になりますが、静岡デザイン専門学校（シズデ）も前身の洋裁学校の創設から数えて90周年の記念イベントがありました。80周年とか90周年とか悠久の時の流れを感じずにはいられません。

先日、シズデ時代の後輩と20年ぶりくらいに会って食事をしました。東京でフリーランスのデザイナーとして活躍しているとのことで、とても懐かしくて嬉しかったです。彼から「オレ卒業後は音楽で食っていこうと思っていたけど、鈴木先輩に『やめろ、音楽は趣味にしつけ！』って言われてデザイナーを目指したんだよね。あの時のアドバイスに従って本当に良かったと思ってる。今さらだけどありがとうございます」と言われました。「ああ、20年前の自分は、そんないい事を言ったんだな。そんなこと、全く忘れていたけど、そういうことなら、お礼に今日は奢れよ、おごってくれよ」とご馳走してもらいました（笑）。シズデ在学中の話題で大いに盛り上がりとっても楽しい時間を過ごしました。

さてさて、つい若者ぶって「シズデ」とか言ってみましたが、1995年の私の入学当時はまだ「静岡文化専門学校」という名称でした。「シズデ」などという言葉は無かったのです。「文化」という響きに何かハイカラな印象を受けながらも、「服飾の学校だから縁はないよな…」と思っていた矢先、グラフィックデザイン科が新設されると知り、タイミングよく出来たばかりのグラフィックデザイン科の1期生として入学することができました。

3年間の学生生活の間には、校舎の建て替えに伴う旧校舎から仮校舎への引っ越し、静岡デザイン専門学校への名称変更、鷹匠の新築校舎への凱旋と、毎年違う学校に通っている気分で、何とも刺激に満ちたもので飽きませんでした。学科も増えて静岡文化専門学校が静岡デザイン専門学校（シズデ）に変身して行くと共に、私自身も少しづつ成長していったのです。

シズデ卒業後は、私もデザイナーとして社会人として、静岡市内で地元企業や個人商店、地域をデザインで盛り上げるお手伝いをしています。グラフィックデザイン科1期生ということで「同窓会長」に任命されましたが、当初は卒業生としての大きな使命感があったわけではなく、「シズデのことも卒業後は遠い思い出のようになるのでは？」と思っていたのですが…、現実は全くそんなことはありませんでした。

静岡の街中いたるところにシズデの名前が散らばっています。

大道芸ワールドカップのシーズンになればシズデデザインのボスターが溢かれり、入社してくる新人はシズデ卒業生、しゃれたラーメン屋ができたなと思えばのれんや箸袋までシズデ生のデザイン。こんなところにもシズデの名が…と驚きと嬉しさの連続で、卒業生として同窓会長として誇らしく思います。

また、デザイン業界に限らず、ファッション業界やブライダル業界、家具業界に建築業界、ビューティー業界にフラワー業界、いたるところで卒業生に出会います。新聞には毎日のようにシズデ生の活躍が紹介されています。私は20年以上も前に卒業したわけですが、このようにいつも近くにシズデを感じているので未だに学生気分が抜けないのでした。

2024年には、御幸町の新しい建物に移転されること。静岡デザイン専門学校の鷹匠校舎を巣立った卒業生に加えて、新しい御幸町校舎にこれから入学し卒業してゆく後輩たちが各業界で活躍し、これからも100年、200年と静岡を、そして日本を、世界を盛り上げて、いつまでも私を学生気分でいさせてくれることを期待しております。



鈴木 智 さん

■静岡デザイン専門学校 同窓会 会長

# 静岡インターナショナル エア・リゾート専門学校

SHIZUOKA PROFESSIONAL TRAINING COLLEGE OF INTERNATIONAL COMMUNICATION, AIRLINE, AND RESORT

国際エアライン科

観光・ホテルブライダル科

国際コミュニケーション科

国際交流科

マナー教育・語学教育をベースに、観光系専門教育を実践し、  
静岡から国際社会を舞台に羽ばたく人材を育成。

静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校は、県内で初めての空港である富士山静岡空港の開港に伴い、航空系の学科を設置した観光系専門学校として、2008(平成20)年に静岡県中心部の静岡市に開校しました。学校法人静岡理工大学の専門学校部門としては5校目の専門学校です。

本校の通称は、「S-AIR」。S-AIRのロゴマークにある青い鳥は「清楚・純粹・信頼」を、そして赤い鳥は「情熱」を意味しています。高い志を抱いた若者が、ここ静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校で専門知識と技能を身につけ、国際社会を舞台に羽ばたいて欲しいという願いが込められています。そしてその想いは校章に刻まれ、入学する学生たちの胸に輝いています。

本校では、マナー教育と英語を中心とした語学教育をベースに、航空・観光・ホテル・ブライダル・国際ビジネス業界などにおける様々な接客サービスに関する専門知識や技能とプロ意

識を持った人材の育成を目標とし、開校以来教職員一丸となって教育活動に取り組んで参りました。マナー教育では、専門学校では珍しい制服制度(学校指定スーツ)を全学生に導入し、業界に相応しい立ち居振る舞いや身だしなみ、そして美しい言葉遣いやおもてなしの心を徹底して指導しています。また、これからグローバル社会で欠かせない英語教育は、レベル別授業を徹底。一人ひとりの着実なステップアップを実現し、実践的な英語力の習得へと繋げています。加えて、関連する企業や団体と綿密に連携しながら、業界における最新の専門知識や技術を学生へ提供している専門学校としての教育活動が認められ、主要3学科においては「職業実践専門課程」の認定を受けています。

本校には海外からの留学生も多く在籍しており、校名の如く学内がグローバルな学習環境です。同じような志を抱く学生たちが学ぶ校舎には、いつも爽やかな挨拶と元気な笑顔が満ち溢れています。



# 観光系専門学校として特徴ある教育を実践し、業界・企業から更なる信頼を得られる教育機関を目指す。

## 航空系人材育成を目指す学科を設置する専門学校として、2008年に開校

富士山静岡空港が2009年に開港することが決まった当時、航空業界の人材を専門的に育成する学校が静岡県内になかったことを受け、県内で幅広く教育活動を行う本法人において、航空業界を軸に観光業界、国際ビジネス業界で活躍できる人材の育成を目指す専門学校として「静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校」を開校する運びとなりました。

2007年4月に開校準備室を立ち上げ、国際エアライン科、国際トラベル科、国際コミュニケーション科の3学科を設置し、翌2008年4月には第1期生として53名の入学生を迎えました。富士山静岡空港開港に伴う静岡県内の観光業界の盛り上がりだけでなく、日本の観光立国推進に向け、官民を挙げてインバウンドをはじめとする観光促進に取り組んでいた国の方針も後押しし、観光業界の仕事・国際的な仕事への関心も年々高まっていったように感じました。

2011年度にはホテル・ブライダルコースの設置、2012年度には主に留学生が学ぶ国際交流科を設置するなど、業界で求められる人材ニーズに合わせて学科コースの改編を行って参りました。

また、関連する企業や団体と密に連携し、観光業界で必要とされる知識や技術・技能を身に付けるための実践的な職業教育に取り組み、2015年度に国際エアライン科と国際ツーリズム・ホテル科(旧:国際トラベル科)が、翌2016年度には国際コミュニケーション科が、文部科学大臣より「職業実践専門課程」としての認定を受けました。

そして開校13年目となる2020年現在、在籍者は300名を超え、これまで1,000名に迫る卒業生を社会に送り出してきました。観光業界をはじめとする様々な仕事において多くの企業様から評価をいただいている卒業生の活躍ぶりは、後輩たちに自信と勇気を与え、明るい未来を見させてくれています。

## マナー・語学の「基本教育」と「専門教育」による『独自の教育システム』

本校は、航空・旅行・ホテル・ブライダル・国際ビジネス・コンシェルジュ等の専門教育については、経験豊富な教員陣のもと、最新の情報を取り入れた授業を展開しています。中でも、機内実習室や搭乗実習室、ホテル・ブライダル実習室など、将来の仕事をイメージしながら学べる実践的な学習環境も充実しています。

また、観光業界全般で必要となる「マナー教育」や「語学教育」を全学生に対し『基本教育』として提供しています。この全科共通の教育については、学科コースに関係なく学生の習熟

度別にクラス分けし、一人ひとりのレベルに合った授業を展開する他、「マナーコンテスト」や「Language Day」といった学校全体での行事も実施しています。これにより、学生たちが高い意識を持って学習に取り組めるだけでなく、異なる学科コースの学生同士の交流も活発となり、学校としての一体感を高める効果を感じております。また、同一科目の授業運営に対して複数の教員による取り組みを可能にしたり、全学生に新しく導入したい教育が生まれた場合の導入が容易であったりすることで、臨機応変な教育の提供が可能となっています。

また、国際交流科に主に在籍する外国人留学生との合同授業や学内イベントもあり、学内にて異文化を体感できる環境であることも本校の特長です。お互いの違いを認識し、認め合えるこの環境での学びは、グローバルな業界で活躍を夢見る多くの学生にとって大変有意義であると感じています。

## 新しい時代のサービスやおもてなしを追求し教育・人材育成を以て社会に貢献

将来的には、現在の教育を発展させ、企業における基礎教育をも組み込んだ新しい教育プログラムの構築を目指していきたいと考えております。それは、おもてなしを第一とする接客サービス業務ではこれまであまり取り入れられてこなかった、データを取りサービスを改善していくシステムの構築や、企業で実際に行われている新人教育の内容やプラスアルファで求められる教育について企業からヒアリングを行いながら、より高いレベルでの専門教育の構築を目指すというものです。

このような取り組みの中で、『企業の成長に繋がるこれからのサービスやおもてなし』というものを追求し教育改革を行いながら、求められる人材の輩出を通して企業・社会に対して更なる貢献ができたらと考えております。

静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校  
校長 横田 雅利



# 施設紹介



実際に使用されていた機内の座席シートやミールカートを設置し、機内と同様の空間を再現した実習室です。客室乗務員が行う様々な機内サービスやアナウンス、保安要員としての役割を実践的に学びます。



ホテル・ブライダルに関する知識や技能を実践的に学び、テーブルセッティングやレストラン・バンケットサービス等のサービス技能を身につけていきます。



空港のチェックインカウンターを再現した実習室。搭乗手続きや手荷物のお預かり、発券手続き、アナウンスなど、グランドスタッフとしての役割をロールプレイング形式で学ぶことができます。



外国語会話学習を主に行う実習室。オンライン英会話システムも導入し、外国人講師との少人数グループレッスンを受講することができます。語学関連の参考書も豊富に用意されています。



コンシェルジュが立つインフォメーションカウンターを再現。館内のご案内やアナウンス、ベビーカーの貸し出し、周辺の観光案内など、接客ロールプレイングを通して業務への理解を深めています。

# 沿革

- 2008(平成 20)年 4 月
- 静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校を開校
  - 以下の 3 学科 7 コースを設置
  - 国際エアライン科(2 年制)  
【ライトアテンダントコース／グランドスタッフコース／エアカーゴコース】
  - 国際トラベル科(2 年制)  
【ツアープランナーコース／ツアーコンダクターコース】
  - 国際コミュニケーション科(2 年制)  
【国際コミュニケーションコース／貿易ビジネスコース】
- 初代校長 遠藤 進 就任
- 2010(平成 22)年 4 月
- 第 2 代校長 山口 一三 就任
- 2011(平成 23)年 4 月
- 国際トラベル科を国際ツーリズム・ホテル科に改称し、コース名をツーリズムコース／ホテル・ブライダルコースに改称
- 2012(平成 24)年 2 月
- S-AIR フェスタ(学内国際交流イベント)を初開催
- 4 月
- 国際交流科(3 年制)を新設
  - 国際エアライン科のコース名をエアラインコース／エアポートコースに改称
  - 国際コミュニケーション科のコース名をランゲージコース／ビジネスコースに改称
  - 第 3 代校長 仁科 誠 就任
  - EF(エデュケーション・ファースト)と海外語学留学プログラムで提携
- 2013(平成 25)年 4 月
- 全学科コースに制服制度(学校指定スーツ)を導入
  - 学内マナーコンテストを初開催
- 2014(平成 26)年 4 月
- 国際コミュニケーション科のビジネスコースをコンシェルジュコースに改称
- 2016(平成 28)年 3 月
- 国際エアライン科と国際ツーリズム・ホテル科が文部科学大臣より「職業実践専門課程」の認定を受ける
- 2017(平成 29)年 2 月
- 国際コミュニケーション科が文部科学大臣より「職業実践専門課程」の認定を受ける
- 4 月
- 国際ツーリズム・ホテル科を観光・ホテルブライダル科に改称し、ツーリズムコースを観光ビジネスコースに改称
  - 国際エアライン科のエアポートコースをグランドスタッフコースに改称
- 10 月
- オンライン英会話システムを学内に導入
- 2019(平成 31)年 4 月
- 第 4 代校長 横田 雅利 就任



# 活動紹介



## マナー教育

制服制度(学校指定スーツ)を全学科コースに導入し、美しい身だしなみや立ち居振る舞い、言葉遣いなどのマナー教育を徹底しています。また、心の姿勢である内面的要素も高めながら2年間の中で“自分ブランド”を確立させていきます。



## 語学教育

グローバル社会で活躍する上で必須の英語教育を、全学科コースで実施しています。授業はレベル別クラス編成で行われ、TOEICでもハイスコア取得者を多く輩出しています。また、第二外国語として中国語・韓国語も学習しています。



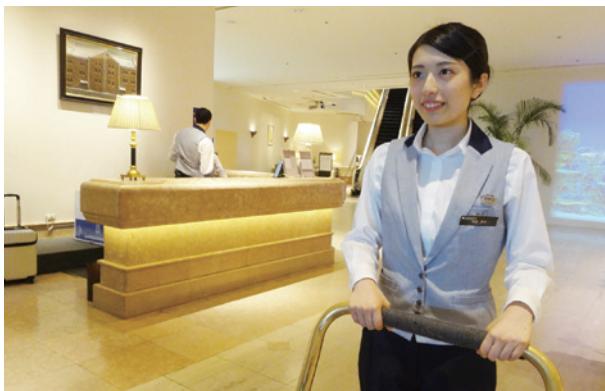
## 企業連携授業【1年次】

職業実践専門課程の認定を受けている国際エアライン科、観光・ホテルブライダル科、国際コミュニケーション科の3学科において、関連企業との連携授業を実施しています。業界の最新情報や求められるスキルを、企業の方から直接学びます。



## 国内研修【1年次】(2019.06)

空港・ホテル・テーマパークなど行き先はコースによって異なり、普段の授業や将来目指す仕事・業界への理解をより深めることのできる研修内容です。コースによっては各業界で活躍している卒業生の話を聞く機会も設けており、職業をより身近に感じることができます。



## インターンシップ【1年次】(2017.08)

希望者は長期休暇を利用し、空港やホテル、テーマパーク、商業施設などで就業体験をすることができます。学校で学んだことを実際のお客様対応の中で活かしながら職業への理解を深め、その後の学習における課題を見つけていきます。



## 業界セミナー【1年次】(2018.12)

1年生が目指す業界への理解を深めることを目的に、各業界を代表する企業の方をお招きし、講演を実施しています。様々な接遇サービス業界・国際ビジネス業界の話を聞く中で、就職に向けた意識を高め、視野を広げていきます。



### 海外留学プログラム (2019.02)

世界最大の語学教育機関EF (Education First)と提携し、主に約1ヶ月の語学留学プログラムを学生に提供しています。語学学校での学びに加え、海外ならではの貴重な体験や様々な人との出会いは、その後の成長に繋がる経験となります。



### Language Day (ランゲージデー) (2019.12)

英語・中国語・韓国語の言語や文化に楽しく触れ、異文化への理解を高めることを目的としたイベントです。様々なゲームや文化体験ができる「アクティビティ」と各言語での「スピーチコンテスト」が行われます。



### 海外研修 (2013.03)

本校で身に付けた英語や中国語などを実際のコミュニケーションの中で使える国として、主にシンガポールで4泊5日の研修を行っています。現地学生との交流活動などを通して、異文化を体感しながら国際的な視野を広げます。



### マナーコンテスト (年2回) (2019.07)

本校の基本教育の一つであるマナー教育の一環で実施しています。ロールプレイング部門、スピーチ部門においてマナーの審査が行なわれます。学生一人ひとりが日々の立ち居振る舞いを改めて振り返り、今後に活かす機会としています。



### S-AIR フェスタ (2015.04)

本校では主にアジア圏からの留学生が国際交流科に在籍し、同じ校舎で学んでいます。留学生と日本人の学生たちが互いの文化や習慣についての理解を深め、異文化を体験できる機会として、国際交流イベント『S-AIRフェスタ』を開催しています。



### ボランティア活動 (2018.10)

外国客船受入れや大道芸ワールドカップ、静岡マラソン、特別支援学校、子ども向け施設等において、通訳や運営サポートのボランティアを実施。様々な方とコミュニケーションをとることは、接遇サービスの業界を目指す学生にとって、とても貴重な経験です。

# 学生代表メッセージ

同じ夢を追いかける仲間と共に、専門性を高め自分を磨いた2年間の学びは、将来の糧に。

学校法人静岡理工科大学グループの記念すべき80周年の節目に、静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校(S-AIR)の学生代表としてこのような機会をいただき大変光栄に感じています。

専門学校は、皆それぞれの夢や目標に向かって専門知識や専門のスキルを身に付ける中で、お互いに切磋琢磨できる場所です。S-AIRでは、航空・観光・国際ビジネス業界などに必要な専門知識や技術に加え、高い接遇スキルやプロ意識、実践的な語学力を身に付けることができます。私は今、このような専門学校の環境下で学べることをとても貴重に感じています。

私は高校生の頃に客室乗務員を目指したいと思い、S-AIRの国際エアライン科エアラインコースへ入学を決めました。専門の授業では、航空業界経験者である先生方の経験に裏付けられたお話がとても興味深く、客室乗務員の仕事のやりがいや楽しさ、厳しさも学ぶことができます。学内には、航空機内を本格的に再現した機内実習室があり、客室乗務員が行う様々な機内サービスや保安業務についてロールプレイングを交えて学ぶことができます。実際に客室乗務員になった時のこととをイメージしながら学べるので、毎回、緊張感と高揚感を感じながら授業に臨んでいます。

学外での研修制度も2年間を通じて充実しています。中でも私が最も印象に残っている研修は、航空会社が所有する訓練施設で、実際の客室乗務員の方も行う緊急時対応訓練を行ったことです。現役トレーナーの方の指導のもと、緊張感ある空気の中で、実際に大きな声を出しながらお客様の誘導やドア操作、機体からの脱出の訓練を行いました。まさに客室乗務員の一つひとつの行動が、お客様の命にも関わるということを実感し、保安業務の大切さを改めて感じると共に、客室乗務員の仕事を目指す上で身の引き締まる思いがしました。

S-AIRに入学し、私が最も成長したと感じる点は、言葉遣いや立ち居振舞い、マナーについてです。S-AIRでは、全学科コースを通して「マナー教育」が徹底されており、オリジナルスーツの「制服」もあります。授業で様々なご指導があるのはもちろんのこと、学校生活を通して先生方が、私たち学生の間違った言葉遣いや細かな所作もその場で丁寧に指導をしてくださいます。また、第一印象を高める身だしなみやヘアメイク、そして笑顔の訓練を通して、一人ひとりの学生が自分自身の魅力を最大に高めて“自分ブランド”を確立することを目標にしています。そのような日々の積み重ねが、就職活動に自信を持って向かう力

となり、普段も目上の方とお話しする際や接客のアルバイトでも活かすことができています。

語学教育についても、S-AIRでは様々な学びがあります。英語では、TOEICや英検の検定試験におけるレベル別クラス編成で受講する授業を基本に、日常英会話からビジネスで使える実践的な英会話の授業、そしてオンライン英会話システムを使っての個人レッスンもあります。毎日様々ななかたちで英語に触れることで、多くの学生が大幅なレベルアップを実現すると共に、英語に対する壁がなくなり英語の楽しさを感じています。

そして、私にとって専門学校生活を通して最も大きな力となったのは、共に同じ夢を追いかける仲間の存在です。仲間の頑張りに毎日刺激を受けながら、私も負けまいと必死に努力することができました。ライバルであり同志である仲間は、私以上に私のことを知り、厳しい就職活動を乗り越える上で私を支えてくれる大きな存在となっていました。私は希望していた客室乗務員として内定をいただくことができましたが、これは私一人の力ではなく、周りの仲間や先生方、家族など多くの方のサポートがあってこそだと強く感じました。

就職後は、客室乗務員として航空機を利用される多くの方をお迎えします。これまで私を支えてくださった方々への感謝の気持ちを忘れず、また学校法人静岡理工科大学グループ 静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校の卒業生であるという誇りを胸に、機内の保安要員、サービス要員である客室乗務員として活躍していきたいと思います。



大久保 亜子 さん

■国際エアライン科 エアラインコース2年  
■静岡県立富岳館高等学校 出身

# 同窓会長メッセージ

## 社会が求めるニーズに 対応し続ける S-AIR の卒業生は グローバルな人材として輝く。

学校法人静岡理工科大学グループ創立 80 周年、誠におめでとうございます。心からお慶び申し上げます。

この 80 周年記念誌への寄稿にあたり、私自身が学生だった頃の思い出に浸り、またこれまでの社会情勢など肌に感じたことを振り返る良い機会となりました。このような機会をいただきましたことに感謝申し上げます。

さて、私が同窓会会長を務める静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校 (S-AIR) は、本年で 13 年目に至ります。法人内の他校と比べると浅い歴史ではありますが、多くの学生が学び、巣立っていく中で、数多くのドラマがあったことは確かです。開校した 2008 年度当時は、53 名の入学生からスタート。国際エアライン科、国際トラベル科、国際コミュニケーション科の 3 学科が設置されていました。社会ニーズや学生ニーズに対応し、進化し続けた S-AIR の 2020 年度の入学生は 155 名。開校時はわずか 1 名だった留学生は、今年度の入学生は 29 名にもなります。学科やコースも改編され、現在では国際エアライン科、観光・ホテルブライダル科、国際コミュニケーション科、国際交流科の 4 学科が設置されています。学生たちの専門的な学びに対して最大限のサポートをし、学びの場を与えてくださったことに、卒業生を代表して感謝申し上げます。

さて私は、2009 年に 2 期生として国際エアライン科 エアカーゴコースへ入学いたしました。高校生の頃、空港スタッフの中でも一番航空機に近い場所で働くグランドハンドリングスタッフという仕事を知り、憧れを抱いたことが入学のきっかけです。ちょうど私の入学と同じ年に、静岡県内初の空港である静岡空港が開港を迎える、テレビや新聞などでは日常的に静岡空港の話題が取り上げられていました。空港は皆の注目を集める“熱い”場所であり、S-AIR で航空業界について学ぶにつれて、夢の実現に向けた私の気持ちも益々強くなっていましたことを記憶しています。自分が目指す航空業界の専門的な学び、S-AIR 独自のマナー教育や英語教育、そして将来について仲間と語り合った時間。S-AIR での 2 年間は、今思い返しても刺激的で特別な時間でした。

そんな私たち学生の熱い気持ちと相反するように、当時、世の中ではリーマンショックの影響からか稀にみる不況で、就職活動は就職氷河期とも言える状況でした。そのような中でも S-AIR の仲間たちは臆することもせず、日本中または世界中に飛び立って行きました。私自身も地元の静岡空港で目標であったグランドハンドリングの仕事に内定をいただき、憧れの仕事

のスタートラインに立つことができました。S-AIR で専門教育にプラス  $\alpha$  で行われている様々な教育が、逆境に負けない人間力を育んでいると言えるのではないでしょうか。社会人となって早 10 年の月日が流れますが、今でも各地で活躍する仲間たちの活躍には感化されることが多く、それは私のモチベーションにも繋がっています。

2020 年現在、社会全体、世界全体がこれまでにない困難な状況に直面していますが、S-AIR においてはどのような状況においても常に挑戦し、世界中で活躍できるグローバルな人材を育成していくことを期待しています。

改めて、学校法人静岡理工科大学グループ創立 80 周年に携わることができましたことに感謝申し上げます。その大きな歴史と我が母校の歴史を感じ、責任の重さに身が引き締まる思いが致します。S-AIR は、同窓会長である私を含め理事たちも、平成生まれの若輩者ではありますが、皆で考え、皆で行動することをモットーに、母校の更なる発展に努力して参る所存でございます。引き続き、皆様のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりますが、今後も学校法人静岡理工科大学グループが、この長い歴史を土台に益々の発展を遂げ、社会で輝く人材の輩出を以て社会に貢献していかれることを心より祈念いたしております。



塚本 裕作 さん

■静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校 同窓会 会長

# 専門学校 浜松デザインカレッジ

HAMAMATSU DESIGN COLLEGE

グラフィックデザイン科

メイク・ブライダル科

ファッション流通科

学校法人のスケールメリットと、小規模校ならではの肌理細やかな学生対応の、ハイブリッドで学生と地域に寄り添い「職業人」を育てる。

専門学校 浜松デザインカレッジは、2008(平成20)年4月に、浜松情報専門学校校舎内に併設するかたちで「静岡デザイン専門学校 浜松校」として設置、当初よりデザイン、ファッション、ビューティー分野を持つ専門学校です。設置当初は、おもに県西部を対象エリアとして、静岡デザイン専門学校の教育ノウハウを受け継ぐカリキュラム内容でしたが、次第に地域に根付いた独自のスタイルに変化させてきました。現在では浜松情報専門学校との2校一体運営を行っており、2021(令和3)年度には「浜松未来総合専門学校」として2校を統合する計画で準備を行っています。

グラフィックデザイン科は、広告デザインを総合的に学び、レイアウトやイラストレーションやキャラクターデザイン、写真、ロゴマーク、コピーなどの制作や、ホームページ、映像編集など、さまざまな「表現技術」を高いレベルで身に付けます。またそれらの技術をどのように用い、総合的にデザインしていくかを考える企画・提案力を養うため、産学、官学コラボ

レーションや各種コンテストへの挑戦などの実践を重ね、「社会で必要とされるデザイン」を学び、デザイナーとしての実践力・企画力を身に付けます。

ファッション流通科は、ファッション販売に必要な接客マナーとコーディネート、業界の知識、スタイリングやディスプレイ、バイイング、プレス等の学習します。ショップの運営経験では、企画から接客までの全てを実践的に経験します。

メイク・ブライダル科では、ヘアメイク、ネイル、そしてブライダルまで、専門性の高い学びを通して優秀な人材の輩出に力を入れています。ブライダル分野においては、ヘアメイクアップアーティストのみならず、プランナーやドレスリストなど幅広い職種への就職を目指します。模擬ブライダルでは、プランニングや衣装選び、ヘアメイク、司会や音響に至るまで、学生がそのすべてを手掛けます。実践的な学びとともに、各種検定試験の取得など、実践力+資格で、美容業界やブライダル業界で輝くプロフェッショナルを目指します。



# 「豊かな個性と独創力を磨くこと」こそが ハマデの伝統。これからもカタチを変え、 社会を彩る発信を続けます。

## 表現する事の楽しさを伝え続けた ハマデの歴史

本校は、平成20年4月に静岡デザイン専門学校 浜松校として開校し、県西部地域のデザイン・ファッショング文化の教育拠点として創立され、平成23年に現在の校名に変更し、本年13年目を迎えました。

開校以来一貫してハマデは、学生の個性と感性を最大限に尊重した教育を標榜し続け、現在「グラフィックデザイン科」「ファッショング流通科」「メイク・ブライダル科」を展開し、学生と教職員の距離が近い中で互いが切磋琢磨し、様々な教育実績をあげています。

常に時代のカルチャーに敏感に反応しながら教育テーマを追い求め、しなやかに変化・成長しながら学んだ卒業生達は、様々なフィールドで、ハマデで身に付けた個性と感性を存分に発揮しながら今も活躍しています。

学生に寄り添い、共に悩み、共に喜び、学生達を育てて下さった歴代の教職員の皆様のご尽力、ご貢献に、あらためて敬意と、深い感謝を申し上げます。

## ハマデの教育は、社会を豊かに彩り、 人を笑顔にする、素敵な仕事への 近道であることを実感させること

時代はいまだ大量生産・大量消費時代の真っただ中であり、目的のために新しく何かを生み出すことよりも、最短距離で多くの利益を手にするかが優先される時代が続き、多くのデザイナーやクリエイターの個性を埋没させてしまっています。

そのような中、本校は学生達に、今いる場所でしっかりとリアルな視点を持ち、人間本来の豊かさや感性を目に見える形で表現し、様々なワークをあらゆる仕事や生活に活かし、そしてあらゆる仕事や生活の場面やメディアに展開する重要性を教えていきます。

デザインを学ぶ学生には、学ぶ過程で身につく発想力や創作家は、私たちが生きていく上で大きな力となって、様々なことに応用できることを伝え続けます。

また、ファッショングを学ぶ学生には、ファッショングは着飾るためのツールではなく、自己を表現するもの。そのためには自身の内面を見つめ、ものの捉え方、生き方を表現できるようになることが大切なだと教え、目の前の一人にその喜びを伝えることのできる大人に成長して欲しいと伝え続けます。

そして、メイクを学ぶ学生には、ただ誰かの真似をしたり、何かのために自分を変えたり必要はなく、「自分が一番居心地いいと思えるもの」「自分らしくいられるもの」をお客様に自信をもって伝えられるプロフェッショナルに成長し、お客様

の前に立ってほしいと伝え続けます。

そして、ハマデを応援してくれる地域・行政・産業界など、数多くのサポーターの皆さんとの交わりによって身に付けることは、社会の中で、情報の伝達をスムーズにし、機能性を高め、人々の心を和ませ、希望や高揚感を与え、また関係性をよくするための潤滑油の役割までも担うことができる、素敵な仕事に繋がることを伝え続けていきます。

## 「その道で生きていく喜び」を伝えています 今まで、これからも

私は授業の中で、デザインについて必ずあることを伝えてきました。

「きれいに作るのは当たり前。大切なのは伝わること。」

それは、デザインやクリエイティブな仕事に就く人が理解しないなければならない本質であり、どんなに華やかでかっこよく、きれいなデザインを作っても、それを見た人に目的が伝わらないデザインはカッコ悪いということなのです。

本校は、これまでの歩みの中で先人たちが築き上げてきた本校の歴史と伝統を守りながら、2021年4月には、同じ校舎で運営する「浜松情報専門学校」と発展的統合をし、新たに「浜松未来総合専門学校」として、校名通り「未来」に向けた新たな歩みを開始します。

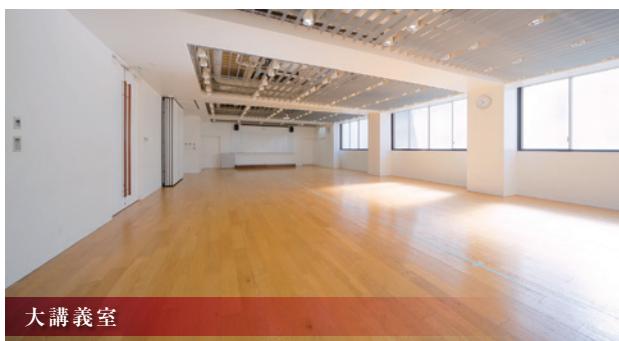
これまで本校が守り続けてきた「豊かな個性と独創力を磨く」教育は、カタチを変え、これからも新たな歩みの中でも、必ず受け継がれていきます。

そして、デザインの名前を冠している「ハマデ」だからこそ、これからも私たちは学生達に「その道で生きていく喜び」を伝え続けていきます。

専門学校 浜松デザインカレッジ  
校長 松本 文晴



# 施設紹介



# 沿革

- 2008(平成 20)年 4 月
- 静岡デザイン専門学校浜松校として開校 2 学科を設置  
グラフィックデザイン科  
(3年制 広告企画コース／デジタルデザインコース)  
ファッショングビジネス科  
(2年制 ファッショングビジネスコース／メイクスタイリングコース)
- 2011(平成 23)年 4 月
- 専門学校浜松デザインカレッジに学校名を変更 3 学科に再編
  - グラフィックデザイン科をカリキュラム変更  
(広告イラストコース /WebCG コース)
  - ファッショングビジネス科をカリキュラム変更
  - メイク・ビューティー科(2年制)設置
  - hamade Creative Action! 高校生みらいクリエイターグランプリがスタート
- 2013(平成 25)年 4 月
- グラフィックデザイン科をカリキュラム変更(広告デザインコース／イラスト・コミックコース)
  - ファッショングビジネス科をファッショント・コーディネート科に改称・カリキュラム変更
  - メイク・ビューティー科をメイク・ネイル・ビューティー科に改称・カリキュラム変更  
(メイクコース／ネイルコース)
- 2017(平成 29)年 4 月
- グラフィックデザイン科 職業実践専門課程認定
- 7 月
- チームラボとのコラボ企画によって「チームラボアイランド浜名湖」に参加
- 2018(平成 30)年 4 月
- ファッショント流通科、メイク・ブライダル科 職業実践専門課程認定
  - グラフィックデザイン科 カリキュラム変更
  - ファッショント・コーディネート科をファッショント流通科に改称・カリキュラム変更
  - メイク・ネイル・ビューティー科をメイク・ブライダル科に改称・カリキュラム変更
- 2019(令和元)年 9 月
- 高等教育の修学支援新制度の対象校として認定



# 活動紹介



## 浜デ & 浜情合同春の遠足 (2019.05)

浜情と浜デの全学科でナガシマスパーアンドへ行きました。ジェットコースターや観覧車などのアトラクションに乗ったり、併設しているアウトレットモールで買い物を楽しんだりしました。学校や学科の垣根を越えて仲を深めることができました。



## デザインコンテストを通じたデザインワーク実習

JAGDA国際学生ポスターawード(2019年入選)やMUDコンペティション(2019年優秀賞受賞)など、デザインコンテストへの応募を通して、意識的にクオリティを高めるデザインワークを行います。



## 学生発 WEB メディア運営 (2019.04~)

企画/取材/撮影/デザイン/制作までの全工程を学生主体で完成させ、さらに運営までしている浜松の街紹介WEBメディア「ノルマチ」。その「ノルマチ」を通して、WEBサイト制作に関わるノウハウを学んでいます。

## 企業や団体と連携した実践的なカリキュラム

地元企業と連携した案件に取り組むことで、実際のクライアントワークを体験します。デザイン作業の他に、企業の方に向けたプレゼンテーションの実施やフィードバックを通して、普段の学習では身に付きにくい実践的な経験を積みます。



## 上級生が下級生にレクチャーする 1.2 年生合同授業 (2019.05)

JMA検定2級を持つ2年生が、1年生へ3級取得指導を行いました。2年生は、教えることで他者に解りやすく伝える接客力を身に付けます。知識だけではなく、プロとしてお客様に提案できるまでの応用力の習得を目標としています。



ヘアメイクを通して想いを発信するクリエイティブワーク  
(2019.08)

変化する美容ニーズに柔軟に対応するため、様々なタイプのヘアメイク技術を習得します。ヘアメイクを通しての自己表現を学び発信力を高めていき、選ばれ、支持される美容従事者を目指していきます。



2年間の学びの集大成 模擬挙式(2019.11)

ブライダルプランナー・ヘアメイク・司会・アテンドなどの全てを学生が担当し模擬挙式を行いました。公開お色直しでの花嫁着付けライブショーや1年生の余興ダンスなどで盛り上がり温かいお式となりました。



選ばれる販売員を目指す  
'接客ロールブレイングコンテスト'(2019.10)

2年生が「接客ロールブレイング大会」を実施しました。現役で働く販売員の方を審査員に迎え、緊張する雰囲気の中、学生たちはオリジナリティあふれる接客を披露してくれました。審査員からも即戦力として期待が持てると好評価を頂きました。



学びの集大成「店舗実習」(2019.11)

学生たち自身でディレクションしたファッションブランドを運営する「店舗実習」。運営期間中は多くのお客様にご来店頂き、学生たちは2年間学んできた店舗運営や接客の手法を存分に発揮していました。



ファッションと「エシカル消費」を考える・伝える  
(2019.12)

消費者庁が主催する「エシカル・ラボ」というイベントで「エシカルフォトスポット」の展示を行いました。「SDGs」や「エシカル消費」についてディスカッションし伝統産業やアップサイクルを取り入れたディスプレイを制作。来場者に撮影をして頂き、SNSでの発信を促していました。



海外研修(2019.05)

異文化の芸術作品を見たり、現地で活躍するプロに技術を教わったりすることで世界の技術・トレンドを体験します。見るもの聞くもの全てが学生たちにとって刺激的で、これから制作でもこの経験を活かすことができそうです。

# 学生代表メッセージ

## 学びの先にみつけたもの。

私は、この学校に入って様々なことを学んできました。多くのことを学んでいく中で、私が特に心を惹かれたのが着付けの授業でした。正直、私はこの学校に入って着付けの授業を受けるまで、和服を着るのは花火大会の年に一度浴衣を着るくらいで、あまり和服に触れることがありませんでした。しかし、学校で着付けを習って、人に着付けられるようになり、浴衣を自分で着られるようになり、日本ならではの文化に触れ素敵だと感じるようになりました。

着付けの授業では、ただ着付けるだけではなく、きもののたたみ方やきものの各部の名称まで教えていただけます。より詳しくものについて学ぶことができるため、技術だけでなく知識も得ることができます。私は、その授業の中できものに魅力を感じ、もっともっと学びたいと思うようになりました。また、私は先輩方の卒業制作展で着付けショーのモデルを担当しました。真っ赤な打掛を何度も着付けしていただきました。打掛は今まで来たことがなかったし、さらにお客様に打掛の綺麗さを伝えなければならないということで、とても苦戦しました。

着付けられているとき、どのくらい胸を張って、どのくらい顔を上げていたらより綺麗に見えるのか、鏡の前で先生と先輩に見ていただきながら何度も調整しました。着付けられた後、お客様に綺麗な打掛を見せるように後ろを向いて袖を広げるところでは、腕の角度を何度も練習したり、後ろを向くときの目線の持っていく方まで研究したりして、先輩の作品をより素晴らしいものにできるように頑張りました。

何度も着付けをしていただいたので、プロの講師の方や先輩が着付けをしている姿を目の前で何度も見ることができました。プロの仕事を自分の体で体験して、自分の目で見ることができ、何よりの勉強になりました。プロの講師の方々が指導してくださいっている浜松デザインカレッジだからこそその学び方だと思います。着付けられている人が心地よくきものを着るために、いつも力を込めて、力を入れすぎてしまってはいけないのはいつなのか、身をもって学ぶことができました。

先輩の着付けは、不快になることがなく素晴らしいものでした。なぜ不快に感じることがないのか何度も着付けの練習をする中で、研究して自分に取り入れようと努力しました。着付けは、人のパーソナルスペースの中に入行って行うのですが、先輩は距離の詰め方がうまく、近すぎて気を張ってしまうということがないと気付きました。顔と顔が近づく瞬間が短いので、緊張してしまうことがないのでないかと考えました。これは、きっと自分が実際に着付けられてみないと気付くことがで

きなかったと思います。実際に体験することがいかに大切であるかを知りました。

私は、この卒業制作展での経験を通して、よりきものの魅力を感じることができました。技術だけでなくお客様側の気持ちも知ることができました。私は、もっときものについて学びたいという気持ちとともにきものの魅力を多くの人に知ってもらいたいという気持ちで和服店に就職することを決めました。そして内定をいただき、来年の四月から和服店で働かせていただることになりました。お客様の気持ちを考えて、笑顔のなっていただけるような接客をする店員になれるように頑張っていこうと思っています。そのために、これからもこの学校でたくさんのこと学んでいきたいです。

今、私はありがたいことにプロの方々に幅広く学べる環境にあります。着付けの授業だけではなく、様々な授業が自分の力になって自分の将来のためになると考えているので、毎日の学校を楽しみながら、より多くのことを学んで自分のものとして生かしていくことができるよう努めていきたいと思います。



加藤 柚葉 さん

■メイク・ブライダル科 2年 学級委員長  
■静岡県立浜名高等学校学校 出身

# 卒業生代表メッセージ

## ハマデと私のデザイン人生。

浜松デザインカレッジ創立 10 周年にあたり、心からお祝い申し上げます。卒業生を代表して御挨拶させていただきます。

この「静岡理工科大学グループ 創立 80 周年記念誌」が発刊されるにあたって、私がハマデに入学する少し前から学生生活の様子を振り返ってみようと思います。

幼い頃からイラストを描くことが好きだった私は、お気に入りのアニメやイラストレーターの絵を真似して描いてみたり、日常をマンガにしたりするのが趣味の高校生でした。しかし自分が表現するものに対して自信を持つことができなかったこともあり、友人たちにはあまり打ち明けず心に秘めて生活を続けていました。高校 3 年生になり進路を考え始めた頃、絵を活かせる”デザイナー”という職業が目に留まりました。この職業を調べていくうちにクリエイティブ業界への憧れがどんどん膨らんでいき、ついに”ハマデ”への入学を決意を固めました。そして平成 22 年 浜松デザインカレッジ グラフィックデザイン科へ入学、私のデザイン人生が始まったのです。

学校生活では、プロデザイナーになるためにたくさんの貴重な経験を重ねてきました。1 年次では、デザインや表現の基礎となるデッサンやあらゆる画材を使った実習、ゼロから専門ソフトを学びました。2・3 年次ではより実践的でプロの仕事に近い実習が行われました。

特に印象的だった授業は、地元企業をクライアントに招いた産学連携の実習。クライアントとのヒアリングから問題点を見つけ出し、デザイン企画、プレゼンテーションまで一貫して行いました。クライアントの生の声がダイレクトにいただけることもあり、刺激的な経験となりました。

また、同じ志を持つ仲間や夢を後押ししてくれる先生方との出会いも大きな財産となりました。

20 数名の生徒で編成されたチームでのフリーペーパー制作では、メンバー同士の意見がぶつかり合ったりもしましたが、「良いものをつくりたい」という同じ目標を心に、お互いを尊重し合った打合せを意識することでチームワークの大切さを学びました。そんな喜楽を共にしてきた仲間たちの多くは、ハマデを卒業した現在でもクリエイティブ業界を舞台に活躍しています。その姿を見て、私も負けていられないと日々励みになっています。

業界での経験が豊富な先生方が在籍されていて、デザインに関する技術や知識量に圧倒されていました。デザイン制作において行き詰った際には気さくに相談に乗ってくださり、様々な切り口から物事を考える方法や知らなかった表現のアイデ

アなど、話をするたびに新しい発見が多くありました。「自分には才能がない」と弱音を吐いたときは、自分では気がつかなかった強みや個性に気づかせていただき、就職や人間関係などの悩みも親身になって聞いてくださったりと、公私共にエールを送り続けてくださる心強い存在でした。

もともと自信がない性格の私。ハマデを卒業をするころには、3 年間充分やってきたという自信に満ちあふれ、自分の制作物に対して胸を張ってプレゼンすることができるようになり、プロのデザイナーとして社会へと飛び立つことができました。

ハマデを卒業して早 10 年。今こうしてプロのデザイナーとして活動できているのは、卒業してもなお共に切磋琢磨できる仲間たちがいること、見守り続けてくれる先生方がいてくださること、そして、好きなことを粘り強く突き詰める原動力を育ててくれたハマデがあったからこそだと思っています。

2021 年度からハマデは「浜松未来総合専門学校」として生まれ変わり、ますます進化が止まりません。私もデザイナーとして更に進化し続けるよう、どんな挑戦も恐れないということを目標にデザイン人生を歩んでいきたいです。



安達 彩夏 さん

■2013 年卒業／グラフィックデザイナー

グラフィックデザイン科非常勤講師としても活躍中

# 浜松日本語学院

HAMAMATSU JAPAN LANGUAGE COLLEGE

日本語科

進学2年コース 進学1年6ヶ月コース

## 日本語教育において「自分の考えと気持ちを人との繋がりの中で伝え合う力」 世界各国から集い、世界各地で活躍している卒業生。

私たちは、2011年の開校以来33の国と1,000名を超える入学生を迎えることが出来ました。入学した学生の33の国・地域を紹介すると、中国、香港、マカオ、台湾、韓国、モンゴル、ベトナム、タイ、ミャンマー、カンボジア、インドネシア、東ティモール、シンガポール、マレーシア、フィリピン、インド、バングラデシュ、ネパール、スリランカ、パキスタン、ウズベキスタン、ブラジル、ペルー、フランス、パラグアイ、オーストラリア、アメリカ、カナダ、イギリス、オランダ、ブルガリア、チュニジア、日本になります。今後、年数を重ねていくうえでさらに、たくさんの国・地域の学生が浜松に来てくれることと思います。

私たちは開校以来、学生の留学生活を充実させるために「学習面」と「生活面」をきめ細やかに指導してきました。学習面では「自分の考えと気持ちを人との繋がりの中で伝え合う力」を育成し、日本社会の中で実際に使うことが出来る日本語能力の育成を目指しています。そして、授業の中だけでなく、地域・市民との交流を目的とした課外授業やグルー

プ内の学生との交流授業など学校生活が日本語の実践的な練習の場となる環境も整え、「人・社会とつながる」コミュニケーション能力を養ってきました。生活面においても、日本社会に溶け込めるようにアパートやアルバイトの指導などの様々な側面からの生活指導をしています。そのような中で、4月入学の「2年コース」と10月入学の「1年6ヶ月コース」を修了した学生は、静岡理工科大学や浜松情報専門学校等のグループ内の学校や、県内外の大学、大学院、専門学校に進学しています。そして、これらの学校を卒業した学生は、地域を代表する企業に就職したり、日本での様々な夢を果たしたりするなど個々の目標を実現しています。

また、本校は日本語教師の養成にも力を入れており、文化庁認定講座である「基礎課程」と実践・演習を中心とした指導が受けられる「専攻課程」の2コースを有し、本校を含めた日本語学校だけでなく、地域日本語教室や企業内日本語研修担当者、海外での日本語教育者などの様々な地域、業界において有益となる日本語教師を輩出しています。



# 日本語教育を通して、 地域に優秀な外国人材を輩出し、 地域社会に貢献する。

## 本校も法人 80 周年とともに、10 年の佳節 学生に寄添い、報恩感謝の思いで地域社会に貢献

私たち浜松日本語学院は、まだ、10年という短い歴史ではありますが、原点として書き残さなければならない点が二つあります。

一点目は、開校の年である2011年に東日本大震災があったことです。中国からの25名の入学予定者は1名を除いてすべてキャンセル。父親が日本で働いている中国の学生1名が入学し、辛うじて開校出来た状況でした。このまま、学校が閉校になってしまうかもしれない強い危機感を持ちながら、募集対象国を東アジアだけでなく、東南アジア、南アジア等に広げました。また、他にはない高校や大学、日本語学校等と連携教育を行う中で入学者は少しづつ戻り、学校の定員も100名から337名と増員することが出来、教職員の方が多かった入学式が嘘のようです。

二点目は、非漢字圏の入学生が多くなることによって、今までの教材・カリキュラムだけでは対応できない場面が多く出てきたことです。そこで、漢字言語を持たない文化圏の学生にも、よりコミュニケーション力を高める日本語力を習得できる教科書とカリキュラムを導入し、学校一丸となって取り組みました。その結果、今まで以上に豊かな日本語が溢れる授業風景、さらに教師間が学びあう姿勢、高資格取得者の増加等の大きな成果を上げることが出来ました。ご指導を頂いた方々をはじめとして、携わった一人、一人の真剣な努力によって、成し遂げられた結果ですが、それと同時に、教育における努力をより良い結果として導く、学生に寄り添う普遍的な価値観が、浜松日本語学院にとっての柱となり、より学生のための学校へと舵をきるもう一つの原動力であったと確信しております。

## 地域企業・法人内学校と連携し、 外国人材の人材育成拠点としての責任を果たす

現在、私たち浜松日本語学院は337名の定員になり、「学びの共同体」として、日々教職員の力を向上し、授業の質を高めていく中で、学習者の為の地域を代表する学校になろうと日々努力をしています。数年前になりますが、名古屋入国管理局の職員の方が、浜松日本語学院へ定期的な現地調査に来られた折、「今まで見てきた学校の中で、この学校が一番いい学校でした。私が留学生だったらこの学校に入ります」と言っていただきました。身に余るお言葉でしたが、もっと学習者にそう思ってもらえる学校づくりをする励みにしています。

進路の結果としても、6割以上の学生が毎年、法人内の大学、

専門学校に進学し、全国の有名大学にも合格出来るまでになりました。卒業生は、県内企業をはじめとして全国及び母国の企業に就職し、その目標、夢を実現しています。また、運輸や介護分野等の地域を代表する企業と連携し、専門分野の人材育成のスキームやカリキュラムをつくりながら教育事業を進めています。今後は他の分野や地域でも展開していき、世に役立つ人材育成拠点を目指しています。

## 世界の若者の成長の一助になるために、 地域を代表する日本語教育機関を目指して

今後、未来に向けた取り組みとして、今までの教育事業に加えて、海外の大学等との提携の中で高度人材の育成や、教材・教科書、評価、教授法の開発を行っていくことを目標にしています。教材等の開発は、日々の教育活動を集積させ、広く世の為に役立つことを目的に、大学や専門学校、行政、企業との連携を深めながら、それらを世に発信していきたいと思っています。そして、その時代に対応した新しい教材や評価法、教授法などが、さらに世界の若者の成長の一助になっていくことを願ってやみません。

2021年1月には、浜松日本語学院の新しい校舎が完成しました。そこに入学してくる未来の学生、また、共に働く教職員の顔を想像すると笑みがこぼれてしまいます。さらに、10年後、そして、20年後の法人100周年、本校の小さかった源流が大河となって流れで続いていることを確信して校長挨拶とさせて頂きます。

浜松日本語学院 校長 竹下 知宏



## 教育環境



教室

開放的で明るい教室で授業を行います。校内に学生用インターネットも完備しており効率よく日本語学習に励むことが出来ます。



パソコン

学生用の共有スペースに設置されているパソコンも使用可。進学に向けての情報収集や課題学習に取り組む際に役立っています。



学生アパート

来日直後の留学生にとって住環境の確保は至難の業。本校は海外からの留学生全員に学生用のアパートを紹介しています。一人部屋から複数人部屋まで出来る限り希望に応じて対応しています。



新校舎

2021年1月浜松情報専門学校隣地に浜松日本語学院新校舎竣工。

## 主な活動紹介



### 『できる日本語』の言語活動 (2016.05)

私たちの授業では、各課の行動目標に即して総合的な活動を行います。その活動を通してお互いを理解する、周りの人と楽しく生活する、生活を充実させることをねらいです。この日は日帰り旅行として、お茶摘み体験に出かけました。



### 校外活動 (地域ボランティア) (2019.06)

私たち教室での授業だけでなく、浜松市をはじめとして地域の繋がりの中でも郊外活動として、課外授業を実施しています。地域ボランティアとして、浜名湖の湖岸清掃や街中の花壇整備を行っています。



### 遠足 (2020.09)

日本語をより深く理解するためには、背景となる生活と文化に対する理解が不可欠です。学生同士の交流・親睦を深める事も目的に遠足を毎年行っています。2020年度は三ヶ日青年の家に向け、カヌーなどの自然体験も行いました。



### 生活 オリエンテーション (2017.10)

日本での生活習慣やルールを覚えるために、浜松市や警察の方にもご協力頂いています。市役所の方からはごみの分別方法を、警察の方からは交通ルールを自転車シミュレーターを使うなどして大変分かりやすく説明して頂きました。



### スポーツ大会 (2019.12)

学生が主体となって企画から運営を行うスポーツ大会。大縄跳びや綱引き、リレーでは、一生懸命に自分のクラスを応援しているのが印象的で、最後の結果発表では歓喜と落胆の声が混じり合い、大いに盛り上がりを見せています。



### お正月体験 (2020.01)

日本のお正月を肌で感じ取ってもらうため、毎年冬休み明けに行う活動です。福笑いやお手玉などの日本の伝統的な遊びや書初めを行います。また、お汁粉をみんなで食べ、五感でお正月を体験しています。



### 介護人材育成 プログラム

人材不足が深刻な介護業界において、地域社会福祉法人と連携し、現地(海外)医療系大学、法人内専門学校介護福祉科と一緒に教育を行い、長期間就労可能な介護高度人材の育成を目指しています。



### 鈴与株式会社及び ブラジル領事館との奨学金制度を 活用した人材育成プログラム

多くの在日ブラジルの方々の中には高い就労意欲を持ちながらも、残念ながら日本語能力の問題により、非正規労働に就かざるを得ない若者も少なくありません。このような背景を踏まえ、本校で日本語を学び、卒業後は鈴与グループ内の企業に正社員として就労する奨学金制度を鈴与グループと在浜松ブラジル総領事館と協力して実施しています。

# 学生代表メッセージ



吳 達 さん

■2020年3月卒業  
■中国出身

中国の高校卒業後静岡理工科大学入学を目指し、1年半日本語を一生懸命勉強しました。

浜松日本語学院での一年半の勉強を経て、静岡理工科大学情報学部への入学を決めました。年月は水のように過ぎていきましたが、入学したばかりの頃の勉強への期待の大きさと、将来を見据えて慎重に計画を立てていた野心を覚えています。在学期間中、先生方の指導や同級生の支えがあって大きく成長ができたと思います。学生同士の絆を深めるための活動も充実しており、グループディスカッションを通して多くの知識を交換することで、日本語能力だけではなく人間としての価値を磨くことが出来ました。大学進学についても先生方には大変お世話になりました。大学でも粘り強く多くの知識を吸収し成長していきたいと思います。

日本で過ごす将来は目に見えないものですが、誠実に明るく、少しの欲望を持って過ごしていれば、平和で豊かな毎日が過ごせると思っております。海外から来た開拓者精神をもってこれからも努力していきたいと思います。



NGUYEN THI LAN HUONG さん

■2021年3月卒業  
■ベトナム出身

介護福祉士として日本で働くために  
介護福祉施設で働きながら勉強しています。

私はベトナムの大学で看護学を専攻しておりましたが、高齢者の事をもっと深く学びたいと思い、日本の介護福祉士の資格取得を目指して来日しました。浜松日本語学院に入学し、日本語だけではなく日本の文化や日本人のマナーの奥深さも学ぶことができました。様々な国の人々と交流をし、多文化を体験しています。チームに分かれて活動をすることもあり、将来的にこのようなチームワークが仕事に役に立つのではないかと思っています。

現在は介護福祉施設でアルバイトをしていますが、利用者の方が「ありがとうございます」と言ってくれたりすると、喜びを感じ励みにもなります。先生と職員の皆様のおかげで色々なことを体験させていただき、成功への道を歩いていると自信を持つれます。卒業後は介護福祉を学ぶ専門学校へ進学し、将来は介護福祉士として働く予定です。これからも目標に向かって全力で頑張っていきたいと思います。



HIDA STHEFANE MAYUMI さん

■2021年3月修了  
■ブラジル出身

浜松に永住者として暮らす外国人として、  
企業の支援を受けながら日本語を学んでいます。

私は15年間日本に住んでいましたが、日本語がよくわからず生活をしていました。昨年、鈴与グループと在浜松ブラジル総領事館が共同事業としてスタートした就労支援型奨学金制度を受け、浜松日本語学院で奨学生として勉強しながら、鈴与のグループ会社でアルバイトをするチャンスに恵まれました。浜松日本語学院で1年間日本語を勉強した後、アルバイト先で就職することとなっているため、同じ会社で働く日本人に負けないように一生懸命勉強しています。

浜松日本語学院は良い先生、良い教材、良いカリキュラムが揃っていて、15年間日本に住んでいた時とはまるで違うかのように、短期間で日本語が上達しているのが実感として分かりました。間違いなく、日本語を学ぶ環境として最適な学校です。浜松に住む外国人として一生懸命勉強し、しっかりと成果を出せる社会人になりたいと思っています。

# 沼津日本語学院

NUMAZU JAPAN LANGUAGE COLLEGE

日本語科

進学 2 年コース 進学 1 年 6 ヶ月コース

## 地域に根付いた日本語教育、そして、地域で活躍できる人材の育成。

沼津日本語学院は、『日本語教育を通じて地域・地元の企業で活躍できる人材を育成すること』を教育理念に、外国人に対する日本語教育と、日本文化、風俗、習慣等の教育を行い、日本と出身国との文化の相互理解を図り、国際交流の発展に寄与することを目的に、2017年4月に開校しました。

世界各国から留学生を受け入れ、口頭能力を重視し、論理思考を高める日本語教育を中心に、日本文化体験と日本人学生との交流を通して高い日本語力を習得。専門学校との合同授業や大学・大学院進学講座など様々なカリキュラムを実施し、修了後は、静岡理工科大学や静岡理工科大学専門学校グループをはじめ日本の大学や専門学校への進学を目指します。

授業では、「自分のこと／自分の考えを伝える力」「伝え合う・語り合う日本語力」を身につける教科書『できる日本語』を使用。さらに、地域の方々が授業に参加するサポートーバンク制度で活きた日本語を学び、沼津情報・ビジネス専門学校の学生との交流授業で同世代の日本人学生との親交を深めるなど、教科書では伝えきれない日本語教

育を行っています。

本国にいる家族と離れ、日本の生活習慣やマナーを理解し、勉強とアルバイトを両立しながら、日々、努力している留学生の夢の実現に向けて、教職員が留学生一人ひとりと向き合い、勉強、進路、生活面で、きめ細やかなサポートを行っています。また、国際交流協会や地元企業、アルバイト先企業、近郊の日本語学校など、留学生と関わる多くの方々を巻き込み、地域住民との方々との親交を深める留学生支援の会の開催や、国際交流協会主催イベントへの参加、アルバイト先や近郊の日本語学校との情報交換により、生活支援を協働しながら、留学生が地域住民の一員として生活できるよう取り組んでいます。

2020年からは日本語教師養成講座を開講。経験豊富な講師陣による授業と、留学生クラスでの実践経験により質の高い日本語教師を育成します。沼津日本語学院は、これからも、世界各国の留学生とともに成長し、地域をリードする日本語教育機関を目指します。



# 県東部に、国際色豊かな「人材育成機関」が誕生！

## アジア圏の学生を中心に「日本語学校」として 2017年4月に開校

2021年4月、創立5年目を迎えた「沼津日本語学院」。歴史的にはまだ浅いのですが、少しづつ地域の方々にもその存在が伝わって来ています。初年度は4月期生22名、聴講生3名の計25名でスタートし、その後10月期生25名が加わり、総勢50名の学校となりました。これまで、ベトナム・ネパール・スリランカ・中国・ボリビア・ブラジル・イスス・ブラジルの学生が学び、2018年には、104名が学ぶほど成長していきました。近年、日本の経済発展に伴い、主にアジア圏の人々に日本への留学意識が高まり、留学生が30万人を越えるほどになりました。県西部地区に比べて、東部地区では、まだまだ留学そのものが開拓時代と言える状況でした。沼津情報・ビジネス専門学校の新校舎移転から1年後に、同校校舎の7階に開校するに至りました。

2019年10月には、出入国在留管理庁から「適正校」として認められ、今後の発展に期待が寄せられています。

## 日本語で「伝える力」、「考える力」、 他者と分かり合うための「語り合う力」を養う

人や社会と繋がっていくには互いに伝え合い、語り合いながら交流することが大切です。沼津日本語学院では、「できる日本語」という教材を中心に授業展開をしています。その中で、教室での学習だけでなく様々な形のコミュニケーション活動を行い、「日本語」を通して日本の文化・慣習、人間関係を学ぶことができます。その考え方に基づいて、静岡県東部地区には様々な国際交流協会が存在し、地域の方々と交流できるイベントやボランティア活動があり、「生きた日本語」を学ぶ機会に恵まれています。真の「日本語力」「学力」「人間力」を身につけることにより、希望する進路を切り開いていくことができます。

法人内の大学・専門学校・高等学校・中学校の学生・生徒との交流の場を持つことも特権と言えます。沼津情報・ビジネス専門学校との交流授業、静岡北中学校との交流英語授業など、本校の学生にとって良き刺激となる機会となっています。また、「留学生支援の会」では、地域の方々と「日本の文化」をともに学び、さらには出身国を紹介するイベントも経験できます。

## 真の「日本語力」を身につけ、国際人として 日本の社会や世界で活躍できる人を目指して

今後の沼津日本語学院としての発展に関して、以下のような取り組みを進めています。

- 1) 法人内の大学・専門学校への進学率をさらに高める
  - 2) 将来日本や世界各地で活躍できるような学生の育成
  - 3) 日本語教師養成講座の開講
- 1) 2019年3月には46名、2020年3月には55名が本校を卒業していました。卒業生の約65%が法人内の専門学校に進学しています。彼らが将来「○○○の資格が取れました」「○○○に就職することになりました」と誇らしげに報告できるような体制づくりをしていくことが求められます。
- 2) 近年、特にアジアを中心に「日本」あるいは「日本語」に関心を持つ人々が増え、将来日本で「よき働き手」として人材確保が課題となっています。その要請に応えるべく、ある意味日本で働くための手段としての「日本語」も必要となってきます。
- 3) これから「日本語学校」として「学生に教える」だけに留まらず、「日本語」を教える「教師の育成」そのものが注目を浴びることになると考えます。その意味で「日本語教師養成講座」は、需要が高まる時がくると確信しています。県東部地区には、養成機関がまだ少ないということで非常にタイミングな状況にあると言えます。これから、さらに「日本語」を学ぶ人々、「日本語」を教えるとする方々の期待に沿えるような学校になればと願っています。

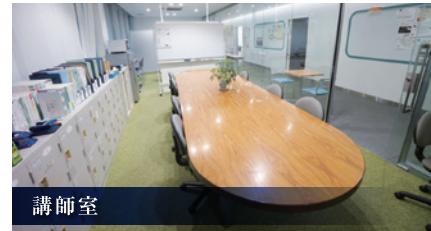
沼津日本語学院 校長 大石 正昭



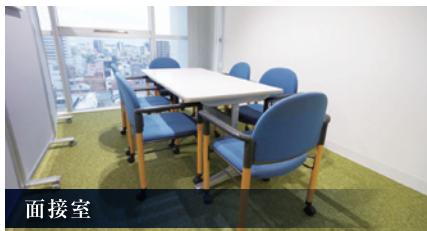
## 教育環境



明るく広い教室です。全教室にプロジェクターを完備し、ICTを活用した授業を実施しています。



授業準備や休憩や食事など、リラックスできるスペースです。



教職員が留学生一人ひとりと向き合い、勉強、進路、生活面で、きめ細やかなサポートをしています。



教室に学生がいつでも自由に使えるパソコンを設置しています。テレビ電話やチャット、動画視聴もできるので大人気です。

## 主な活動紹介



### 留学生支援の会 (2019.06)

年1回、地域の方々に学習の成果を発表しています。地域の方々との交流を深め、出身国の方の歌やダンスを披露したり、ゲームを通して、親睦を深めています。



### 交流授業 (2019.11)

沼津情報・ビジネス専門学校と交流授業を行っています。同世代の学生と会話や授業体験をすることにより、進学先の決定や進学後のイメージを膨らませることができます。



### できる日本語 できる! 活動 (2019.09)

「日本人の家を訪問し、交流する」「旅行の計画を立てる」など、様々なできる活動を通して、学生が教室で学んだことが「できた!」という達成感を味わえるような授業をしています。



### お正月体験 (2020.01)

日本文化に触れる体験として、日本のお正月の行事体験をしています。餅つきや書初め、福笑いなど、学んだ日本語を使い楽しんでいます。



### 国際交流協会 イベント (2020.02)

近隣の国際交流協会主催のイベントに参加し、学校と留学生について地域の方々に関心を深めてもらえるように取り組んでいます。



### 出張授業 (2020.01)

学生を中学校等の日本の学校に異文化理解講師として派遣し、母国について紹介しています。日本語・英語を使って交流を深めています。



### 弁論大会 (2020.03)

年1回、学習の成果の発表として弁論大会を開催しています。家族への思い、母国と日本の違いなど様々な視点のスピーチを聞くことができます。地域の方々を招き、審査していただいている。



### 日本語カラオケ大会 (2019.08)

日本のポップカルチャーを知るイベントとして、カラオケ大会を開催しています。出演するクラス代表の学生は、毎日練習をし、見事な歌声と日本語を披露しています。

# 学生代表メッセージ



MAPATUNA MUDIYANSELAGE  
MILINDA MADHUSANKA さん

- 日本語科進学 2年コース
- スリランカ出身

---

きめ細やかなサポートで、  
安心して留学生活を送っています。

---

私は、2019年4月に日本へ来ました。日本で生活を始めると、日本語もわからないですし、様々な問題に直面しました。スリランカで生活をしていたときは、両親にすべてやってもらっていましたが、今は、全部自分でやらなければなりません。とても大変です。しかし、生活で困っているとき、先生たちがいつも助けてくれます。病気のときは、病院へ一緒に行ってくれますし、日本で生活するルールを丁寧に教えてくれます。おかげで、私は今、安心して日本で生活することができます。

先生たちは、私の将来の夢の実現に向けて、進路について様々なアドバイスをしてくれます。私は、卒業したら、観光ビジネス科に進学し、日本人のホテルでの接客サービスや「おもてなし」を勉強し、日本のホテルで就職したいと考えています。将来は、スリランカに日本の接客サービスを取り入れたホテルを作りたいです。



LO THI DUYEN さん

- 日本語科進学 2年コース
- ベトナム出身

---

たくさんのイベントを通し、  
地域の方と“日本語で”交流しています。

---

私は、毎日、学校へ行くのが楽しみです。最新の機器がそろった教室で授業を受けることができます。先生たちは、毎日、熱心に教えてくれます。先生たちのおかげで、日本語能力試験 N2 に合格し、今は、N1 合格に向けて勉強しています。

授業だけでなく、私たち留学生と地域の日本人の方が交流できるイベントが沼津日本語学院には、たくさんあります。私は「留学生支援の会」が好きです。日本の小学生からお年寄りの方に、私たちの国の文化を紹介したり、日本文化を体験できたり、一緒にゲームをしたりと交流を深めることができます。また、「留学生カラオケ大会」では、地域に住む日本人の方が審査員をしてくださり、留学生が日本の歌やダンスを披露します。たくさんのイベントは、授業内で学んだ日本語を使う良い機会になり、日本人の考え方や価値観を知ることができます。これから日本での生活がもっと楽しくなりそうです。



KYAW YE NAING さん

- 日本語科進学 2年コース
- ミャンマー出身

---

苦手だった漢字の勉強も  
今では大好きです。

---

私の国、ミャンマーは、経済発展と共に、日本企業が次々に進出しています。私は、日本に留学する前に、日本の銀行で日本人の上司と働いていました。日本に興味を持ち、留学を決意し、2020年4月から沼津日本語学院で勉強しています。日本に来てからは、毎日、一生懸命、勉強しています。

でも、漢字がなかなか覚えられません。そこで、先生から、メイクストーリーで漢字を覚えるという勉強方法を教えていただきました。例えば、「父」という漢字は、私の父は、いつも帽子をかぶっているので帽子をかぶった父をイメージします。それを、クラスで発表し、クラスメイトのストーリーも聞くと新しい発見があります。今は、漢字の勉強がとても楽しいです。

卒業したら、自動車整備の専門学校に進学し、自動車について学び、日本の自動車ディーラーに就職したいです。そしていつかミャンマーの発展にも貢献したいです。







**堀田 恭平 さん**

■静岡県自動車工業高等学校 元教頭（第2代・昭和53年4月～昭和60年3月）  
 ■沼津情報専門学校 元校長（第2代・昭和60年4月～昭和63年3月）  
 ■静岡産業技術専門学校 元校長（第7代・昭和63年4月～平成3年3月）

## 自動車学園において半世紀に亘り職業教育一筋に携わり、 若者の人材育成に尽力しつつ自動車産業界に送る役目を果たす。

私は、昭和33年に静岡県自動車学園に奉職しました。昭和30年代は、高度経済成長時代で自動車が大衆に広く普及し、自家用車時代の幕開けでもありました。

また、昭和31年には、自動車整備士育成のための各種学校が設立され、モータリゼーションの進展に支えられて、全国的にも特色のある専門の交通教育機関として注目されておりました。学園の自動車学校においては運転試験場を併設しており、自動車の普及率の上昇に伴う運転免許取得者の増大により、連日、受験者は長蛇の列をなし試験コースには大勢の人垣の中で免許試験が行われておりました。

教習業務は、早朝から夜間にかけて連日行われ、教習車両の排気ガスは柚木地域一帯に漂っており、教習中の接触事故は日常茶飯事となり、常に危険が伴い、試験官でさえ何とかならないかと言う強い要望から考案したのが補助ブレーキでありました。放課後の徹夜作業を繰り返し作成し、教習車両に装着し、接触事故も見事に軽減されたのでありました。一方において、昭和37年5月の理事会・評議員会において正式に「静岡県自動車工業高等学校」の設置が決議され直ちに開校の準備に入りました。

設立の準備に当たり、当時の学園役員、県私学振興室、学事文書課長、整備振興会等々10名の視察団によって、北海道自動車短期大学を視察し、自動車学科についての教育カリキュラムを中心に、実習工場の施設設備、教材等々設置基準に伴う参考資料を頂き開校の準備が出来たのであります。当時、高等学校の教員免許資格を所有していたのは私一人で、高等学校設立準備委員の第一号の辞令を受けて北海道自動車短期大学視察にも



昭和33年 静岡県自動車学校・整備科の始業点呼・整備実習工場前にて

同行し、諸々開校に向けて準備に取り掛かったのであります。

第1期生の募集に当たり、将来的には自動車短期大学構想も踏まえてのことと、モータリゼーションの先端を切って開校する高等学校とあって反響は非常に大きく、自動車工学科・第1期生・150名の募集定員に対して、864名の応募者がありました。

新設校教員体制については、一般教養科目については、公立・私立高校教員資格合格者名簿から人選を行い、特に自動車工学科の本命となる実習教員については、本学園の自動車学校整備科出身の卒業生から人選により抜擢し、教員体制が整ったのであります。当時の文部省としては、高等学校自動車学科は初めての認可であり、高等学校用の検定教科書は無く、全国の工業高校からも自動車産業の普及に伴い自動車関連の教科書が急がれており、本校の新設によって、一挙に文部省がその必要性を認め、全国自動車教育研究会が中心となり、教科書の編成に取り掛かりました。私も全国から5人の執筆

編集者に選ばれ、実教出版社による高等学校用教科書として、全国の工業高校機械科で採用されたのであります。「自動車構造・自動車整備・自動車電気装置・自動車法規」など長年に亘り編纂に関わり、本校の自動車学科の教科書としても使用したのであります。入学式は本館校舎が未完成の中で、一室を紅白の幕で仕切り行われました。

実習工場も未完成であり、実習作業については、専らグラウンドにおいて自動車学校からの払い下げの教習車両を教材とし、タガネとハンマーによる解体作業が連日の日課でありました。グラウンドは、雑草が茂り、河川敷同然の状態で瀬名特有の竜爪おろしか吹き抜けて行く、グラウンドと呼ぶには余りにもお粗末な広場であります。

放課後教職員と生徒による整地作業が連日行われ、雑草の刈り取り小石を拾っては側構に埋め込む繰り返しの作業が続けられ、また、地盤は軟弱であり、一旦雨が降るとたちまち泥海と化し、泥濘となり、始末におえませんでした。しかし、生徒は第一期生たる誇りと意欲が満ち溢れており、率先して職員と共に共同作業に携わったのでありました。

自動車工業高校の特色は自動車整備士資格と運転免許資格の取得にありました。時代の繁栄を受け自動車に憧れ、興味関心をもつ若者は非常に多く、自動車整備士を目標に本校への応募者は年々増加していきました。また、在校生の卒業期における運転免許取得については、当時、学校施設内には運転教習コースが併設されており、本校専属の8人の教習指導員によって指導が行われ毎年約350人の生徒の免許取得に当たったのであります。さらに、開校10周年に当たる年、本校が全国自動車教育研究会の会場校となり、エンジン動力計を使用しての実験成果が好評を博したことが印象に残っています。

この後、私は昭和60年から沼津情報専門学校に校長として赴任しました。この時代、情報化への教育の対応策の強化が叫ばれ、産業界との連携をもとに即戦力となりうる産学一体の実践教育によって技術者不足に悩む企業側と就職先を確保したい学校側の思いを一致させるべくインターンシップを導入し、企業間との異業種交流が発足しました。1年後には、静岡県産学交流会と改称し、会長となり企業60社、大学・専門学校22校の構成でスタートしました。沼津情報専門学校をはじめとする学園グループが先鞭を切って立ち上げたものであります。産業技術専門学校においては、従来の学校という概念から脱皮した教育環境に最新の教育機器を導入し、様々



昭和38年 静岡県自動車工業高校開校当時の教職員(前列・左から二人目が本人)



全国工業高校機械科で使用された実教出版社による教科書

な情報が入手できる環境の中で教育効果を高めようと光ファイバーによる光ランを構成したインテリジェントスクールを完成させ、ソフト・ハードの両面からより高度な情報処理教育の充実を図る事が出来たのであります。また、高度情報化時代の21世紀をリードするSEの育成を目標に平成2年度より県下初の3年制SEの養成学科「情報システム研究科」をスタートさせ、産学協同による連携を図りながらの企業研修、国際的感覚を身につけるための海外研修などを盛り込み、より実践的なSEを育成する事になりました。

職業教育を通して静岡県職業教育振興会の副会長、および研修運営委員会の委員長として教員研修はもとより、設置者・校長など経営者の資質向上研修など実施し、私学教育発展のために尽力しました。これらが認められ、平成27年7月「専修学校教育功労者文部科学大臣表彰」を授与されました。

### 思い出の一品

この車は、昭和三十八年の自動車工業高校開校に伴い、自動車学園にふさわしいシンボルとなる自動車を何としても手に入れようと、日産自動車に日参して譲り受けたものです。昭和十二年製造の「ダットサン」で当時でもかなり古く、実習棟正面に飾られたものです。その後、本部静岡校から静岡工科自動車大学校の正面玄関で来客者を見守っています。現状でも整備されており、工科祭のイベントにおいては、コースを走る雄姿を見る事が出来ます。私にとって忘れる事の出来ない歴史を語り継ぐ貴重な一品です。





## 静岡理工科大学開学までの思い出

### 1. 大学設置の準備段階

静岡県18才人口は平成4年の5万7千人をピークに急減期に向かうことは周知のことであった。昭和61年から教育関係のコンサルタントに依頼して学園の対応について検討していた。

62年度の静岡県の大学収容率は38%に過ぎず、62%は東京都など関東圏に流出している。産業界の高度化から大学進学指向が続くと見込まれ県内大学への進学需要は高まるとの報告であった。一方、18才人口の急減期を控え全国的に大学は既に飽和状態であり文部省は大学新設には抑制段階にある。

しかし、静岡県は他県流出率62%と大学過疎県で特に理工系大学は静岡大学工学部のみで県内高校からの入学者は30%程度と低い。理工系大学であれば認可の可能性は無い訳ではないが理工系大学設置のハードルは高いというのが文部省の見解であった。

こうした動向を踏まえ、長期安定経営を図るため理工系大学を設置し大学を核として高校、専門学校の質の向上を図り、高等教育機関としての発展を図るべく計画を立てた。

大学設置の最終候補地の袋井市は東海道沿線に位置し、周辺は企業の集積も多く浜松市の外縁都市として成長が著しい。候補地は丘陵地であり既に袋井市は大学用地として96,000m<sup>2</sup>を買収確保してある。県西部地区は輸送機械、電子機器を中心とした工業の集積の進んだ地域であり袋井市が最も適した立地であると判断した。

袋井市の誘致を受け「公私協力方式」として設置し、工学部の理学系統に知能情報学科、物質科学科を、工学系統に機械工学科、電子工学科を置き入学定員は300名とする。建設経費は概算105億円を予定した。昭和63年8月上旬には文部省との事前相談を始め平成2年12月に大学設置認可を受け平成

3年4月開学というスケジュールを立てた。

### 2. 開学までの関係機関との協議について

文部省との第一次事前相談は、昭和63年9月から平成元年7月にかけて行われた。私学行政課から主として学校法人の創設資金等資産の状況、校舎等建物が基準に合致しているか等の指導を受け、企画課からは設置する大学の教育内容、カリキュラムの組み立て、教員等、教育研究面の面から指導を受けた。一次審査をパスして継続審査となり、大学設置審議会委員による現地調査を経て平成2年12月21日大学を設置する学校法人として『寄附行為変更認可』、設置する大学の『設置認可』が文部大臣から交付された。

学園と袋井市で「大学設置計画協議会」を設置し、大学校地の提供(無償譲渡・無償貸与)、土地造成工事などを開学に関する諸々の事項を協議していった。袋井市議会にも全面的応援体



平成11年度静岡理工科大学入学式

制を築いていただいた。「袋井市学術交流基金設置条例」が制定され、学生奨学金、大学と企業の共同研究費、公開講座・セミナーなど広範囲に亘り補助金援助をいただいた。

大学開設の資金として、日本私立学校振興共済事業団を通じて『指定寄付金』の募集を行い、鈴与株式会社をはじめ239社・16名の個人から多額の寄付金をいただいた。

昭和63年9月の文部省事前相談開始から、平成3年4月の開学までの2年半という短期間で校地造成、校舎建設、実験機材、図書館整備、入学試験、広報活動など多岐に亘り慌しい期間であった。

### 3.大学設置準備の当初には 予想もしなかった問題がおこる

#### ■収益事業の取扱で法人分離に発展

文部省の事前相談の段階で「自動車教習所業を寄附行為の収益事業から削除し事業を分離するよう」指導があった。自動車教習所業は収益事業として静岡県告示にはあるが文部省告示にはないことから大きな問題に発展した。分離に当たり職員の身分上の処遇に不利益にならないこと、将来展望ができる円滑な財産の分離をすることを重視した。私学共済制度の適用、県私立専修学校各種学校退職金財団の加入を継続し学校法人として存続させる方法が最適と判断した。

静岡産業技術専門学校の自動車系学科を独立した学校として新設して収益事業に自動車教習所業を行う県知事認可の学校法人を設立する分離案を静岡県並びに文部省に打診し了解が得られた。平成2年7月16日、「静岡工科専門学校の設置」及び「学校法人静岡自動車学園」の設立が認可された。

理事長から『新法人の目標は、「地域社会への貢献」と「自立・経営の安定化」であり、常に経営改革を進め優れた実績を積み重ねていくよう願いたい』との訓示が示された。

#### ■学長候補者逝去と新学長の選任

学長候補者、石原智男先生（東京大学名誉教授、日本自動車研究所副理事長・所長）は、開学に向けて活発に活動され、袋井市民にも公開講座で「理工科大学の目指す方向」を説明し理解を求めた。

待望の静岡理工科大学の設置認可が平成2年12月21日交付されその僅か3日後の24日、石原智男先生が心不全のため急逝された。学園関係者の受けた衝撃は大きかった。後任の学長候補者については国立総合研究大学院大学学長長倉先生及び文部省と相談しながら選任を続けた。

4月1日の開学が間近に迫った平成3年3月12日、久松敬弘先生（東京大学名誉教授・元東京大学工学部長、日新製鋼株取締役副社長）の初代学長就任が決定した。

### 4.理工科大学の開学と高校、専門学校の対応

平成3年4月10日372名の入学生を迎える入学式を行った。希望に溢れた第一期生と彼らを迎える教職員の晴れ晴れとした笑顔が30年を経た今も忘れられない。

昭和63年当時、18歳人口の減少期に入ると専門学校は淘汰されると教育界では言われていた。専門学校4校を設置している

学園経営陣は大変な危機感を持っていた。しかし、専門学校進学率は63年の15.4%から平成29年の22.5%に上昇している。進学率の上昇は実務教育と時代の流れを捉えた教育が高学歴社会に評価されている証左である。

専門学校部門においては、高度情報技術者の育成を目的とする3年制「情報システム研究科」を、情報系3校に設置した。コンピュータ系学生全員にノートパソコンを導入し自宅においてもコンピュータ学習のできる体制を構築した。

高校部門では、静岡北高に理数科、星陵高に英数科を設置し進学校としての評価を得ている。静岡北高校は文部科学省からSSH（スーパーサイエンス・ハイスクール）の指定を受け、理科教育に先端授業を取り入れている。両校とも理工科大学と高大一貫授業を行っている。更に発展を目指し静岡北中学校、星陵中学校を開校し中高一貫教育に取り組んでいる。

分離独立した静岡工科専門学校は、1級自動車整備士受験資格認定校の指定を受け4年制の「静岡工科自動車大学校」に発展している。

令和2年度の入学者状況は、全ての学校で入学定員を確保しており、学園全体の入学定員充足率は121%である。18歳人口は平成4年のピーク時から61.6%と大きく減少し定員充足できない学校も多々ある中、理工科大学を核に高校、専門学校のレベル向上と体力強化の成果は、ひとえに教職員の皆様の努力により達成されており御礼申し上げます。

静岡理工科大学の設置に当たり、袋井市、鈴与株式会社をはじめ県内外の有力企業を中心に多くの企業・官民の多大な精神的・財政的援助があって開学が可能になったといえる。ご支援いただいた多くの皆様に感謝申し上げます。

#### 想い出の一言

#### 初代久松学長から 学長退任の日に頂いた言葉

静岡理工科大学は、今日完成年度（平成7年3月31日）を迎えたが、幾つも改善・改革を要する事柄がある。次の3つの段階を踏むことにより進めてほしい。

1. 問題点の事実を揃えること
2. その事実と真摯に対峙すること  
（何故そうなったのか、どう解決するとよいかなど）
3. 洞察することによって、考えがまとまり解決すべき方向が決まる

この言葉がその後の私の仕事の進め方に影響を与えた。



## 荒木 信幸 さん

■静岡理工科大学 前学長（第4代・平成18年9月～平成26年3月）  
■静岡理工科大学 名誉学長 ■スズキ株式会社 社外監査役  
■浜松地域イノベーション推進機構 次世代自動車センター 顧問

## 「我が道を行く！」

「この道より我を生かす道はなし、この道を行く」は、武者小路実篤の言葉ですが、日常的な難問に遭遇した時、自分の通ってきた道の方向性が正しかったのかどうか、今後どうすればよいのかと迷ったときに、思い出す言葉です。

お陰様で、静岡理工科大学に勤務した約10年間は、上記の言葉を深刻に検証しなければならないような事態はほとんど発生しませんでした。これは、大学に勤務する教職員の方々の意向と、私自身の方針とは、ほぼ同じ方向を向いていたと評価されるのではないかと思っています。

この度、学園創立80周年を迎えるにあたって、心からのお祝いを申し上げます。学園全体の今後のさらなる発展を切に願う立場から申し上げたいのは、そこに働いてきた教職員のみならず、学園において学んできた多くの卒業生、さらに、何らかの形で、学園とご縁をいただいた方々には、それぞれの「道」に相応して、学園の発展に貢献してこられた方々のおか



平成19年 記念植樹

げであると承知し、そのような方々に対して、心から御礼申し上げたいと存じます。

お陰様で、私自身も学園とほぼ同じ年齢で80歳を迎えました。これを契機に私が通ってきた道筋について少しお話します。

私の父は、明治39年(1906年)生まれで、昔の山形の師範学校を卒業し、小学校の教員になって、私の母と結婚しました。しばらくすると、このままで良かったのかと考えてしまう局面がありました。急遽、山形の小学校教員を辞して、東京に出て、昼は、小学校の教員を務め、夜は、夜間学校で学びなおす道を選びました。私は、その時(昭和14年(1939年))に生まれましたので、山形県人ではなく、東京人?と言えるかもしれません(2歳までの東京滞在でしたので何も覚えていませんが……)。

その後、絶縁曲折ありましたが、太平洋戦争の終戦後、しばらくして、小学校3年生の時に、山形県内に戻りました。晴れて「山形出身」と言える状況が生まれたことになります。

これらの幼少期の経験は、「子が育てられている過程での出



平成18年 産学官連携フォーラム

「来事」であって、親の意向が100%に近い状態で、反映されている時期に発生した事項です。子供である私自身は、それに追随しているだけであったと言えるかもしれません。しかし、このような経験が子供の一生を左右することになっていることも事実です。私は、このような流れの中で、大学の教育者になったのではないかと、強く思う時があります。単純に「カエルの子はカエル」なのかもしれません……。

浜松には、昭和45年(1970年)に、東北大学から静岡大学に赴任し、平成17年(2005年)に定年を迎えました。その間、35年間、教壇に立って教育することの難しさを経験すると同時に、学生と一緒にになって、研究を進めるものの楽しさを味わいました。現時点においても当時の学生との交流が続いています。初期に担当した学生は、会社などを定年退職して、ゆうゆう自適を決め込んでいる人が増えてきています。

一方、私の方は、工学部長や副学長を務め、大学運営の難しさも経験しました。さらに、静大定年後、ご縁あって、静岡理工科大学の非常勤講師として、再び教壇に立つことになりました。半年ほど勤めた頃、突然、その次年度(平成18年9月)から学長に就任するようにとの要請があり、大変驚いたことを覚えています。

当時は、1991年の大学の設立から20年にも満たない新設の大学として、新鮮を感じることがいたる所にありました。課題として位置づけられることも多くありました。

研究より教育、学生に対する教職員の目線の違いとしての「お客様扱い」など、学内の雰囲気を醸成する基本的な考え方をどのようにすべきかなどが、迷ったことの代表的事項でした。

また、袋井市や掛川市をはじめとした近隣の自治体との関係の在り方にも気を使いました。特に袋井市からは、大学設立時の献身的な支援をいただいたことを念頭に置いた協力関係を築きました。

結局、学長を2期務め、新しい学長である野口博先生にバトンをお渡しました。

学長退任後、顧問などの立場で、2年間ほど、新しい学長をサポートするお手伝いをしたのち、平成30年3月末で理工科大学の仕事から解放されて、ヤレヤレと一息ついていたところ、スズキの鈴木修会長から「もう少し働き！」との御達しがあって、スズキの監査役に就任しました。

この新しい職場は、生まれて初めての「ものづくり企業」の製



平成23年 先端機器分析センター 竣工式



平成21年度静岡理工科大学卒業証書・学位記授与式

造現場としての位置づけにある会社からのオファーであり、自分が務まるかどうかはなはだ疑問とする方向転換でした。少し迷いましたが、このような企業に卒業生を送り出す仕事に携わってきた人間として、理解すべき分野であるとの位置づけで、お引き受けしました。

ほどなく、修会長から「エンジン部品しか造ったことのない中小企業がモーター駆動の時代になんでも、路頭に迷うことのないようにせよ！」との御達しがあって、「次世代自動車センター」を浜松市の施設として立ち上げ、現在に至っています。

2020年9月で満81歳になりましたロオトルのたわ言として、ご放免ください。

## 思い出の一品

静岡理工科大学設立20周年の記念品としていただいた置時計。本を形どった木彫りの枠の中に円形の時計がはめ込まれている。本の表紙にあたるところを開けると、時計が見える。表紙の裏側には、キャンパスの建物の外観が彫刻されている。





↓  
個人の暗黙知をオープンにして  
形式知に変換し見える化して  
組織の集合知とし、組織の生き残りを図る  
VSF 幸せな静岡理工科大学



# 未来への挑戦

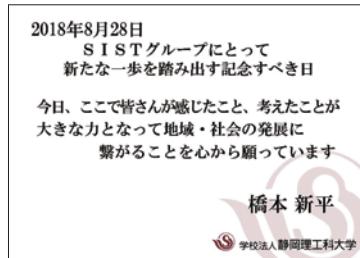
～未来へ向かう学園の姿～

1. SIST 交流研修会
2. 御幸町キャンパスプロジェクト始動！
3. 静岡理工科大学：静岡県内大学唯一の  
「土木工学科(仮称)」設置構想中
4. 中学校・高等学校の『未来を見据えた取り組み』
5. 浜松未来総合専門学校の開校
6. 浜松日本語学院の移転・新校舎建設
7. 学校法人静岡理工科大学『グループビジョン 2030』

# 未来への挑戦 ~未来へ向かう学園の姿~

80周年記念誌は、単に過去の歴史を記録するだけではなく、SISTグループが未来へ向けてどのような挑戦をしていくのかを明確にし、決意表明をする場でもあると考えます。そこで、“未来への挑戦”と題して、取り組みの一端をご紹介します。

## 1 SIST交流研修会



テクノロジーの発達によりあらゆるものを取り巻く環境が目まぐるしく変化することで複雑さが増し、不透明性・不確実性が高く将来の予測が困難である現代、教育の世界では、更なる少子高齢化による社会構造の変革や学習指導要領の改訂といった多くの課題が挙げられています。

環境が大きく変動する現代において、知識こそが最大の意義ある資産となる知識社会の到来が予想されます。この様な時代背景の中で、本学園では個人の「暗黙知」を「形式知」に変換し、組織の「集合知」とすることで組織力を更に強化することを目的として、『SIST交流研修会』が企画されました。

『SIST交流研修会』は、学園を取り巻く社会情勢や教育環境の変化等について学ぶ「全体研修」と、全教職員が各所属部署や担当といった枠組みを越えて数人ずつのグループに分かれ、様々なテーマについて自身の経験や知識を基に発信・共有する「グループディスカッション」、人を知り人と語らうことで学園内には多くの仲間がいることを改めて実感する「懇親会」で構成されています。

「全体研修」は、様々な実例から社会の変遷やこれから訪れる時代について学ぶと同時に、知ることで新たな気付きを得て、本学園の持つ課題や強み・方向性等について見つめ直すためのきっかけとなることを目的としています。また「グループディスカッション」や「懇親会」では、教職員一人ひとりがそれぞれの経験や考えを述べることで相互理解を深め、目標を共有して対話を行いながら、考えを広げ新しい価値を共に創り上げていく『一体感醸成』を大きな目的としています。

継続的に開催することを予定している『SIST交流研修会』は、2018（平成30）年に第1回、翌2019（令和元）年に第2回が開催されました。本学園の80周年を迎える2020（令和2）年の開催については当初、80周年記念式典開催時期との兼ね合いも含め協議されておりましたが、新型コロナウィルス感染症の感染拡大を受け中止となりました。

従来の常識が通用しないニューノーマルの時代を迎え、2021（令和3）年以降は学園内の繋がりを更に強め、組織力を強化していく必要があります。本学園は、「暗黙知の集団から集合知・実践知を持つ持続性のある組織」「多数精鋭の強い組織集団」への転換を目指し、取り組んでいきます。

### ▶第1回SIST交流研修会（開催日：2018年8月28日）

「第1回SIST交流研修会」は静岡理工科大学を会場に、学園全体の教職員ほぼ全員が一同に会して開催されました。各所属部署や担当業務の枠を越えた連携は勿論、各校の施設設備・教育ノウハウの共有や有効活用について等、熱意溢れる活発な意見交換がなされました。



### ▶第2回SIST交流研修会（開催日：2019年8月29日）

第1回目の開催によって学園教職員における一体的連携についての協議・機運が高まったことを受け、「第2回SIST交流研修会」では更なる相互理解を深めると共に、縦横無碍な連帯感の強化を目的として開催されました。



#### ◆グループディスカッション

第2回目の研修会にて行われたグループディスカッションでは、各部門担当教員との協議の上で選出された12のテーマについて各自が参加希望を事前提出し、所属する部門や担当業務に拘らず40のグループに分かれて行われました。それぞれが、各テーマに沿った内容について学習資料等による事前準備を行っていたこともあり、課題解決や未来を見据えた考え方・アイデアなどが述べられました。



その中から、以下のテーマ・キーワードについて出された意見やポイントとなる内容をご紹介します。

#### 【1】グローバル教育

- 「いかにして学生・生徒の目を海外へ向けるか」が第1歩であり、そこから「どの様にして国際的な意識・感覚を定着させ、伸ばしていくか」が重要である。
- 海外留学プログラム等において、「追い込まれた環境=自身で判断・行動しなければならない状況」に置かれることで、学生本人の自信に結び付けられる。従って、この様なプログラムを企画する際にこういった点も含めて検討する必要があるのではないか。

#### 【2】ICTを活用した教育

- 現状では、効率化を目指す目的でのICT機器の活用となっているが、ここからディスカッションや主体性・共働性を学ぶ目的へと展開していきたい。
- ICTを活用した教育システムにおいて、『中・高、専門学校、大学間での連携』『学園全体でのコラボレーション』等に可能性を感じられる。

#### 【3】法人内連携

- 各教員が持つ「経験値」や「効果的な指導方法」等の共有化が重要である。
- 学園全体の「教育開発チーム」立ち上げ。同世代（横軸）や、同系統（縦軸）の教員が話し合える場を設ける事で、教育方法の情報共有や資料の蓄積等が期待出来る。また、担当する部門に関係なく教員同士が教育について議論する場も必要不可欠である。



前述の3つのテーマ・キーワードに関わる、各校の「未来における取り組み」についてご紹介します。

## 【1】グローバル教育

### ▶星陵中学校・星陵高等学校

#### ●国際交流プログラム

海外提携校生との交流による語学力向上に加え、多様性を受け入れる大切さを学ぶプログラムを行っています。中学3年生と中高一貫コース生の高校1年生を中心としたSEI (SEIRYO English Immersion) プログラムでは、東京大学や立教大学の留学生を講師として招喚し、少人数制によるSDGs解決の糸口を探る探求学習に取り組んでいます。英語だけを使ってコミュニケーションをとり成果発表（プレゼンテーション、ディベート）を行うことで、生きた英語力の向上と共に、未来に向けて「生きる力」を高めています。

### ▶浜松日本語学院

#### ●総合学園の強みを活かしたグループ各校との交流授業

交流授業を通して、留学生が日本人とのコミュニケーション力を養うことは勿論のことですが、「留学生から見た日本」「日本人から見た海外の国々」を対話によって互いに理解し合うことにより、多様な視点を身に付け、若い感性への大きな刺激となっています。グローバル社会を歩み始める日本で学ぶ学生たちが「異文化」を感じ、学び、互いにグローバル社会に羽ばたく準備が出来るのはグループだからこそであり、将来、世界で活躍する為の「学びの場」となっています。

## 【2】ICTを活用した教育

### ▶静岡理工科大学

#### ●遠隔授業を支える仕組み作りと新技術への取り組み

従来より、Stream (※①) を使ったオンデマンド形式を中心とした遠隔授業を推進する働きかけを行っています。国立情報学研究所の推進する情報基盤への取り組みや、society5.0 (※②) を支えるであろう新技術への対応も日々行っており、今後は遠隔授業だけでなく、様々なウェブ上のサービスを今まで以上に使いやすくする環境を整えます。

※①Microsoft Stream : セキュリティで保護されたビデオ サービス。組織内のユーザーがビデオを安全にアップロード、視聴、共有出来る。（MicrosoftHPより）

※②Society 5.0 : 日本が提唱する未来社会のコンセプト。サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、新たな未来社会。（Wikipediaより）



## 【3】法人内連携

### ▶静岡理工科大学&静岡デザイン専門学校

#### ●まちづくり共同事業『みてたプロジェクト』

静岡駅北の「みてた地区（御幸町、伝馬町、鷹匠）」のまちづくりについて、静岡理工科大学建築学科の有志と静岡デザイン専門学校生が企画提案するまちづくり共同事業です。班ごとのテーマに沿ったまち歩きやまとめ発表などのフィールド活動を通じて社会を学び、協調性や積極性を増進しています。継続的に地域の活性化に学生たちが関わることで、まちづくり意識の醸成につながっていきます。



### ▶静岡産業技術専門学校&沼津情報・ビジネス専門学校

#### ●4年制学科連携事業の推進

共に4年制学科である、静岡産業技術専門学校「みらい情報科」と沼津情報・ビジネス専門学校「高度ITビジネス科」では、それぞれの授業への参加を初めとして、就職活動に向けたコミュニケーションスキル向上訓練や集団討論等の合同特別講座の開催・合同企業ガイダンスの実施など、連携事業を推進しています。接点を持つことの少ない他校の在校生と、連携して共通の課題に取り組むことで多様な考え方や価値観に触れることが出来、学生の成長に繋がっていきます。



## 2 御幸町キャンパスプロジェクト始動！

学園の建学の精神である“技術者の育成をもって地域社会に貢献する”を具現化し、地域の皆様と共に成長するための新たな拠点が『御幸町キャンパス』です。

御幸町キャンパスの基本理念は、広範な学校種を擁する本学園の特色を活かし、建学の精神にある【地域への貢献】を、学園が一体となって実現していく事にあります。

2024年度のオープンに向けて、地域に根差した【学園のランドマーク】を目指し、『御幸町キャンパスプロジェクト』が本格的に始動して参ります。

※御幸町キャンパスは、静岡市葵区御幸町9番・伝馬町4番 市街地再開発ビルの4階～12階に設置されます。

### 基本理念

大学・専門学校・高等学校・中学校・日本語学校という  
広範な学校種を擁する本学園の特色を活かし、  
建学の精神である『技術者の育成をもって地域社会に貢献する』を、  
学園が一体となって実現させる、“学園のランドマーク”

### 御幸町キャンパス コンセプト

多くの人が往来し、  
集い、めぐり逢い、共に学び、  
共に考え刺激し合って、共に成長する。  
そして【ひと】【もの・こと】【まち】の  
未来を切り拓いていくフィールド

『繋がる』をコンセプトに静岡へ他所から人を呼び込む

### 『御幸町キャンパス』概要

#### ●学校法人静岡理工科大学 法人本部

#### ●教育推進室

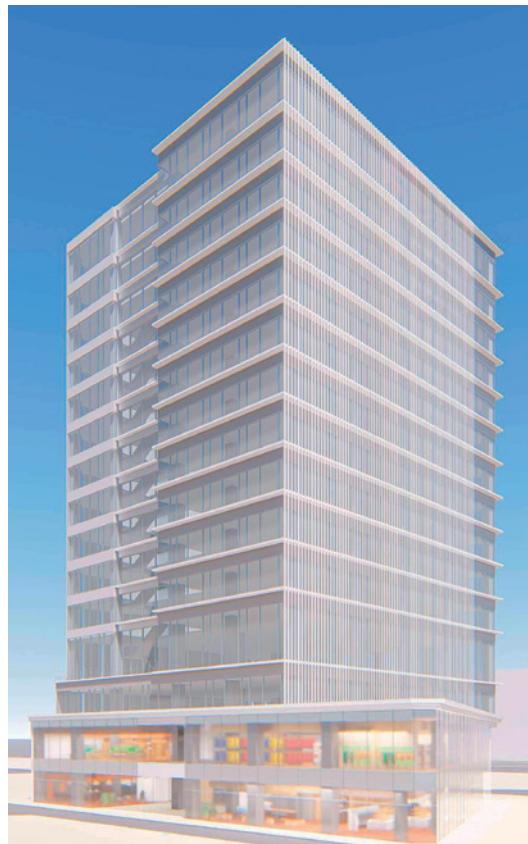
総合学園としての良さを活かした本学園の新しい教育法や、先端のICTを活用した教育手法、教育コンテンツの開発・共有などの施策を企画し、実施します。

#### ●同窓生サイト(仮称)

県内および全国の静岡理工科大学グループ校卒業生7万人余と地域を繋ぎ、様々な交流会の開催や異業種交流の場を提供することで、地域の活性化・賑わいを創出します。

#### ●静岡デザイン専門学校

これまでの地域連携を取り込んだ教育を更に進化させると共に、本学園の各校と地域社会を繋ぐ活動を推進していきます。



御幸町9番・伝馬町4番市街地再開発ビル  
完成イメージバース

#### ●静岡理工科大学 サテライトラボ

静岡理工科大学が主体となり、本学園の各学校や他大学、企業や地域社会と連携を深め、国際連携に結び付けていくための足掛かりとしてフィールドワークを行うための教育活動拠点です。先端的な教育環境を備えた教室も設置します。

#### ●地域協働センター

地域が抱える課題に寄り添い、本学園が有するシーズと地域のニーズをつなぎ合わせて、産学官民連携しながら実践へと展開することを活動目的としています。地域産業のプロデュースの役割と共に、社会人向けの教育なども行います。

### 3 静岡理工科大学：静岡県内大学唯一の「土木工学科(仮称)」設置構想中

#### ▶設置構想の背景等

本学では、2022年4月、理工学部に土木工学科（仮称）の設置を構想しています。

静岡県は、国内において基幹となる鉄道や港湾、そして空港も有し、東西を結ぶ交通の要所です。また、山間地域や東西に長い海岸線、大きな河川もあり、南海トラフ大地震や津波等の災害に備える必要があります。このような地域特性を有していますが、県内にはこれまで土木の専門知識・技術を基礎から学んだ人材を育成できる教育機関がありませんでした。

そこで、「技術者の育成をもって地域社会に貢献する」を建学の精神として掲げている本学としては、静岡県だからこそ土木と防災の技術者が必要だと考え、設置構想に至りました。本学の土木工学科（仮称）では、防災・減災に加えてI-Construction（ICT導入による建設生産システムの生産性向上）への対応など、従来の学びに加えて、これから土木技術者に求められる能力を培うことができます。

静岡県内唯一の私立理工系総合大学である本学が、土木工学科（仮称）を新設することで、新たな分野において優れた人材を輩出し、社会の発展に一層寄与できるようにして参ります。

静岡で育てる土木技術者

静岡をフィールドとした学びで、  
人・生活を自然災害から守る

土木工学の伝統的な専門知識を総合的に学修するとともに、  
情報技術の活用や地域と連携したプロジェクトを通して、  
大震災に備える静岡県での防災・減災の在り方、環境との融合、  
安全で快適な生活環境を考慮した社会基盤整備を担う  
土木工学に精通した技術者を育成します。



新校舎【土木工学科棟(仮称)】完成予想図

### 4 中学校・高等学校の『未来を見据えた取り組み』

#### ▶静岡北中学校・高等学校

##### ●SSZ × SSH × 国際交流

本校では長らく「科学」を根幹に据えて教育活動に励んできました。中学でのSSZ（サイエンス・スタディ・ゼロ）、高校でのSSH（スーパーサイエンスハイスクール）における研究成果は、身近な地域のみならず国際的にも高く評価されています。科学は「本質を見抜く」ことです。研究は非常に地道な作業の積み重ねではありますが、その過程で自主性・協調性・創造性などの多様な能力が伸長し、自己成長を体感することができます。

また、国内だけではなく海外の研究・教育機関とも連携していることから、グローバル時代に求められるスキルを実体験から身に付けることも可能です。混沌とした先行き不透明な時代だからこそ科学の力が必要不可欠であり、そこに「希望」の糸口があると確信しています。



#### ▶星陵中学校・高等学校

##### ●EdTech × SDGs × 星陵ラボ

あらゆる分野でテクノロジーが活用される現代社会において、教育領域だけは大きな「変化」なく歩みを続けてきました。しかし、近年の目覚ましい情報通信技術の発展にともない私たちが生きる世界は日々刻々と変容しています。また、グローバル化は異文化理解の重要性と従来の価値観にとらわれることなく広い視野で物事を考える必要性を高めました。

星陵では生徒の主体性を育み、既存の枠組みを超えてグローバルに活躍できる人材を輩出するために、オンライン学習やICT機器を効果的に活用した授業、国連が2030年まで達成すべき目標として定めたSDGsを基軸とした探究活動、星陵ラボでのテーマ型課題研究を実践しています。生徒と教員が協働しながら「解なき時代」の生き方・楽しみ方を見出しています。



## 5 浜松未来総合専門学校の開校



学校法人 静岡理工科大学  
浜松未来総合専門学校

2021年4月、浜松情報専門学校と専門学校 浜松デザインカレッジが統合し、浜松未来総合専門学校として新たなスタートを切ります。

学校に関わる全ての人が託す『いろいろな、みらい』に応え、常に学生を中心とし、フェアでオリジナリティがあり成長を続ける職業人育成のための総合専門学校です。

新しい時代に、新しい学びを。可能性にあふれる若い力を未来のためにとことん活かす学びが始まります。

### ▶ミッションステートメント

学校に関わる全てのステークホルダーに応え、常に学生を中心とし、フェアでオリジナリティがあり、成長を続ける、地域に根ざした職業人育成のための総合専門学校。

- (1)人材育成シナリオを地元産業界・企業と共に創る。
- (2)浜松日本語学院との一貫教育システム構築。
- (3)地域との連携をより深め、文化の創造・発信の拠点となり得る「開かれた学校」へ。

その特徴は、【分野や国境、文化の壁】を越えた環境の中で育む『ミライに向けたスキル』です。

### ▶“掛け算の学び”が育む【ミライスキル】

学校が1つになる“足し算”ではなく、それぞれの特徴を活かしていく、“掛け算”的な学びです。各学科の専門性を高める「タテの学び」と学科を超えた「ヨコの学び」が掛け合わされ、『総合的な学び』として実践します。

そこから学生たちは「未来を創造する知識や技術」「互いの強みを活かし課題を解決する力」「未来への希望を持って課題に取り組む力」【ミライスキル】を身に着けていきます。

## 6 浜松日本語学院の移転・新校舎建設

2011（平成23）年の開校以来、毎年、多くの留学生を送り出してきた浜松日本語学院が2021（令和3）年1月、浜松情報専門学校の隣接地に建設された新校舎へと移転致しました。新校舎は地下1階地上8階建てで、普通教室だけでなく図書室や自習室、200人収容のホールやラウンジを設けるなど、留学生の学習環境を重視した設計となっています。

新校舎建設・移転の背景には、東南アジア地域を中心とした日本への留学生の著しい増加があります。また、昨今の法務省・入国管理局の動向では、海外の優秀な人財を積極的に採用し長期的な就労人口減少への対応とする企業が増加しており、日本語教育機関は大きな期待を寄せられています。

減少を続けている日本の就業人財として「必要とされる国際人財を社会に輩出すること」を目標として、浜松日本語学院は新たな学び舎で日本語教育・法人内連携教育を実践していきます。



## 7 学校法人静岡理工科大学『グループビジョン2030』

### ▶本学園「グループビジョン2030」とは？

不透明で予測困難な時代の中にあっても、社会の変化に丁寧かつ柔軟に対応し続けることにより「確固たる信頼」を築いた上で存在感を示し、私たちの本質的な役割である教育を通じて社会に貢献する組織であり続ける。

その想いを明確にするため、10年後のありたい姿として『学校法人静岡理工科大学「グループビジョン2030』』が制定されました。

## 学校法人静岡理工科大学『グループビジョン2030』 総合力と多様な教育で、 心躍る未来を。

- ◆ 多彩な学校種を持つ学園の総合力を活かし、多様性に富んだ学生・生徒を（社会人や留学生も含め幅広く）受け入れ、かつ多様な教職員が教育を提供する。
- ◆ それにより10年後も、その先にある未来の社会を明るくワクワクするものにしていくような人材育成や、組織としての社会貢献を実現する。
- ◆ 「心躍る」という言葉で、ワクワクするような未来を創るというイメージと、ビジョンそのもののワクワク感を強める。

### ▶『グループビジョン2030』制定までの経緯

『学校法人静岡理工科大学「グループビジョン2030』』は、「学園としての目標とすべき姿・構想・未来像などをビジョンとして最初に示すべき」「コロナ禍という未曾有の出来事を経験し、社会がどう変革するかを読み切ることは非常に難しいことから、単眼ではなく複眼で未来を見通すことが肝要」との理事長指針に基づき、幅広い知見や発想で法人全体のビジョンを作ることを目的として「学園ビジョン検討WG（ワーキンググループ）」が設置され、学園グループ全体から選出された9名のメンバーを中心に検討が重ねられました。

WGの設置以降、約4か月の間に数多くの会議が行われ、人口推計や社会動向などの情報から「現在の学園を取り巻く環境」や「10年後の学園に及ぼす影響」等について整理し、現在の学園の強みや達成したいと願う未来像についての具現化等、活発な意見交換がなされました。また、上記以外にも複数回のレビューや中間報告など、WGメンバーだけでなく、多くの方々が学園の未来について真剣に議論し、本学園『グループビジョン2030』は制定されました。

### ▶ビジョンのポイントと込められた想い

広範な学校種を有する本学園の強みは、各校の特色ある教育・研究と様々な領域の教職員一人ひとりの人間性や専門性、地域・企業・行政等の方々との連携、そしてこれらが一体となることで生み出される総合力です。この総合力を基盤として、めまぐるしい社会の変化を冷静に見極め、時代がどう変化しようとも、ますます多様化する学びのニーズをしっかりと捉えた「多様な教育」を実現することで、明るくワクワクした『心躍る未来づくり』に貢献する。『学校法人静岡理工科大学「グループビジョン2030』』には、そんな想いが込められています。



# 資料

- 
1. 学校法人静岡理工科大学 歴代理事長
  2. 静岡理工科大学グループ校 歴代学長・歴代校長
  3. 学校法人静岡理工科大学 役員名簿
  4. 創立80周年記念誌編集委員・編集後記

## ◆学校法人静岡理工科大学 歴代理事長



初代  
**鈴木 要二**

1952(昭和 27)年 4月 14 日

↓

1977(昭和 52)年 11月 16 日



第2代  
**鈴木 辰衛**

1978(昭和 53)年 2月 28 日

↓

1980(昭和 55)年 4月 16 日



第3代  
**川村 春雄**

1980(昭和 55)年 5月 24 日

↓

1983(昭和 58)年 3月 17 日



第4代  
**金子 儀平**

1983(昭和 58)年 3月 18 日

↓

1985(昭和 60)年 3月 17 日



第5代  
**宇野 紳七郎**

1985(昭和 60)年 3月 18 日

↓

1991(平成 3)年 1月 29 日



第6代  
**鈴木 通弘**

1991(平成 3)年 1月 30 日

↓

1995(平成 7)年 3月 31 日



第7代  
**遠藤 芳伸**

1995(平成7)年4月1日

⋮

1996(平成8)年5月29日



第8代  
**熊沢 一**

1996(平成8)年5月30日

⋮

2001(平成13)年1月29日

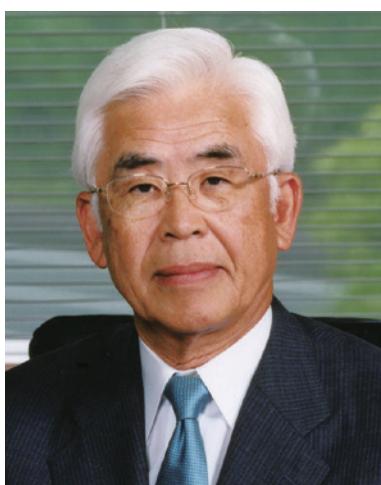


第9代  
**野々村 勅夫**

2001(平成13)年1月30日

⋮

2007(平成19)年1月29日



第10代  
**佐々木 和男**

2007(平成19)年1月30日

⋮

2011(平成23)年9月30日



第11代  
**外山 浩介**

2011(平成23)年10月1日

⋮

2017(平成29)年9月30日



第12代  
**橋本 新平**

2017(平成29)年10月1日

⋮

◆ 静岡理工科大学 歴代学長

|     | 氏名    | 任期                               |
|-----|-------|----------------------------------|
| 初代  | 久松 敬弘 | 1991（平成3）年4月1日～1995（平成7）年3月31日   |
| 第2代 | 中川 龍一 | 1995（平成7）年4月1日～1998（平成10）年8月31日  |
| 第3代 | 塙田 進  | 1998（平成10）年9月1日～2006（平成18）年8月31日 |
| 第4代 | 荒木 信幸 | 2006（平成18）年9月1日～2014（平成26）年3月31日 |
| 第5代 | 野口 博  | 2014（平成26）年4月1日～                 |

◆ 静岡北高等学校 歴代校長 [静岡県自動車工業高等学校を1980（昭和55）年3月校名変更]

|      | 氏名    | 任期                                |
|------|-------|-----------------------------------|
| 初代   | 金子 儀平 | 1963（昭和38）年4月1日～1966（昭和41）年11月14日 |
| 第2代  | 金田 馨  | 1966（昭和41）年11月15日～1970（昭和45）年7月3日 |
| 第3代  | 鳥羽 敏夫 | 1970（昭和45）年7月4日～1977（昭和52）年9月11日  |
| 第4代  | 北川 卷平 | 1977（昭和52）年9月12日～1982（昭和57）年3月31日 |
| 第5代  | 高橋 晃  | 1982（昭和57）年4月1日～1987（昭和62）年3月31日  |
| 第6代  | 森 實   | 1987（昭和62）年4月1日～1992（平成4）年3月31日   |
| 第7代  | 有野 勝三 | 1993（平成5）年4月1日～1998（平成10）年3月31日   |
| 第8代  | 杉山 昌弘 | 1998（平成10）年4月1日～2004（平成16）年3月31日  |
| 第9代  | 森竹 鍵治 | 2004（平成16）年4月1日～2014（平成26）年3月31日  |
| 第10代 | 廣住 雅人 | 2014（平成26）年4月1日～2019（平成31）年3月31日  |
| 第11代 | 山本 政治 | 2019（平成31）年4月1日～                  |

◆ 静岡北中学校 歴代校長

|     | 氏名    | 任期                               |
|-----|-------|----------------------------------|
| 初代  | 森竹 鍵治 | 2010（平成22）年4月1日～2014（平成26）年3月31日 |
| 第2代 | 廣住 雅人 | 2014（平成26）年4月1日～2019（平成31）年3月31日 |
| 第3代 | 山本 政治 | 2019（平成31）年4月1日～                 |

◆ 星陵高等学校 歴代校長 [1977（昭和52）年6月3日合併]

|     | 氏名     | 任期                               |
|-----|--------|----------------------------------|
| 初代  | 式守 富司  | 1975（昭和50）年4月1日～1978（昭和53）年3月31日 |
| 第2代 | 古川 鑑   | 1978（昭和53）年4月1日～1980（昭和55）年3月31日 |
| 第3代 | 遠藤 茂樹  | 1980（昭和55）年4月1日～1982（昭和57）年3月31日 |
| 第4代 | 大川 亀之助 | 1982（昭和57）年4月1日～1987（昭和62）年3月31日 |
| 第5代 | 福本 良雄  | 1987（昭和62）年4月1日～1992（平成4）年3月31日  |
| 第6代 | 杉山 昌弘  | 1992（平成4）年4月1日～1995（平成7）年3月31日   |
| 第7代 | 森竹 鍵治  | 1995（平成7）年4月1日～2004（平成16）年3月31日  |
| 第8代 | 坪井 正明  | 2004（平成16）年4月1日～2016（平成28）年3月31日 |
| 第9代 | 渡邊 一洋  | 2016（平成28）年4月1日～                 |

◆ 星陵中学校 歴代校長

|     | 氏名    | 任期                               |
|-----|-------|----------------------------------|
| 初代  | 坪井 正明 | 2011（平成23）年4月1日～2018（平成30）年3月31日 |
| 第2代 | 渡邊 一洋 | 2018（平成30）年4月1日～                 |

◆ 静岡産業技術専門学校 歴代校長 [静岡県自動車学校整備科を1970（昭和45）年7月校名変更]

|      | 氏名    | 任期                                |
|------|-------|-----------------------------------|
| 初代   | 金子 儀平 | 1956（昭和31）年9月1日～1965（昭和40）年3月31日  |
| 第2代  | 吉野 栄  | 1965（昭和40）年4月1日～1970（昭和45）年7月3日   |
| 第3代  | 金田 馨  | 1970（昭和45）年7月4日～1973（昭和48）年7月13日  |
| 第4代  | 田中 光夫 | 1973（昭和48）年7月14日～1975（昭和50）年3月31日 |
| 第5代  | 寺田 實  | 1975（昭和50）年4月1日～1985（昭和60）年3月19日  |
| 第6代  | 安武 和弘 | 1985（昭和60）年3月20日～1988（昭和63）年3月31日 |
| 第7代  | 堀田 恭平 | 1988（昭和63）年4月1日～1991（平成3）年3月31日   |
| 第8代  | 平井 利明 | 1991（平成3）年4月1日～2001（平成13）年3月31日   |
| 第9代  | 齋藤 傳  | 2001（平成13）年4月1日～2004（平成16）年3月31日  |
| 第10代 | 山下 博通 | 2004（平成16）年4月1日～2007（平成19）年3月31日  |
| 第11代 | 遠藤 進  | 2007（平成19）年4月1日～2019（平成31）年3月31日  |
| 第12代 | 坂部 真彦 | 2019（平成31）年4月1日～                  |

◆沼津情報・ビジネス専門学校 歴代校長 [2010(平成22)年4月1日校名変更 旧:沼津情報専門学校]

| 氏名        | 任期                               |
|-----------|----------------------------------|
| 初代 寺田 實   | 1983(昭和58)年4月1日～1985(昭和60)年3月31日 |
| 第2代 堀田 恭平 | 1985(昭和60)年4月1日～1988(昭和63)年3月31日 |
| 第3代 大沢 正幸 | 1988(昭和63)年4月1日～1990(平成2)年3月31日  |
| 第4代 山崎 哲  | 1990(平成2)年4月1日～1994(平成6)年3月31日   |
| 第5代 山本 武  | 1994(平成6)年4月1日～1996(平成8)年3月31日   |
| 第6代 遠藤 進  | 1996(平成8)年4月1日～1999(平成11)年3月31日  |
| 第7代 山下 博通 | 1999(平成11)年4月1日～2004(平成16)年3月31日 |
| 第8代 垣東 秀夫 | 2004(平成16)年4月1日～2007(平成19)年3月31日 |
| 第9代 鈴木 経康 | 2007(平成19)年4月1日～                 |

◆浜松情報専門学校 歴代校長

| 氏名         | 任期                                 |
|------------|------------------------------------|
| 初代 松本 欣二   | 1985(昭和60)年4月1日～1988(昭和63)年3月31日   |
| 第2代 杉山 昌弘  | 1988(昭和63)年4月1日～1990(平成2)年3月31日    |
| 第3代 杉村 嘉久  | 1990(平成2)年4月1日～1994(平成6)年4月30日     |
| 第4代 太田 正巳  | 1994(平成6)年5月1日～1996(平成8)年3月31日     |
| 第5代 巣山 正道  | 1996(平成8)年4月1日～1999(平成11)年3月31日    |
| 第6代 遠藤 進   | 1999(平成11)年4月1日～2006(平成18)年10月24日  |
| 第7代 緒方 雅智  | 2006(平成18)年10月25日～2009(平成21)年3月31日 |
| 第8代 石野 真明  | 2009(平成21)年4月1日～2011(平成23)年9月30日   |
| 第9代 氏原 秀之  | 2011(平成23)年10月1日～2015(平成27)年3月31日  |
| 第10代 横山 純  | 2015(平成27)年4月1日～2018(平成30)年3月31日   |
| 第11代 松本 文晴 | 2018(平成30)年4月1日～                   |

◆静岡デザイン専門学校 歴代校長 [1984(昭和59)年9月合併／1996(平成8)年9月校名変更 旧:静岡文化専門学校]

| 氏名         | 任期                                 |
|------------|------------------------------------|
| 初代 杉山 三枝子  | 1984(昭和59)年4月1日～1989(平成元)年3月31日    |
| 第2代 山本 武   | 1989(平成元)年4月1日～1994(平成6)年3月31日     |
| 第3代 杉村 嘉久  | 1994(平成6)年4月1日～2005(平成17)年3月31日    |
| 第4代 緒方 雅智  | 2005(平成17)年4月1日～2006(平成18)年10月24日  |
| 第5代 遠藤 進   | 2006(平成18)年10月25日～2007(平成19)年3月31日 |
| 第6代 久保田 香里 | 2007(平成19)年4月1日～                   |

◆静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校 歴代校長

| 氏名        | 任期                               |
|-----------|----------------------------------|
| 初代 遠藤 進   | 2008(平成20)年4月1日～2010(平成22)年3月31日 |
| 第2代 山口 一三 | 2010(平成22)年4月1日～2012(平成24)年3月31日 |
| 第3代 仁科 誠  | 2012(平成24)年4月1日～2019(平成31)年3月31日 |
| 第4代 横田 雅利 | 2019(平成31)年4月1日～                 |

◆専門学校浜松デザインガレッジ 歴代校長 [2011(平成23)年4月1日校名変更 旧:静岡デザイン専門学校 浜松校]

| 氏名         | 任期                               |
|------------|----------------------------------|
| 初代 緒方 雅智   | 2008(平成20)年4月1日～2009(平成21)年3月31日 |
| 第2代 尾白 充彦  | 2009(平成21)年4月1日～2014(平成26)年3月31日 |
| 第3代 氏原 秀之  | 2014(平成26)年4月1日～2015(平成27)年3月31日 |
| 第4代 遠藤 進   | 2015(平成27)年4月1日～2017(平成29)年3月31日 |
| 第5代 久保田 香里 | 2017(平成29)年4月1日～2018(平成30)年3月31日 |
| 第6代 松本 文晴  | 2018(平成30)年4月1日～                 |

◆浜松日本語学院 歴代校長

| 氏名        | 任期                                |
|-----------|-----------------------------------|
| 初代 遠藤 進   | 2011(平成23)年10月1日～2017(平成29)年3月31日 |
| 第2代 竹下 知宏 | 2017(平成29)年4月1日～                  |

◆沼津日本語学院 歴代校長

| 氏名        | 任期                              |
|-----------|---------------------------------|
| 初代 渡邊 尚明  | 2017(平成29)年4月1日～2019(令和元)年5月31日 |
| 第2代 大石 正昭 | 2019(令和元)年6月1日～                 |

## ◆学校法人静岡理工科大学 役員名簿

定数 理事：13～15名 監事：3名

2020（令和2）年10月1日現在

| 区分   | 氏名     | 常勤・非常勤の別 | 摘要   |
|------|--------|----------|--|
| 理事長  | 橋本 新平  | 常勤       | 2017（平成29）年4月 常務理事就任<br>2017（平成29）年10月 理事長就任 |
| 常務理事 | 藤浪 和夫  | 常勤       | 2015（平成27）年10月 理事就任<br>2019（令和元）年10月 常務理事就任  |
| 理事   | 下田 修   | 常勤       | 2014（平成26）年4月 理事就任                           |
| 理事   | 渡邊 一洋  | 常勤       | 2019（平成31）年4月 理事就任                           |
| 理事   | 高橋 仁   | 常勤       | 2019（令和元）年10月 理事就任                           |
| 理事   | 外山 浩介  | 非常勤      | 2006（平成18）年2月 理事就任                           |
| 理事   | 鈴木 輿平  | 非常勤      | 1989（平成元）年1月 理事就任                            |
| 理事   | 後藤 康雄  | 非常勤      | 1989（平成元）年3月 理事就任                            |
| 理事   | 矢崎 裕彦  | 非常勤      | 1991（平成3）年1月 理事就任                            |
| 理事   | 脇本 省吾  | 非常勤      | 2013（平成25）年10月 理事就任                          |
| 理事   | 野口 博   | 常勤       | 2013（平成25）年10月 理事就任                          |
| 理事   | 青山 藤詞郎 | 非常勤      | 2015（平成27）年10月 理事就任                          |
| 理事   | 杉本 浩利  | 非常勤      | 2015（平成27）年10月 理事就任                          |
| 理事   | 志田 洪顯  | 非常勤      | 2016（平成28）年2月 理事就任                           |
| 理事   | 佐藤 滋美  | 非常勤      | 2018（平成30）年4月 理事就任                           |
| 監事   | 杉本 憲一  | 非常勤      | 1991（平成3）年1月 監事就任                            |
| 監事   | 中村 元保  | 非常勤      | 2015（平成27）年10月 監事就任                          |
| 監事   | 望月 裕之  | 非常勤      | 2017（平成29）年10月 理事就任                          |

## 学校法人静岡理工科大学 創立80周年記念誌編集委員

編集責任者 藤浪 和夫 常務理事・法人室長

編集委員 (50音順) 池田 達哉 静岡理工科大学  
岩崎 京子 静岡デザイン専門学校  
河村 都美明 法人室財務担当部長  
小宮山 一徳 浜松日本語学院  
齊藤 広樹 沼津情報・ビジネス専門学校  
佐藤 一雅 静岡北高等学校  
島田 幸紀 静岡産業技術専門学校  
新間 功輝 浜松情報専門学校  
杉田 真美 静岡インターナショナル・エア・リゾート専門学校  
瀧田 強 沼津情報・ビジネス専門学校  
福永 意人 星陵中学校  
増田 智昭 星陵高等学校  
村松 佑紀 沼津日本語学院  
望月 麻衣子 法人室広報担当  
渡邊 大介 法人室広報担当



### 編集後記

昭和 15 年、本学園の前身である静岡県自動車学校が設立されて令和 2 年で 80 年になることを記念し、当初、様々な記念事業を予定しておりましたが、年初より感染が始まった新型コロナの世界的な感染拡大により世界経済が深刻な打撃を受け、記念式典は令和 3 年に延期を余儀なくされました。しかしながら、記念誌は本学園の歴史をきちんと記録として残すことが重要であると考え、編集作業を継続してきました。

本誌の構成にあたっては、80 年の沿革を記述したヒストリー(学校創立期、拡大・発展期、大学設立期、進展期の 4 つに区分)、所属の学校を紹介するグループ校紹介、OB の方による思い出寄稿、最後に、今後の本学園としての未来図を描き、進むべき方向性を明確にするため、未来への挑戦と題して特集記事として盛り込みました。これは、記念誌として単に歴史を刻むだけではなく、学びを活かし創造する力、協働によってより良い社会を築き上げる力が求められるこれからの時代を見据え、未来へ

挑戦していく姿勢を示すことが必要であると考えたからです。

少子高齢化、グローバル化、DX 化の進展により、我々教育業界はもとより様々な世界でパラダイムシフトが起こり、更にはコロナ禍の影響により、今後益々不透明な状況になっていきますが、令和 4 年から始まる第 4 次中期計画の、学校法人静岡理工科大学「グループビジョン 2030」である、「総合力と多様な教育で心躍る未来を」作るために、本誌が幾ばくかの参考になれば幸いです。そして、「技術者の育成をもって地域社会に貢献する」という建学の精神を踏まえ、90 年、100 年、更にはその先の未来に向かって邁進して参ります。

最後に、本誌の発行にあたり、ご寄稿及び資料提供をいただきました多くのの方々、各校の編集委員の皆様、編集発行作業にご協力いただいた関係者の方々に、この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

編集責任者 常務理事・法人室長 藤浪 和夫

学校法人静岡理工科大学  
**創立80周年記念誌**

---

2021(令和3)年3月発行

発行 学校法人静岡理工科大学 静岡県静岡市葵区相生町12-18

制作 学校法人静岡理工科大学 創立80周年記念誌編集委員

株式会社ディスタンス・インターナショナル

---